THE CENTRAL REVIEW

中央公論

小説の語尾

秋 [illegible]

第 [illegible]

早稻田大學

新學年開始校外生募集

政治經濟科講義

貳年完了

政治原論	法學博士	浮田和民
帝國憲法	法學博士	副島義一
行政法汎論	法學博士	美濃部達吉
行政法各論	法學博士	清水澄
植民汎論		石黑定美
自治制論	法學士	島村他三郎
比較市政論		安部磯雄
社會政策	法學博士	桑田熊藏
清國政治組織		森茂
經濟原論	法學博士	井上辰九郎
銀行論及爲替論	法學博士	山崎覺次郎

商業經濟		關一
農業經濟	農學士	小出滿二
工業經濟		牧野啓吾
財政學	マスター、オフ、アーツ	田中穗積
公債論及豫算論	マスター、オフ、アーツ	田中穗積
商業政策	法學博士	井上辰九郎
農業政策	法學士	柳田國男
工業政策	法學博士	河津暹
林政學	林學博士	小出房吉
交通機關論		伊藤重次郎
世界今代史	文學博士	浮田和民

東洋近時外交史		巽來治郎
西洋近時政治史	法學博士	有賀長雄
近世商業史	文學士	平沼淑郎
社會學	文學博士	建部遯吾
法學通論	法學士	飯島喬平
刑法要論	法學士	牧野英一
民法要論	法學士	飯島喬平
商法要論	法學士	柳川勝二
國際公法	法學博士	中村進午
倫理叢話	法學博士	浮田和民
講義錄研究方法、研究資料其他		

法律科講義

貳年完了

法學通論	法學士	飯島喬平
帝國憲法	法學博士	副島義一
行政法汎論	法學博士	美濃部達吉
行政法各論	法學博士	清水澄
地方自治制論	法學博士	清水澄
警察學	法學士	久保田政周
民法總論	法學士	鈴木英太郎
物權法	法學博士	横田秀雄
債權總論	法學博士	横田秀雄
債權各論	法學博士	横田秀雄
親族法	ドクトル、ユーリス	坂本三郎

相續法	法學士	柳川勝二
商法總則	法學士	飯島喬平
會社法	法學博士	原嘉道
商行爲	法學士	須賀喜三郎
保險法	法學博士	粟津清亮
手形法	法學博士	岡野敬次郎
海商法	法學士	市村富久
刑法總論	法學士	牧野英一
刑法各論	法學士	牧野英一
民事訴訟法第一編	法學士	岩田一郎
民事訴訟法第二編	法學士	岩田一郎

民事訴訟法第三編以下	法學博士	仁井田益太郎
民事訴訟法第六編以下	法學博士	仁井田益太郎
刑事訴訟法	法學士	豐島直通
破産法	法學士	岩本勇次郎
平時國際公法	法學博士	中村進午
戰時國際公法	法學博士	中村進午
國際私法	法學博士	山田三良
政治原論	法學博士	浮田和民
經濟原論	法學博士	井上辰九郎
財政學	マスター、オフ、アーツ	田中穗積
講義錄研究方法、研究資料其他		

早稻田大學講義錄

文學科講義 貳年完了

學科		講師
印度文學	文學士	常盤大定
德川時代文學史	文學士	佐々政一
傳奇主義・寫實主義・自然主義――歷史		長谷川誠也
文學要論		島村瀧太郎
文藝談	文學博士（ドクトル、デル、フイロソフヒー）	坪内雄藏
獨逸近世思潮		金子馬治
唐宋文學史		松平康國
明治文學の變遷	文學士	佐々政一
美學概論		島村瀧太郎
音樂談		東儀季治

學科		講師
日本美術學	文學士	瀧精一
社會學	法學博士	浮田和民
心理學	文學士	大槻快尊
東洋倫理學	文學博士	遠藤隆吉
倫理學	文學士	藤井健治郎
哲學概論	文學士	朝永三十郎
敎育學	文學士	大瀬甚太郎
應用支那文典		廣池千九郎
日本俗語文典	文學士	保科孝一
西洋名著評論		五十嵐力
明治時文評論	文學士	岡田正美
和歌評釋	文學士	尾上八郎

學科		講師
近古文評釋		松井簡治
和漢混淆文選釋	文學士	高木尚介
漢詩評釋		桂五十郎
支那時文評釋	早稻田大學政學士	青柳篤恒
俳句選釋	文學士	坂本四方太
平安朝散文評釋		種村宗八
支那小說戲曲評釋		宮崎繁吉
唐宋文評釋	文學士	丸井圭次郎
生物學	理學士	草野俊助
近世科學	ドクトル、オフ、サイエンス	田村哲
講義錄研究方法、研究資料其他		

◉校外生の指導待遇等に本大學の獨得の新設備あり

◉各科第壹號―十月初旬―發行す◉

◉各學課表及內容見本付詳細規則書申込次第送呈す

早稻田中學講義 二年完了

早稻田商業講義 二年完了

高等國民敎育 一年完了

本講義錄は中學校敎授細目に準じて學課を編成したる上に時勢に剴切なる學問實業藝術等の科目をも加味せり、講師には敎育界第一流の大家を網羅し敎授法の斬新文章の平易は勿論每號優美なる繪畫を添へ以て如何なる初學者にも趣味津々の間に之を獨習するを得せしむ

本大學商科の課程を基礎として其の內容を平易にして商業學の一般を說き商業經營に關する最新の理論を引用講述して以て商業上の常識を養ひ學理を解說すると共に活社會の商業機關を說明し兼て內外商業界の新事實を紹介して活用的人材を養成せんことを期す

本講義錄は中學程度の敎育と專門敎育との中間に介して高等の意義に於ける普通敎育を授け立憲思想文藝趣味の涵養に努め、國民として又社會の一員として何人にも必要なる學科を網羅して最も平易簡明に講述し以て趣味博大德操堅固なる模範的國民を養成せんとす

以上の三學科は本年四月新學期を開始せる者にて各科共第十號まで發行せり此際入學者には第一號より取揃へ配付す有志の士は速に申込るべし◉詳細規則學科表內容見本等は通知次第送呈す◉

東京牛込早稻田 早稻田大學出版部

社告

當秋期附錄號は編輯の都合上、發行の期を誤りたることを讀者諸君に深謝仕候尚

本號は定價金參拾八錢郵稅金貳錢に御座候、六ヶ月以上拂ひ込まれたる本社直接の愛讀諸君に對しては、前記郵稅額だけ割引可仕御承知相成度候也

十月一日

反省社編輯部
反省社庶務部

新刊

前外務大臣 伯爵林董閣下序、正木照藏先生譯

マクス、オーレル原著

ジョン、ブル

又名 英吉利氣質

裝釘雅美全壹册
正價五十五錢
郵稅八錢

多年我英文界にも偏く喧傳せるマ氏の名著『英人と英國』の完譯也。原文の一句を漏さず而も朗々誦す可き明快の譯文、加之必要の個所には一々註解あり、以て我同盟國民の眞相を窮めんと欲する人若くは原書の研究者には無上の好案内たるを期す。

好評 笹川漁郞譯 （諸新聞批評一斑如下）

▲國民 所說剴切犀利、全編十八章皆有益有趣味の文字

▲時事 譯文も嚴正流暢、一般の恩謝するところならん

▲朝日 社交的談話法に關する一切の秘訣を網羅せり

▲報知 所說剴切痛快にして此種著書中の白眉に屬す

四版

社交談話法

裝釘高雅
價四十錢
郵稅四錢

發行所 東京神田區雉子町 玄黃社

【振替貯金口座七九九五番】

大賣捌 東京堂、東海堂、北隆堂、至誠堂
大阪 杉本、久留米 菊竹

早稻田大學講師文學士 波多野精一君著

基督教の起源

定價九十錢 郵稅八錢

猶太教は基督教の母○耶蘇の事蹟及福音○ペテロ及復活の信仰○パウロの事業及信仰○ヨハネの福音書

本書は著者が東京帝國大學文科大學に於いて嘖々たる好評の内に講ぜられたるを更に訂正したるもの著者の眞面目なる研究の結果に成りし本書は我國の哲學界宗教界に光明を與ふべきは弊社の信して疑はさる所敢て江湖に推奬す

內村鑑三君著

よろづ短言

定價五拾錢 郵稅六錢

日露戰爭前三年間著者が萬朝報に投ぜし短文の中より其粹を拔き之を一書となして發行せし書なり事政治文學、宗教、天然、社交非戰等の諸問題に涉り精讀再讀するの價値あるべし

松村介石著

不朽の道

定價五拾五錢 郵稅六錢

▲忽ち再版▲

本書の歡迎せらるゝを以て如何に今日の精神界か動かざる易らざる確固不拔即ち眞理の不朽の道を求めつゝあるかを知るべきなり

◎本書の初版十日ならずして忽ち盡く以て此書の眞價を知れ

米國ニューマン、スミス氏著 日本宮崎湖處子君譯

科學的信仰

定價九十錢 郵稅八錢

目次○新奇なる觀察點○默示としての進化○自然界の方向の事實○細胞歷史に於ける方向○自然の方向の理會すべき性質○自然界の方向の道德性○美の意義○個體の出現○進化に於ける退化○進化の恢復○完成の原則○未完自然の預言的價値等一讀すべき良書なり

發兌 東京市京橋區尾張町二丁目（振替貯金五五三番） 警醒社書店

市内は御一報次第直に御一覧に供し可申、地方の御注文は直ちに發送する手筈整ひ居候



内地小包料は代金引替手數料共金貳拾錢臺灣樺太滿韓送料は金卅五錢

弊店主任高橋彌四郎儀は舊トモエヤ支店長として廿有餘年間勤務せし處曩に同店を辭し右の場所に合資會社アヲキ商店を組織し多年練磨研究の功を實地に應用し各位をして後顧の憂なく且流行に遲れざる品物を確實廉價に販賣仕候間何卒御引立之程奉希上候敬具

市内ハ電話又ハ御一報次第早速店員御用伺ニ參堂可仕候

安心の出來るクツとカバンは

アヲキ商店

京橋區南傳馬町二丁目東側
電話本局 一七四三番

國木田獨歩

病牀錄

再版

總クロース
函入最上製

定價八拾錢
小包料八錢

東京麹町區
土手三番町二十七番地
新潮社

▲報知新聞評　獨歩彼は自己を僞ること能はざるの人、況んや病牀死生一髮の境に在りて、赤裸々の感想を述ぶ、吾人は玆に欺かざる獨歩の眞相を看ることを得たり。彼は尋常一樣の作家にあらず天地の玄妙に深き驚異の念を抱き、人生の根帶に大なる煩悶あり、其小說は所詮小說の體を假りて此感想を述べたるものゝみ。「病牀錄」に至りては、更に直截に更に明快に、單刀直入此感想を披瀝し來れるものにして、或意味に於いて彼れが小說以上の興味ありと云ふことを得べし。一卷二百八十頁、死生觀、人物觀、戀愛觀、藝術觀等に分ると雖もいづれも人生を心讀せし天才の閃光也、智に拘せられず理に縛せられず。當面直下に胸臆を拓き來つて語々悉く眞、我等の胸と胸と相觸れて甚深の感銘を與ふ。若し夫れ彼の小說に散見する一種の警句に至りては、本書の毎節毎頁に見ることを得可く、彼れの小說に最も偉なりとせし人生はた戀愛に對する高調なる煩悶は、本書に於て更に痛切に味ふことを得可し、思想家としての獨歩を知らんとする人の爲めに一讀を薦む。

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

醤油釀造界の一大革新

最良醤油



資本金｜壹千萬圓

釀造元

日本醤油釀造株式會社

東京深川區小名木川通 電話浪花「長」三七七三番 一五九五番

特色

製造清潔
品質佳良
黴を生ぜず
價格低廉

特色

弊社は前人未發の新發明にかゝる斬新にして完全なる鈴木式釀造方法及機械的裝置により精良無比の醤油を釀造販賣す

特約販賣所

東京日本橋區北新堀町 電話浪花「長」二四六番

合資會社 **日本醤油東京販賣所**

其他東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論第二十三年第十號秋期大附録號目次



秋期大附録

◉露國自然派の先蹤をなせる官能的描寫を看よ！

トルストイ著　徳田秋江氏譯

生ひ立ちの記

【最上製函入美本】

定價九拾錢　小包料八錢



翁が少年時代の耳目に映せる自然人生の批評にして、露國に於ける最近自然派の先蹤をなせる杜翁が官能的描寫は遺憾なく此うちに味ふことを得可し。文藝に志ある者の必讀に値するは勿論、偉人が少時に於ける思想發達史として、善良なる家庭に於いて要する絶好の修養書也

我邦に於ける杜翁(トルストイ)研究は、從來其思想的方面に於て僅に皮相を穿てるに過ぎず。久しく閑却せられたる其文藝的方面は『生ひ立ちの記』の新譯によりて眞面目なる研究の報告に接する事を得たり。我邦唯一の杜翁學者徳富蘆花氏は曾て「若し杜翁の著作悉く燒き盡して其一二を殘すとせば予は『生ひ立ちの記』と『戰爭と平和』とを以てせん」と言ひたりき。『生ひ立ちの記』は實に翁が八十年の著作生涯に於ける處女作にして、時の大家ツルゲーネフをして嘆賞措く能はざらしめたるもの、定木の如く直く、白紙の如く純白なる

◉偉人が少年時代に於ける思想發達の徑路を看よ！

東京神田駿河臺　東京國民書院　電話本三千四番　振替四千二百番　取次　東京堂　上田屋

"SUR LA RAVIERE"



BY PAUL CHABAS.



第二十三年第十號

(第二百卅五號)

秋期大附錄號

興味ある大博覽會延期問題

(一)

大博覽會の延期は。洵に西園寺侯の言の如く素より國家問題にあらず、又政治問題にも非ざる也、然れども其の成立以來比較的に歡迎せられ、殊に其の財政整理案を以て頓に中外の信用を厚くしたる桂內閣に取ては、此の延期こそ實に唯一の不人氣問題なれ。東京府會市會及び區會は總て全會一致を以て反對の決議を爲し、東京實業組合も然かし、而して新聞紙中に在ては、單に東京朝日、國民、『やまと』の三新聞が敢然として贊成したるのみ、時事、讀賣、報知、萬朝、二六、日本、都の七新聞は極力延期に反對し(東京日々、每日電報は贊否共に言はず)而して政友會の東京支部及び二日會等の有志は、之を把て內閣攻擊の武器と爲さんと欲し、已に公然反對の決議を爲して、而して進步黨は暫らく沈默を守るを

約し、戊申倶樂部また研究の餘地ありとして他日を期するもの丶如し
延期問題が今正さに下火となりつ丶あるは事實也、思ふに是れ一種の低氣壓乎、漸くにして稀薄となり、竟に全く消滅すべきか、抑もまた深度を加へて、竟に風を捲き雨を飛ばして政界を狂湃せしむるに至るか、政界の事及び感情より來る形勢の常理を以て推す可らざるに於て、吾人は未だその變化の如何を輕々に判斷する能はず。

（二）

根本的に博覽會を非とする者あり、現に歐洲諸國は博覽會の絶えず開催さる丶煩に堪へずして、漸く之を厭ふの傾向あり、獨逸政府が曾て伯林に萬國博覽會を開設せんと欲して、各實業組合の意見を徵するや、彼等は答申して曰く『大博覽會は徒らにお祭騷ぎたるに過ぎず、群集する觀覽者は多く彌次馬に止まりて購買力を有せず、其の結果一時開催地の物價を暴騰せしむるのみ、然かも一度騰貴せる物價は容易に下落せざるを以て、結局博覽會は有害也、且つ夫れ獨逸の産業は、今や悦ぶべき秩序の上に立て駸々乎として進歩しつ丶あり、何ぞ博覽會に由て之を廣告する必要あらんや』

米國人は最も壯大なる博覽會を悦ぶ、現に博覽會請負師なるものあり、其の設計、建築を始め一切を請負ふとを專門とす、然かもシカゴ及びセントルイスに於ける大博覽會は、共に成功を以て終ると能はざりき

日本と雖も今時勢後れの大博覽會を催ふし、此がため餘裕もなきに幾千萬の國帑を糜す可らずとする

もの、是れ非博覽會論の主旨にして、其の主張者は、内閣が來る明治五十年を以て大博覽會を催ふさんとするをもまた容赦なく非難す

（三）

内閣を辯護する者の說によれば、大博覽會を明治四十五年に開催せんとするも事實不可能也、强て之を開催せんとすれば、不完全なるものとするの外なく、且つ其の經費も到底一千萬圓の豫定額を以て引合ふ能はず、寧ろ之を五ヶ年間延期し、此の間に於て交通機關ホテル等の附帶設備をも爲すに如かずといへり

是れも亦一說也、且つ明治五十年は我が天皇陛下御即位後五十年に相當し、東西古今を通じて其の例多からざる慶事たるに於て、我が官民は正さに雄大なる紀念式を行ふなるべし、故英國女皇の即位六十年式の盛大なりしを思はゞ、我れ豈多く之に讓る可けんや、殊に我が天皇陛下は、御即位以來、藩を廢して全く政體を復古し玉へるのみならず、文武總て擴張一新し、憲法政治を施行して國力を一統し、淸國及び露國と大戰して曠古の大勝を獲、其の結果として南は臺灣を併せ、北は樺太の一半を版圖とし、韓國を保護國とし、南滿洲に利權を立てゝ國勢の張れると、實に有史以來無比なるに於て、陛下の盛德宏業を世界に表彰するがため、雄大なる式典を擧行せんと官民の齊しく期待する所なるべし、即ち實業方面の成蹟を顯揚するが爲めには、萬國大博覽會を開催するが如き、亦其の一端ならずんばあらず

故に單に一の大博覽會とのみ言はず、御即位五十年の大慶典を擧ぐるがため、今より總ての準備に鋭

意せば、交通機關を首め、都市の外觀其の他も著るしく向ふ十年間に改良せらるべく、大博覽會の如きも亦十分に内外人を滿足せしむるに足るべし

（四）

最初議會が大博覽會設置を主張するや、實は戰勝に浮かれて、光榮ある大博覽會を催ふし、以て汎く外國人を招來して賑ひを添ゆると共に、多く國民を潤ふさんとするに外ならざりき、去れば萬國大博覽會として戰勝紀念の意味を表彰せんと欲したりしも、斯くすれば第一に露國の感情を害し、第二に露國の同盟國の惡感を招き、第三に露國及び其の同盟國に遠慮するがため、列國の多く贊同せざることを懸念して、竟に萬國大博覽會を止めて、單に大博覽會と爲したりしのみ、然かも其の豫算の如き必らずしも相當の根據あるにあらず、漠然として一千萬圓と定め、其の内の半額は入場料取立を一任することを主なる條件として東京市に負擔を約さしめたるのみ

然るに豫算成立し、官制また定まるに及び、世は不景氣に襲はれて人心頓に沮喪せると同時に、歐洲列國は甚だしく贊同せず、而して時の西園寺内閣も亦財政難の襲來に由て、漸く大博覽會の早計なりしを認め、單に之を大博覽會事務局にのみ一任して、極めて冷淡に看過し、毫も督勵を加へて以て其の事務を捗ぶ等の擧に出でず、松田氏の大藏大臣たるに及びては、却つて延期の必要を感じて密かに重もなる閣僚間に内議する所ありたりき

此の時に方つて、大博覽會事務局は幾んど暦日なきが如く、頗ぶる鷹揚なるものなりき、彼等は博覽

會に關する古今東西の典籍記錄を蒐集し、之に由て博覽會に對する萬有の智識を有するに得意なりき、地方に至て官民を招集し、大博覽會に協贊せしむるがため、博辯宏辭、實に鬼神をも感動せしむるが如くなりき、然るも實際の事業を進むるには、恰かも風馬牛相關せざる姿なりき、四十五年の春までには、今より三年半を剩すに過ぎざるも、未だ敷地の買收をすら全く終らざるなり、否、水族館の設定をすら定めざるなり、否々、建物建築の設計をすら未だ立つるに至らざる也、彼等は大博覽會の如き大建築物を一手に請負ふて間違なく竣工せしむべき大なる土木組なきを知らざるに似たり、之を分割して大小幾多の請負業者に請負はしむるも、木材其の他の材料に不足し、隨つて工夫其の他の勞力にも不足するを知らざる也、之を以て向ふ三ヶ年半の間に工事を竣工せんとすれば、勢ひ粗造濫設に流れて、再び東京府博覽會の二の舞を演ずるの恐れあるを察せざる也、殊に工事を急ぐがため、其の費額を增加し、唯だ敷地と建築のみにても、豫定の一千萬圓にては殆んど不足を生ずるの懸念あるを知らざる也、否、怜悧なる或るものは、工事進行の半途に至て否應なしに追加費を要求する魂膽をも抱藏し居たりしといふ

或る有力なる技師の說によれば、大博覽會の建築物は素より悉く永久的のものならざるも、壯大と利便とを主とし、尙ほ日本建築の特色をも加味して、兎も角日本大博覽會として甚だ粗拙ならざるものを建てんには、其の設計に一ヶ年、此の設計に基きて一方に土地を整理しつゝ一方には木石を伐出し、之れを建築地に運搬し來るまでには、約二ヶ年を要すべく、斯くて建築に三ヶ年、造作及び電話電燈瓦斯

水道等の取付に一年、陳列場整理にも亦約一年乃至半年を要するが故に、明治四十二年中に設計を完成するとして、恰かも五十年に始めて開館し得べしといへり、而して其の費用は少くも二千萬圓乃至二千五百萬圓を要し、之を完全のものとするに從つて、更に多くを要すと聞く

今の内閣が斷じて延期と決したるは、恐らくは斯る事情のためなるべし、且つ吾人の想像する所によれば、大博覽會は初め無期延期に内定したりしが如きも、世論の反對思ひの外激しきを視て、俄かに五十年まで延期するに更ためたるものに似たり、五十年まで今の内閣の持續す可らざると勿論なりと雖も然かも果して眞面目に五十年に開催する成算を有するや否や、吾人は世上の深く玆に注視せんとを促さゞるを得ず

（五）

東京府市會議員中には、任期中大博覽會の開設に際して、或る特權を享有し得、此の特權に由て或る名利を兩つながら掌握せんとを豫期し、極力競爭して當選し、當選後更らに或る役員たるがため萬金を吝まざる者も亦之ありたりき、故に突然延期に逢ふや、其の計畫は全然齟齬したりき、彼等が議員たり役員たる任期は、四十五年以後に及ばざれば也、玆に於て彼等の失望は靑山附近に於て多くの思惑を企てゝ大失敗大損害を受くるものと幾んど異ならざる也、彼等は感情に走りて痛く内閣の處置に反對したり、否、勘定上より反對せざるを得ざる也、其の竟に常識を失するが如き言動に出てたるも亦素より怪むに足らざるのみ

或は名を商工業の萎縮に藉りて延期の非を鳴らすものあり、素より大博覽會を大祭の如く、小兒的に思ひ做して樂み待てるものは、延期に失望すべき也、大博覽會を當てに諸種の計劃を畫き、土地に家屋に、餘興に興行に、才取に仲買に、大小智愚各々相應の思惑を爲せしものは、延期のため總ての水泡に歸したるを憤懣すべし、延期が一般の人氣に妙ならざる素より多言を要せざる也、然れども眞に其の改良進歩の顯著なるとを表彰せんとする商工業者は、此の延期により五年計畫を十年計畫に改め、其の製作に力を用ゆるの餘地多きを悅ぶべきの理也、然り、眞に實着に價ある製作を出さんとする商工業者技術者は、寧ろ延期を歡迎すべし、斷じて反對するの要なき也

然るに府會市會を始め、實業組合までが反對の決議を爲せるは何ぞや、府市會が感情否勘定に走るとは之を知る、實業組合なるもの亦豈彼の思惑を爲せる一連に非ざるか、然らずんば大博覽會の早く開かるゝを以て、不景氣救濟の一策なりと過信したるものならん、大博覽會によりて多くの外國人を招來し少くも二三億の金錢を日本に振蒔かしむべしと夢想したるものなるべし、嗤ふべき哉

獨逸字の一新聞紙曰く『日本政府が財政上大博覽會を延期したるは洵に餘儀なき次第なるべし、日本人が此の大博覽會に依て自個の商品を世界に廣告せんとするは恐らくは謬想ならん、但だ日本人が世界の進歩したる器械を目擊して自ら發明するの機會を後れしめたる丈けは、其の損失なるべきのみ』と、日本大博覽會の目的若し世界の器械を視て參考に資するに在りとせば、其の成立の價値の小なる寧ろ驚かざるを得ざる也

或は曰く「大博覽會延期は當然也、但だ之を延期するに當つて、東京市に諮らざりしは失體也、市は既に大博覽會の經費として五百餘萬圓を負擔せり、即ち大博覽會は政府と市との共同事業の如し、素より大博覽會のことは勅令に依りて定めらる、之を改廢すると政府の自由なるも、事實上共同者たる市に問はざりしは專斷に過ぐ、所謂非立憲的たるを免がれず」と

此の說また一理あり、現に戊申倶樂部の多數は此の說を把持するものに似たり

東京市長尾崎氏が初め此の說を以て首相桂侯に問ふや、侯は謝して「唯だ秘密の外間に漏れて、多く物議を生じ、竟に事の斷行を阻止するを恐れしのみ、此がため會長たりし金子子爵にすら打明けざりき、請ふ之を諒せよ」と、思ふに能く秘密を守り、且つ自家に責任を取りて果決敢行するは、桂内閣の長所にして而して又實に短所也、初め日露戰役の開始さるゝや、桂内閣は民間の有志、殊に新聞記者の重もなるものを招きて一切の事實を打明け其の援助を求めたりき、故に平生政府反對の中堅を以て自任せる人々も、政府のために地方を遊說して以て擧國一致の實を擧ぐるに力めたりき、然るに媾和談判の開始さるゝに及び、桂侯等は一切口を緘して有志と語らず、全然意思の疏通を杜絕したりしを以て、竟に民間の大反對を招き、新聞紙を擧げて媾和條件を非難し攻擊したる極、彼の燒打事件をすら演出せしむるに至りたりき、吾人の思惟する所を以てすれば、若し當時桂侯等にして日露對戰の實情を打明け、媾和の竟に已む可らざるを語らん乎、多くの新聞紙は之を諒として國民の感情を煽動せざりしならん、假令然

らざるも、少くも議論を以て反對するのみ、竟に感情に走らざりしならん、果して然らば豈彼の燒打事件なるものを生ぜんや、外交の事素より秘密を要し、而して媾和の大權に屬するに於て、桂侯が責任を負ふて決行したると寸毫も咎むる餘地なしと雖も、然るも民心の指導に於ては甚だ缺如したりしと謂ざる可からず、今や大博覽會の延期問題の如き、桂侯の意中には夙くより潛み居たりしならんと雖も、之を閣僚に口外したるは恐らくは八月二十日前後なるべし、此の時に方つて東京市長及び評議員中の一二人に之を打明くるも、彼等何ぞ多く秘密を外間に漏さんや、假令之を漏して反對の聲を擧ぐると雖も、到底防止の遑なきにあらずや、且つ彼等も亦甚だ事理に昧ならざるもの也、說くに延期の已む可らざるを以てせば、何ぞ之を首肯せざらんや、彼等已に之を首肯せば、假令感情、否勘定より延期に反對する議員あるも、之を鎭撫すると易々たらん、然るに桂侯の擧措玆に出でざりしは、亦過度に秘密を固守する弊癖に出づ、世多く侯等を以て武斷家とす、恐らくは此等の事實に憑據したる說なるべし

　然れども之を以て非立憲なりといふは酷に過ぐ、大博覽會の延期は、當然勅令に由るべくして、而して其の事の政府の權利にして又義務たるに於て、政府自から責任を負ふて速かに之を決行するは實に間然す可らざれば也、夫れ延期す可くんば速かに延期すべし、是れ一切の準備、一切の思惑を爲すものに取りて、損失を少くする所以なれば也、公然法律に違犯するか、若くは或る私利私慾のため法律の精神に違背し、全然民論を蹂躙せんか、之を非立憲と稱すべきも、法律により、國家のため延期を斷行せる以上、決して非立憲と稱す可らず、假令東京市に諮問せざりしとも、竟に是れ合法の處分たるに妨げな

き以上、斷じて非立憲といふ可らず、若し之を非立憲とせば、日露媾和も亦非立憲乎、非立憲なる稱呼の濫用も亦極まれりといふべし

且つ夫れ桂内閣が過度に秘密を固守するを難ずるも、此がため延期を非とするの理由は有らず、既に延期の必要にして且つ機宜の措置たるとを認むる以上、其の手續上一二の小過失あるも、推して延期を動かす可らず、况んや其の小過失なるものも、全く合法的にして、寸分も違法ならざるをや、彼の手續を咎むるが如きは、畢竟敢然として延期賛成を公言し得ざる怯者のみ、否、彼等は之に由て單に感情にのみ走る反對論の緩和に充てんと欲するならんのみ

（七）

裏には裏あり、西園寺侯假令國家問題に非ず、又政治問題とすべきものに非ずと喝破するも、政友會等竟に如何の動作に出づるや豫知す可らず、况んや博覽會問題の直接責任者は、彼等の最も畏憚し嫉視する大浦男なるをや、一個の部分攻擊として、何ものか之を利用するものあるや知る可らざるのみ、隨つて之を興味ある問題として視るの價値は十分に之れ有り

元老大臣の品行

井上侯の興津に病みて幾んど起つと能はざらんどするや、都下の諸新聞紙は皆人を遣りて日夕侯の症

狀を探り、精細に之を報告したり、國家の元勳に對する相當の手段として、吾人は彼等の用意を稱せざる能はず、但だ一方に侯の人物性格を描くに力めながら、待合の女將藝妓俳優等の口舌を藉つて盛んに侯の行狀性癖を傳ふるに至て、吾人實に阿然たらざらんと欲するも得ざる也

侯を國家の元勳として崇敬し、隨つて其の症狀を細報する程ならば、其の人物性行を傳ふるにも、精嚴なる批評を以てするを當然とす、多くの新聞紙中未だ曾て之を爲したるものなきは何ぞや、精嚴なる批評を加ふべき能力なき乎、抑も又其の面倒を厭ふ乎、却つて何事ぞ、卑むべき女將藝妓の齒を藉りて、侯の性格を語らんとはする、知らずや、卑しき賣春婦をして、其の近接せる侯を語らしむるは、是れ直ちに侯の暗黑面（ダアクサイド）を描すものなることを、而して是れ實に侯其の人を侮辱するに當ることを

常に辛辣なる筆を揮へる某新聞は、曾て伊藤公が妓流に狎昵し、之をして白日公然其の官舍本邸に出入せしむるの非を鳴らして、嚴詰峻難、殆んど公をして逃避に所なからしめたりき、然るに今や同一新聞にして、率先して女將藝妓の口を藉りて公の暗黑面を傳へ、然かも之に由て侯を難ずるにあらずして却つて頌するが如くして得色あるは何ぞや、吾人は之に由て新聞紙其の物の品性の墮落を認むると共に、社會道德の萎靡せるを慨せざる能はざる也

就て考ふるに、井上侯初め、元老及び大臣等は、大抵花柳の巷に出入して色を漁し慾を恣にし、老いて而して渝る所あらざるを多しとす、是れ社會上默視す可らざる一事也

多くの人には暗黑面あらざるとなし、司馬溫公は一室の事尙ほ天下に秘すべきものなしといへるも、

是は温公の如き公明の君子人にして初めて然るのみ、今の英皇エドワード七世陛下も、其の皇太子時代に於て多くの暗黒面を有せられしが如く、陛下の大なる負債が近頃に至て辛ふじて辨償し終られたるも、實は暗黒面に投費せられたるものなりと傳へられ、現に米國に於ては、陛下の情事といふものを經緯して十餘册の小說を編せるものあり、恰かも我が源氏物語に似て更らに淫靡を逞せり、素より悉く事實にあらずして、多くは架空的ならんと雖も、一斑や則ち窺ふに足らん。然れども彼の國俗は暗黒面に蓋して以て臭を掩ふが如く、曾て公衆の眼前に之を許くとなし、倫敦のピカデリーにはシルクハットの紳士往々にして影を見するも、新聞紙は見て見ざるが如くす、巴里の貴女紳士の淸淑なるは其の表面のみ、エミールゾラの描きたるものの多く實情を穿ちたるや人の是認する所たり、然るも新聞紙また臭を掩ふて世に告げず、表面は飽まで淸淨にして且つ綺麗なるものとす、我が國の新聞紙は之に反す、官公署が藝娼妓の存在を認めて之に課税すといふを楯に、彼等の廣告を掲げ、彼等の一擧一動を報ずると、殆んど紳士淑女の言行を報ずるよりも細か也、甚だしきは國法の奈何ともする能はざる所と唱へて、娼樓の主人を國民の選良として衆議院に迎ふるものすらあり、隨つて人の花柳の巷に出入して痴を盡し愚を盡すや、微細に之を報導して以て讀者の好奇心を飽かしむるを以て智なりとする新聞紙多し、乃ち我が國に在ては殆んど暗黒面なるものあらざる也、否、有りと雖も之を掩ふて臭に蓋するが如き俗なきのみ

玆に於て元老大臣等の賣春の賤婦に狎れ、色を漁し情を恣にする愚態痴態は、最も明細に新聞紙に傳へられて、常に公衆の眼前に暴露せらる、我が公衆の德心或は歐洲人に及ばざるあらんも、然かも之を

視て苦々しく感ぜざるはあらず、其の多くは元老大臣の尊きを忘れて、一種輕侮の念を禁ずる能はざるを常とす。現に日露戰役の酣なる頃、或る新聞紙は桂、小村、曾禰の各大臣と其の狎昵の賤妓とを並べて、兩者の寫眞を併せて揭げたるとありき、若し彼の燒打事件を以て內閣の運命を縮めたるものと做すあらば、吾人は將さに曰はんとす、此の寫眞の揭出は大臣に對する不信任の唯一、否最大原由なりしよを

伊藤公は大勳位也、位實に人臣を極めて、是れ以上に躋るべきものあらず、躋れば則ち皇族たり、國王たるの外なきのみ、且つ其の勳業赫々として中外に宣揚せられ、古今多く其の儔あらず、百の銅像を建てゝ活きながら之を神とするも、理に於て多く缺くる所あらじ、然るに公のため僅かに一銅像を湊川に立つれば、侮蔑八方より起つて竟に之を仆すものありしは何ぞや、吾人の見によれば、公が今に至るも尙ほ酒色に沈溺して舊陋癖を悛めず、潔齋して神宮に詣でながら、早く女將に戯むれ、紅白を塗抹せる婦女と追逐して、少しも耻づる所なく、殊に其の愚態痴態の常に細かに都鄙の新聞紙に傳へられて、隱約の間に國民の輕侮嘲笑を招ける結果に外ならざるのみ、公の勳業と位爵とを以てして、而して恪勤厚懿、身を持すると潔白ならば、天下豈翕然として公を崇敬せざらんや、公を視て跪拜し、其の勳爵に目を眩する田舍漢と雖も、其の胸奧には乃ち一種輕侮の念を宿せざるものあらず、總て公自から招くのみ、況んや公以下の元老大臣に於てをや

品行方正なるものは廉潔也、顧みて良心に寸分の疚しき所あらず、斯の如きは眞に勇者にして、苟く

も國家のためといへば、如何なる事をも敢行す、クロムエルは其の顯著なる一例也、故品川彌二郎子は、品行方正にして且つ廉潔なるに於て、實に眞の勇者なりき、今の國務大臣に就て其の儔を求むれば、夫れ大浦兼武男乎、男や學識の他に絕するものあるに非ざるも、然るも巨然として今の內閣に重きを爲し敵黨をして勇者として畏憚せしむるは他なし、品行嚴正にして而して廉潔なれば也、今の元老大臣等以て戒むる所を察すべき也

夫れ元老大臣は摸範人也、病めば則ち日夕の症狀を傳へられ、一擧手一投足悉く都鄙の新聞紙に揭げられざる莫し、素より聖人に非ず、又教育者にあらざるも、公共的に最高なる名譽の職分に在るがために、常に中外に瞻視せられ、萬目の焦點に立てり、自から摸範人たらざらんと欲するも得ざるのみ、摸範人にして尙ほ且つ恬然として時々花柳の巷に出入し、賣春の賤婦と狎昵して痴を極め愚を極むるが如きは、是れ好んで醜を天下に晒すもの也、單に多くの黃金を懷く匹夫ならば則ち已む、苟くも國家の元老大臣として、名譽の位地に立つ以上、深く戒むる所なかる可らず、況んや五十六十七十を超えたるをや、多くの新聞紙所謂粹にして深く之を咎めざるも、元老大臣等自身は、省みて其の良心に問ふべし、寧ろ其の兒孫に質すべし、今や社會の道義漸く委靡して、制裁將さに緩まんとす、吾人故に先づ一鍼を元老大臣に加ふ、素より世道人心の爲めのみ



立憲制の本義

法學博士　副嶋義一

國務大臣の責任、內閣の統一及帝國議會に於ける論議

方今政治上の弊害多しと雖ども、國務大臣責任の本義未だ全く明白ならざるより甚しきはなし、夫れ立憲の要旨は先づ國家政務の當事者を嚴定するに在り、當事者一たび定まらんか、責任者亦自ら明白と爲る、國家政務の當事者は君主なり、國務大臣なり、府縣知事なり、及其他國家百般の機關なり、君主國に於ては統治權を總攬する者は君主なり、君主は統治權の總攬者なり、是れ古今の國制上動かすべからざる元則なり、然れども歷史上の事實に於ては君主以外の者國柄を掌握したることあり、例へば君主の父兄若くは君主の配偶者が事實上國權を行使したることあり、是れ名實の混同にして乃ち國家紛亂の始めなりしなり、我日本に於ても或は隱居の法皇にして猶國務を攬りたることあり、或は外戚、幼沖の天皇を擁して攝關したることあり、或は後宮垂簾の政を專し、或は皇兄弟九五の位を爭ふあり、之が爲に國家の治平を害したること稀ならざりき、憲法は斯る弊害を一掃せんが爲に天皇は國家元首として統治權を總攬することを嚴明にし、苟くも天皇の裁可あらずんば國法上の効力を有せざることを定め、天皇の在位は終身にして讓位することを許さず、皇族は天皇の未成年、又は故障の場合にあらざれば攝政たることを得ざることを定めたり、即ち天皇は名實共に統治權の總攬者即ち國務の當事者たらざるべ

からざることを期したり、若し天皇の位にあらず天皇の名を有せざる者が天皇の實を行はんとする如きあらば、是れ國法上無効たるのみならず政治上道義上不正不倫の甚しきものなり、而して此事國務大臣に關しても亦敢へて異なることなきなり、夫れ國務大臣は天皇を輔弼し其の責に任ずるものなること憲法の規定する所なり、國務大臣は即ち天皇を輔弼するの當事者なり、天皇を輔弼するの當事者として責任を有する者は國務大臣の外何人も存することなきなり、且つ天皇は其の大權の作用に依り國務大臣を任用す、即ち其任用は信任第一の者を以てすべし、國務には天皇の信任を得る者は國務大臣の外に何人も存することなし、又存することあるべからざるなり、是れ國法上に於て道義上に於ても宜しく然るべき所なり。

然るに今我國政治界の現狀に於ては、所謂元老なる者ありて大臣の上に立ち、君主の信任を有し、大臣以上の權柄を振ふ、是れ實に放肆なり、若し所謂元老にして國政の料理に任せんと欲せば宜しく正位に立ち責任の地位に當るべし、若し其の故障の爲に責任の地位に立つを得ざらんか、宜しく當局地位者の國政の料理に任せ決して之に容喙すべからず、元より元老も政治上の意見を有すべし、然れども之を發表するには適當の方法を以てすべし、或は議會に於て或は公然の言論を以て或は新聞紙雜誌等を用ゆべし、是れ其の自由とする所なり、然るに其の宮中に信好なるに乘じ、或は施政に付異議を奏宜し、或は大臣を左右し以て國政に干涉して竊かに實權を握らんとする如きは是れ法皇の院政なり、立憲の制は皇族に於ても猶院政を許さず、何ぞ獨り元老院政を採るを得んや、其の位に在らずして其の職を行はんとするは是れ國政紛亂の始なり、元老或は大久保彥左衞門の爲を以て自ら任せんが、假令純忠彥左衞門の如くなるも立憲制の下に於ては猶不可なり、况んや彥左衞門の如く純忠ならざる者に於てをや、殊に宮廷に於て刺譏讒誣を試みる如きあらんや、是れ君主の信任を傷け天聽を蔽ひ、宮中と府中の間に懸隔を生ぜしむるものにして、國政に統一を缺き其の

弊や遂に救ふべからざるに至らん、凡そ政治の弊は常に陰暗卑劣の裡に萠芽するものなり、故に憲法及其他の法令は上は君主より下は國務大臣以下の百官に至るまで政務の當事者を定め、決して他より之を侵すを得ざらしむ、元老の所爲の如き實に官制の大義に反するものにして、法律上政治上道義上不法不正不倫の甚しきものなり、立憲の本義を宣明するに當ては斯る不法は之を第一に戰絶せざるべからず、尤も非違の甚しかりし例は本年の始に於ける大藏遞信兩大臣の辭職なり、聞くが如くんば遞信大臣先きに元老と協定したる鐵道經費の外に增額を求め、大藏大臣之を諾す、元老之を詰して云く、是れ先きの協定に反するにあらずやと、遞信大藏兩大臣ともに之れを抗するを得ず、遂に各其の職を辭せりと、是れ抑も何等の怪事ぞや、元老は國務大臣の上に立つ職位を有するや、大藏遞信兩大臣は元老の任命せる所なりや、天皇の任命したる國務大臣が、憲法上官制上何等の職位を有せざる元老に對し、責を負ひ職を辭する如きは、實に立憲の本義に反するや大なり。

縱令元老は如何なる言動を爲すも、苟くも一國の國務大臣たる者は宜しく其の自己の地位の如何を熟知せざるべからず、國務大臣は天皇を輔弼する至高至大の地位を有し、獨立の責任を負ふものなれば、國務は總べて自ら之を決定せざるべからず、他の協定を待つ如きは自己の職責を忘却するものなり、故との西園寺內閣の如き既に軍備擴張、鐵道國有等前內閣若くは元老の計畫を徒らに執行するの使僕たるに甘んじて常に元老の掣肘を受けたり、是豈自己の職責を知悉するものならんや、夫れ西園寺侯門地の高きは以て宮中の信を繋ぐに足り、政友會の援助は以て衆議院を制するに足り、貴族院亦甚だ御し難きにあらす、輿論亦甚だ相反したるにあらず、然るに一朝にして其の內閣の瓦解するに至りし所以のものは當初元老の容喙を許るし其獨立の地位を潰したるを以て也、彼の有名なる獨逸の宰相たりし「ビスマルク」は、現時の獨逸國を創立したるの大功臣なり、其勢力の隆盛なること殆んど君主を

歷したり、然れ共其の一たび宰相の位を退くや、復々國政に參與せしめらるゝことなかりき、何となれば當局者にあらざれば國政を掌るを得ざること立憲の本義なればなり、英國に於ても獨國に於ても此の立憲の通義は確守せられざることなし、當局の國務大臣は名實共に君主の輔弼者なり、獨立の責任者なり、君主の第一の信任者なり、國務大臣の外に更に君主を輔弼するべき第三の人が後方に存することとなし、是に於て政治は常に公明正大なり、方今我國政務の要は、元首が唯其の尤も信任する者を以て國務大臣を任用し、名實共に國家最高の政務の府たらしむるに在り、苟くも國務大臣以外の者は、縱令舊功臣なるも亦元老なるも全く之が容喙を拒絶し、國務大臣をして獨立の決定府、及責任の府たらしむるに在り、且つ總理大臣の任を受けんとする者は宜しく奏して云ふべし、總理大臣は國家政務最高の府なり、内は國務各大臣を統御すると同時に、外元老の掣肘を受くべきものにあらず、唯國務に付排他的の信任を受けざるべからずと、斯くして國家元首の信任あらば即ち總理大臣の任を受くべし、然らずんは之を荷受すべからず、若し元首の信任あらば他の喧囂は何かあらんや、現時の桂内閣は他の掣肘を受くること西園寺内閣の如く甚しからざる點に於て優れりと云ふべし、若し現内閣以後の内閣にして前内閣の如き轍を履む者あらんか、斷して之を斥けざるべからざるなり。

若し國務各大臣が元首の信任を受け、獨立の責任を以て國務に當るに至るを得ば、是れ我内閣組織の上に於て一段の進歩を爲したるものと謂ふを得べし、然れども國務大臣は各々獨立して元首を輔弼する責任者なり、故に各大臣は堅く自說を執り他に同せざる場合を生ずることあるべし、是れ國務の統一を缺くの端なり、夫れ國家政務の功績の擧ると否とは其の統一を得ると否とに大なる關係を有す、國家政務の執行は其の統一を得るを一大要件とす、若し軍務、外務、内務、財務等の各部大臣が唯其の政務を行ふに腐心し、國家全體の實力に相應するを顧みざるときは國家遂に疲弊

の疾患に罹らん、例へば軍備の擴張に汲々として他の政務殊に農工商の政務を怠慢するときは、國力衰耗して軍備の資力は遂に之を給する能はざるに至らん、故に軍備も外交も教育も財政も國家全體の自然的狀態に適合せしめざるべからず、國狀に適合する諸般の政務を行ふには統一の計畫を要す、統一の計畫なきの施政は國務紛亂に至るの始なり、從て行政各部の統一を掌る機關及制度の存することは國制上甚だ肝要なり、是に於て我現行の官制上內閣を設け、國務各大臣を以て之を組織し、重要の國務を議定せしめ、內閣總理大臣は各大臣の首班として機務を奏宣し、旨を受けて行政各部の統一を保持せしむ、即ち總理大臣は行政各部を統一するの上位者なり、元より各大臣は獨立の責任者なるを以て若し內閣會議に於て意見相合せざるときは多數決に依りて之を決するを得ず、之を天皇に奏宣して裁決を請はざるべからず、然れども總理大臣が內閣會議に於て各大臣の意見を總括するを得ず、各種の意見を併奏する如きは其の首班たるの職責を盡くし得たるものにあらず、斯る場合には內閣破裂の非を示すものにして總理大臣辭職の原因と爲ることあるべし、故に總理大臣が苟くも其の首班たる職責を盡さんには、奏宣前に先つ內閣會議を決着せしめざるべからず、則ち總理大臣の意見は各大臣の意見と相合せざるべからず、換言すれば總理大臣は各大臣を統一するの技量と德量とを有せざるべからず、故に國務各大臣は獨立責任の地位に在りと雖ども其の政務の執行には總理大臣の同意を得ざるべからず、從て總理大臣は國家全體の國是の下に行政各部の政務を統轄することを得るなり、然れども國務各大臣は唯總理大臣の命令を奉行するものにあらず、其の政務の決定は當該大臣の自らの決定なるゆへ獨立の責任者たるの地位を失ふに至らず、而して他方には國務の統一は常に保持せらる是れ我法制の妙所なり。

斯くの如く國務の統一は一大要件にして、亦我現行の法制の上に於ては、總理大臣あり、元首の下に於て元首の旨を受け國務各部の統一を保持する統轄的最高

府として存せり、然るに實際の事實は果して如何、總理大臣は果して此の統轄の職責を盡し得たるや否や、明治三十一年の憲政黨內閣に於ては、當時の總理大臣大隈伯自由進步兩派の融和未だ熟せざるの黨派を帥ゐて之を組織したり、其の直ちに瓦解したるは寧ろ當然なりと謂はざるべからず、次て明治三十三年の政友會內閣は全く一黨を以て內閣を組織し、伊藤侯總理大臣と爲りしも、大藏大臣渡邊氏の財政案に付諸大臣の調和を得る能はず、遂に內閣は瓦解せり、是れ總理大臣が閣員の統一を保持する能はざりし較著なる例なり、蓋し我內閣組織に於て尤も醫すべからざる痼疾的弊害は總理大臣が陸海軍兩省の大臣の任用を自由に推薦し得ざるの一事是なり、夫れ總理大臣は元首の下に於て行政各部の統一を保持する最高位に立つ、其地位は陸海軍大臣の上に在ること猶ほ他の文部、司法の大臣の上に在ると異なることなし、然るに總理大臣は陸海軍大臣を自由に推薦することを得ず、從て亦陸海軍の政務及經費に付任意の統轄を爲すを得ず、陸海軍の政務は內閣の中に於て殆んど治外法權の狀態を有す、是豈不當の甚しきものにあらずや、假令陸海軍は國家政務の中に在て甚だ必要なる部分に屬するも、然かも國家全體の國是より打算して之が計畫を立てざるべからず、陸海軍の政務は亦國是の執行の一部分たり、一國政務の大方針の外に超然たることを得ざるなり、それ國家全體の大方針は總理大臣に依り決定せらる、故に總理大臣は陸海軍大臣をして此大方針に從はしむるの手腕を有せざるべからず、然るに我國代々の總理大臣多くは此痼疾の醫療を決斷し得ず、唯舊慣に任せて一日の安を偷む、疾病をして愈膏肓に浸犯せしめたり、前內閣の如き尤も其適例なりしなり、幸ひに今や疾病の存する所を審にし之が救濟に着手せんとせり、陸海軍の事業緜延の如き失政を表示するものなりと雖、然かも之を爲さざるには優るべし、今より以後苟くも總理大臣たる者は陸海軍大臣も之を自由に推薦するを得ざるべからず、從て亦之を監督すると他の諸大臣に於けると同一ならざるべからず、凡そ總理大臣は當初內閣

を組織するに際し、國政大體の方針に付豫め各大臣と其意見を一致せしめざる可らず、且つ常に行政各部の間を能く調理して此の方針を保持することを務めざるべからず、是れ内閣組織の基礎なり、若し之に反し外は元老の容喙を拒むを得ず、内は陸海軍大臣を御する能はず、漫然として總理大臣の職に就く、愚なりと謂ふべし、現時の桂總理大臣は强硬なる獨裁主義を採り、以て各大臣を統帥すと聞く、若し果して信ならんか内閣組織に一段の進歩を爲したるものと謂ふべきなり。

それ國務各大臣は元首を輔弼すべき獨立の責任者なりと雖とも、總理大臣に依り統一せられざるべからず、總理大臣は行政各部の間に秩序を保持し、國務を均衡にするを務むべし、之れ其の手腕を要する所なり、總理大臣能く其の地位に應し其手腕を振ふを得ば、國政は着々として其の途に就き、其の功績や眞に觀るべきものあらん、然れども政府者が獨り其の政權を專にし、他の監督を受けざるときは、縱令純良の人なるも遂には放肆に至らん、故に國務大臣は帝國議會に於て其の責任の解除を求めざるべからず、即ち議會に於て其の政策と計畫とを說明し、質問に答へ、誤解を辨明し、又決算を提出せざるべからず、議會も亦大は外交、軍國の方針より、小は行政會計の當否に至るまで、之を辨難攻擊して疑惑を解き、隱微を穿つことを務め以て政府の所爲の正否を問ひ、其の放肆を防ぎ、由て以て國政をして公明正大ならしむることを圖らざるべからず、議會は即ち國政をして公明正大ならしむる所以の府なり、故に議會は唯多數黨をして跋扈せしむることを本來の目的とするものにあらず、反て正義の存する所輿論の向ふ所を明かにし、以て政府の施政の正否を律するの標準を知らしむる所なり、故に議會の議場に於ては、政府も政府黨も、反對黨も多數黨も、少數黨も、自由に其の意見を吐露して以て討論駁擊せざるべからず、元より議會の議事は之を決定せざるべからず、而して決定は多數決に依らざるべからず、然れども之を決定する前に當り多數黨の主張する所正義なることを明白にせざるべからず、然らずんば國民は何を以て議

會の議決に感孚することあらんや、且つ多數黨の主張必ずしも正義なるにあらず、少數黨の主張亦正義なることあり、其の何れが果して正義なるやは議會に於ける討論駁擊の際に觀て之か判斷を下すことを得べし、而して之が最後の判斷は輿論之を下さざるべからず、故に議會の國制上必要なる所以は國務に付各方面をして各々意見を提出して互に討論駁擊せしむる府たるに存す、多數黨が決定を與ふるは必ずしも必要なる階段にはあらざるなり、是れ立憲制の本義なりとす、熟ら我議院の狀態を觀るに此の立憲制の本義に反すること多し、國務大臣は敢えて議場に出席して辨明することを好まず、唯儀式的に出席するのみ、又其の政策と施政に付十分なる說明を與へず、質問に對する答辯は常に之を曖昧にし、若くは遷延す、凡べて議會に對するには信實と熱心とを缺き、唯一時を糊塗して以て得たりと爲すの風あり、多數黨は其の勢力を恃み辨難攻擊の勞を避けて唯議事の進行を希ひ、强ゐて採決を早くせんことを願ふて止まず、少數黨も亦其の可否の採決に關係なきを口實として敢て辨難を加へず、凡て議員の議論は切實と誠心とを缺き、唯一時の名を博するを以て甘んずるの風あり、斯くして幾億萬の豫算案も咄嗟の間に決定せらるゝ也、實に是れ沒立憲主義の甚しきものなり、予曾て獨逸國の國會を觀、其の狀況の實に讃嘆に堪へざるものあるを發見せり、それ現今の獨逸國は皇帝萬能の國なり、其の議院制に於ける遠く英國の後に在り、然れども議院の制度、慣例の甚だ美なるものを有せり、舊內務卿「ポサドスキー」伯の如き開會中は殆んと每日議場に出席し、其の机上には赤、黃、樺、白色等の表紙を附けたる數多の帳簿を前に列して、或は閱讀し、或は記入し、常務を執りつゝ議員の演說を聽き、其の佳所に至る每に眼を擧げ筆を止めて詳聽し、其の段落を過ぐるに至り復た執務に從事す、而して機熟すれば則ち立ちて演說し、或は說明し、或は答辯す、斯くの如くにして伯は議場を以て其の執務の房室とし、議席に列して演說するも亦其の平生の執務の一と爲せるなり、議場に列するを忌み、答辯を拒む如

きは常務を厭嫌すると同一視せるなり、伯の如きは立憲制大臣の好摸範たりしと謂ふべし、(加ふるに伯は平生の生活甚だ質素にして、歐羅巴の貴族に似ず、伯曾て議場に於て演說して曰く、方今獨逸國に於て社會黨の益跋扈するに至れるは、貴族の豪奢を極むるの生活が誘導したるなりと、是が爲に伯は貴族の同情を失ひたるも國民一般には大に人望を有せり、惜哉宰相「ビユロー」公と議合はず今や其の職に在らず)現時の宰相「ビユロー」公亦議會に於ける說明答辯の爲めに大に其勞を竭せり、公の執務の大半は議會の爲にせり、既に平生の時に於て議場に於て演說すべき材料を輯聚し、會々賜暇旅行することあるも、必ず屬僚を伴ひ、記錄を携へ、調査を怠ることとなく、以て異時の需要に備ふ、是に於て臨機の際答辯と駁擊とに窮することなし、若し夫れ公の議場に於ける演說の雄大にして精緻なることとは中外の久しく仰瞻する所なり、其の自己の政策を宣明し、世界の狀況を述べ、反對黨若くは社會黨の所說を攻難駁擊するに當てや、鋒芒陸離として胸を刺すの感あり、而して其辯說數時間に亘るも猶泥々として議論は盡きることとなし、且つ公の演說は用語措辭の精練にして典麗なるを以て聞く者をして覺へず喝采を叫ばしむ、要するに公の演說は理を窮め情を穿ち人の心裡に徹到せしめずんば止まざるの慨あり、公の如き立憲國大臣として得易からざるの材なり、然れども獨逸の國會の美なるは獨り宰相演說のみには限らざるなり、先づ議場の光景を一瞥するに、服裝の如きは必ずしも一定せず、保守黨の議員は多く貴族に出つるを以て多くは禮服を着く、中央黨の議員は僧侶多きを以て時に或は僧服を纏ふ者あり、自由黨の議員は多く商工者に出つ故に平服を穿つ者あり、尤も眼に映し易きは社會黨の議員なり、此の議員は勞力者より出づ、從て茶褐色の短衣を着つくる者多し、故に服裝に依りて先づ其の出身の何になるやを甄別するを得ることあり、又其の服裝の種々なる爲、種々の人民團體より選出せられたるを標示し、眞に人民代表會たるの外觀を呈せり、斯くて議案を議するに當ては、各黨派は各々

其の代表者を出して意見を吐露す、社會黨及「ポーレン」黨の如く、一は反國家黨なり、他は敵獨逸黨にして、且つ少數黨なるも能く其の意見を發表することを得、敢へて妨害沮却せらるゝことなし、殊に社會黨の首領「ベーベル」の如き尤も豪宕精悍にして、政府の失政を攻撃し、傍若無人にして皇帝及宰相を罵倒するも猶ほ演壇より降下せしめらるゝことなし、歳計豫算案の提出せらるゝや、其の委員會に附せるゝの前に當り先づ國家全體の政治上の狀況に付政府及各黨派の討論あり、其議常に數日に亘らざることなし、甚しきは一週間に及ぶも猶盡きざることあり、而して其の委員會審査の後、第二讀會第三讀會を開くに際しても亦決して咄嗟の間に終ることとなし、必ず行政各部の施政に付各黨派の論難細に入り微を穿ち議論盡くるに至て初めて採決す、而して何れの提議、何れの主張が果して正なりや否やは既に議決前に之を判別するを得べし、故に少數黨も必ずしも沮喪するを須ひず、多數黨も必ずしも驕慢なるを得ず、何となれば正義の判斷は議決の外に在ればなり、而して正義の存する所は乃ち輿論を喚起するの淵源と爲ればなり、一國の政治是に於て始めて公明正大たるを得るなり、獨逸の現皇帝の如き專肆なる覇術を行ふを好む者なりと雖も、其の甚しき怨恨を買はざる所以は一方に斯る公明正大なる議政の方術を採るを以てなり。

若し夫れ英國の國會の美風に至ては、眞に欽羨に堪ざるものあり、曾て議論に於て兩黨互に劍光砲火の論戰を交へ採決したる後、少數黨の首領多數黨に向ひ謝して曰く、今日の事、些の遺憾なし、謹て採決を甘諾すと、多數黨の首領亦之に答禮して曰く、貴黨の不運を痛むと、勝つも驕らず、敗るゝも沮まず、英國の黨爭は實に宛然たる君子の爭なり、蓋し英國の國會議場は眞に國事を議する府なり、故に議員は誠實と熱心とを以て從事す、此の如くにして始めて國會の職責を盡すものと謂ふべきなり。

顧て我國議會の狀態を觀るに議員の學識、政治上の知識、及其の節操、德義に付ては彼地の議員に比し大

に劣る所あるを免れず、夫れ一般の學識、政治上の智識の如きは元より一朝にして之を學習し得べきにあらす、之を俄かに議員に要求するは酷なり、之に反し議員性格の根本要素たる政治上の節操と德義に至ては、議員自らの意志如何に由り之を保有するを得るなり、敢えて勉强して學習するを要せさるなり、然かも猶之を放肆に附して敢へて之を求むるを欲せす、我議會の政績宜しく大に擧るべくして而して大に擧からす、我立憲制の効果の宜しく實のるべくして而して未た大に實のらざる所以のものは、主として議員の性格に闕漏あるの致す所なり、それ既に議員の節操と道義に闕くる所あり、故に選擧場裏に公言したるものと議場に於ける行動とは相矛盾し、或は全く相反對するに毫も其の病むところにあらす、唯選擧場裏に於て當選するを畢生の能事と爲し、一たひ當選を終れは先きの公言は直ちに之を糊塗して其口舌を二三にす、豈是れ眞の國民の代議士ならんや、人或は東西の文明を比較して西洋は物質的の進歩を爲せるも、精神的道義的の進歩は東洋に優ることなしと云ふ者往々之あり、然るに東洋の道德は多くは奴隷的なり、奴隷の主人に對する的の道德を以て上乘とす、是元より不可なるにあらす、然れとも我東洋に於ては同人に對する道德、公衆と公共に對する道德の猶大に進歩せさるべからざるを主張して止まざるなり、西洋に於ける公衆道德は大に進歩せり、故に議員の節操も甚堅固にして其の選擧場裡に公言せる主義は議場に於ても毫も之を變ずることなし、是を以て選擧人は其の主張に從ひ安んして選擧に從事することを得、先年獨乙國に於て殖民問題に付國會の解散せらるゝや、政府及其の黨與は殖民愛國主義の好辭柄を以て選擧場裡に臨みたるも然かも政府反對の中央黨員及社會黨員に投票せる者は前回の選擧に比して毫も減少したることなく、中央黨の如く寧ろ多少の增員を得たり、社會黨に屬する投票數も敢えて減少したるにあらす、各選擧區に於て多くは決選投票に於て反對黨連合の爲に敗られたるのみ、以て知るべし、選擧人の意思の如何に鞏固なるかを、是れ議員候補者の節操の堅

確なるか爲に投票者も亦之に信賴せるに由るなり、我國に於ては議員の節操を涵養せさるべからざると同時に選擧人の節操も亦大に之を扶殖せさるべかす、議員獨り堅確なる志操を有するも選擧區にして動揺定まりなくんば亦之を如何ともする能はざるなり、是に於て選擧人の敎育殊に政治上の訓練を爲すの必要を生ず、聞く頃者板垣伯議員の不可なるにあらす、國民に恒心なき爲議員も其の節操を守ることを得す、苟くも國民にして議會の解散に遇ふも其意を變ずることなくんば議員も亦愕々正論を吐露することを得べしと談せりと、是れ眞に然り、國政改善の最終の淵源は國民に存するなり、苟くも國民にして立憲制の本旨に副ふを知らずんは何そ其の効果を收むるを得んや、然らば則ち國民を訓練し敎育して立憲制の本旨に副ふの智德を具備せしむることは尤も肝要の事件なり、若し方今國民を立憲制に敎訓することを目的とする有志のもの興るあらんか、國家を利することゝ世の憒々者流の政黨の比にあらざるなり、板垣伯の如き往時自由黨を組織せるは國會の開設を目的としたり、今や國會既に開設の目的を遂せり故に以後は社會改良に盡力すと云へりと聞く、然れとも國會の開設を以て濟國の經綸は之を終局したるものにあらす、國民をして國民政治の生活を完全に遂けしむるは常に之か訓練を爲すを要す、夫れ河水も滯て動かされは則ち腐敗す、國民も棄てゝ訓せされは則ち愚昧に陷る、故に河水は常に之を流通せしめさるべからす、國民は常に之を敎訓せさるべからす、有志の士務むる所を知らざるべからす。

性慾敎育問題

ドクトル 富士川 游

性慾敎育といふ文字は、獨逸語の Sexualpädagogik をば直譯したので、その趣旨とする所は、『性慾の事をば若年のものに敎へ示す』といふのであるから、これを性慾說明 (Sexuelle Aufklärung) といつてもよろしい。性慾の生理及び衞生につきての事項を說くのであ

るから、固よりこれを衛生の部門の内に入れても差閊は無いが、しかし、その問題が特殊のものであるから、便益のために、一部門を立ててこれを論ずるのである。

それで、この性慾教育問題は、一面には教育に關し、一面には衛生に關するもので、教育の方面では、教育心理學と、倫理的、宗教的との見地から研究せねばならぬことであるが、衛生の方面では、醫學、就中神經病理學と、衛生學との見地から、これを攻究せねばならぬ。故にこの問題は、醫學界と教育界との兩領域に渉りて、重要なるものの一個として擧げねばならぬのである。

全體、性慾といふものは、生殖作用に關聯して現はるる所の本能的生理的作用で、生殖作用といふものは、吾人人類の發達の上に、重大の關係を持つて居るものであるから、その衛生を誤まるために、起る所の弊害といふものは誠に慘憺として恐るべきものである。それで性慾問題の忽にすべきものでないといふことは、これまで教育家の中にも主張した人がある。殊に醫家の内には。これを唱へた人が尠く無い。しかるに、教育の方では、從來これを秘密に附するといふことを以て、唯一の方針として居つて、今から僅かに十八年ばかり前に獨逸國に開かれたる道德教育會議の席上でも、性慾の事は秘密に附するを可とすといふ說が多數であつた位で、今日でも、此の如き意見を有して居る人は宗教家などにはこれあるべしと信ぜらるる。

しかし、現時、教育學者及び醫學者の間に行はれて居る說、即ち所謂輿論といふものは『性慾は教へ示すべきものである、無暗にこれを秘密に附するといふことは宜しく無い』といふことに一致して居ると言つても宜しい。この事に就ては、前文部視學官乙竹岩造氏の詳細なる報告が、昨年の官報に載つて居る。この報告の初に、性慾に關する教育の沿革が書いてあつて、次に現時の輿論を擧げて『性慾は之を教育すべし、徒に秘密に附し去るは宜しからずといふに一致せり』と書いてあるが、これは事實である。性慾は生理的の本能

であるから、自分に獨りて知るにまかすべしといふやうな說をなす人は、少なくとも西洋の有力なる學者には無い。本能的生理作用であるからと云へば、飲食の事なども放棄して置てよいといふことになる。起臥のことなどもそうである。本能作用その儘、自然のままといふことになれば、これは野蠻時代の狀態の再現である。故に今日の所では、性慾教育に對して、反對の說を立つる人があるにしても、それは性慾教育の方法に就ての異論であつて、この點に就ては固より多少意見の齟齬を免れぬことであるが、絕對的に、性慾の教育をしてはならぬといふやうな、原基的（プリミチーフ）の考を持つて居る人は、斯の學問界には甚だ少ないことと信ずる。

　教育の方面のことに就ては、我邦では、前に擧げた乙竹前視學官の報告（官報所載）に、精細に、載せてあるし、又近頃、朝野教育家の間には、その意見を公にする人々があるやうであるから、余は、今ここには、一切之を論ずることをやめて、單に余が專門の醫學上の見地からして、この問題に就て言ふべきことを單簡に擧げようと思ふ。

　全體、性慾教育の問題が始まつたのは昨日今日のことではない。余は、今から凡そ十年前、明治三十一年、獨逸滯在中に兒童の性慾の早期に現はるることを論じ、性慾教育に注意せねばならぬといふことを我が邦の教育家諸氏に警告せんが爲めに、當時我邦にて始めて刊行せられた『兒童研究』雜誌に大分委しく書いたことがある。しかし、余が此の時の論文は、些も教育家の注意を喚起することは無かつた。時勢の進步と言はうか、何と言はうか、十年后の今日では、余が十年ほど前に言つたと同樣の說が、嶄新として多少世人の注意を惹くやうになつた。これは余が自家の着眼を誇るために言ふのではない。我邦の學問社會の有樣に憤激して、餘計なことながら、苦言をなすのである。すべて實際上、重要と認むる問題は、早く之を捉へて、研究して見るが善い。研究は一夜づくりではいけない。多數の學者が五年も十年も掛つて、研究を積むで來たものを、ただ自分の考へて一概に、これを是非すると

いふことは素人なればイザ知らず、決して學問界の人のすべきことでない。近時我邦の教育は、形式に拘泥して、教育の眞義が達せられて居ないと云ふ人があるが、たとへば性慾教育問題のことなどを考へて見てもこの惡口は、或は當を得たものかと思はれる點がある。これは横道であるが、兎も角も、這般の問題が、眞面目に、專門家から研究せらるるやうにならねば、駄目であるといふことを特に一言する。

性慾教育の趣旨

我が醫學の上から言ふと、性慾教育といふものは、人々をして健全で、自然に適したる生殖生活を營ましむることを期するものである。人々をして、身體的及び精神的の滿足を得せしめて、而かもその健康を傷はしめず、種族(ラッセー)を善良に保ち、又進むでこれを一層上等のものにするやうにつとむるのが、性慾教育の目的である。しかし、この目的は、單に醫學上の要求ばかりでは達せられぬことは明かで、無論、倫理上の方面からの補助を得ねばならぬ。そうして性慾教育の實際上の問題では、性慾の事をば若年のものに教へ示すといふことが、最も重要の事項である。

醫學上の見地からすると、この性慾教育を施すといふことは焦眉の急に迫つて居るものと云はねばならぬ。これには大要、次の二個の重大なる原因があるからである。

第一は**性慾の早期發動**である。性慾が兒童に現はれるのは、大抵男十二歳、女十一歳が最も早いものとしてあるが、大抵十三四歳の兒童では、性慾が已に現はれて來るものと認めねばならぬ。獨逸國で有名の博士コーン氏の説に『兒童の間に手淫の行はるる原因は兩親又は教員等が、其兒童に性慾の事を説明しないからである。兒童は性慾の事を教へて貰はないからして、その知識は不明の泉源より得るの外は無い。それで兒童が始めて性慾の刺戟を知りたる時に、すなはち手淫の惡風に染むのである』と言つて居るが、これは自家の實驗と、他の諸家の實驗とに基づいて立てた説で、

至當のものと認めねばならぬ。瑞西精神病學の大家でフォーレル氏といふ博士は、多年性慾問題の事を研究し、近時一大著述を公にした人であるが、この人の說に『兒童の手淫の原因の第三番に擧ぐべきものは、習得と摸倣とである。これは學校で、年長の兒童より習得し、又は摸倣するもので、學校以外でも下女などから習得し又は摸倣の機會を得ることが多い。これからして、性慾が早期に發現するやうになつて、手淫の惡風は增長して、これを制止することが六ケ敷い』と言つて居る。(Trof. Forel, Die sexuelle Frage. 1906. L. 244.)これも確かに事實である。

性慾の早期に發現することには、又た寄席、芝居、小說、新聞の三面記事等が重大の關係を持つて居る。そうして今日は從前と異なりて、交通の機關が盛になり、從前ならば書籍、雜誌等は漸次に國內に波及したのであるが、今日では瞬く暇に、全國に散布して、その弊害の及ぶ所は甚だ廣いのである。

第二は花柳病の蔓延である。花柳病の中でも梅毒は多少、人々が恐れる病氣であるが、淋疾の如きは、平氣で居るものが多い。それがために。不潔の交接のために、花柳病の蔓延することは、實に畏るべき勢であるが、殊に憂ふべきは、靑年者の間に、この病の盛に行はることである。それで獨逸國の花柳病撲滅會では、昨年五月マンハイムで、第三回大會を開いた時に、性慾敎育の實施に就て、醫家及び敎育家の所說が發表せられ、其演說は纒めて、一冊の本として、出版せられた(Sexual pädagogik. 1907. Leipzig.)。當時諸家の演說の大要は昨年の『兒童硏究』雜誌に、余が抄錄したるものを載せてあるから、委しい事は、それに讓ることとして、大體のことを言へば、諸家の論旨は、花柳病豫防の一個の手段としても、性慾敎育の實施は緊要の事であるといふことに歸着して居る。

然らば實際に於て、我邦の靑年者に、目下どの位、花柳病があるかとの問に對して、これに答ふべき十分の材料はないけれども、しかしこれを推定するに足るべきものはある。陸軍省衞生年報を見ると、一年志願

兵、士官候補生、幼年學校志願者の不合格者の病類に、次の通りの花柳病の數が示してある。

	一年志願兵 梅毒	一年志願兵 睪丸、副睪丸病	士官候補生 梅毒	士官候補生 睪丸、副睪丸病	幼年學校志願者 梅毒	幼年學校志願者 睪丸、副睪丸病
明治三十二年	四•〇五	一•二八	〇•五七	〇•三七	〇•九六	〇•九六
同 三十三年	一•四九	三•四八	〇•二六	一•二三	—	—
同 三十四年	二•六三	〇•七五	〇•四九	一•四八	—	〇•八六
同 三十五年	一•一九	一•九八	〇•七〇	二•一〇	—	—
同 三十六年	二•四五	二•〇四	〇•九三	一•八六	—	二•〇三
同 三十九年	一•九一	一•三九	〇•六九	一•二六	—	一•八八

〔備考〕表中の數は千分比例。三十七八年は統計を缺ぐ

右の病類は不合格となつたものであるから、無論著しいものばかりて、花柳病の中ても、淋病は擧げてないが、睪丸、副睪丸の病のあるは、其多數が花柳病の結果であるから、其數て以て、大凡、花柳病の數が推定せられる。すなはち、此表て見ると、幼年學校志願者、即ち尋常中學の初の時代の年齡のものにも、現に淋病及び梅毒に罹るものがあるといふことが確實て、これより年齡の稍々長したる士官候補生及び一年志願兵には梅毒も淋病も共に少なくないといふ事が證明せられる。

材料は少ないが、しかし、最も確實の成績を示せるものは、明治四十年十二月、在東京麻布步兵第三聯隊に入營せる新兵千三百二十四名につき、斯科專門の醫學士にて、該聯隊附の軍醫正山田弘倫氏が、現在花柳病（淋疾、軟下疳、梅毒）を患ひ又は既往に於て花柳病を患へたるものを調査したる成績てある。この成績によると、入營者の中にて花柳病を患ふるものは、各職業につき、百人中、次の通てある。

農業	一四•三六	學生	二三•二六
職人	二三•一二	漁夫	二六•八四
商業	三〇•八六	其他	一六•二一

右の表て見ると、學生には百人中、二十三人二分六厘の花柳病患者がある割合て、農業などのものよりは、遙かに多數てある。

又特に淋疾だけの調査て見ると、各職業百人中

農業	一一•二七	僧侶	一六•六七
職人	一四•〇六	漁夫	二一•〇五
商業	一六•五七	藝人	五〇•〇〇
學生	一三•九五	會社員	一二•五〇

官吏　四〇・

以右の數の淋疾患者がある。右の中、學生とあるは、普通の學生をのみ擧げたので、官吏、僧侶、會社員等も、すべて二十才位下であるから、大抵學生の籍から轉したものであると見なければならぬ、左すれば學生の淋病患者は百人中八十人許の大數となる。これは勿論放蕩者の萃を拔いたものと考へねばならぬから、これて學生の間に、十人に八人の割合、すなはち殆ど全數の學生が淋病に罹て居るとは云はれぬが、しかし百人中、十四人弱の淋病患者、即ち十人につき一人半弱の淋病患者があるといふ事は事實に近いのである。

海軍兵學校は入學試驗の程度の高いので、その受驗者は割合に眞面目のものが多いと認められて居る。しかるに明治三十八年入學試驗不合格者一千六十五人の中、體格不良のもの三百三十を除き、其他は疾病のために不合格となつたのてあるが、其中に花柳病が四人、泌尿生殖器病が三十三人ほどある。左すれば、海軍兵學校入學志願者の中にも花柳病は一千人に三人位はあるといふことが事實に近いのである。

又明治三十六年及び三十七年の兩年の間に、東京醫科大學皮膚科の泌尿器科部に來て、診療を乞ふたものゝ內に、六百七十四人の淋疾患者が居つた。その內に、學生が二百〇二人て、すなはち淋疾患者の凡そ三分の一は學生であつた。（醫學士田中友治氏報告）これは大學の病院であるから、割合に全體に學生の患者が多いといふ關係から、此の如く、學生の淋病患者が目立ちて多いのてあるから、これて以て學生の間の淋疾の多少を定むることは出來ぬが、しかし一部の學生の間に、淋疾の盛に行はれて居るといふことは、確かに認められる。

余が、こゝに擧げたる事實は、多くは東京市內て、而も近時の事實であるから、世の教育家及び經世家の注意を引くに足ることゝ思ふのである。少しく鋭敏に國家のためを思ふ人てあつたら、此の如き事實を見れば、一驚を喫すべき筈てある。これをこの儘に放置し

て置いたならば、吾人の種族の未來は誠に慘憺たる有樣に陷るべきことは明かである。それで、この弊害を除かむには、若年のものに、性慾の說明をして、生殖作用の衞生に注意せしむるやうにすべしといふ根本の問題が現はれる。そうして、この性慾の敎育が、焦眉の急に迫て居るといふことが言はれるのである。この場合に於て、今の學生の墮落を云々して、顏をしかめ單純なる形式的威壓で、これを壓迫しようと試むるなどは、これを敎育の本旨に背いた遣方と云はねばならぬ。

性慾敎育の時期

然らば、性慾の敎育は、何時頃よりこれを始めて可なるやと云ふ問題になる。これに就ては諸家の意見が區々である。フラッハス氏の說では、年頃となれる兒童をば嚴酷に監督し、あらゆる書籍、圖書などの、兒童の性慾を興奮すべきものを隔離し、兒童にして若し已に性慾の發生せりと認めらるゝに至りて、始めてこれに性慾の敎示をなすべしといふことである。

しかし、性慾の敎示をば、成るべく遲く始むべしといふの說には贊成者が尠なく、これに反して、これを幼若の年齡に於てすべしとの說には贊成者が多い。例へば維也納大學の講師カール、ウルマン氏は性慾の敎育は、兒童の生殖機の未だ成熟せざる前、すなはち十歲前後に始むるがよいと說いて居る。マンハイムの敎頭エンデルリン氏、伯林のドクトル フマルステンハイム氏も小學校の兒童に、性慾の敎育を施すべしと說き『小學の生徒をして、その卒業の時まで、生殖作用の關係を絕對に知らしめずといふことは、全く不可能の次第で、生徒は機微の間に、性慾の事を推し測るといふ有樣で、その眞相を明かにすることが出來ぬために、性慾のために、その身體を傷ふやうになるのである』と言つて居る。

敎育學の大家フエルステル氏などは、性慾の敎育を施すことは、その生殖機の成熟する頃、即ち十二歲乃至十三歲から始めるのが適當であると說て居る（Prof.

Förster, Jugendlehre.)。プロフエッソールクルーケンベルグ夫人は性慾教育に就ては經驗を有し、確信を持つて居る人であるが、同夫人は、フエルステル氏の說に賛成せず、性慾教育といふものは、兒童の物心つきたる頃より、漸徐に、これを教へ示すべきものであると說て居る。この說には賛成者が多い。(Frau Prof E. Krukenberg, Sexuelle Aufklärung im Hause. Die Umschau 1907.

性慾教育の教師

性慾教育は學校と、家庭とにて、施さねばならぬといふ意見が多い。マンハイムの教頭ラクロア氏が說によると、小學校にて性慾の教育をするために、師範學校の科目の中に性慾教育の一科を置くがよろしいといふことである。

しかし、又他の人の說では、各個兒童の身體的及び精神的特性を知らざる人をして、性慾のことを、綜合的に說明せしむるはよろしくない。それて、兩親及び家醫(出入の醫師)をして、各個の小兒に適當する時期を選び、適當の說明によりて、性慾の說明をなさしむるがよろしいといふのである。

或は學校醫をして性慾教育の任に當らしむるが適當であると說く人もある。

プロフエッソールクルーケンベルグ夫人の說によると、性慾教育は、固より學校と家庭と、相共に、之を施さねばならぬものであるが、どっちかと云へば、學校よりは家庭の方が重に任務を持たねばならぬ、そうして家庭では、父の方よりは母の方が重い任務を以て、性慾教育の事に當らねばならぬ。

性慾教育の方式

性慾教育をばどういふ風にして施すべきかといふてとは大問題であるが、しかし諸家の意見も略ぼ纏まつて居る。

家庭では、母たるものが、主として性慾教育の任に當たるべきであるが、その兒童に性慾の事を說明する

にはお伽噺のやうなもので、これを說明するがよろしい、(クルーケンベルグ夫人等)。固より兒童の各個に就て、取捨せねばならぬことゝて、家庭に於て、この任務を十分に盡すといふことは至難であると言はねばならぬ。維也納のドクトルブローム氏が、八歲から十二歲迄の兒童に性慾の說明するの目的に作りたる小冊子(Oker Blom, Beim Oukel Doctor anf dem Sande, vorbl-ugende sexuelle Belehrungen für Knaben von acht bis zwölf Yahren Mit Hilfe des Eltern. Wien.)があるが、この小冊子の大體は、一人の男兒が、田舍の叔父の許て一年の夏を暮した時に、叔父は醫師で、親切で、色々の事を話して吳れた內に、面白かりしことゝ、新しい知識を得たのはこれでありしことを、手紙に認めて、これを其友人に贈つたといふ仕組で、誠に善く出來て居る。

小學校では、これを博物學の教科の中で施行し、植物から始めて動物の生殖作用までに留めて置くがよろしいといふ說と、一方では、小學校にて性慾教育の任に當るべきものは、醫師で、これをば衞生科の中に含め、性慾生活の危險の點をば、解剖學的及び生理學的よりするがよろしいと說て居る(スタイネン、フュルステンハイム諸氏)

中學校でも、これを博物學の中でするか、又は別に衞生科を設けてするかといふことゝであるが、今日の所では、別に衞生の一科目を設くるといふことが、性慾教育以外の必要からも、盛に唱へられて居る場合であるから、衞生の一科を設けて、その中に、性慾教育を施すべしといふ說の方が優勢である。

性慾教育の範圍

性慾教育の範圍に就ては、教育家の方では獨逸伯林のケムシース、瑞西チウリヒのフエルステル諸大家、醫學家の方では伯林大學の神經病學教授オイレンブルグ、ブタペスト大學の衞生學教授リーベルマン諸大家の說がある。しかし、大體に於ては、一致して居るから、ここには、別々にこれを擧げず、主にドクトルマ

ルクーゼ氏が記述する所に依りて、性慾敎育の範圍を述ぶることとする。

第一　豫備の敎育として、博物學科の中で、生物の生殖のこと、及び動物と植物との生殖器のことを說明すること。

第二　性慾の說明は、醫師をしてこれをなさしめ、又成るべくこれを衞生科の中に於てすべきこと。

第三　性慾の敎育は、單簡なる解剖學的及び生理學的誘導編より始めて、生殖生活の危險を說示すべきこと。

（イ）生殖器の濫用（過度、不自然、不適當）及び早期にこれを用ふるの害を說くこと。

（ロ）生殖器病の危險を說くこと。

第四　交接作用及び生殖器病の豫防法等をば詳說せざること。

第五　兒童をして成るべく性慾を遠ざけしむるやうにすること。性慾交の前に、醫師に相談せしむるやうすること。生殖器病に際しては速かに醫師に治療を乞ふやうにせしむることを期すべし。

第六　性慾敎育は、意思の訓育を兼て施すことを期し、若年の母親の將來、私生兒の將來等を說きて、意思の力を十分にして、以て性慾の制遏をなさしむるやうに期すること。

第七　危險及び弊害をば重く考へ過ぎざらしむるやうに勉むべきこと。

右の敎科案は、已に伯林の一二の中學校で實行せられて居るもので、これに倣つて遣て居る學校は、獨逸國ては少なからぬやうてある。

之を要するに、幼稚の兒童てあれば、父母といふもの說明をぼんやりする位から始め、漸次に、生殖のことに及ぶべきてある。小學校の生徒には、男性、女性、父、母、受胎等の概念をば、植物及び動物のことに就て、敎へるやうにし、中學校の生徒て、性慾の發動が認められる時期からは、同時に性慾の過誤が甚だ危險てあるといふことを說明し、上級の生徒には、顯微鏡を用ひて、受胎の作用、細胞及び核の分裂、自然

陶汰、人工淘汰及び遺傳のことなどを十分に說明するがよろしい。尤も細目に渉りて生殖作用を說くこと、生殖器病の豫防法を說くこと等はよろしくない。

餘論

性慾敎育といふものの要旨は、大體右の如きものの〔で〕あつて、個人衛生上及び社會衛生上、一日も緩ふすべからざるものと云はねばならぬ。今の世に所謂自然主義(眞正の自然主義と云ふものはどうか知らぬが)とやらいふもののやうに、人類の本能たる性慾は、本能そのままに發動せしめてよろしいといふのとは、全く反對て、本能をば、自然のままに任かすときは、危險であるから、醫學と倫理學との知識によりて、これを適當の方針に向はしめやうと期するのである。

從て性慾敎育に於て、主とする所は一方に於て醫學上から、智的に、生殖生活の事項を說明すると同時に、一方に於て、性格の養成と、倫理的意思の覺醒とにつとめねばならぬ。つまり性慾衛生と性慾倫理と相待ちて性慾敎育を完全ならしむるものである。性慾倫理の事に就ては、近時諸家の論說もあるが、プロフエツソルフオーレル氏の『性慾倫理』(Prof. A. Forel, Sexuelle Ethik 1907.)の如きは最良の參考書であると思ふ。

余がここに述べた所のものは、性慾敎育の現今の狀態を示したものである。固より性慾敎育のことは專門家の研究に委すべきもので、その細目に渉りてこれを專門以外の人々に示すべき筈のものでは無いから、ここに擧げたのは。その梗概に止まるのである。

支那に對する列國政策一變の機

無名人

支那は曾て或支那人が自ら號して眠れる獅子と言つたるが爲に、一たび天下を驚かし、當時に於ては歐洲の列國をして汲々として支那の歡心を收めんことを謀

らしめた。故に日清戰爭の如きも、歐洲に於ては當初甚だ人氣ある戰と云ふことが出來なかつた。併し成功より成功する者はなして、日本が勝つたと云ふことは深く列國の同情を博し得たが、此戰爭に依つて眠れる獅子と思はれた支那は、其實一箇の眠れる老狸に過ぎざることが分明となつた。之が爲に從來汲々として支那の歡心を買ふに力を費した歐洲列國競ふて又支那分割の策に出てた。則ち第一に獨逸が膠州灣を取り、第二に露國が關東州を取りたるが如きは其の一例であつて、佛國も亦牛に曳かれて善光寺詣りて、獨逸露國の後を追ふて、支那に於ては二國と利害を共にして居つた。不思議にも支那は、獨逸に侵され露國に侵されながら自國を侵略したる露獨に向つて其耳を傾けて、北京の政治は全然二國及佛國の聯合力に依つて支へられた時節もあつた。此時に方つて日本、英吉利、亞米利加の三國は、北京に於ては寧ろ失意の位地に立つて、而して失意は三國を驅りて自然に相握手せしめて、進步政策を執らんことを支那に勸告するの位地に立つて、獨逸、露西亞、佛蘭西の三國が保守反動の政策を執ることを勸告すると相對抗した時代があつた。不幸にして日英米三國は相聯合したりと雖、尙保守反動の政治を止めて、改進の政策を執らしむるだけの力を有しなかつたのであつたが、其中に所謂三十三年の團匪の亂となつた。

此團匪の亂は何人が企てたか今日に於て分明でないが、少くとも北京の朝廷大官悉く之に同意したと云ふことは出來得るのである。或は西太后が張本人であると云ふ說もあるが、西太后は事每に朝廷の大官の意見に依つて動く人であるから、大官が悉く同意したるが故に自分は此政策を執つた者であると云ふことを、今に於て辯疏せらるゝさうであるが、多分是は事實であるだらうと思ふ。唯怪むべきは此の團匪の騷亂に先ちて、露國は露淸銀行をして、馬蹄銀と小麥を非常に多量を買込ましめつゝあつた。當時露國は果して何の爲に此の如き物を買集めるかと怪んだのであつたが、果せるかな團匪の亂が起きて、而して此の團匪の亂に乘

じて、露國は滿洲一帶を占領して、聯合軍が北京に於て奮闘しつゝある間に、露國は獅子の分け前を取つてしまつた。是に由つて此を觀れば、露國は團匪の亂を煽動した者であると云ふことを斷言するは大早計かも知れぬが、併ながら少くとも團匪の亂の起らんとすることを、早く知つて居つたと云ふことだけは、斷言しても差支ないと思ふ。露國は此の如き騷亂の起ることを知りつゝ、自らは其の危變に備へて、列國に對して毫も此危變を報道しなかつたと云ふことは、露國の負ふべき一大責任であるだらうと思ふ。此の如くして列國は餘儀なく聯合せねばならぬ事となつた。聯合は支那をして閉口せしめて、列國の言ふ所悉く承知せねばならぬと云ふことになつた。凡そ此の團匪の亂に至るまで、何故に支那が自ら此の如き暴力を用ゐるに至つたかと云ふことを訊ねて見れば、日英米と露佛獨と、三國相對抗して事毎に相排擠したと云ふことが、支那をして自ら恃んで强からしめた本であると思ふ。然るに今や此の相排擠したる列國は相聯合したるが爲に、支那は其息を閉ぢてしまつたのである。是に於てか其結果として聯合軍の侵略となり、聯合軍の償金要求となり、聯合軍が自ら兵を率ゐて北京の公使館を護ることゝなり、列國は自ら山海關、天津、北京に電線を敷くといふ端となり、今日に於て北京の宮城を瞰下す所の城壁の上に獨逸が大砲を据ゑて、一發の下に北京の宮廷を粉碎せんとする有樣を示しつゝあるが如きは、全く此の列國聯合の力であつた

此の如く支那に對しては聯合が勝ち、列國の單獨運動は列國を敗らしめる本となつて來て居るが、偖て團匪平いで後は、再び列國が其の利權を擴張するが爲に、分れて相排擠することゝなつた。第一に津鎮鐵道、第二に粤漢鐵道、或は某の鑛山某の鐵道と云ひ、或は敎師の傭聘と云ひ、貨物の賣込と云ひ、銃器の買上と云ひ、列國をして相紛爭せしむる多くの利益問題が出たが爲に、列國は復び分裂してしまつた。是に於てか一旦閉息したる清國は、復び又列國を睥睨することゝなつた。何となれば列國の利害に乘じて之を操縱

し、列國の權力平均の上に立つと云ふことに就ては、支那は三千年來研究し來つた所の外交術に於ては、敢て人後に落ちざるものであるが故である。併此の如くして列國は各其内兜を見透されて相爭はねばならぬやうになつたが、搗て加へて日露戰爭の爲に、支那の上下を通じて、極て自國が危險の位地に在ると云ふことを覺つた結果は、大に新學を獎勵せねばならぬといふ事になつて、新學を學んだ結果は、所謂世界普通の流行品たる國民的自覺と云ふやうなものを生じて、利權の恢復とか、或は國權の擁護とか、國際公法に於ける自國の權利と云ふやうのものに就て相爭ふの眼識を生じて來た。又一方には、日本は國會政治に依つて上下相一致すると云ふことが勝利の本であつたと云ふので、支那も亦憲政を布き、國會を開かねばならぬと云ふことになつて來たが、今や北京の朝廷は全國民の信頼敬服の根據の上に立つものでなく、場合に依れば顛覆の憂ありと云ふことを覺つたから、直ちに北京に於ける政治家は、此國民的運動の潮合に乘つて、或點までは總ての國民的運動は上下一致と言ひ得る形が生じて來た。此の如くして善か惡か、興か敗か、兎に角支那は活動し掛けて來た。此活動が果して支那の爲であるや否や、而して其活動が永久に亙つたる國民勃興の勢であるや、將た痙攣的の活動であるや、余の豫言する限りではないが、兎に角支那は活動しかけたと云ふことは掩ふ可らざる事實である。

然るに列國は相合すれば支那を壓し、相分るれば支那の爲に壓せらるゝと云ふ苦き經驗を屢々嘗めながら、尙汲々として目前尺寸の利益を爭ふが爲に相排擠して、益々支那をして自大ならしめる勢を助長しつゝある。今日に於て歐洲殊に英國の人民は、東洋に於ける英國の權力は最早衰退した、黃色人種は英國の國旗に對して侮辱を加へつゝあると云ふやうの事を公言する者があるが、予も亦英國の權力は進みたりと云ふことは出來ぬ。併ながら若し歐洲の權力が衰へたりと言はゞ、誰の力であるかと言はゞ、それは文明人自らが互に相排斥し來つたと云ふことが、其の原因であると云

ふことを自覺せねばならぬのであると思ふ。則ち日本が滿洲に於て、列國の承認に依つて結んだる條約に據つて種々なる事業を起す、此事業たるや日本は寸毫も他國の利益を害せずしてやりつゝあることとて、即ち自國の權力に依つて爲すことである。然るに此權利を認めたる英國人民中に於て、種々此權利を妨げるが如き企てをして而して、其の私曲を行ふことが出來ざるや否や、直ちに日本は滿洲に於て不法を行ふと云ふが如き聲を發して、其の同盟國を排斥して敢て顧みない。是に於てか日英同盟ありと雖尙日英の間相爭ふの機會があると云ふことを支那をして覺らしめ、此間に日英を操縱するといふ野心を生ぜしめつゝある。又列國の公使が北京に於て互に慶親王を訪問して、鐵道問題に就て相爭ふ。自國の權利を主張するは可なり、其の談判中には往々にして他國の權利利益を侵害するも顧みざるが如き口吻を發する者が少くない。是亦淸國の政治家をして、窃に冷笑して列國與し易しと思はしめる原因である。又商標權の如き亦然りてある、日本が曾て特許官を派出し、特許條例を作り、日本の法律に稍基いた法令を支那の爲に作り、之に依て自他共に其利益を全うせんと考へた時に、英吉利の如きは公使は之に同意をしたのである、而して暫くを經て、獨逸公使等の種々なる運動に依つて、英國公使は其心を變じて、後には日本の主張に反對するやうの事となつて、今日に於ては支那の特許條例相談なるものは全然破れてしまつた。而して其結果はどうなつたかと云へば、日本は英國の商品の商標を模造して、歐洲の貿易を妨碍するが如き形跡があると云ふ様の事を、屢々唱へらるゝやうになつた。若し英國にして當初の主張の如く、日本と手を並べて商標條例を作ることに運動せしめたならば、今日此の如き苦情の出る必要はない。然るに當初に於ては日本に同意し、中ごろ日本に背き、而して日本は商標條例なきが故に己が爲さんとする所を爲しつゝあれば、日本は英國の商標を侵害すると云ふが如き苦情を並べて、以て日本の面目を潰さんとしつゝある。此の如きは亦淸國の政治家をして、日英の

間與し易しと信ぜしむる本である。又米國の如きも、三十三年頃に於ては清國をして改進の政治を取らしめ、門戸開放の主義を取らしめると云ふが爲に、日英と相提携したるに拘らず、今日に於て滿洲が日本の勢力範圍になり、稍々日本の貿易が他國に比して都合好く行かんとするや、直ちに其商人の中には、日本が滿洲を私すると云ふが如き議論を唱へて、甚しきは米清同盟を唱へて、以て其目前の利益を收めんとするが如き、淺薄なる外交家を出すやうになつた。是亦支那をして列國與し易しと思はしむる原因である。此の如くして列國は互に相排斥し、互に間隙を作り、而して支那をして其間隙を襲はしめることを敎へつゝある。互に此支那を度すべからざる不貞の婦人と知りつゝ、其不貞の婦人の歡心を收めんとして相努めて居る、而して此不貞の婦人をして益々其不貞を逞うせしめつゝある。若し今日東洋に於ける文明なるものをして、信仰なき無勢力のものたらしめる者がありとすれば何人の責であるか、是は歐洲列國自家の罪であると斷言するに憚からぬのである。

右は今日まで列國が相聯合すれば其目的を遂げ、相排擠すれば其目的を過つといふ來歷を述べたに過ぎぬのであるが、偖歐洲列國共に注目せねばならぬことは、今後支那の形勢は愈々危險に近ぎきつゝあると云ふ一事である。從來は支那の外國に對する運動なるものは、多く北京大官の私見に過ぎぬのであるが、今日日本に學びて、支那は立憲政體を開き、國會を設けると云ふことになつて、九年の後愈々議事堂が開かれると云ふ段になつた。今や清國の上下を通じて全力を竭して此國會政治の準備を爲しつゝある。到る處に新聞は發行せられ、到る處に政黨の卵は出來つゝある。而して其の政黨の卵なるものは、何を綱領とするかと云はゞ、必ずや利權の恢復といふことが第一の綱領であらうと思ふ。恐くは或利權の恢復といふ事は、北京の政治家も亦好んで唱へしめることであらうと思ふ。何故なれば此對外運動を起さしむれば以て滿洲朝廷の權利の正當なるや否やを疑はしめると云ふが如き、內政

問題を避けるに至便てあるからてある。さう云ふ譯て此利權恢復と云ふことは、上下を通じたる國民的運動となるに相違ない。而して是が處士横議にあらずして、地方會議に依り、中央會議に依り、正當なる議政機關に依つて發表せらるゝ運動となるから、清國は此運動に乘つた以上は、或は虎に騎るの勢て、其の行かむと欲せざる所までも行かねばならぬかも知れぬのてある。是れ國會を有つて居る國の何れにしても避く可らざる勢てあるが、支那はさなきだに排外運動に就て最も火の付き易い所てあるに、今や國會なる機關に依て此排外運動がリアライズせられ、正當なるものと說明せられ、敵すべからざる勢を得た時に、列國は如何なる位地に立つのてあるか、支那に於て最も利權を有し、最も廣き勢力範圍を有つて居る者が、最も危險を受けるのてある。支那は二十七八年に於て、日本より救ふ可らざる打擊を受けた、併ながら尚之に依て其國の位地を覺ること能はずして、三十三年の團匪の亂となつた。之が爲に列國の聯合軍は長驅して北京に入り、西安に蒙塵したる朝廷も捕へられざること一歩てあつた。是れ實に振古の恥辱てあつたが、併ながら尚以て支那を覺らしめることが出來ず、今日に於て尚哈爾賓に於て露國の權利を疑ひ、滿洲に於て日本の權利を疑ひ、山東に於て排獨逸の運動を起さんとし、米國に對してボイコットを企て、日本に對して廣東に於てボイコットを企てると云ふ有樣てある。多分此次に來るものは、英國に對し米國に對する反動てあらうと思ふ此の如くすれば、今後の事を考へて見れば、最も清國に利害を有する者は、最も清國に於て危險の位地に陷るのてある、是れ列國が深く今より攻究せねばならぬ問題てある。

然るに日本に於ては此危險を避くるの策として、日本は清國に對して從來の政策を捨てゝ清國を懷柔し、親和の手段を執らねばならぬと云ふが如き議論を唱へる人が少くない。併ながら是實に愚の極點てあると思ふ、清國をして若し南洋若くは亞弗利加の野蠻國たらしめば、恩を施して而して利を收めると云ふことは決

して困難の事ではない、併ながら清國は儼然たる大帝國であつて、外交の術に於ては歐洲諸國よりも數日の長ある國民である、而して其の政治家たるや極めて現金であつて、喉元過れば熱さを忘れる人々である、此の如き國家に對して恩を施して利を收めよと云ふが如きは人を愚にするも亦極れりと謂はねばならぬ。恐くは是れ日本の外交家にして爲す無きの徒が、己の爲す無き跡を糊塗せんが爲に唱へる瞞かし論に過ぎぬであらう。日本は決して此の如き愚策に依つて、來るべき危變に備へ得べしと思はゞ、大なる過失であらうと思ふ。日本に於て此の如き議論あるが如く、列國に於ても亦此の如き議論がある。併ながら列國も日本と等しく、必ずや此愚論を覺るの日遠からざるべしと思ふ。而して其次に來るべきものは何であるか、恐くは列國の互に相握手すると云ふことであらうと思ふ。若し列國が握手するの決心が無かつたならば、恐くは支那を助長して、眠れる老狸をして眠れる獅子たらしめて、列國は自ら土を塗り金箔を塗つて、此帝國をして儼然たる恐るべき大敵たらしめて、自ら其弊を受くるに至るだらうと思ふ。

故に予は斷言す、此二三年内に於て支那に對する世界の政策は必ず一變するであらうと思ふ。而して誰が此政策一變のイニシエーションを取るかと云ふことは、予は興味を以て觀る所の問題である。

三種の疑惑

金子筑水

現代ほど疑問の多い時代はない。吾人は前後左右たゞ疑問にのみ取圍まれてゐる。見渡すかぎり人事百般に關する疑問は山のごとく高く海のごとく深い。吾人はあらゆる複雜な疑問のために、さながら窒息するかの感に堪へない。就中現代に於ては、實際生活上又は社會生活上の直接問題が甚しく世人を苦めてゐる。世人は此等直接問題に惱殺されて、殆ど他の一切の疑問を觀る遑がないらしい。されど現代人士の胸中には、

此等直接問題の外に、又は此等直接問題と連關して、更に一層深奥複雜な疑問が一種險惡な暗流を成してゐる。吾人は無數の直接問題と連關して、常に吾人が胸中の奥底に潛んでゐる無數の深甚な疑問のために惱まされてゐる。追はんして追ふを得ず、拂はんと欲して敢て拂ふ能はざるが此の種の疑問の本質である。固より此の種の疑問には限りがない。一々其の種類を組織的に編成するは學者の能事である。茲には試に其の中の二三を簡單に指摘して見やう。蓋し下に掲げる疑問は、特に現代人士の胸中に深く秘められた疑問であると思ふ。

吾人が第一に掲げんとする疑問は、必しも近代に初まれるにあらず、古來幾たびか詩人、哲學者、宗教家の間に繰返へされて、今日尚ほ未だ充分の解決を見ない最後の大疑問の一である。即ち吾人が人生の意義を探り、又は其の運命を想ひめぐらす際、吾人は必ず下のごとき最後の疑問に接する。吾人が自然と人生との意義又は運命に關して、如何に誠實に攻察し、如何に熱心に瞑想し、如何に深く想ひ信ずる所あるとも、斯かる攻察又は信仰は、畢竟人間の小さな識見又は信仰の上に想浮べられた人間の勝手な觀察又は信仰に過ぎずして、自然と人生との眞實の意義又は運命は、永久に我等人類には不可思議不可解ではあるまいか。假に人類間の個人的僻見、個人的觀察、個人的信仰等が次第に消滅して、自然と人生との意義及運命に關して、すべての人類が大體同一の意見、所觀信仰を持するに至るとするも、斯かる所觀又は信仰其のものが既に人間固有の目、精神、慾望、感情の上に築かれたもので、果たして其れが自然と人生との眞實の意義及運命に觸れたものであるか否かは不明である。吾人は人間に固有な感覺機關、思想の形式、感情、慾望、意志等を以て自然と人生とに對する。隨つて吾人が自然と人生との意義及運命に關して知る所又は信ずる所は、畢竟人間特殊の思想、感情、意志の上に築かれたものに過ぎない。斯かる人間的の所觀又は信仰が、果たして自然と人生との全體の運命に觸れて遺憾ないものであらう

か。疑へばそこに充分疑はれる餘地がある。極めて小さな精神を備へた蟲けらは、此の自然界を何と觀察するであらうか。鳥や魚や其他の劣等動物は、此の宇宙に對して、如何なる感想を懷くであらうか。吾人々類から見れば、此等劣等動物の感想は、殆ど無意義であらう、眞に憐むべきものでもあらう。されど焉ぞ知らん、自然と人生との運命に關する人類の感想其のものも、或は僅に劣等動物の感想に優つた憐むべきものではあるまいか。吾人が天地人生に關する所觀や信仰も、畢竟禽獸が天地に對して懷く小さな感想のたぐひではないか。自然と人生との眞運命は、我等人類の觀る所とは甚しく異なつたものではなからうか。吾人の人生觀も確信も、極めて不安なものではなからうか。近代ポジチ井スチックな態度の流行するにつれ、ひとへに當面現在の事實を尊び、更に其の裡面を觀察する事は、一概に空想夢想として排斥さるれど、吾人が至情は決して單に當面現在の事實のみに滿足するを得ず、深く其の内部の眞相又は將來の運命までも探つて已まない。吾人は吾人が存在の意義並びに其の將來の運命に關して、必ず何處にか安心する所を求めなければ已まない。然るに吾人が折角求め得た確信も、要するに人間の勝手な安心に過ぎないとすれば、我等は如何にも心細く不安の感に堪へない、すべてに於て疑惑の念を脱する事が出來ない。吾人が存在も、畢竟一種の夢幻に過ぎずやとも疑はれる。吾人は果たして此の疑惑の苦痛より脫し得られるであらうかと。是れが古來あらゆる思想家を苦め、殊に今日の懷疑時代に於て、深く近代人士の胸中に蟠まつてゐる沈痛な大疑惑の一てある。

吾人は此の種の疑惑の中に大なる眞理を認める、決して一概に排斥さるべきものではない。蓋し人間のすべての知識並びに信仰が、畢竟人間固有の感覺機關、精神、感情、慾望、意志の上に成立つた人間的知識又は信仰て、所詮はすべてを人間化して見た、知識又は信仰に過ぎざる一事は如何なる大哲學者又は宗教家と雖も拒むことの出來ない事實てある。苟も人間の知識

又は信仰であるかぎり、そはすべて人間的知識又は信仰であるべきは必然である。此の點から考へれば、吾人が知識又は信仰は、果たして自然の眞相又は人生の眞運命を、其の全體のまゝに直觀すべきものであるかは甚だ疑はしい。むしろ倒に斯かる絶對的知識又は信仰は、永久に我等人類の到達し得ない所と諦めるの外はない。此の意味に於て、古來の思想家が公言したごとく、吾人が將來には、現世よりも更に一段眞實な世界あり、現世を之れに較べれば、さながら一種の夢幻に過ぎないかも圖りがたい。彼の一部淺薄なポジチボストが考へるごとく、宇宙人生は決して然かく明瞭單純なものではない。吾人は依然として神秘と不可思議とに圍まれてゐる。

　人間の智見や信仰は、要するに人間的であるとして、さて人間的なるが故に、すべての宇宙觀や人生觀も畢竟空想に過ぎないと斷ずるは如何がであらう。茲に懷疑論者と非懷疑論者との岐路がある。吾人は茲に此の種の哲學上の問題を精細に論述することを避ける。簡單に吾人が所觀を記せば、吾人が識見や信仰が人間的である事は、必しも其れが全然誤解又は空想である事の證明ではない、假令人間的であらうが標象的であらうが、苟も其れが客觀的事象の影響によつて成立つかぎり、斯かる識見や確信は、必しも得手勝手な主觀の空想にあらずして、客觀的事象に密接な關係あるものとしか考へられない。假令經驗的事實を遠かつた宇宙觀又は人生觀には、幾多の誤解又は空想が混入するにもせよ、既に一たび經驗的事實の眞を承認するかぎり、宇宙人生に關するすべての知識及信仰が空想であるとは斷ぜられない。吾人が慰安は、此の點に存する。此の慰安さへ尙疑はるべしとすれば、吾人は遂に絶對の懷疑に沈まざるを得ない。

　第二に吾人が掲げんとする疑惑は、廣くは宇宙人生狹くは個人の存在に果たして何等か深奧不可思議な意義あるかを疑ふ近代人の態度である。古來の思想又は宗教によれば、個人の存在には勿論廣く宇宙人生にも一定の靈妙な目的、理想、意義は儼然として存在し、

個人は勿論廣く宇宙人生も、此等靈妙な目的又は理想に從つて動くものと確信された。然るに近代に至り、一面自然科學の進步につれて、一切の不可思議が排斥され、他面實際生活に於ける不調和又は暗黑面は甚しく世人の頭腦を刺激して、自然界や人生に、果たして靈妙神秘な意義又は目的あるか、世人をして深く疑惑させるに至つた。精細に攻察するまでもない、自然界に一定の意義又は目的あるかは甚だ不確實である。普通の觀察によれば、自然界はひとへに其の盲目的な自然力に支配されてゐる、其の間に何等か奧妙な意義あるかは全然不確實である。吾人は自然界の生物が、殆ど全く其の暴力のために飜弄されて、其の存在に何等特殊の權威なきさまを認める毎に、中心深く疑惧の念に支配されざるを得ない。人類生活と雖も、一面から觀察すれば、殆ど全く自然力の冷酷な權勢のもとに屈服してゐる。我等は自然の暴力に支配され、偶然の出來事に飜弄され、偶然に生れ、偶然に育ち、偶然に死するが如く、其の間吾人の生死又は存在に何等特殊の意義あるか、眞に深く疑はざるを得ない。吾人は偶然の出來事が吾人の生命を絕ち、或は偶然の天災が數万の生類を犧牲に供するを見る毎に、顧みて深く自己存在の本意を疑はざるを得ない。近代生活難の壓迫に苦み、淋しく哀れな一生を送つて、さていづこへともなく消へ行く者は世間幾何であらうぞ。山間僻地に人となり、廣い人生を味はず、随つて世に何等の影響も與へず、有るか無きかの生を送つて、いつともなく消え去る無數の人類に果たして何程の意義があらうか。幸ひに世間並に生長し、世間並に教育され、又世間並に生活し得るとしても、さて世間並の生存又は生活といふ事が、果たして何等か深い意義あり大なる目的ある事と觀ぜらるべきであらうか。玆にも深い疑ひはある。衣食のために奔走し、衣食のために心身を疲らし、終生役々として息む暇なく、僅に多少の成功榮達に心奪はれ、僅に子孫の繁殖に一生を疲勞しをはる、其れが普通人の生涯である。斯かる生涯に何程の意義があらうか。斯かる生活に何等偉大な目的があらうか。人生は

むしろ沒趣味ではないか無意義ではないか。器械的暴力が人生の全體ではないか。近代文藝は特に社會の暗黒面を畫くからでもあらうが、其の中に現れた多數の人物は、生活の沒趣味に飽き無意義に驚き、僅に其の全體を支配しつゝある自然力の冷酷な運命のみを認めて、生活全體を無意義無目的に解釋し、人生を擧げて虛無空寂と觀念しつゝあるではないか。此の立脚地から見れば、古來の宗教や道德が自然と人生とを一定の靈妙な意義又は目的に支配されるものと教へたは、むしろ幼稚な空想ではないか。既に自然も人生も一種無意義な器械的運動に過ぎずとすれば、吾人が生存には何等特別な意義はない、固より一定の責任も無ければ義務もない、我等はたゞ巧に自然力に從ひ行くの途あるのみではないかと。此れが特に深く近代人士の胸中に横はる根本的懷疑である。

此の種の懷疑は、特に近代の自然科學的又は唯物論的傾向に根ざし、又深く近代生活の一種特別な空氣の裡に必然的に發生し來たつた疑惑である。思ふに此の種の懷疑は、今の精神界に一大變動が起こるにあらずば、容易に消滅しない强い懷疑であらう。固より古來の宗教又は哲學の力、又は一ト通りの論說の力を以ては、容易に排斥しがたい强い疑惑である。而して此の種の疑惑の中に、一種拒むべからざる眞理が含まれ居る事は何人にも容易に認められる。自然界に一定の意義目的ありやは、今日の吾人の識見を以てしては、極めて不確實である。何等か深い意義又は目的ありと思惟されると同じ力に於て、自然界には或は何等の意義も目的も無いかとも疑はれる。明瞭に其の意義又は目的が示されざるかぎり、之れに關する疑惑はいよ／＼深い道理である。況や近代生活の傾向を見れば、たゞ金錢、たゞ成功、たゞ物慾、其の外には何等の目的もないごとく見へる。强者生存が現代生活唯一の法則と觀ぜられる。斯かる生活斯かる人生に何等か深い意義又は目的ありとは、吾人には容易に受けとれない。自然派の作家がひとへに自然力の强制を狙ふも、强ち道理が無いではない。されど人生が果たして無意義無目

的にして、單に自然力の盲動に過ぎざるか否かは、決して輕卒に判斷さるべき問題ではない。自然界の事は假に吾人に不明瞭であるとするも、人生其のものが全然無意義無目的であるかは、充分愼重な判斷を要する。固より明らかに人生の意義又は目的か示されないかぎり、之れに關する疑惑は何時までも永續する道理なれど、其の意義又は目的の明示されない事は、必しも人生の無意義無目的な證明ではない。言ふまでもなく近代文明に於ては、實際界に於ても思想界に於ても、主として物質的自然力の一方面のみが尊重されてゐる。自然科學は一切の自然界を器械的に説明せんとし、實際生活は殆ど全く物質力又は自然力の支配又は利用にのみ注意してゐる。物質力又は自然力が近代人士に取つては殆ど宇宙人生の全體である。斯かる立脚地から觀察すれば、宇宙人生が全然無意義に無目的に考へられるは必然の結果であらう。されど宇宙人生を全然無意義な器械力の支配と見るは、果たして正當な見解であらうか。物質力や自然力が前代に於て充分其の價値を認められなかつた弊はあるが、其の反對に近代に於ては餘りに此の一面にのみ注意して、全體の精神力の價値を輕んずる弊はないか。目的や理想や意義は、ひとり精神力の活動にのみ見出ださるべきことではないか。古人は靈肉の調和の裡に人生の意義を尋ねんとしたではないか。此の點から言へば、少なくとも人生の意義又は目的は、徒に外に求むべきものではなく、吾人みづから之れを造り行くべきものではないか。人生の意義は吾人が精神力の創造し行くべきものではないか。果たして然りとすれば、近代流行の人生無意義の疑惑は、決して輕々しく承認さるべき態度ではない。此等重要問題については、吾人は充分愼重な態度を採らなければならない。

　最後に掲げんとする疑問は、特に近代生活の特殊な狀態から發生し來たつた特殊な疑問である。近代文明の一の特色は、在來の人類間のすべての階級や制限が徹回され、すべての人類は人類として皆平等なるべきを自覺し、從來のあらゆる制限から解脫して、自由に

無制限に各自の願望を果たさうとする點にある。換言すれば、一般智見の開發又は普及につれ、各個人が自由に無制限に飽まで自家の慾望を滿たさうとするが近代文明の一特質である。随つてあらゆる意味に於て一般慾望の擴張又は增大といふ事が近代生活の一特色とも見える。有史以來近代ほど廣く人類が無制限な大慾望に滿ちた時代はあるまい。さて斯かる慾望の增大は、勿論其れが文明進歩の要件でもあらうが、他面から觀察すれば、意外な風潮を産出する源となつてゐる。吾人が慾望には限りがない、然るに慾望の滿たされる範圍には限りがある。小さな慾望が滿たされたゞけでは、吾人はどうしても滿足する事が出來ない。如何に數多の小さな慾望が滿たされても、眞の滿足は得られない。是に於てか、すべての事がおもしろくない、つまらない、無意味である、沒趣味である。慾望ます〳〵増大して、眞の滿足はいよ〳〵得られない。此れが人生の眞狀態であるとすれば、人生ほどつまらない沒趣味なものはない。終生營々役々として何の得る所があらうか。自我の眞滿足を得てこそ生活にも意義がある。眞滿足を缺いた生活が我等に何の意味があらうか。凡人は小さな慾望さへ滿たされゝば、それで滿足してしまふ。子供がたわいもない事に嬉しがると同じ道理だ。又假令大慾望を懷いたにせよ、慾望の滿たされる範圍に限りあるを見ては、普通人士は、先づ一と通りの慾望の充實に滿足してしまふ、およその所に見切をつけて、相應な滿足に一生を終るが普通である。されど今日のごとく、人類の慾望がます〳〵增進して殆ど其の底止する所を知らざるに於ては、其の無限の慾望と有限の充實とを如何やうに調和すべきか至難な問題である。漫然有限な充實に滿足する事が、果たして吾人の本願であらうか。斯くの如くして近代人士は、其の無限の慾望に藉られて、有限の充實に深い不滿を懷き、其の極、人生の事すべて無意味である沒趣味であると觀念して、深く人生の意義をさへ疑ふ傾きがある。

此の種の傾向又は疑惑は、確に現代生活に纏綿した特種な現象であらう。慾望の增大は一般文化の進歩を

意味する。其の杜絶を主張する禁慾主義が、果たして眞の人類生活であるかは疑問である。普通世間並の慾望を懐き。世間並の充實に滿足し、其れが眞の生活であると心得たフィリスチンの主張が、果たして將來の人心を滿足せさるに足りるであらうかは、更にいよいよ疑はしい。されば此の種の疑惑にも深い道理はある。吾人は此種の疑惑が容易に解決されるとは思はない。いづこにか無限の慾望と有限の充實とが調和される新生活が見出されなければならない。而して斯くの如きは、到底世間のフィリスチンの爲し得べき業ではない。吾人の見る所によれば、今の人は、其の慾望の對象を餘りに外にむかつてのみ求める傾きは無いか、餘りに己れとかけ離れた遠方にのみむかつて求める弊は無いか。餘りに變化消滅しやすいもの、我れとかけ離れた外部にのみ滿足を求めて、却つて我れを空虛にし、且比較的常住の境を看過するが今人の弊ではないか。孰れにせよ、自我の眞滿足の世界さへ見出だされゝば、そこに前段の疑惑は解決されることゝ思ふ。（完）

支那論

池邊吉太郎

支那の政體の變革と經濟組織の生れ變り。今の所どう成り行くか一寸分らぬ。經濟組織の生れ變りは私は存外いゝ事と思ふ。政治上の變革が甘く行かず、其方から色々の妨害を受けるといふ事でもあると六つかしいが、どうにかこうにか改革が進行して行けば、其間には今計畫中の鐵道があつちにもこつちにも隨分澤山出來上ると思ふ。初めには隨分エライ條件、其條件中には政治上の意味、國際上の意味を含ませなくては外國の資本家が金を貸さなかつた。外國の資本家といつても多くは外國の政府と交渉した樣なものであつた。が近頃ではそれが段々變つて、外國の方でも餘程讓歩して、さう六つかしい條件でなくとも金を貸すやうになつた。といふのは支那の鐵道が有利であり、又有望であるといふ所にある。政治上の關係のみからでなく經濟上から貸す。又支那人自身も鐵道といふものはよ

いものだ、儲かるものだと思ひ込んで來た。といふのは事實上儲かつて來たからである。此景況は無論あの大野原――あの大國の富源のある所を縫うて鐵道を敷けるといふ所から出て來た。處で經濟上の發達がさうなればそれが政治上の改革を促がすといふ事になる。殊に鐵道の發達は政治上の血液循環を容易にするものであるから、上の思惑が下に通じ、下の事情が上に分つて支那帝國統一の力を强くするといふ事になる。即ち此鐵道の發達によつて政治上の變革の速度をも加へて來るし、又其進行の安全をも保障せらるる事になる。又どうかして變革に反動でも起つた場合にも鐵道があれば之を踏み附ける事が容易である。これ丈けを見れば或は順よく行くかも知れんと思はるゝけれども、元來支那が今度の内政改革――殆んど革命同樣の改革を兎も角もやり出す丈けの餘裕があるといふのは支那人自身の持て居る力ではない。皆外國から持たした力である。日英同盟も其力の本である。日英同盟以前に起つた清國保全開放の主義も其力の本である。そんな力が外からずうと支那の周圍に墻を廻してゐるので、誰れも手を出さずに今度の改革を遣らせて居るのである。支那が悠々閑々として事業をして居る餘裕は、全く外から與へられたもので、自分のものではない。だから萬一にも列國の勢力が變つた働きをすれば支那の形勢も亦變つて來ることを豫想しなくてはならぬ。勿論今では何もそんな模樣はない、列國が今と違つた行途を取るやうな形勢は殆んど一つもない。けれども日清戰爭當時、各國は皆支那の内地に特權を以て居る。例の利權回收で以て餘程恢復はしたが、今でもまだ殘て居る。支那が若し下手に之に手を出すやうな事があつたならば列國の形勢が違ふかも知れない。さうすれば政治上は勿論の事、經濟上も大いに違つて來る。要するに未定の問題である。

それから今度は專ら支那人の側を見る。支那人が果して政治上經濟上充分に自己の他位のある所を了解して夫れを立脚點として、具合のよい事情は之を利用し、妨害になるやうな事柄は之を避けて行く事が出來るか

どうか其れを見る。向ふ見ずの馬鹿な事をやつて國際事件などを起さぬかどうかそれを見る。現に三十三年の北清事件などは突拍手もない譯の分らぬ事をやつて居る。列國の公使館を包圍したり、又其起りを調べると従分どたいもない詔勅なども出て居る。詰り支那が自ら殆んど支那を分割するやうな事をやつて居る。あの事件の後に列國が保全開放の道を講じたのは支那の爲めには大變な仕合せであつて、日本兵が北京で働いたのは自ら救ひたるにあらずして、實は支那を救ひたるも同じ事である。一體あの事件を惹き起したのは無論西太后、其れを扶けてゐる滿洲人であらう。元來女性の主權者は仕様のないものである。其西太后は老體ではあるが今も相變らず主權者になつてゐる。尤も今度は袁世凱や張之洞の如き有力なる補弼を得て、具合よく經濟の生れ變りや政體の變革やを行はれて、漸次に進歩の道に向はんと決斷をせられた。けれども何時どう風向が變らぬとも限らない。其事は先きに並べた事情に歸着する。下手に手を出して列國の總て、若くは其一二を怒らせて、是迄の行途と違つた行途を取らせるやうにするかどうかといふ事に歸着する。袁世凱や張之洞が居るから大抵はいゝだらうと思ふ。然し保證は出來ん。袁世凱などは西太后の寵遇によつてあの地位に居るのであるから、どうかした場合には西太后の意思に逆らつて押し切てやりにくいといふ事情もあるだらう。だから之れも亦不定の問題である。

今迄述べた事は支那主權者及び支那政府の有様であるが、支那人民の方は奈何と見る。これは私はさう譯の分らぬ人間ぢやないと見てゐる。支那人は世界からは仕様のない人間と見られてゐる。厄介な四億萬の動物だと思はれてゐる。けれども私はさうぢやなからうと信じてゐる。相應に頭腦を持つて居る哲學者なども昔から出た。相應に上手に兵隊を使つた將軍も出た。發明力も隨分持て居る。東西の發明を比較して見たら餘程面白からうと私は思つてゐる。古い發明は支那に従分多い。又自分の財産をよく治めて行く力は充分にある。これは經濟上の發展の基になる。一個人がよく

經濟をやれば一國の經濟もよくなるのは當り前である。現に鐵道でも有利と見れば外國人の手から取り上げて自分でやる。もう少し後になつたら會社組織なども日本人などよりよくやる事がないとも限らない。合資、合名、株式會社なども日本より古くある。又信用制度なども各地によつて違ふだらうが充分鞏固なものもある。其れを只一概に支那人は譯の分らぬ奴だと思はれたのは實に支那人の不幸である。が又支那人自らも其不幸を招いだ形勢がないでもない。といふのは一體支那人は殘忍である。元はさうでもなかつたか知れぬが、秦時代から始終北からイジメられて戰爭をして居た爲めであるか、非常に殘忍になつて、物を破壞する事を何とも思はぬ。秦の始皇は萬里の長城を築きて、長城以內を一統せんとし、漢の武帝は盛んに遠征をやつて、其時の支那の範圍は非常に宏大であつた。始皇帝あたりから、足の及び得る所、知識の及び得る所、四海一家の國家を作るといふのが其理想であつた。中華といふのは新らしい名であるが、華といふことは昔からあつた。つまり文明の中心、政治の中心、教育の中心である。さうして世界を統一した帝國――ユニヴアサル、エムパイアといふやうなものを造るといふのが理想であつた。唐の時などもさういふ考で、其考がずつと拔けなかつた。處が其一統帝國も始終外から苦しめられてなか〳〵出來ない。戰國の苦しみに堪へなくなつた。三國史のあとの晉、即ち五胡の亂のあたりで支那の昔の文明も經濟もすつかりぶちこはされて了つたやうだ。今の山東省は餘程貧しいやうだが、昔は齊の國でエライ經濟上の發達した處である。又山西省なども管仲などの頃は盛んであつたが今は一向振はない。皆兵亂に罹つた爲めである。兵亂の結果文明もなくなり、政府もなくなり、經濟の本であるあらゆる生產事業もなくなつた。揚子江を境として其北は悉皆駄目で、南の方はよい。北の方がわるいといふのは黃河の存在も一の理由をなしてゐる。あの河は雨が降れば直き洪水が起つて何も彼も破壞する。それが北方の振はざる一理由ではある。が大原因は全く兵亂の爲めで

ある。北方の夷狄は總て殘忍であつて、一度過ぐれば、野に靑色なしといはれた。其性質が支那人にも移て支那人自らも殘忍になつた。歐洲に於ても革命の時は經濟上の組織も打ち壞すが、支那のは更に激烈で而して甚しく頻繁で、王樣が起る每に革命があるといふ譯である。彼の長髮賊のあとなどを見ると實にヒドイものだ。あれらは愛親覺羅を滅ぼす積りであつたらうが、其革命軍を滅ぼした殘忍たらない。革命派の總てを亡ぼした。南京に行けば分る。南京は昔からの都で、近くは明の都でもあり、いろ／＼の文明が存在して居る所である。それをメチャ／＼に破壞して、人間は老若男女を問はず皆切りさいなんで、秦淮に投り込んだ、秦淮の水爲めに流れずといふ有樣になつた。南京悉く野原になつて長髮賊の據た城はみんな根こそぎ坊主にされた。全坊主、半坊主、三分の一坊主、度合は違ふが坊主にされた。若し長髮賊が勝つたならば矢張り其通りて官軍のものを其通りにやつたゞらうと想像される。かういふ殘忍なものになつたから、外國に對する防禦戰爭、對外的大戰爭の起る度每にウント破壞をやる。又內丈けの革命の時でもウント破壞をするといふのが幾度も／＼繰り返されて今日に至つたのである。今日の淸朝は決してわるい主權者ではない。康熙帝などは露の彼得大帝と時を同うして而かも彼と相並ぶべき人である。だから此人などは存外破壞をしない。いゝものは殘して、もり立てた。其れが爲め却て今日の累になつたかも知れぬと思ふ位破壞をしなかつた。尤も元の伯顏も餘り破壞をしなかつた。人を殺さず、物を掠めず、戰利品は只梅の一枝だといふ詩を作つた位である。それでも北の方は大分破壞をしたが南の方は破壞をせなかつた。この二人の事などを考へて見ると外から來た人よりも支那の內のものが却て酷い破壞をやつたと思ふ位に殘忍な性質を支那人が得た。つまる所、支那人を守舊と思て居るのが大間違。革命は大好きな人民で、度々遣り過ぎて仕樣のない有樣になつたのである。其實ハイカラ人民である。であるから新らし物好きである。其點から見れば今度の改革な

ども存外有望のものと思はれる。支那は大帝國であるといふので、代議士の選擧なども堂々とやり、又昔から文章の好きな國民であるから其代議士なども大いに雄辯を振ふといふ事になるかも知れぬ。立憲政體は畢竟演說遣ひの政治であるからなか〳〵立派な立憲政治をやるかも分らない。今の有機は自分の長所——革命好き、破壞好きを濫用して其の爲めに疲れ切て眠てゐたやうなのだ。亞片のみの爲めに眠つたのではなく革命に疲れて眠たのである。それが眼が覺めたら存外いゝ具合に働けるやうになつて來ないとも限らないと思ふ。元より大體は未定の問題である。未定の問題てはあるがどうもさういふ風になつて來るらしく思はれる。

又人によつては西太后は病身である。皇帝も亦病身である。孰れも餘命幾何もない。而して世嗣はない。だから此問題からして近々大亂が起る恐があるといふ人がある。此恐れのある事は間違がない、其爭の結果外國に對して馬鹿な事をするやうな事がないとも限らない。又外援を藉れて大干涉を招ぐといふやうな事もあるかも知れない。こんな事は支那のオハコである。けれども私はこれも存外賢く凌いで行くかも知れんと思つて居る。順よく行けば皇族一人を皇太子にして他の皇族若くは其れを押し立てる大官共は、今は內輪の爭にごた〳〵して居る時でないといつて、存外おとなしく形附いて了ふやうな事がないとも限らないと思ふ。が未定の中に僅かの材料て判斷するのであるから、これは勿論見込である。私の一つの見込である。話しに順序が立たないので定めて書きにくい事と思ふ。

（完）



現在に於ける海外一切の狀勢殊に我國と緊密の關係ある清米露等の消息をば最近の新聞雜誌等に上り若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿に上りて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

新露國みやげ

夏秋龜一

△能く人はモスクワとかピータースブルグとかへ行つて、戻ると直にそれを材料に露國の談をするのであるが、眞平に實力を知らんと欲せば寧ろ田舍の方を調ぶるのが宜いのである、私は昨年の十一月から遂此頃まで彼地へ參つて居ましたが、此度の旅行は重に南部露西亞波蘭の方でした。

△南部露西亞は製鐵業が甚だ盛てある、その材料たる鐵が澤山出るのに更に石炭が澤山ある、或る工場の如きは直ぐその下から石炭が採掘される、で自然に好箇の製鐵場を成して居る、近年鐵道の擴張があり、政府の注文を受けて非常の利益を得たものだ、が日露戰爭以後一時政府の事業に一頓挫を來したので注文がなく遂に手を海外に出す樣になつた、之が又段々に發展を見るので、四五年前には五十五萬「プード」の輸出であつたのが、昨年は千四百五十萬「プート」に上つて居る、得意先はアルゼンチン、イタリー、インド等である。此地の製鐵業に先鞭を着けたものは英人で、それは早や四十年前から試みられて居る、次にベルギー人、それから露西亞人てある。

△烏拉爾方面も誰も知る如く多くの金屬が出る、金、銀、鐵、白金等を產するのだが、經營宜きを得ずして損をして居る、官設の製鐵所があり、大砲などを作つて居るか收支常に償はぬといふ方だ、烏拉爾は何しろ山間に僻在して居つて海岸には遠い、從つて運輸の便を缺いて居る、此點が南部露西亞の黑海々岸に瀕して居て、一帆直に何處へも輸出し得らるゝに比しては多大の遜色がある、それ故烏拉爾地方とは違つて、南部露西亞の製鐵所では一割五分乃至二割の利益を收めて居る、ロコモチーブの製造も盛にするがそれ等の材料は盡く內地から得らるのである、今や西比利亞　道の

複線、黑龍江鐵道等の工事があるので需要は少しく多くなつて居る。

△西比利亞は汽車から見ると唯荒漠たる山林、原野だけれど深く內地へ入つて見ると大に趣を異にして居るといふのは露國本部よりも却つて氣候が順適である所爲か、西比利亞には凶作が無い、昨年も宜かつたが今年も雨が降り暖氣で有つたものだから先づ中作以上である、それ故昨年の如き四、五百「プード」の穀物の輸出を爲し、その他家畜にも富み毛皮をも盛に出す、コーカス人はオムスク近傍迄來て家畜を育てゝ成功した、コーカス人は羊を常食にするから羊を澤山に蓄ふ、バタは日本へは多く英佛等から來るが、これ等は此地方に於て多く製造される、大規模のものはないが、小製造所が澤山あり、又各戸各戸て孤立して製造もする、それ等を皆一手に纒めて海外へ輸出するのであるが、それには特別運搬車があり、氷を入れて腐敗を防ぐのだ、之を倫敦まで送る總運賃が一プード僅に一圓三十錢位て濟むのである、

△人口も年々增加して來る、政府はそれに勉めて居るので移民局が設けられ、年々澤山に移民を送る、昨年も亦本年も五十萬以上も送る、先づ年々五十萬以上の人間が殖えるので、單に西比利亞のみかは更に黑龍江方面まで及んで居る、十年二十年の後には如何程迄の人口に達するてあろうか、人口の增加といふことは軍事上にも必須の事て、兵隊を集めるに非常の利便がある、前年日露戰爭の折初期の戰に參加したもの即ち鴨綠江、得利寺の役や遼陽の役に與かつたものには西比利亞人が多いのてあつた、今や黑龍江附近にも兵隊を增遣して居る、加ふるに一面又西比利亞鐵道の複線が愈よ出來上れば、輸送力は元の三倍以上になる、すれば去來といふ場合には露西亞本國からも多大の兵員が送れるのに、地方の人口も亦此の如きの有樣であるから、敢てそれを以て直に好戰の意志あるものとせずとも、平和の保證として昔日に十倍するの力を有することになる、

△露國一般の經濟界に就いて言へば、米國幷に西歐諸國と同樣不況てある、加之百姓は數年來の凶作の爲に疲弊して居るのだ、が大池には水涸れずて、流石に大國は違つたものだ、土地は廣く金持はある、金銀鑛物には富んて居る、從つて財政には鞏固なところがある、日露戰爭の結果、戰勝國とはいひながら我國は却つてへこんて居つて、財政には信用がなく內外債は下落す

る、陸海軍の事業は一部繰延となる有様だ、之に反して露國は如何てあるか、日露戰役に二十五億萬の國帑を消費する、更に内には革命がある、それこれにも係らず、今や革命黨も資力に潤澤を缺くが爲に運動を中止し居るので小康を得て居る、本年の夏一時二億万の公債を起して之を外國に募らうとしたのだが、その刹那猶ほ民力の十分負擔に堪ふるのを知つて、急に內國債に變へてしまつた、て現今に於ては二十七億萬圓の歲出をなして、まだ少し餘裕がある有樣であるのだ、私は財務の當局者に逢つて聞いたが、更に來年度には三十億萬圓の支出をするといつて居た、それが來るべき議會に於て通過するか如何かは分らぬとしても、無責任な案が漫に立てらるゝものでない、民力は十分それに堪え得ることを信ずるとせねばならぬ。

△之を軍備の上からいつても、日本では繰延などゝいふけれど、露國てその樣な事どころじやない、陸軍の經費はドン／＼増す、軍器の改良に金を惜まぬ、即ち砲臺、鐵砲、彈藥は改良される、我下瀬火藥にも優る新火藥が今日露國ては發明されて居る、之は日露戰役の當時に如何したものか、我砲彈の彼の陣地に落ちたのに爆裂せないものが一つあつた、それを材料として色々試驗を重ねた結果、火移りが早い等その他二三の弱點が發見され、遂にその弱點の取除に苦心して旨く成功したのだ、その他今日重きを措かるゝ軍用輕氣球にも力を盡して居り、佛蘭西に人を特派して研究最中である、艦材に供する鐵等もそれぞれ改良されて居る、兵隊はドン／＼殖やす、その給料は以前の五倍を拂ふ、食料もよりよくなる、士官の給料も、增加するといふ有樣である。

△西比利亞鐵道が複線になるが、單線てあつても貨物は不足なところである、それを複線にして輸送力が三倍するとなつた所て貨物が從つて增す道理のものてない、之れは言はずとも單に軍用目的のものに相違ないが、財政上からは多大の損である、而かも之を敢てするを見ても國力の測るべからざることを知るに足りる、此複線工事は現時イルラーチックからアッケンチック迄着手して居るし、黑龍江線の方も無論着手中て、ネルクニチンスクから先の方を目下探査して居る。

△海軍の方でも戰鬪艦を造らねばならぬと騷いて居る、之は戰爭の目的のみでなくとも、列國對峙の上に自國の面目を支える上からも非常に必要であるからだ、て新戰鬪艦四隻、その費用として千二百萬留の豫

算を議會に呈出したのであるが、前年千島海峡に不覺を取つた以來國民に信用がなくなつて居る、で、委員會に於ても下院にても否決されてしまつた、第一第二の兩議會は共に政府反對黨が多數を占めて居つたが、第三議會は大勢が頗る變じて三分の二は御味方黨になつたのだが、矢張り下院では此海軍の戰鬪艦費に反對した、只貴族院のみが之を可決した、で兩院委員會なるものが開かれて決し樣としたが、双方相固執して下らずにしまつた、之に對して政府は果して孰れに賛成するかが大疑問であつた、併し議會で決せぬ豫算は已むなく前年度の者を踏襲するといふ規則があるかが、それによるかこれ亦た新聞上の大爭論となつた、が兎に角此海軍費に於いては政府は勇斷に出て、敢て大憲第十三條により、新戰鬪艦費二千萬圓兵器彈藥費七百萬圓を支出する事を確定した。此狀勢から見ると日露兩國果して孰れが戰勝國であるか不明である、追つけ十一月に議會も開けるのだが、將來のことは仲々困難の問題である、十月黨。此が誰も知る御味方黨なので現首相ストールイリピン氏がその領袖である、が前の處置に於て多少面目を蹂躙されて居る點もあるから、次の議會で十分に御味方を勉めるが如何か、十月黨内には温和派と否からざるものとなるが、その硬骨の士は或は政府に反對するかも知れぬ。

△露國の人民は個人としては甚だ附合ひ易い性質である、職工には多少文字があるが、百姓になると無學文盲である、それ故革命黨の連中が説けばそれに感じ易い、けれども又反對の説を持ち込まれゝばそれにも又動き易いといふ風で、根底のある論據の上に行動することは望まれぬ、左樣に無學文盲ではあるけれども、歴史的關係からでもあらう、一般に外國人を善遇する氣風がある、排外思想などを有して居らぬ、それに陰忍の風を嫌つて淡泊に胸襟を打ち開けることを愛する。

△生活の程度は低く、彼等農民等は肉類などは滅多に喰はぬ、堅い黒麵包に紅茶の安物日本では一斤十錢ばかりのものを煮出して用ゐ、それで度々空腹を充たして居る、それとても近年の事で以前にはお茶もなし、唯白湯ばかりで濟ましたものであつた。が今ではお茶は毎食缺くべからざるものとなつて居る、體質は甚だ強く、貧民になつては住むに家屋も持たず、家畜に伴つて牧草の上に野宿する者もある、でも何の障りもなく風露に晒されて平氣で居るといふ程に頑健である。

△コーカスといふ處は餘程氣風が違つては居る、露國民中一番ずるいが亞細亞贔負である點が變つて居る、その容貌を見ても、隆鼻高顴皮膚の白い處などは白人種だが、髮の毛は眞黑である、彼等は正しく韃靼人種と白人種との混合種族であるのだけれども、自らは敢て黃人種を以て許して居る、それ故私は日露戰役中數ヶ月間程その地方に足を止めたが、彼等は日本の勝利を聞いて、却つて我々黃人種の劣敗者に非ることを證するとして喜んで居た。

△茲に一つの追憶談がある、「エウラツハ」停車場から八十露里あるところの「ヌーハ」といふ地に居た時のこと、或る日その地に駐屯して居る陸軍少將からして私に逢ひたいといふて來た、頃は戰役中の事である、間牒とでも見て詰責の結果大事にも及ぶのかと矢庭に思ひとつたが、儘よ日本人の意氣を示して遣らうと臍を固めて行つた、すると日本の軍隊の事やら敎育の有樣やらの質問が出たから、此處ぞとその優秀なる點を說き、大に本國の爲に氣談を吐いた、さて如何にと思つたら、意外、少將特の外感嘆の色を示して左右を顧みて曰ふには、日本人は斯うだから戰にも勝つのである、汝等も亦此意氣を有せなければならぬと說き示して、私をばそのまゝ解放したのみかは、此から折々遊に來よ、無賴の徒が時に迫害を加へる樣な事があつたら遠慮なく申出よ、容赦なく處分するからともいつて呉れた。

△がピヤチゴールスクでは遂に追ひ出された、其處は彼地方で有名な溫泉場ですが、泊つてしまつてから宿の女主人が來て、土地のものが貴下に迫害を加へんとして居るから他へ行つて呉れといふ、其樣な事はなからう、有つた所がよいとて落着いて居たが十時頃に復も扉を排して來り、是非立つて呉れといふ、續いて二時頃に寢て居るのを呼び起してまでいふ、私は怒つて兎に角一晝夜は此家に泊る約束がしてあるのだから、その時間丈けは此處に居る權利を持つて居る、狼藉者が見えたら構はず連れて來いと斷然言ひ張つて、到頭その晩は明してしまつた、明けると駐在士官が兵員を連れて來た、そして早々此管轄内を出て呉れといふ、此處で私は其樣な無法な事をいふなら莫斯哥まで電報をかけてその筋へ問合せるが宜い、日露交戰中と雖も存歐領露西亞の日本人は一般締盟國人と同樣に保護すべしといふツァーの詔勅がある、それによつて安心して我々は旅行して居るものである、電報料を負擔する

から問合せよと云たけれど、それは左樣としても兎に角、予の管轄區内だけは穩便に引拂つてくれと頼むのである、でも今日は早や汽車便がなくなつてしまつた、左樣な無體な事をいつても仕樣がないといつたら、では明朝の汽車迄は差支ない、その間は公園なり何處なり寛々散歩しても構はぬからといふ樣な譯で、此土地ばかりは遂に翌日引拂はぬを得ぬことになつた、後で事情が知れた、旅館の女主人といふのは或る陸軍大佐の未亡人であつて、良人は其戰役の爲滿洲で陣歿した、その遺恨で何とか私に危害を加へんと謀つたものだ相な、

△此度の旅行は露西亞から北部獨逸の片田舍へ廻つて來た、伯林には流石は都會丈け輕薄の風も見えるのだが、田舍へ行くと獨逸人の眞の氣質は分る、實に勤儉尙武の民である、獨逸の國運は基礎が甚だ固く、如何にも勃興の兆がある、個人として斯の如く勤儉であるのに、それに又露西亞人と違つて一般に教育が進んで居る、鐵道員でも相應の學力がある、その學力を働かして一意職務を勵むのであるから成績は擧らざるを得ない、それ故僅な人員で以て多くの事務が進捗する、鐵道國有で成功した國は獨り獨逸あるのみだといはれて居るが、それはその筈である、航海業も以前には佛英がバルチック海上に雄を唱へて居たのが今では獨逸に代られて居る、私はステッチンから航海して見たが船長自ら甲板上の幕を張ればボーイも上等から中等までを一人で掛け持ちする、で他國船ならば優に二三人必要なところを一人で濟ますといふ有樣である、で全體の經費が他國船よりは非常に尠なくつて濟む、だからいざ競爭となると優に他を制することが出來る、商業に於ても然りで、スカンヂナビヤ諸州即ち瑞典那威等には矢張り佛英が以前に優勢であつたのが、今日では盡く獨逸に壓倒されてしまつて居る。工業も益進歩して來る、此勢を以て更に陸海軍に大に力を用ゐて居るのである。航海商工業に於て覇を天下に稱する英國をして後へに瞠着たらしむる勢であるから、近來英國人は大に嫉猜心を生し、英、獨の關係頗る面白からざる有樣となつて來た、尤も陸海軍費大擴張の結果、獨逸の財政近來頗る困難を來した等の弱點はあるが、これ等は他日に讓るとしやふ。

海外消息

（最近一ヶ月間の海外一切の情勢を網羅し一目の下に其眞相を明ならしむ）

如楓庵

●憲政布告後の土耳古の形勢　は益々紛糾し來る樣に見受けられ候。青年土耳古黨の勢威日に熾にして、皇帝以下廷臣等如何ともする能はざる有樣と相成、此分にて押進めば佛國革命の二の舞を演ぜずとも限らず、佛國革命の如き、或は其他の伊太利獨逸等に於ける者も又同じく、初めの間こそ至極温和に靜肅に成されたれ、遂に一千八百四十八年に於ける巴里街頭の大虐殺を免かるゝ事を得ざりし事實より考ふれば、土國の政變が或は意外の大騷亂を引起すやも知れずと「スペクテーター」は申居り候。八月一日皇帝は無蓋車にてセラムリクの禮拜堂に臨幸あり、途上一々起立して人民等の憲政萬歳の喝采に挨拶せられしが、第二軍團の本營地たるアドリアノープルに於ては土耳古皇帝反對の感情甚しく強く、公園に催されたる憲政大會にては、土帝の萬歳を唱ふる事を拒み、軍隊は皇帝をして憲法を玩弄せしめざるべしと宣言致し候。當日皇帝はコンスタンチノープル駐箚の列國大公使等を引見して、爾今誓て憲法を尊重し、人民の自由を認むべしと言明せられ候。

▲されど土耳古政府の大赦命は、反て益々形勢の不穏を來たし、暴漢各地に横行して良民を苦しめつゝあり、大赦の結果出獄せる者國事犯を加へて九百五十名、更に續々出獄放免の恩典に浴する者を通算する時は、米國居住のアルメニア人のみにても、約二十万の大多數に達すべく、土國全領土内の監獄は日ならず空虚となるべしと申し候。猶人、良民、軍隊、志士、基督教徒と回教徒等入り亂れて、互に憲政万歳を狂呼しつゝある有樣、宛然佛國革命當初の巴里の如くなる間に、内閣は再び動搖を開始し、土帝は更に甚しき苦境に陷り申し候。

▲總理大臣シイスフリスム氏の組織せる内閣は、陸海軍大臣の任命に關し、土帝に奏請すべき條件に就き、議論沸騰致し、遂に閣員の總辭職を見るに至りしが、七日發の外電は、新内閣の成立を報じ來り候。新内閣はキアミル、パシヤ氏に依りて組織せられ、即座に用捨なく、宮廷の寵臣を追ひ拂ふ事に一致せしが、宮中の有力者は逸早く、影を隱くして、逮捕を免がるゝ者多かりしも、前陸海軍大臣以下數十名の高等官は遂に捕へられて、群集の嘲笑を受けつゝ獄に投ぜられ候。新首相キアミル氏は最も深き自由主義の崇拜者にして、新智識に富める所謂新式の政治家なれば、此際土國内閣の首相として最も當を得たる人なりとの事に候。

▲タイムスは土耳古の政變の餘りに迅速なるに驚き、名にし負ふ頑冥不靈の土耳古現皇帝が、斯くも急突に、憲政布告に決したる事實の裏面を察すれば、現下の政局が、如何に皇帝の位置に不利なる者あるか見るに足るべしと云ひ、サルタンの世襲的最上權、絶對なる專制權は、今回の

以上の事實に依りて、其或一部殺がれたり、土耳古皇帝の地位は最早昔日の如くならざるべしと論じ、斯くて皇帝は自己の安全を買ひ得るかと云ふに、之れ頗る疑問なりとて、其理由を述べ「土帝は政變の勃發以來、鋭意民心を得んとしつゝあるも、斯の如きは決して短日月の間に成され得べきものにあらず、軍隊は既に彼を去りて、彼れの用を爲さず、今日まで暴政を改むる事なく、民權を無視して、思ふ儘に振舞ふ事を得たるは、全く軍隊の彼れの背後にありしが故なり、其の之を失へたる今日に及んでは、土耳古皇帝も全く手足を切り取られたる者と同樣、進退の自由をすら得ざる不具者となるの外なしと痛論致し候。

▲タイムスは更に青年土耳古黨の事に言及して其將來を危み、彼等の要求容れられたりとて、人民は其を以て生命財産の安固を得たりと思ふは早計なり、現在は既に專制權が、サルタンの手より軍隊の手に遷りたる刹那の政治的現象に過ぎず、青年土耳古黨が能く議會を運用し、參政權を善用して、土國人民の安寧福利を企圖するや否やは、猶今後の彼等の行動を見るを要す、吾人は大なる同情と、深き興味とを以て彼等の將來を監視せんと欲すと述べられ候。

●米國大西洋艦隊濠洲政策　十月中旬を以て我國にも進航すべき米國大西洋艦隊は、スパリー提督に率られて、シドニーに到着、此處に熱心なる濠洲英人の歡迎を受られ候。スパーリー提督は彼等の歡迎を以て、加洲人以上なりとし、最も大なる感情を拂ふべしと申され、同地の諸新聞は言ひ合はせし如く、之を以て米國及び濠洲の接近を説き、太平洋に於ける白皙人種の利益を保護し、黄色人種の排斥を實現せんとする、白人濠洲政策を維持するの一助たるべしと論じ、且つ暗に日英同盟の終結を待つて、英米同盟の結ばるゝべき事を諷示せられ候。

▲就中「シドニー、ヘラルド」の如きは大西洋艦隊の訪問を得て、濠州史未曾有の大事件なりとし、英領殖民地は米國の進歩を狂喜し濠州に於ける總ての米國の利益を助長すべしとまで主張するに至り、スパーリー又之と殆ど同樣の答辯を述べてシドニーを立去られ候。是等は固より政治上何等の價値をも有せざるべき一時的愚論に過ぎざるも、彼等白皙人種が、相會ふ機會ある毎に、必ず白人の利益維持、黄色人種の排斥を云々するは、甚だ苦々しき事に候はずや。

▲以上濠洲の言論に關し、米國新聞の態度は如何やと云ふに、タイムス社發華盛頓電報は最も悉はしく之を報じ來り候故、茲に之を轉載致すべく候。即ち「言論の責任を重んずる新聞の多數は、社說に於て全然沈默の態度を取れり、但し他の新聞紙は濠洲人は他日黄禍實現する事ある場合に、英國艦隊必ず之と奮鬪すべき模樣あるを認め、大に欣び居れりとの所信を吐露しつゝあり」と

●英獨兩帝の會見　英佛露三國同盟の成立以來の英獨兩帝會見は、頗る注目を値すべきものに候はずや。英王は八月十一日午前九時、クロンベルヒに於て獨帝陛下の御出迎に接せられ、互に相抱いて兩頰に接吻せられし後自働車に御同乘、フリードリッヒ宮城に入らせられ、午

艦の前後に亘りて長時間政治上の談論を成されたるが、問題は英獨海軍の制限案位にて其れ以上の意義を有せざるべしと申され候、英國の叔父と其甥とが、一堂の下に會したる事に候へば、兩陛下の間には政治を離れたる肉身の愛を加味したる會見を遂げられたるべく候も、兩國官憲は其内容に就ては、固く秘して一言も發せざるが故に、兩帝會見の眞意に至つては明瞭に知る事を得ざる次第に候。

▲されど其後外電の報ずる處に依れば、英國大藏大臣ロイド、ジヨルヂ氏は、ノイエフライ、エプレツセ記者と會見の際、英獨の親交は目下歐州全部を壓迫しつゝある不安の狀態を除去する唯一の手段なり語とられたる由に候が、獨紙の論調も妙に此方に傾き來り、英獨兩國が妥協の上、海軍々備に或制限を加へんことは、獨逸の財政の切に要求する處、若し英國側より先づ提議せらるゝならば、獨逸は喜んで之に應ずべしと言ふに至り候。之れ實に獨逸が其孤立的地位の不安なるを自覺し來りたる證左にして、最も注目を要すべき近來の現象とも見るべき者に候も、之を以て直に、獨逸が其海軍を悲觀し始めたりと思はゞ大なる誤りにて候。兎に角今後列國に對する獨逸の態度は實に刮目して見るべき者に有之

●英澳兩帝の會見　英王陛下は十一日獨逸皇帝とクロンベルヒに會見せし後、其夕イシユルに向て出發、翌十二日を以て老澳帝と握手せられ候。イシユルは墺太利の瀟洒たる一小市にして、夏期老墺帝が避暑せらるべき處、老帝は此處に獨帝を迎ひたるが、七十八歳の高齢にも拘はらず、頗る健全に渡らせられ、滿腔の熱情を以て、平和の宣傳者たる英王陛下に接せられ候。「スペクテーター」は之を見て、歐洲の諸帝王中平和の最も深き同情は、此フランシス、ヨセフ陛下なりと云ふべく、老帝も又英王陛下の所謂劍を拔かさるべき」平和的態度を知悉し居るを以て、隔てなく會談せられたるべしと申され候が、老帝はレヴアルに於ける英露兩帝の會見を喜び居りたる由に候

▲之を機として、澳國外相アーレンタル男は英の外務次官ハルデン氏と會見せられ、土耳古問題に關し協議せられしが、半官的に其内容を洩して曰く「英墺兩國は列國と同じく同情の眼を以て漸時土耳古の形勢を觀望し、其事態の推移の良好ならんことを希望するに一致せり」と。之れ恐らく表面の事實に過ぎざるべきも、土耳古の現勢に對して、如何なる意見をも抱持し難きは、以上の二大政治家と雖も敢て吾人と異なる處なかるべしと有力なる某派は語られ候。

●米清同盟論の勃發　恐らく寢耳に水とは米清同盟説の突如として米國に現はれたる事に有之べく候。紐育「ヘラルド」記者は支那の一新聞記者李某なる者と巴里に於て會談し、日本の侵攻的態度を難じ、東洋の平和を維持せんが爲には、米清同盟の必要ありと說かれたる由に候が、一度以上會談の顚末が、紐育「ヘラルド」紙上に現はるゝや、大に米人の感情を興奮せしめ、續いて、有力なる米國政治家の贊成意見を連載するに及びて、世界は其突飛なるに且つ驚き且つ呆れ申し候。「ヘラ

ルド」新聞の主唱せる米清同盟論の要旨を摘記すれば、先づ日本の支那に於ける專横を防ぎ、之には米國自ら當り、其代償として米國の東洋貿易を維持する事に支那は努力すべく、以て相互の利益を保護すべし、然らざれば、支那は早晚日本の有に歸し、米國の東洋貿易は死滅するに到るべく、太平洋は遂に日本の獨舞臺となるべし、亞細亞は世界の亞細亞にして決して日本の亞細亞にあらずと云ふに有之候。されど「タイムス」通信員は之を以て頗る薄弱なる者となし米國政府及び眞面目なる政治家は、決して斯かる恐論に傾聽せざるべしと斷言致され候。

●摩國政局の再變

摩國政局の轉變は到底今日を以て明日を計り難く候が、タンヂール發の無線電信は摩洛哥正王の大敗を報じ來り候、正王の敗衂は目も當てられぬ程の始末にて、混亂の中に正王は捕虜となれりとも傳へられ、又一說には佛軍の占領地帶へ逃走せりとも云はれ候、之と同時に僭王ムライハフイトはタンヂール其他に於て摩洛哥正王たる事を宣言し、正王アブダル、アジツの王位を廢したる通言を發したる由に候が、佛國の之に對する態度は依然として舊の如く、矢張列國一般の同意を得るにあらざれば、新摩國王を承認せざるべきを揚言致し居り候。

▲されどタンジールに於ける列國の使臣は、一日も早く現潜王の位置を佛國の認承せんことを希望致し居られ、頻りに各自其本國政府に向てムラハフイッド潜王の即位を承認する旨の訓命を要求しつゝある有様にて、佛國も遂に默止し難くてか、其後の最近通信に依れば、佛國は西班牙と共に、ムライハフッドを摩國王と承認すべき通諜を列國に發せられたりと云はれ候、其條件としては、潛王をして先王の內外債一切を引受けしめ、摩國の秩序を回復せしむべく、(一)佛國は西班牙と共に摩國內亂の爲に要したる其軍事費を要求すべければ、列國はそれ〴〵自由の要求を摩國に向て提出せらるべしと云ふに有之候由、摩王は又アルゼシラス條約を確守すべき約束を以て、自己をサルタンと繼承すべき長文の書を列國に發したる由に候、暫く記して後報を待つべく候。





現代人物論（九）

平田内相論

平田新内相

島田三郎

△平田といふ人は倨傲ならず浮誇ならず、極めて眞摯篤實な性質の人である、生れは米澤である、米澤といへば名君鷹山公の感化のあるところ、生活に簡易を尊び節倹を尊ぶ、で一般に眞面目な人間が出るところだ、氏は先天的に左様な性質でもあらうが、又斯かる土地に育つたので、それに經歷を言へば逆境を知らぬ、故品川彌二郎子の外婿となつて攀援の道を得、長州系就中山縣系の人となつて初中終政府内に棲息し來た人である、そして學問はといへば、獨逸露西亞の兩國に遊んだので、官僚的學風の空氣中に成長した保守的官吏的の人である、彼の如き先天的性質は此の如きの閲歷此の如きの學風によつて後天的にも益々完成された譯である。

△斯樣な人物が内務の椅子に坐つて國柄を執るといふ事は、今日の時勢として事を好み華麗と變革とを悅ぶ人よりも結構な事と思ふ。今はそれ如何いふ場合であるか、民心を收攬せんが爲には地方官等は漫りに不急の土木を起さうと騷ぐではないか、賄賂は公行する風俗は益々頽廢する、此の如き時勢に於て質撲平田男の如き人が當路の者となり幾分匡濟の實を擧ぐるを得ん事は吾人の翹望する所である、男の頭は堅實を愛するだけそれだけ保守的である、從つて人目に榮ゆる樣なブリリアントの行動は出來ぬ、が今の場合吾人は寧ろ斯の如き眞面目な人物を欲する。

△前内相原氏の如きはおして仕事の出來る人であ

る、傲岸不屈功名の爲とあつたら如何なる事でもする。能く波瀾を捲き起して自らその中に健闘する人となる、權變を敢てして擧措端倪すべからずである、衆目の表には立つが、極めて危險なところが多い、平田男のする所は之に比しては先づ安心の方である。

△平田男は曾て前桂内閣の初期に農商務の椅子に凭つたことがある、時の次官は木内重四郎氏で現在は朝鮮の顧問に聘せられて居るんだ、此人が當時歐洲を巡遊して戻り、株式取引所を以て投機業となし、勉めて之に抑壓を加へるといふ考で居つた、此考が平田男の是認するところとなつて、遂に定期賣買期限三ヶ月のものを二ヶ月に短縮することに斷行した、その結果物論鼎沸、木内氏は到頭引責退任となり、從つて平田男も免るゝを得ず、矢張り農商務大臣の職を拋つにも至つたのだ、之で見ても氏の頭の如何に保守的に往々にして時勢に迂き所があるかは察せられる、株式取引所に弊害があつても商業界に無くてはならぬ必要の事柄が存すとを測ることが出來ず、相場は投機なり、投機は即博奕より、といふ樣單な純なる理路を以て直に之を抑壓すべしと決するに至つたのだ。が美處も亦這裏に存するではないか、過を見て斯に仁を知るだ、之で以ての平田男性行の如何なるものかゞ明瞭に窺ひ知ることが出來る

△原氏の性行は如何であるか、吾人は此處に斷言はせぬ、が道路の傳ふるところによれば彼の東京市の電鐵買上の如きは如何か、運動費を出せ、出せば市をして電鐵を買ひ上げさせてやると承知したとやら、その他競馬の手傳ひをやつて投機熱を昂上させるとか色々ある、之を傍觀するに甚だ危險千萬である。斯樣な亂暴なことは平田男には見るべからざることゝして安堵出來る

△此方面に安堵は出來るがそれだけ又平田男は細心て競馬などを憂ふると同時に其處此處に見える社會黨などが兎角目に着いてならぬ、氣が揉めるといふ性分である、吾人の考では一二病的分子があつたからとて、自餘全體の分子、即ち世間の議論が健全であつたなら

左樣に憂惧するに足らぬ、寧ろ放任して彼等をして自由に呼吸せしめて宜いと思ふが、平田男は兎角左樣なリベラルな態度には出られぬ、が又學問を愛する人てある、獨逸あたりの書籍に机上て親んて、自然に左樣なことをも理解するてあらう、そして世間の多くの分子さへ健全であればといふ考が少しは出そうなものだ、今や平田男は感化事業や慈善事業に鋭意して居られる樣だが、それ等は矢張り幾分その傾向に進んて居ることを證する。それに次官の一木喜德郎氏が亦選を平田男と同くして居る、平田男の米澤生れに對して一木氏は遠州生れである、前者に鷹山公の感化あるに對して後者には二宮翁のそれがある。兎角は勤儉を尊び質素を愛する方てあるから相待ち相輔けて同じ徑路を進むには便り多い事に思ふ但二氏の弊はドコ迄も官僚氣風て事務章程に違はぬかドーカか第一の氣懸りて人民に對する同情熱度の缺乏てある

△內務の椅子には從來の內閣ては閣僚中の尤も辣腕者を据え、それをして、選擧運動から議會の操縱等、專ら權謀を要する方面に當らしめたといふ傾がある、然るに桂內閣が平田男を選んで其椅子に置いたといふ事を疑問にする人もあるが、桂なるものは仲々智慮のある男である、之が抑もそれを證する。世間ていふ辣腕者なる横着漢を擧げたら差當り後藤男が內務の衝に當るべきてあらう、男は臺灣總督府民政局長より滿鐵總裁の位置に居る間に頗る實業家を羅致して居る、又懷ろ金の融通が出來る臺灣や滿鐵の表面に計算を立てぬ金を利用して新聞記者や、大學敎授をも買込て居る、又それ等を利用するに於ても氣か利て居る、が現桂內閣が取るべき策は決して此上黨援を多くするの新運動には存しない、前內閣を平和の間に讓り受けた關係上、此儘にしてさへ居れば、彼を助けた黨派はズルリ流れ込んて來る譯てある、愁ひ刺激を與へて却つて反感を買ふ樣な事は愚なることてある、後藤男が此椅子に坐れば必ず刺激を與へる、反感を強くする、爲に從來の御味方黨が離れて仕舞う、大浦男などとなつたら猶更てある、大同倶樂部との關係上政友會に對して面白か

らぬ結果の生ずることは明瞭である、此に於てか中外共に視て無難とする質朴の聞えある平田男を擧げることとは極めて事宜を得たものである。桂の明は能く此處に及ぶのだ。

△桂といふ男は仲々こすい男である、之に對して馬鹿を見たのは西園寺前首相である、桂は日露戰役に於て敢て尨大なる陸海軍の擴張案を立てたが、財政上當然その繰延をせなければ立ち行かぬ事は明瞭なるに及んで、自らの案を自ら否認するの跡を示すことは眞逆に出來ず、又此間際に外交上の失敗に人望を失墜したから之を機として西園寺侯に後を任せて退いた、任せられた西園寺侯には何等の術策もない、一意前計畫を踏襲して如何にか成らうと試たが成らぬものは遂に成らぬ、斯くて又辭任の已むべからざるに至つたことは人の知る通りだ。此處に於てか桂侯は再び立つたが、その爲す所を見ると矢張り外には策が無い、が一旦責任を西園寺侯に推諉して民心を緩和して置く、時分は宜いといふ考で今度は斷然陸海軍の事業の一部の繰延をした、道德上からいへば如何なものだが、併し時務の上からは非難はすまい、それに侯は一面に於て、現今の社會一般の思潮並に風尚に就いても、從來の放縱無檢束に對して當然反動の來るべきを認めて居る、勤儉を唱道するの可なるを信じて來た、此に於てか平田男の如きを內務に擧ぐるの必要を益々認めて來たのだ、平田男のみかは大浦男が農相となるに及んで農商務省內に握飯が殖えたとも聞くが、それ等で桂侯の用意も知れる。

△桂侯の性行には感心出來ぬが、併し桂侯に由つて少しにても時難が濟はれるとすれば、吾人は西園寺內閣の失敗を歎て送り兎に角現內閣の施爲に同意せねばならぬ、孔子は管仲を非難した、でも管仲微かつせば被髮左衽せんと言つたではないか、今の場合の桂侯は即ち管仲である。

△平田男の內相の椅子に凭るべき事情は上說の如くであるが、さて人といふものは位置が强固になり安全になるに從つて初の勇氣は鈍るものである、平田男は

貴族院に居つては極力競馬の非なるを爭つた、が此元氣が永久に銷磨せぬてあらうか、來るべき議會はその試金石である、吾人は男の如何なる態度を以て現れるかを見るべく夫を待設けて居る。（談話筆記校閲濟）

△平田東助論

無名氏

平田東助といふ人は隨分世間では隱謀家だとか策士だとかいふけれども自分の眼に見る處では一個の老書生で、さうして名譽よりも仕事が好きである。仕事も事業とか何とかいつて個人に關する仕事よりも國家的の仕事が好きだ。まあ一言にしていへば國家道樂の老書生である。世間では隱謀家だとか策士だとかいふが、隱謀や策略は彼の目的ではない。目的は常に自分の主義主張を行ひ度いといふのである。其れを行ふ爲めには時としては種々の手段を考へ出すことがあるだらうと思ふ。隨分綿密な男だから人の考へない所までも考へ、人の氣の附かない所までも氣が附く。彼を知らぬものは策士とか何とかいふが本領は策士といふ譯ではない。彼の本領はいゝ意味に於ての保守黨である。保守黨といつても無暗に保守するといふ譯ではない。社會政策などゝいふ事についてはなか〳〵進歩した考を持て居る。然し政治は飜譯ではいかんといふのは彼の眞向に來た考である。つまり國の地盤から段々生え上がつて行かなければならんといふ事を考へて居る。一氣呵成に世の中の事をやるといふ連中から見れば保守黨といふかも知れぬけれども物の發達順序を追うてやる連中から見れば、之れが本當の進歩黨といひ得るかも知れんと思ふ。

平田の長所は何かといへば物を壞すといふ事よりも物を纏るといふ事にある。殊に丁寧反覆委曲周到にやるから大概の人は口說き落される。それは彼れの長所である。タクト（手練）といつても一寸した手練手管てはない。なか〳〵念の入つた手のかゝつた手管である。

平田の一つの手柄ともいふべき事は條約改正の時に

伊藤公などが土地所有權を外人に與へんといはれた、處が平田が固く爭うてそりやいかん、理屈からいへば與へてもよい、又私も永久に與へないとはいはん、けれども四十三年に再び條約を改正する時に彼れに與ふるものがなくてはいかん、何かいゝものを一つ交換するものがなくてはいかんといふので、とう／＼之れを與へなかつた。保守的の人であるが、これなどはなかなか遠慮ある仕方といつてよい。實際のアドミニストレーターとして彼にどの位の力があるかといふ事は、今から試驗せらるゝ時期である。それは事實が多分吾々に代ていふだらう。けれども帷幄の人物としては彼はもう保險附である。彼は忠實である。自分を本位とせずして共に事を爲す所の仲間を本位とする。機密を嚴守する。法律の思想がある。一通りの文案が出來る。世故に老練である。思想がなか／＼緻密である。自分といふ事を何處までも後ろに置いて仕事といふ事を何處までも前におく傾きがある。故に如何なる場合にも重寶な人には相違ない。又長く政府に立て居るから自己の門下生中に幾多の俊才があり、又友人同志の中にも澤山の俊才がある。だから適材を適所におくに都合よき事假令袋の中から物を探るといふ迄は出來ないとしても勸工場から俄仕込をするよりはよい代物を得る事が出來る。彼は當世に見ることの少ない眞面目な男て、矢張り上杉鷹山公の政治主義を實行しやうと思ふて居るらしく見える。

△平田東助男

松井廣吉

明治三十五年桂侯が始めて内閣を組織するや、其の最も頼む所の參謀は實に平田男なりき、今年七月桂侯の再び内閣を組織する時、政綱の立案、閣臣の配置總て侯自から決して彼の淸浦大浦の子男等は皆門外漢たりき、而して平田男のみ侯の參謀長として獨り謀議に與かりたりき

平田男の智素より淸浦子に及ばず、其の勇略また遂

かに大浦男に及ばず、其の奇才に至ては竟に後藤男に較するに足らず、然るに智謀深遠なる桂侯が彼に就かずして唯だ平田を擇むは何ぞや

平田男は山縣公の眷顧を受けて、多年法制局長官たりき、此の間幾んど公の秘書官長の如くにして、政海、寧ろ官海の情僞に精熟したりき、而して資性謹恪、心を秉ると最も公平にして、古君子の風あり、所謂六尺の孤を托するに足り、心を安んじて信頼し得、是れ侯が専ら男を信じて腹心を措く所以ならずや

清浦子智術餘りあるも、傲岸人に下らざる癖あり、大浦男勇剛絶なするも剛愎自から用ゆる弊なきにあらず、共に敵手に畏憚せらるゝもまた嫉惡を免れず、平田男に至ては、至公至平にして謹厚、多く世に聞へざるも亦敵を有せず、善く知る者のためには實に重寄の信依を有す、眞に當世の君子人にして、桂侯の如き智人の主として之に頼る、洵に其の所を得たりと謂べし

男は其の夫人に由て故品川彌次郎子と姻戚たり、山縣公の嗣子伊三郎氏とは義兄弟たり、故品川子方正にして廉潔、自ら信ずること甚だ厚く、苟くも君國のためといへば、万壁悉く砕くの勇あり、曾て松方侯を強ひて熱烈なる撰擧干渉を行へるが如き、膽勇倫を絶すといふべし、男や方正にして廉潔なると品川子に譲らず、子の熱烈なきも、子の誠實は之れ有り、子が晩年心を盡せる農事奬勵と産業組合とは、今や男之を繼承して倦色なし、且つ子が曾て農商務、内務に大臣たりしが如く、男も亦同じ椅子に凭れり、何ぞ其宿緣の相似て奇なるや、但だ明治廿五年の撰擧干渉は、竟に男に於て見る可らずと雖も、男は將さに第二の品川子たるべき乎、男の名聲未だ甚だ聞へずと雖も、實は政海、少くも桂黨に於ける最大雄鎭たり、桂侯の男に於ける、正さに水魚の妙を見る

△平田氏は堅實なる人物にて候

石川半山

内務大臣平田東助氏は至て眞面目なる、堅實なる人物と存候、或る者は其の局量の如何にも狹小なるを論じ候へども、豪放ならざる氏の資性としては、局量の狹小に見ゆるも止むを得ざることに候

日本帝國中にても其文明の一世紀は遲くれたるが如く見ゆる東北の米澤に生れ、明治の初年に露國へ留學を命ぜられ、次て獨乙へ留學したる人なれば、其產地と云ひ教育されたる地方と云ひ、何れの方面から考え候ても、融通の利く才子となることは六ケしかりしならんと存候

尤も最初は伊藤系の人には非りしやと存候、伊藤公が明治十九年憲法取調の洋行には、平田氏も伊東巳代治氏等と共に其の隨行員の列に在りしを以て之を見れば、或は最初は伊藤公に知られし人かとも存候、山縣公が人材を吸引する力は非凡なる者にて、伊藤系の人や井上系の人や乃至薩派の俊秀にして山縣公に吸引せられたる者も少からず候へば、平田氏も亦最初は伊藤公に知られ、次て山縣公に吸收せられしには非るやと存候

抑も山縣公は常に其の左右に四天王を置て國務を料理せられしが如く思はれ候、其の陸軍の長官として、所謂長州陸軍の基礎を作らるゝ時代に於て、第一の四天王は三浦梧樓、三好重臣、滋野清彥、堀江芳介の四氏に候、第二の四天王は曾我祐準、小澤武雄、岡本兵四郎、黑川通軌の四氏に候、第三の四天王は大築尙志、原田一道、西周、津田眞道の四氏に候

既にして一轉して行政の方面に出て、內閣首相となりて、國政を執らるゝに當ては、桂太郞、芳川顯正、青木周藏、曾禰荒助の四氏は第一の四天王に候、而して平田氏は清浦奎吾、小松原英太郞、大浦兼武の諸氏と共に、第二の四天王に候

然り、平田氏は山縣公が多く有する四天王の一人に候、而して公の感化は其の天禀を助長して、頗る堅實なる人物とはなり申候

平田氏が故品川先生の遺志を繼承して、各地の產業組合に熱心盡力せらるゝは、我輩が國家の爲めに最も

感謝する所に候、但し其の意見の時として重農學派に傾き、嘗て農商務大臣たりし時、其の議論の極端に走りて、往々商業を以て罪惡視するが如き事ありしは、我輩が氏の爲めに最も惜しむ所なるも、之れは氏が國事を思ふ熱誠の誤て極端なる點迄に馳せ行きたる者にして、今日は氏と雖も決して商業を罪惡と思ふが如きことは有らざるべしと存候

前内閣の内務大臣原敬氏は、極めて放膽にして、思ひ切りたる政略を行ひたるが爲めに、種々の物議を生じたるも、平田氏にして手堅き方針を執て、誠意熱心に國務に從事せんには、若し大功を擧ぐることなきも少くも大過を生ずることはなかるべしと存候

新内閣に於て低氣壓を生ずるの虞あるものは、大浦氏と後藤氏の方面なり、上杉鷹山公が遺德の感化を受けたる平田氏と二宮尊德翁を尊信せる一木氏等が、其の保守的頑拳を堅めて、手堅く籠城せる内務の方面は、多分は太平無事ならんかと想像致候

△平田東助論

匿名氏

私の考では、平田といふ人は後藤とか大浦とかいふやうな、あゝいふ評判男とは大變違つた性格の人と思ふ。何時の内閣でも表面の舞臺で花々しく働いて世間の注目を惹く人と、表面には何等のイムプレッションを與へず、世間ではあの人は何をして居るのか分らぬ位の極めて陰氣な、靜かな人と。此二つの種類の人が詰度ある。現内閣では誰が一番の花役者であるかといへば、いふまでもなく第一は後藤遞信大臣、第二は此後藤遞信大臣とは反對の性格だか而かも可なりの人氣を負うて居る大浦農商務大臣。此二人は現内閣の花役者であると何人も思うて居る。之れは確かにさうであらうと私も思ふ。處が平田といふ人については世間では餘り興味を以て見て居ない。あの人を内務大臣としたのは其人物が溫厚で、圭角がなくて、公平な態度の人であるからであると思うて居るらしい。此想像の外に平

田に對しては格別違つた考を有て居る人が餘りないやうに思はれる。當り前なら大浦あたりを內務にすべきてあるが、政友會などに對して餘り辣腕を揮はれては却て政友會の反感を買ふ恐がある、桂は如才がない人てあるから寧ろ平田の如き溫厚な人を內務に据えた方が得策と見た。だから平田の內務になつたのは政黨に對する氣兼からてある、政略からてあると多數の人は觀察して居るらしい。勿論平田といふ人を無能の大臣とは世間でも思うてはゐないらしいが、さりとて大した有爲の大臣とも思うてはゐないらしい。そこで政黨などの眼中には平田がない。只後藤男と大浦男の二人が現內閣でいろ／＼な策をして、政黨操縱なども此二人てやるし、平田などはどうでもなるものらしく信じてゐる模樣てある。處で私は一つ疑問を持て居る。元來表面にあらはれて花々しく働く人、若くは働くらしく人に見えるやうにやつて居る人。さういふ人が本當にエライのてあるか、又表面には一向働き振りが見えぬ、のみならず又裏面にも餘り働いてゐないらしいから全く無能てあるかといへば、まんざらさうでもないらしいといふやうな人がエライのか、私は疑問と思つてゐる。近頃頻りに手腕家／＼といふ語を聞くが、其手腕家といふのは何でも世間に目立つやうな光彩陸離たる事をする人を指して居る樣てある。成程後藤男や大浦男などは或點に於いては手腕家てあるに違ひない。決して無能の人でも無爲の人でもない。之れは私も堅く信じてゐる。然しながらさういふ人々の仕事といふものは深い根底の上に立て働いてゐるものでないから總て皆世人の耳目に明白に見える。で百年の後に於て初めて其人物が分るとか、其事業のあとが分るとか、又た棺を蓋うて後世論が定るとかいふやうなものてはない。今日一事をなせば今日其結果が分る、明日一事を行へば明日其効績があらはれる。世間では其れをヤンヤと評判して其人を毀譽褒貶する。後藤とか大浦とかいふ人は其方だらうと思ふ。此二人のする事は明白に世間の人の了解する程度にあつて深遠とか隱險とかいふ事がない。要するに正直てある。其れと引換

へ、平田といふ人はどうも批評界ではもてない方の人で、さうして其する事もどうも國民に了解されない。又自分でも了解されることを勉めもしないし、又好みもしないらしい。あゝいふ人は國民がホメルとクサウと了解しやうが、しまいが一向に頓着しない。自分の信ずる事を何でもやつて除ける。又或場合にはそれを成るべく公衆の耳目から避けるやうにして自分のする事を或は了解せしめず或は殊更らに誤解させるやうな事もする。さうして何時の間にか大なる事業をなすことを期してゐるだらうと私は思ふ。そこで平田といふやうな人のすることは何等の感興も興味も國民に與へない、文學的色彩を有てゐない。後藤とか大浦とかいふ人のする事には文學的色彩があつて見物人が面白い。平田は見物しては一向面白味がなく極めて陰氣である。然し私の見る所では平田といふ人は決して無能ではない。或は現内閣の中では最も有爲の人であらうかと思ふ。此人の初めて内閣大臣になつたのは第一次の桂内閣の時代で、確か農商務大臣であつたと記憶する。然しながら其の閲歴から見るといふと平田は今の内閣員中では最も先輩で桂首相よりも以前に國務大臣になつてゐなければならない程の人だ。此人の洋行したのは維新前で確か十七八の少年であつた、そして露西亞に行つた。露西亞に行つたのは自分で何んか考ふる所があつて露西亞語でも研究しやうとしたのであるか、或は政府で何か必要があつて行かせたのであるか私には分らない。然し最初には兎に角露西亞に行つた。其れから間もなく獨逸に行て長い間其處で學問をした。歸つたのは明治三四年の頃と思ふ。だから日本の海外留學生としては最も故參の方であつて、明治三四年の頃には外國で修業をして外國の書物を讀み其事情を知て居る人が少なかつたから非常にもてて間もなく大藏省の書記官か何かになり、明治十二三年頃は同省の大書記官で檢査官を兼ね、矢野文雄、小野梓などゝ殆んと同等であつた。それから參事院の議官となり。法制局の部長から進んで長官にもなつた。又色々なものゝ取調委員になつた。法典取調委員にもなつた、伊

藤公が憲法制定の爲め歐羅巴に行つた時にも隨行員の一人となつた。又議會の開けた時、最初の貴族院議員になつた。又條約改正にも盡力し、政府委員としてはなか／＼評判がよかつた。凡そ明治の重要なる立法事業には大抵關係し、且つ主もなる役割を勤めた。それから行政事務にもなか／＼關係がある。例へば官吏登用試驗とか官制改革とかいふものには詮度委員になつた。要するに平田は其閱歷からいつて餘程の先輩であつて今の內閣大臣は皆ずつと平田の後進者である。平田は經驗も多量に有し、其範圍も亦非常に廣い。或點からいつて明治政府の活字引といつてもよいと思ふ。さういふ閱歷の人であるからもつと早く大臣になつてもよい人で、第一次桂內閣の時に初めて大臣になつたといふのは寧ろ不思議な位に思ふ。少くも淸浦などゝ同時に大臣になつてゐなければならない人だ。

平田は今日は山縣系の人と見られてゐるし、又それに違はなからうと思ふ。が然し山縣系の中でも此人が薰陶を受けたのは故の品川子である。品川が內務大臣になつてゐた時も始終品川を助けて品川に政治上の智識を供給した人である。一體議會開會前後から日本の政治上に獨逸學派の系統を引く人と英吉利學派の系統を引く人の對抗があつた。其中獨逸學派の系統を引く政治家といへば伊藤公山縣公を中心とした所謂官僚派即ちビューロクラシーの人々で、伊藤公が獨逸のスタインから感化されてスタイン張りの議論を主張したのて政府部內にも自然傳播されたに違ひない。が然し獨逸學派を代表した人の中で平田男は最も其主もなるものと思ふ。此人は最も古く又長く獨逸に居り、頭はシツカリ獨逸化してゐてたのに、當時は民權自由論が盛んて國會論のやかましかつた時だから獨逸學派を代表して獨逸流の行政主義を政府に弘めやうと勉めたのてある。後年穗積八束なんかゝ獨逸から歸て頻りに政府萬能論を唱へてラバンドの如き政府萬能主義の雄將の學說を大學や又は政府部內にも皷吹した。然し學者として學理として之を皷吹したに過ぎない。平田は實際政府の行政官として政府の機關の上に政府萬能主義の

油を塗り附けて之を運轉した人である。山縣公などの法治主義の極めて有力なる鼓吹者保持者であつたと思ふ。

第二次の山縣内閣の出來た時、即ち憲政黨内閣の倒れた時、其時に自由黨の變名たる憲政黨と山縣内閣との提携問題が起り、いろ〳〵な理由から遂に提携することゝなつた。それと同時に當時實際の憲政黨首領であつた星亨がいろ〳〵な要求を提出して一度は提携が破れんとした程であつた。其要求の中で最も主もなるものは憲政黨から役人を登用して呉れ、無論内閣にも一二の大臣を入れて貰ひたいし、又次官以下局長あたりに澤山入れて貰いたいといふのであつた。一方では其要求を極力排斥して政黨屋の政府に入ることを防遏する運動が起つた。世間は之を官僚派の躍鬼組といつた。即ち文官任用令と分限令を設けて政黨員が漫りに官吏となることの出來ぬ關門を造つた。之れは實際平田男其人の仕事と見てよい。一體平田といふ人は政黨が嫌ひて獨逸流の内閣制を極力維持せんと思つてゐる。政黨内閣などいふものは絕對に嫌ひてある。今は時勢も變化して來たから左程極端てないかも知れぬが非常に嫌ひてあることは事實である、一體山縣派は政黨嫌ひで大浦なんかは公然と其れを公言して居る。大同俱樂部などは大浦がやつてゐるがあれは實際は政黨てない、私黨てある。或は大浦黨桂黨といふべきてある。さういふ私黨は造るが彼等は政黨を作ることをせぬ。處が大浦などのする事は露骨で何人でも政黨に對する彼等の思想感情を誤解しない。處が平田は表面に見えないから世間は充分了解せない。そこで此人が内務大臣になつても大浦などのやうに際立つた辣腕を揮うといふ事がなからうと思うて安心してゐる。けれども其實平田の内務大臣たる事は大浦の内務大臣たる事よりも政黨に取て恐ろしい打擊を受ける事があるだらうと私は思つて居る。平田は品川に大變最負になつて、品川とは確か姻戚の關係もあるらしい。それほど品川と始終接近してゐたものだから餘程品川に感化されてゐる。只品川といふ人は感情の極めて猛烈な人だから、

あの人のすることは表面に發揮されて毀譽褒貶の的に立つのである。平田の性質は極めて平和に見えて、一寸逢ふと猛烈な所のない人のやうに思はれるが、然し其實なか／＼の神經質て又なか／＼深酷な分子を持た人て、おとなし相に見えても負けん氣のある人で可なり思ひ切つた事をやりかねない人だ。只其人となりは謹愼て考深く、容易に秘密を洩らさず、味方にしては極めて頼もしいが、敵に對してはなか／＼思ひ切つた事をやる方てある、少しも花々しい際立つた所のない人てはあるが仕事は今の內閣の中でもなか／＼出來る方の側だと思ふ。世間の人は彼は長らく獨逸て學問をして、いろ／＼の立法事業に干與して態度も政治家のやうに花々しくないから、只政治家的學者であると見て居る。成程現內閣中ては學者であるかも知れぬ。然し單純な學者ては決してない。又私の見る所では平田といふ人は現內閣の中ては第一等の策士の方かも知れんと思ふ。品川といふ人は元來の策士であつて只松陰流の率直な感情の激烈な人てはなく、策略にかけては當時の好敵手といはれた陸奧宗光にも劣らない方であつたが其人の側に居たのであるから平田も其趣味を知り隨分策略をやる人だと私は思つて居る。今日の後藤男とか大浦男とかいふ人も策士でもあり、又好んで策を立てるかも知れぬけれども、何だか其やる事が危なつかしい。批評家から見れば極めて面白いが、時にボロを出したり又失敗をしたりする。平田はなか／＼考深くて其跡を見せぬ。拔目のない事をする。桂が平田を內務大臣にしたのは政友會に對する氣兼からではなく、あの人を政黨操縱に最も適任者と見たからてある。あれを單なるお人善しと思つたら大間違てあらうと思ふ。桂首相にしても平田に內務を任せておけば一番大丈夫だ間違はないと堅く信じてゐるだらうと思つてゐる。

然らば平田といふ人は只單純なる策士で政黨操縱ばかりを得意として長所とする人かといふにどうもさうてはない。自分の政敵に對しては如何なる策略も行ふが國務大臣としては單に政黨操縱などて滿足して居る人てはなからうと思ふ。內政に關しては餘程眞面目な

考を持て居る人であらうと思ふ、あの人は口を開けば信用組合といふ。あの信用組合ももとは獨逸から持て來たのである。獨逸は信用組合の最も發達した所で、山縣公が自治制度を施行する所以も獨逸のを見て之に倣はんとするに起つたので、平田の献策などが與つて力ありと思ふ。品川が內務大臣の時人に逢ふ毎に、若くば地方へ行く毎に信用組合の話をやつたが、其立案者は平田である。又二宮尊德を持ち出したのも平田が最も與つて力がある。桂內閣の時彼が取引所問題で責を引いて辭職したが、其後も始終信用組合の事を研究し其れを何所へ行ても皷吹して居る。外の事は何にもいはんが信用組合の事ばかりは非常にいふ、これは矢張り濟民の志から起つたもので政治家としての平田の思想は餘程眞面目な所にあるだらうと思ふ。自治機關を發達せしめて信用組合とか產業組合とかいふ者を普及して國民の生活を上進させる。德義と經濟とを連結さして二宮主義に基いた經濟主義を國民の間に普及させる。といふことについては餘程眞面目に考へてゐる人と思ふ。だから桂內閣に於いては或は平田を政黨操縱に適當の人と思うて居るかも知れないが、局外者から見る時には內務大臣としても最も適當の人と思ふ。政黨に對しては深酷な事もするだらうが國民に對しては博愛な王道主義を持て一般國民の生活を上進することを考へ、其點に向て大いに力を盡さんとする殊勝なる考を有し、內務大臣としては相應に成功する人と思ふ只あの人は所謂蒲柳の質で身體が弱く、肺病病みだといふ人がある位だから神經が益々銳敏になつて政黨操縱の事などに少し深入りし過ぎて、其れが爲めに內閣の運命にかゝるやうな事をやらないとも限らないが、然し用意の深い人であるから、まさかそんな事もあるまいと思ふ。取引所問題の如きは彼れの千慮の一失であの時は先生どうかして居たんだらうと思ふ。斯る思慮の深い人であるから山縣公から大いにもてたが桂もさういふ人を信用し、桂內閣では後藤よりも大浦よりも重きを爲してゐるだらうと思ふ。勿論花々しい人でないから世間からアッとはれないだらうが、やつた後

から見ると案外大きな事をなしてゐる。こういふ種類の人は當世には餘程珍らしいと思ふ。（完）

△平田男

米澤　古狂生

△凡そ物は適當なる間隔を距てゝ觀なければ其正しい輪廓を認めることが出來ない、僕と平田男とは其間が餘り近過ぎるから到底其眞相を知ることは出來ない、況や僕の如き凡庸の近眼を以て偉大なる人格を具へた男の如き人を評論するなどは思ひも寄らぬことなどである、併し折角の御尋ねであるから僕の差當り知て居る事實を二三話して見よう。

△男は米澤市坐頭町に生れたのだが決して按摩の子ではない、嚴父は伊東昇迪と云ふ國手である、昇迪氏は伊東家中興の偉人で堅忍不拔の精神と崇高俊邁の性格とを具備して居つた、曾て長崎に遊んで蘭醫シーボルトに就て學び、歸鄕の後藩主上杉鷹山公の侍醫に任ぜられて精勤を竭した。彼の高野長英なども親交を結んで居つた、昇迪氏に二男三女があつた、長男祐順氏は陸軍軍醫に奉職されたが父君の看護の爲に中道にして冠を挂けて歸鄕した次男東助氏は出てゝ平田氏を冒したが故あつて離緣した併し依然平田の性を名乘て居る、男が人格を養成したのは嚴父昇迪氏の嚴正なる家庭敎育に負ふ所が甚だ多いのであらう。

△男は少年の頃から既にその頭角を顯はして居つた、當時米澤の四俊才と云ふ語があつた、夫は平田東助、內村良藏、樫村淸德、鵜瀞某であつたと思ふ、鵜瀞は不幸にして夭折し、樫村は醫士として成功したが既に故人になつた、內村の奇才は實に非凡であつたが。惜哉中道にして官を去て今は駒込邊に浮世を馬鹿にして悠々閑居して居る、平田男丈けはその非常な根氣と幸福なる氣運とに由て終に今日に到つたのである。

△男の氣質は米澤固有の一種の頑强堅忍なる處へ獨逸流の勤儉力行を加味し、更に多年の修養に由て自得したる所を加へて煉磨したもので、壯年時代の圭角が段

々に取れて今では殆んど圓滿に近くなつた、今から十年の後にはドンな形式になるかは豫測が出來ない。

△元來米澤一流の氣質と云ふのは頑强堅忍で兎角圭角がある。圓轉滑脫に華々しく面白可笑く世を渡ると云ふことが不得手である、これはその土地の地理と歷史とが然らしむるのであるが、近因の一は鷹山公時代の米澤の大厄難てある、當時米澤藩の窮乏は實に言語道斷であつた、鷹山公の精勵と竹股、莅戸等の忠勤とに由て辛ふじて破滅を免れたが其餘弊は容易に癒えない、士民は勤儉忍耐と云ふ消極的方針を以て傳へて今日に及んで來た、米澤人の長所も短所も爰に在ると思ふ。

△平田男も慥かにこの性質を具へて居つた、併し男の少壯の頃の覇氣は中々盛なものであつた、內村良藏等と隨分蠻行を逞ふしたそうで、夫から獨乙へ留學し、ハイデルベルヒてブルンチユリー先生に就て政治經濟の學を修め優等の成蹟を以てドクトルの學位を受け、歸朝したのが明治八年であつたかと思ふ、此頃から慨然として經世の抱負を懷き、屢々其鋒芒を顯した。

△男が立身の楷梯は故品川彌次郎氏に識られ之と姻戚の關係を結んだ事である、玆に於て山縣公――品川子平田男と云ふ系統が出來た、男は大に山縣公品川子を崇拜して居つた樣である、又故井上毅子を深く敬畏して居た樣である、その間に彼等の性格をも感受して漸々米澤氣風を脫して長州流義に轉換されたとその頃專らの評であつた。

△伊藤公に從て歐州へ出張中肺患に罹つたが幸にして根治した、併し之が爲め一時逆境に立れた、男の同僚若しくは後輩なる金子(堅太郎)、伊藤(巳代治)、曾禰(荒助)、淸浦(奎吾)、末松(謙澄)等が着々重要なる位置に昇るのを見て必ず窃かに肘を撫で丶憮然たりし事もあつたてあらうと想ふ、政治家たるには甚深の學問は不必要である、別にそれ以上の必要の條件があると嘆聲を漏したことも有た樣だ。

△併しこれは一時の現象であつた、元來極めて理性の强い、そして感情に馳せることの無い平田男は飜然として覺得された樣である、爾來氣運一轉忽ちにして衆

の道を得て農相となり、其退閑せられた後も、殖産興業の事業に盡瘁せられ、産業組合創建の爲に孜々として南船北馬の勞を厭はず、今や再び內相の重職に就かれて、國家の爲に益忠誠を盡されつゝあるは吾人の均しく慶して喜ぶ所である。

△夫で平田男の氣質は何處迄も眞面目で正直で所謂權謀術數を弄しないから、平素奇言奇行は極めて少ない、世の所謂逸話と云ふものに乏しひ、併し眞正の逸話は澤山ある樣である、客に對して興到れば談論風發の慨がある、併し餘りに理性が勝ち過ぎるので一寸冷靜の樣に見へる、今少しく溫情が有つて欲しいと思ふ程である。

△併し男は決して冷淡ではない寧ろ熱情が充實して居る、只だ理性を以て感情を押へ容易に之を發せぬのであらう、鄕里の青年などに對しても實に懇切である、一旦引き受けたことは決して等閑に棄て置かぬ、周到緻密な性分であるから決して無責任な空談妄語を吐かぬ、何處までもジミに出來て居る。

△されば男には格別な道樂と云ふものが無い、酒も煙草も好まない、勿論女も近づけない、例の勤儉精勵の一點張りであり、嗜好とては書畫骨董と讀書位なものであるが夫も餘り耽ると云ふ程ではない、併し趣味は中々博い、何んでも研究的に觀察する所は流石に昔し正式の學問をした餘波である。

△男は現に東洋協會の調査部長である、この調査部では各種の專門學者が委員となつて、東洋研究に從事して居るのであるが、男は各種の學術に對して平等の趣味を以て平等に之を理解する、東洋協會中で男の外調査部長に適した人は無いと見へる、否現內閣諸公の中では男が一番學者である、假令男の學問は既に古くなつて、學者としては時勢後れてあるにもせよ、新進の學說を聞て夫を理解することの出來る人は內閣中唯一の平田男あるのみである。

△何處にも在る事である如く、米澤にも鄕友會があつて、米澤有爲會と稱して居る、男は其會長として勉めて青年後進の徒を指導して居る、例會などにも每に出

席して青年を相手に會務を處理したり、話しをしたりする、その郷里の福利を圖る點に於ても充分なる熱心が見へる。

△男の家庭は夫人達子と三男一女とから成立して居る、家庭の嚴肅でしかも常に和氣藹々たることは既に定評がある。

△要するに男は少年時代から一貫した性格を以て漸進したので、幸にして中道に之を覆滅すべき大障礙に逢はなかつた、幾多の小障礙は强固なる意志と偉大なる精力とで排除して通つた、その間に漸々圓熟し來つて終に今日に至つたのであるが、男の前途はまだまだ長い、十年の後二十年の後、男は如何なる邊まで發達するかはよい觀物である。

△僕は實は男の技倆に就て論評する丈けの資格を有て居らぬ、其政治家としての平田男、經濟家としての平田男、學者としての平田男等に至ては別にその道の批評家の眼を煩はねばならぬ、玆には僕の近眼に映した同郷人としての平田男に就て差し當り二三箇條を話して見た迄である、若し夫れ男の眞正の價値は棺を蓋ふて然る後始めて明かになるのである。

學者としての平田男

某法學博士談

△平田男は明治の初年大學の學監であり、斯界の先輩として立られたもの、それから洋行して獨逸に五六年居られたてあらう、重に公法學を修めたのだ、當時公法學者では知名のブルンチエリー氏が居り、男は親しく就いて學んだことと思ふ、て戻つて來ると盛に獨逸の公法學者の説を紹介し、就中ブルンチエリー氏の國家論、ヒユードグレーの獨學政典等の譯著もあつた、此ヒユードグレーの原著は大分評判の宜いもので十何版を重ねたのだ、斯くの如くして山脇氏等と共に專ら獨逸法學を日本に紹介することに勉められた。

△獨逸協會は現首相桂侯も創立者の一人であるが、平田男も設立に與て大に力あるもので、盛に獨逸法學を

講じ、それを日本に紹介することに勉めたのである、その次に獨逸協會學校から出た人て世に顯はれた人も少くない、有松英義氏の如きもその一人てある。

△男の學問のやり方は純粹の法學者てはない、政治經濟を兼ねたる學者である、特に行政の事には早くから着眼して居た樣である、獨逸には行政法學といふものとそれから行政學といふものと二つある、平田男はその行政學の方に志したものであらう。

△人民の安寧幸福は憲法上の組織よりも寧ろ行政の組織運用如何に繋るものが多いといふのはグナイストの説であるが男も矢張り左樣に考へたものであらう、扨て行政學とは行政を如何に改良發達せしむべきかといふ學問だから、經濟學とは遂に離るゝ事が出來ない、行政々策なるものゝ大部分は即ち經濟政策なのである。

△斯くして男の學問は經濟政策に涉て遂に彼の產業組合なるものを熱心に唱道することゝなつたのてあらう、此產業組合の事に就いて平田男の功蹟は何人も知悉して居るところ、之を我國に初て紹介したる人が即ち男なのてある、斯くて斯樣なる考を日本にも有つた人がなかつたかと調べた結果、二宮尊德翁が報德社なるものを發明し組織したことを見出すに至つた、故品川子爵の內務大臣の時に、產業組合が唱へられると共に二宮尊德翁が尊崇され、遂に贈位の事もあつたのは主として之れに依るのてある、勿論之には平田男か大に與られた事と思ふ。

△兎に角產業組合には不斷熱心なる注意を拂ひ、著書等もある、產業組合要論と言つたか、此樣な著述もあつたので、一意專念に骨を折られ、特に三年ばかり前の事だが產業組合中央會なるものを起し、各組合々々の連絡並に發達を圖り、それが爲には雜誌をも發行し、講演をも開催されたのである、て產業組合の數も大に增加して來た、數の增加即効果の現れとも言ひ兼ぬれど、段々に精神を吹き込まれて餘程活氣を呈して來たのは明かである、此等の功蹟は世人の已に認めるところてあり、吾人も亦終始一貫その熱心の衰へざるには

感服して居るのだ。

△平田男の學風を言へば、先づ前述の次第であるが、その趣味も甚だ多い人だ、今は多忙だから十分机邊に親むことは出來ぬが、でも學說を人から聞くことは好んで居られる、政治經濟等の自分の專門のみではなく、歷史とか美術とか、博く學術的の事に耳を傾けらるゝ、從つて愈增しに趣味の範圍が擴張される樣だ、で專門の人と快談することを深く樂とし、成る可く左樣の機會を作り又は之を利用することに勉めらるゝやうである●

平田東助論

黑　頭　巾

其一。

●吾輩は航海して、半島の岬端、大海に斗出する萬仞の絕壁を望見するときは、實に一種崇高にして、痛快なる感に打たれずんばあらず。

●蓋し、一夫關に當りて、以て萬卒に對抗するは、極めて雄壯なる趣味也。

●彼の風濤澎湃として寄せ來る萬古の力に對抗しつゝ、皮落ち肉剝げて、骨立する萬仞の石壁、其下に日夜波瀾砕けて、洶湧する、大壯觀を現出す●

●吾輩は之に對して、毅然として、政海の風濤に面しつゝ、身先頭に立ちて全軍を麾く雄者の人格を聯想す。

●平田男は、新內閣の棟梁として、桂侯の總參謀長として、大洋に面する萬仞の絕壁に相當するの境遇に立つにあらずや。

●國家困難の局、今日の如きは、維新以來、有數の難關たるを失はず。

●此の時に際し、身を挺して、高處に登り、主義の旗を推し立つるは、政事家としての雄者たらずんばあらず。

●男平田が今の境遇は、政事家として快心の位置と謂はざる可らず。

●而して彼の人格は、萬仞の絶壁巖々として骨立し、以て大海の風濤に、其脚を洗ひつゝあるの大觀を具するや如何。

●或政客は、彼を評するに、故大久保甲東以來の内務大臣を以てす。これ恐くは、世人の驚く處ならずんばあらざるべし。

●吾輩を以て見るに、此の如きは、自ら半面の眞理を具す。必ずしも溢美の言に非ず。

●蓋し現代政事家の、第一の弱點とする處は、名利の誘惑に對抗する、道德力の薄弱なるにあり。

●前内相原敬の如き、辛辣の怪手腕を以て、一代の耳目を一身に集注せしめたり。

●然れども、彼れや、これを士君子よりして見るときは、必ずしも敬服すべきものにあらず。

●若しそれ利慾に誘惑されず。斷々然として、職務に忠實に、斃れて而して已むの性格を以て、始めて毅然たる大丈夫とせば、男平田の如きは、恐らくは、輓近得難きの人格たらずんばあらず。

●而して此の點を以て、彼の本領なりとするときは、彼や則ち、甲東以來、稀觀の内務大臣たる也。

●吾輩は、現代に於て、所謂「怪手腕」あるの妖的政事家を歡迎せず、正意誠心、以て忠實に善政を布くの眞面目なる政事家の出づるあらんことを希ふ。

●實を言へば、「才氣」は現代に有り餘りたり。而して國民は、政事家の怪手腕に疲れたる也。

●大久保甲東は嚴毅方正、尤も眞面目に其職に盡すの大人物たり。

●嚴毅方正に於ては、平田男は、甲東に比して遜色あるを見ず。吾輩は、彼に由て、甲東以來の善政を見るあらんことを期待す。

●男平田は、一見樸々として老實なる君子也。豪宕雄偉、大に人を驚かす氣格あるを見ず。

●然りと雖も吾輩が、彼に望む處は、甚だ少からざるものありて存す。

●今の政海は、濁浪滔天の利慾海のみ。此の濁浪海に處して、公明正大に、善政を行はんもの、彼の如き、

忠實清潔なる人格を措きて誰ぞや。

●男平田にして、吾儕の期待を空しくせざらんには、彼や。政壇の雄者たるを失はざるのみならず。抑亦た蒼生の幸福也。

其（二）。

●實を言へば、世人は、廣く、平田男の眞價を知らざりし也。新聞記者と雖も、往々にして、男が新内閣の大立物たらんことを豫期せざりし位也。

●彼は從來、世人より、手腕無き正直なる政事家と誤解されたりし也。是れ寧ろ善意の誤解と雖も、兎も角も、誤解たるを失はず。

●彼は前度の桂内閣のときよりして、既に侯桂の總參謀長たりし也。

●彼自から一箇の妙手腕を有す。必ずしも、頑固正直にして融通の利かざる人に非ず。

●然りと雖も、彼が、餘り高く世人に評價されざりしは、職として、其の樸々たる風采態度と、且つ飽くまで眞面目なる性格とにあり。

●而して彼が、自から名利に近づかず、名聞を求めざるは、其の極僅少の先輩に信任せられて、而して世間には、虚名無かりし所以ならずんばあらず。

●彼は、何處までも忠實にして周密也。必ずしも機敏輕快無くとも、老練明達、策遺算無きを期するは、其の本領也。

●彼は此點に於て、内閣の棟梁として、首相の總參謀長として、適材たるを失はず。

●輕薄奇捷、所謂「怪手腕」あるを以て、働者に擬するは、世の短見者流の事のみ。

●一箇の主義本領は、此の如く薄弱なる人格に由て遂行さるべきものに非ざる也。

●或は曰ふ、男平田は、考へ過ぐるの癖あるが故に、往々にして、時機を逸することあるを免れずと。

●小事も忽かにせず、沈思洗練して以て之を決するは彼の本領也。輕忽にして大事を誤ることは斷じてある可らず。

其（三）。

●彼の政治的理想は秩序なり、平和也。平和に非ずんば、秩序を涵養する無く、秩序立たずんば平和無し。

●彼は、秩序に對するの觀念極めて厚し。故に、凡百の施設、理想、すべて、平和的手段を以て遂行するに非ずんば不可也とす。

●彼が世の「所謂社會主義」を嫌ふといふ所以は、すべて、如上の見地より來るものたらずんばあらず。

●彼は獨逸學者也。殊に國法學の先輩として、故荒川邦藏、木下周一、及び博士山脇玄等と共に、斯學の皷吹者として効勞あり。

●彼の舊著「國法學」一册は、其の獨逸留學の御土産ともいふべきもの也。

●彼は社會主義其ものに對して、充分に智識あり、見解あるの學者也。只だ彼は、苟くも其の秩序、平和の理想に反するの、主義手段をば極力排斥せんとする者たらずんばあらず。

●彼の競馬賭博の如きも、彼の理想よりすれば、まさに大嫌のものたらざる可らず。恐らくは、猶ほ時宜の已む可らざるものありて、彼が未だ手を下さゞるものならん。

●彼の生平は、極めて平易にして和靜也。其の趣味を以てすれば田園的也。

●彼は、民富に對しても、勤勉着實、一錢一厘を積みて、以て漸く巨萬の資力を致すを以て理想とす。

●彼は、其の嗜好を以てするも、少し許りの笊碁を試むるの外、すべてのゲームを爲さず。賭博に類する一切の遊戯を好まず。

●彼は、著實と、勤勉との權化也。彼の人格趣味を實現するものは、産業組合ならずんばあらず。

●男平田が産業組合と共に終始するは、彼の天職たるを失はず。

●産業組合は故品川子、彼と計りて、之れを日本に輸入し、彼をして産業組合法を起草せしめたる也。産業組合法發布の後、彼に「産業組合法要義」の著述あり。

●されば品川子は産業組合の開祖にして、平田男は其の大或者たる也。

◉假に、品川子を以て、ルーテルとすれば、平田男は恰もメランヒトンたるべく、之を孔門に比すれば、彼は孟子たるべきが、彼は辭して以て之を闢けるのみならず。躬行實踐しつゝある也。

◉産業組合の盛んなるは獨逸也。而して伊太利が財政困難の厄境を脱したるも産業組合にあり。其の他、歐米列國、産業組合を以て、此風を陶冶し、國富を涵養するの基礎と爲さゞるはあらず。

◉男平田は、獨逸に留學して、財政の實情に注目し、國利民福の根本義を研究して、産業組合の一法に歸着せしめたり。

◉彼は、學術、趣味、共に産業組合に適合するの人也。故に彼の産業組合を説くや、學説と實驗と、而して、信仰と合體して、條理あり、熱誠ある主張となる。

◉産業組合の一點を以てするに、彼は萬古の人たるを失はず。他日産業組合が全國に普及し、依て以て、國基を培養するの曉には、彼の功德は莫大なるものあらん。

◉然れども、彼をして事功に急なるの人たらしめば、假令、才の美ありとも何んぞ言ふに足らん。唯だ彼や忠實一圖にして餘念ある無し、此に於て始めて彼を推稱するを得る也。

◉博士、横井時敬、「産業組合を弄ぶ勿れ」の論文を新聞に揭げて、組合の普及よりも改善を希望し、論旨危激に涉る。

◉平田男、其の文を讀みて曰く、『余や、産業組合に從事して、一生懸命也、更に尺寸の餘裕あること無し。弄ぶなどゝは、平田の企て及ぶ所にあらず』

◉彼は、更に人をして、博士に謂はしむ。曰く、「謹んで敎を請ふべし。寸暇の時日を指示されよ、必らず高堂に參趨すべし」と辭氣頗る懇切也。

◉博士、頗る恐縮し、直ちに男を訪ふ。心に男が、彼の論旨を以て、博士に糺すあらんことを期す。

◉男は、博士を歡待して、共に産業組合のことを懇談し、一見、十年の親交を爲す。夕刻より深夜に至りて別るゝに、一語の、彼の論文に涉る無し。

●開說、產業組合法は、數回、議會に提出されて、通過せず。蓋し世上未だ此法案の眞價と、必要とを解せざりし也。

●產業組合法發布前に、早稻田大學叢書として、「國民銀行論」の一書出づ。國民銀行は則ち產業組合也。

●此書は、歐洲の產業組合を、本邦に紹介する最初の譯書也。譯は、柏原文太郎の名を以てせられ、冠するに伯大隈の序文を以てす。

●伯大隈の慧眼なる。早く既に產業組合の効價を認識す。而して之を鼓吹するの論說亦頗る聽く可きものあり。

●時尙ほ早くして、此書大に、反響を世間に與ふるに至らざりしとはいへども、伯や、產業組合の歷史に於ける一大恩人たるを失はず。

●三十二年、十四議會のとき、機漸く熟し、子谷干城等、頗る力を盡して遂に產業組合法案の通過を見るに至る。

●子品川は、此日、疾危篤に迫る。男平田、時に內閣書記官長たり。通過の報を齎らして到る。

●博士靑山胤通、男を留めて曰く、子や此報を待つこと一刻千秋も啻ならず。若し吉報を聞かしめば、子や直ちに逝かん。請ふ暫らく待て。此夕、子、遂に法案通過を聞き、笑を含んで薨ず。

●忠誠にして高雅なる品川子は、今何處にある。吾輩は明治の時代を通じて、此種の人物を見ること稀也。

●幸に男平田あり。忠實清潔、善く子の生前の囑望を空しくせざる可き也。

●今春、二月二十日。男平田の、海軍少尉たる愛兒が明石艦上に大負傷を爲したるときは、恰も、彼が、法學博士會に於て、產業組合に關する學術的効勞によりて、博士に推選さるゝの議事ありし時也。

(其四。)

●男平田は、國粹保存主義の政事家たるは論莫し。其の能く、「バタ臭」「シャボン臭」などの語を用ふるを以ても知る可し。

●彼は曰ふ、「產業組合法は、歐洲の法を參考したるも

のなれども、全然シャポン臭を洗ひ去つて、米の臭と爲さゞる可らず』

●然れども、彼は、妄りに外國の事項を排斥するの人に非ず。留學より歸朝の後、住居は西洋的を可とし、疊を去つて、テーブルを用ひたるも、不便の事多くして、遂に日本流に立ち返れり。

●彼は頗る規律的の生活を爲す人也。非常に早起の人也。

●彼は早く寢ね夙に起き、早朝の訪客を空しく待たしむることあらず。

●彼が、すべて、來客をして空しく待たしめざるは、彼の美點也。若し差支あるときは、其の理由を言ふ。而して挨拶せしめて曰く、「暫らく待つことを得ば、面會すべし。御都合惡しくは、何々の日時に來られよ。それにて御差支あれば、別に何々の日時、孰れにても可也。御待すべし」

●彼が、訪客を遇するの法は、頗る歐洲紳士の禮法を識る者也。而して、集會の時には、每に、人よりも早く出席す。

●彼は應對は丁重也。而して、其の職務に關するの事に就ては、身分を忘れて、人に下る。

●彼は、國粹保存主義、尊農主義を標榜す。然れども彼は頑固の人に非ず。

(其五)

●男平田は、體格大ならず、寧ろ蒲柳の質といふべし。平靜以て心を養ひ、克己以て慾を制するに由つて、善く今日あるを致す。

●別莊には、畑を作り、自ら犁鋤を執りて、園藝に從事す。其の能く健康を維持するは、半ば園藝の力也。

●那須に開拓地を有し、別莊を設くと雖も、多く往かざるは、寒を恐るれば也。

●夏も亦た、海水に浴し、皮膚を養ふ。彼は盛暑の時と雖も、湯衣の下に薄毛織のシャツを着けざることあらず。

●天寒く、風冷やかなるの時は、彼は、其の創意になれる特製の人力車を驅るを常とす。

●其は、一人乘、箱人力車ともいふべく、箱馬車を人力車に折衷したる如きもの、以て寒風を禦ぐに適す。

●彼は、其の夫人と共に、行くに、夫人は普通の人車を用ひ、彼は則ち特製を用ふ。

●彼は酒を飲まず、煙草は好むと雖も、力めて之を節す。談論興に乘じて、往々、喫煙其の度を過ぐれば、忽ちにして咽喉を害す。

●彼は、此の如く、弱體にして、而して非常の勉强家也。其の公たると私たるとを問はず、其の關係ある事業は、精悍以て事に當る。

●冬は則ち多くのシャツ、毛皮を用ひ、以て寒氣に對抗す。微恙を推して會に赴く。

●內務大臣として立つの後、例によりて精勵するを以て、人、或は、弱體、劇務に堪へざるべきを憂ふ。

●然れども、彼や、文雅の樂あり。胸中一の閑日月を有す。しかく繁劇なりといふとも、未だ心身を損するに至らず。

●去秋、長期の旅行を爲すのとき、日々、產業組合の演說を爲す。九州は猶ほ殘暑あり。而して彼、錦囊、少からざる新作を盛り來る。

●竹田途上の口占にいふ。

傍水環林一逕斜。穿レ山疊レ石種ニ桑麻一。南豐十月天猶暖。行見女兒摘ニ菊花一。

潺湲水趁ニ脚跟一去。蕭寂雨從ニ頭角一來。山上有レ山行不レ盡。箯車三日涉ニ嵬嵬一。

有の儘を寫し出して、自然に秀削也。

●彼の其の極めて忙がしき旅中に、古を尋ぬ、先賢を弔ふを以て樂みとす。肥後に、菊池郡に分け入りて、菊池神社を拜し、備前には熊澤蕃山を弔ふ。

●彼、岡山に入りて、語りて曰く、「先年一の大工をして、岡山に來りて、大川の水門を修理せしめんとす。彼歸り來りて曰く、岡山非常の名工あり、某等手を下すの地ある無しと」。

●彼續きて曰く、「此事を調査するに及んで、其の所謂、異常の設計は、蕃山時代の設計に成るを知るといふ。二百年前すでに此の活工夫あり。今日の岡山、豈其の

遺風を發揮せざらんやと」

●彼が岡山に、蕃山を弔ふの詩に、

水浄滄浪好濯纓。何妨孤劍老荒城。春風細雨殘燈下。閲盡南雲歸雁聲。

●洋々の音、風雅の正宗を得る。」彼は政事家中の有數の詩人たるを失はざる也。

●長途の旅行中、彼は能く其の隨員を勞はり「彼は此旅行中の千兩役者也」などゝ言ひつゝ、酒を好む人なれば、時々、酒をも飮ましめ、以て彼に氣を措かずして、快く働かしむ。

其六。

●男平田、西涯と號す。書を嗜み詩を好み、風流溫藉、頗る掬すべきものあり。

●彼は徐ろに煙草を吹かしつゝ庭花を眺め、或は犁鋤を執りて、靜かに園に灌ぐ。

●彼は那須野に別莊を有すれども、往くこと極めて稀に、多くは葉山の別莊にゆく。

●葉山の別莊は、彼地に在りては、草分けの一人なり。地は逗子より葉山に入るの岬端、鳴鶴崎にありて、鳴鶴山莊といふ。

●鳴鶴山莊は、松樹の山に倚り、海中に斗出し、構造大ならざれども頗る雅趣を帶ぶ。

●男が自ら鳴鶴山莊に題するの詩に曰く、

鳴鶴當年去不歸。知尋坡老夢中飛。臨皐山下君寄語。櫻浦秋深鱸正肥。

又

氣暖湘南不知寒。茗煙爐火夢魂安。山人對机無塵事。瓶挿菜花子細看。

●櫻浦は鳴鶴山莊の前汀をいふ。瓶に菜花を挿んで子細に看るといふもの、彼の老實にして淸閑なるを見るに足る。

●其の後園には、舶來の草花も、多く植ゑたれども、彼の趣味は寧ろ日本の草花にあり。

◎彼の嫡子、松堂といふ書を善くす。其の淸平の氣質、之を乃父に受く瀟洒たる好靑年也。

●西涯男が政暇、鳴鶴山莊に往くのとき、松堂君も亦

往々隨つて往く。

●父は則ち芋を植ゑ花に灌ぐ。兒は則ち書樓、カンバス對して想を凝らす。家庭の淸福此の如きは、寧ろ欣羨するに餘あり。

●實に男が山莊は幽事多し。

櫻浦新春、

負山面海一村長。宛是武陵溪上鄕。不見桃花天艶色。報春却有野梅香。

●吾輩も亦た、櫻浦二月、氣暖かにして寒を知らず、梅花に對して、夜を徹して筆を驅りし當年を想起す。

●葉山の快觀は、『窓含西嶺千秋雪』にあり。男が山莊も亦た此絶景あり即事にいふ。

澄晴十月海天高。鵑影掠空沒遠臯。也識仙裝逐時改。今朝富岳著銀袍。

又た實景也。

●彼の詩は、其の人の如く、平々、淡々、一の浮語を着けずして、自ら淸興の津々たるものあり。

●人を驚かすの奇句無しと雖も、溫藉にして餘韻あり氣格高華にして、往々にして唐詩人の壘を摩するもの無くんばあらず。

●彼の湘南雜詩の一にいふ。

脈々輕風吹二落梅一。江南三月暖方回。園林一幅丹靑筆。先向二垂楊一着色來。

まさに是れ呉春。應擧が得意の景趣にあらずや。

●彼は時に筆を執りて戯畫を試むと雖も、眞に戯畫たるに留まる。

●彼が、畫趣を解するは、詩人の性情あれば也。彼は眞に風雅三昧の趣を解する者也。

（其七）

●男平田は極めて眞面目なる人也。故に其の詩も亦た訓言の如きもの、或は立志篇的のもの少しとせず。

●立信の詩に、

春花又秋葉、開落約無レ愆。雖從二雲雨一人間何背レ天。

の如きは、好箇の箴語たるを失はず。

●彼は、訓言に代ふるに、有韻の文辭を以てするもの

に非ずや。されば、其の題を設け、想を構ふるに、修身學の科條の如きもの少ならず。

◉彼は産業組合中央會の會頭として、人に揮毫を求めらるゝこと多し、彼は兼ねて、箴語的の詩を作りて、其の需めに應ず。

◉男の詩は、すべて其の理想を告白するもの也。勤儉の詩に、

陶猗有二何術一。勤儉是良謨。河海能成大、復奚擇二細流一。

の如き、滿腹經濟、發して此の二十字となるもの也。

◉男の詩を讀めば、其人を見るが如き也。眞率にして面目すべて流露す。其の殊に佳なるものに至つては、殆んど其の聲を聞くの感あらしむ。

◉彼の詩は眞詩也。其人を識る者は、其詩を愛す可く、未だ識らざる者は、其の詩に由て彼の面目を覘ひ知るを得可き也。

◉男の詩には、往々平仄の間違あり。其の必ずしも拘泥せざるところ則ち喜ぶ可し。

◉彼が共同の七絶の如きは、遺憾無く彼の理想を發揮せるもの。其の詩にいふ、

春風藹々一團中。斯道方成補化功。請看小蜂能釀密。經營亦自在二共同一。

彼が産業組合觀は、すべて此廿八字の中にある也。

◉去年男が鳴鶴山莊に避暑あるのとき、子曾禰荒助、片瀨より來訪一日の清遊を共にす。

◉時に男が上の詩を畫箋紙に大書せるものあり。子曾禰一見して善と稱す。曰く「是は拙者頂戴して罷歸るべし」

◉男曰く、「それは前約ある故に困る」、子曰く、「其の儀ならば、これは拙者が頂戴し、代りに錄平田君詩、西湖書として拙者代筆して遣はすべし」かくして遮二無二に强請し得て歸り去る。

◉男平田東京に歸りて、未だ裝を改めざるに、早や電話を以て、男を喚ぶ者あり、曰く、「曾禰也。鳴鶴山莊の長歌を作れるが故に、高評を請はん」

◉男曰く、「君の傑作ならば、齊戒沐浴して聞かん、請

ふ暫らく待て」、彼は入浴し畢り、浴衣を着けて電話口に立つ。

◉子爵爾則ち、自ら電話に掛りて、長歌を朗讀す。十行廿字の界紙約二枚に餘る。

◉男は聽きて之を筆記し、畢りて更に校正す、終始一時間餘に亘る。交換手も亦た呆然として聽くといふ。

◉子爵爾の長歌の中、「前の農商務の大臣、平田の翁」の句あり。未定稿とはいへども、例に依りて、頗る滑稽を極む。

◉吾輩は、男の詩が、空威張りせず、殊に政事臭を帶びざるを喜ぶ也。

◉而して、農事つねに心に關する彼は、田園の事、覺えず詩に入り來る。秋雨冷甚の詩に、

　昨夜雲晴星若餘。曉來風雨冷衝肌。入秋天候頗多變。晚稻恐愆成熟期。

◉蒼生を思ふ、意頗る親切。大臣の詩として、寧しろ其の忠誠の志を見る。

◉深耕の詩に、

　南畝耕春雨正濃。西郊耘夏日如烘。休言天候無常定。歲向犂頭深處豐。

結一句頗る振ふ。

◉某産業組合の爲に、

　戴星還踏月。粒々苦辛功。可知邦家富。在於五畝中。

一篇産業組合論也。

◉養蠶の詩に、

　五月農家蠶事忙。大姑掃箔小姑桑。憐他夙夜勞無限。未製嫁時一襲衣。

又

　家々蠶了正成絲。六月村閭玉屑滋。寄語世間羅綺客。三春辛苦不曾知。

二首溫藉、西涯集中の傑作を推すべきものたり。

◉かく、男平田は、眞面目なる詩を作る人也といへども、時としては詼謔を弄すること無きにあらず。

◉子爵爾、副統監として渡韓するに決するや、彼は、『イト(伊藤)さんの、里の土産に何貰ふた』の狂歌を贈

る。

●火災保險の武井守正は、彼が始めて官途に就きしときの長官也。武井の男爵を賜はるや、彼は、狂歌を賦し人をして代筆せしめて之を贈る。

●其の封筒には武井樣御親展と書し、差出人を記さず而して、其の歌に由て、作者が男平田なること、遂に暴露す。

●其歌にいふ。

雲の上にかけわたしたる緪梯子、
だんから先きにあがれ八公

だんは男と段とに通ず。八公は公爵に通ず。緪梯子は武井が火災保險親方たるが故也。

其(八)。

●男平田は雄辯を以て名あらずと雖も、亦た現代の辯論家たるを失はず。

●其の音吐爽涼、辯論條理あり。新内閣隨一の辯士たらずんばあらず。

●山縣系にありては、辯論家を推すべきは、清浦、平田、小松原の三人者なるべし。

●子清浦は、尤も巧みなれども、芝居氣あり。男平田の眞率なるとは趣を異にす。

●小松原は綿密を特長とす。其の態度の圓滿にして丁寧なるを以て人心を得る。

●大學教授テレイ還暦祝賀會に、彼が出席して、一場の祝辭を述ぶるや、法科教授、悦服して、輓近、尤も大臣らしき文部大臣と爲す。

●平田の演說は、用語の簡明なるは、其の漢學の修養より來る。而して、平實の裡に機鋒を藏し、場を見、人を見て、目立ざる中に、機轉を利かす。

●彼は蒲柳の質、其の音調は大ならず。其の演說は氣を以て勝る。

●去秋、彼や東海、近畿、山陽、九州にまで、產業組合弘布の巡回を爲すや、四十日の旅程。隨行員は次第に疲るゝに、弱體なる彼は益振ふ。

●其の演說も亦た次第に精采を加へ來りて、歸途、最後に靜岡に於ける演說の如きは掉尾の快辯と爲す。

●奈良縣は古の賤民頗る多し。所謂夙といふもの也。夙の中組合を組織し、成蹟の好良なる者あり。

●縣當局者、男平田に請ふて、稠座の中、彼の組合長に褒辭を與へんことを求む。

●男平田、徐ろに曰く、「君は、四周の村とは事情を異にする所に於て、村民をして、ヒガミ及び自暴の氣を起さしむること無く、能く全體を一致せしめて、勉強淳良の風を養成せり」。夙組合長頗る面目を施す。而して、滿座、亦た彼が措辭の巧妙なるに驚く。

●彼は、事體に重きを措きて辯論す。腹案先づ成るに非ざれば口を開かず。

（其九。）

●男平田と次官一木とは共に、學究的の人なるを以て、考究討論以て日を送るあらんことを說くの政客あり。

●二人者が學究的の趣味は、相合ふ處ならずんばあらず。然れども吾輩を以て見るに、彼や又た一箇本領の存する無くんばあらざるべし。

●新内閣の平田、大浦、小松原は、共に蠻勇政事家を以て目せらる。其人を見るときは、三人者共に、世人は恐らくは案外の感に打たるゝならん。

●男大浦は、時に頗る豪快、傍若無人の言を爲すことあり。彼曰く、『事に當るに、吾輩は、成敗を眼中に措かずして突進す』

●大浦の突進は他の怖るゝ所也。彼、元來、書を讀まず、故に其の行動は、短刀直入的也。

●平田は、一事を決する前、頗る熟慮を費す。決斷以前甚だ長し。これ彼が屢學究的の評を受くる所以ならずんばあらず。

●彼は、一たび決するの後は、猛然としてこれを斷行し、堅く執りて動かす。蠻勇政事家の本領は則ち此に在り。

●吾輩を以て見れば、彼が、態度の平靜にして、而して、實行の頑强なるは、彼が家庭の淸福、其の要因たらずんばあらず。

●彼は一身の方正にして淸平なるが爲に、其の家庭は自から圓滿にして、以て、愈其の操守を涵養するに足

る。
●彼は財に淡也。而して彼は、何不足無き家に生れて而して勤倹の風あり。彼の兄弟には多額納税者あり。
●彼の甥には二人の博士あり。一は醫科の伊東祐彦、福岡に敎授たり。其弟は伊東忠太、日本建築史を以て著聞す。
●彼は、法學博士たり。其二甥と併せて、一家三人の博士を出す。又た世間稀見の事たり。
●彼は淸平以て充分に、其の志を養ふ。故に心事つねに餘裕あり。彼の活動、彼の本領すべて淸平の二字に歸せずんばあらず。
●彼は年齢五十九。まさに働き盛り也。今後の發展必らず見るべきもの無くんばあらざるべし。
●而して吾輩が、彼に取るところは、必ずしも、其の「所謂手腕」なるものに非ずして、其の人格にある也。
●或は、彼甲東公以來の善政を布き得る見込を屬するは則ち、彼を以て甲東の才の美に對するに非ずして、其忠實にして、淸平なる人格の力に期待する所以ならずんばあらざる也。

（完結）

秋蕓、地に接して垂れ、時々雨來ろ。今夏六月、播種したるダリヤ、今朝滿開して、紅、殊に鮮か也。

聞多と亨

三宅雪嶺

井上侯爵が大病だといふので世間に騷ぐものがある、新聞にも少からざる部分を記事に割くものがある、男三郎とか出齒龜とかに幾段をも埋めるから、此かることは珍しとせぬか、實はその騷は何の爲にするのか、少し慮つて然るべきである、侯爵は元勳で國家に重きをなして居るもの、その病氣を輕々しく見るべきではないが、祭り騷ぎ同樣徒らに騷ぐといふ形跡あるのも面白くない、急行汽車が興津へ止まる位の事はよいけれど、大きな病院長副院長が共に出かけて他の病人を疎かにする樣なことは感心せぬ、總て今少し權衡を得たいものてある、侯爵が病氣て居て今日は輕快の方だ

とか、又は左樣でなくて不安心だとか言ひ、左も心配相に書き立てゝ居るのもあるが、實際其樣に心配して居るのか如何か、眞情で悲まずとも表面だけ悲むことは禮式上缺くべからざる事もあるが、餘り空々しくなる時には滑稽に陷る、侯爵は非凡の人物である、多く得がたきものである、さればといつて、實際その死を悲み爲に涙を流すものは幾割てあらうか、固より親戚を始め直接關係ある者はさうもあらう、が關係の稍深いものでも頗る疑はしいのがある。非凡の人物の此世より無くなるのは惜まれはしても、悲哀を催さしむるとは限らぬ、英雄は必ずしも人に泣かるゝものでない、泣かるゝことを望まぬものも稀とはせぬ、侯爵の四邊に集まるものは多く利害關係の厚いものである、中には所謂我利我利亡者なるものも見當る、それ等の徒が實際幾干の涙を有するであらうぞ、或る點からいへば侯爵に關係あると否とを以て直に人品の高下を區別し得る程である、井上に救つて貰つたといふ程のものは、如何なる事を成遂げたにしてもそれが一の弱點として認めらるべきである。とはいへ世の我利々々亡者を手玉の如く取扱ふこと侯爵ほどのものは多くはない、此點は到底尋常人の企て及ばぬところに相違ない、けれども侯爵は何の點を以て偉なりと推すべきか、その膽力に富み機智に優れて居ることは、他の元勳も侯爵の力を借りたる事は少くない、伊藤公の成功の一半は侯爵の力によるとまで言はれて居る、

が人事の變遷の速なることは之でも知られる、三十前後のものは侯爵の元勳であり、且つ政治界實業界に亘つて勢力のある事を知つて居るが、その如何なる非行を敢てしたかを問はんとはしない、彼等の目には只華族として元勳としての井上侯が映じて居る、しかし其れ以上更に五十以上にも及べば、侯爵が前に敢てしたる非行を忘れやうとて忘るゝことは出來ぬ、それに伴つて其の後に爲したる事にも絕えず許すべからざる事柄の附隨し居るに心付くのだ、維新に功あり才幹の比ひなき事彼が如きに拘らず、如何に久しく御親任を蒙むるの渥かつたか、否その後と雖も御覺えの他の元

動ほどでないと承はるのは何故であるか、實は掩ふべからざるものがその間に存して居るのである、常人であつたら恐くは見遁がされなんだであらう、若しその暗黒面を描寫したなら、普通の小説より遙に興味あるものが出來るかも知れぬ、

が、侯爵は一種の人物である、非行を敢てしながら一概に憎むべからざるものもある、此點は奇妙なやうであるが、實は博徒に於て能く見ることだ、博徒の類は浪花節等に盛に語られて居るが、親分なるものは惡事をすると共に子分に對して能く世話をする、人殺しもするが、人助けもする、場合によつていのち懸けにもなる、冷酷なのか熱情なのか俄に決し難い、變つた性格であるが一般が形式に束縛されて眞情の流露し得ないときに直情徑行を快とする傾向が世間に無いではない、僞善が多きに過ぐれば僞惡が却つてより多く喜ばるゝことがある、種類別けすれば井上侯爵は幾分此方面に屬して居るのであらう、いはゞ殿様の馨よりも親分の聞多たる方が多く性格を現はして居るらしい、井上の聞多といへば浪花節に相應した名だ、但し普通の親分よりは大きい、浪花節にはちと大き過ぎる、聞多は博徒の親分たる性格を政治界及び實業界に振ふに於いて特調が現はれて居るとすべきである、自身は華族たるを好んだか如何か分らぬが、華族にして昔の公卿又は大名の様なものとするなら甚だ相應はしくない、何とかの聞多としてこそ性格が遺憾なく發揮せられる斯くして見ると故星亨氏を追臆せずに居られない、

星氏も博徒の親分に類して、而もそれより大なるものであつた、惡事をした、隨分の惡事をした、が一概に憎むべからざるところもあつた、氏が何處まで發展し得たかは知れなくなつたけれど、前に爲し來つた所から推すと、才幹に於て井上侯に劣るとしても、器に於て一層大なるものがあつたかと察せられる、井上侯の力の及ぶ所深くして且つ廣いとしても、多數を統轄して運用するに餘り適して居らぬ、或る有力者を兜り付けて一時命に従はしむることは有る、が自ら采配を執つて群衆を動かし、多數の勢力を借りて時の權勢家

と雌雄を爭ふといふ如きは、爲し得るか如何か疑はしい、井上侯は手段を選ばずして目的を達するといふ點に於て星氏と似るが、金錢の慾は星氏より多い、人の世話をするけれど自らも利せんとして汲々勉める稱すべからざる手段を以て金をも貯へ、骨董品をも貯へる、噂程ではなくても貯へたところは少くない、星氏は比較的自ら利することが少かつた、平生の道樂を見ても金を貯へ骨董品を貯へるといふよりは書籍を集めるといふ方であつた、且つ侯爵は年老いても種々の女を近づけずに居れぬ、昵近の子分、特に實業關係のもの、苦心するところも其點に存する、或る大店の理事は侯爵の別莊に遣はす女に苦心すること一方ならぬ。その點には星氏は頗る淡白て、從つて家庭の淸肅を以て稱せられた、それは種々の事情から來たてあらうが、聞多と亨とを共に親分の大なるものと併稱し、惡事をするがより多く善事をするからとして許すとならば、亨の方が少し優つて居るとすべきてある。亨には缺點が多いけれど、聞多と較ぶれば此の如く言はねばならぬ、林伯爵は星を稱し、大事に當りて之を決行し得ること、大久保以後一人と言ふが、或る點に於て井上侯に類し而して、孰れかといへば之に優つたらうと思はれる、

けれども親分の格で大なるものは他にもある、西鄕隆盛の如き坂本龍馬の如きがそれてある、老西鄕も普通の繩墨を以て律し得られぬ方てある、十年の騷の如き、當時如何なる意志てあつたか今に於て猶ほ疑を免れぬ、つまり親分の大なるものとして大なる騷を爲したといふに解せられる、が親分としては尤も大なるものてあつて、他に能く比肩すべきものがない、破格の事をしても自ら奉ずることが極めて薄く、その衷心に立ち入れば有德の士てある、溫情玉の如き人てある、其子分の爲に破格のことをするを厭はぬが、自らの爲にする慾の薄いところからすれば、聞多は勿論、亨も遠く及ばぬ、スペクテートルのハットンがゲーテを評して曰ふには、是れマルチンルーサル以後第一の人だ、がその間の懸隔は如何に大なるぞよとあつた、移して此等三人の評語とするに足る、親分の性格として聞多

及亭は吉之助に次ぐべきであらう、而も懸隔は決して狹くはない、廣くして殆ど全く別種として差支ない、が自己の利慾からいへば、亭の方が聞多よりは老西郷に近い、聞多より一二等上である、然るに老西郷は彼の如く死し、亭は彼の如くに死んだのに、獨り井上侯爵は無事に榮え、病中のこと緣も由かりも無いものにまで報道されて居る、誠に仕合せの人とすべきである。唯後世の批判は如何であらうか。

那須野（一）

大町桂月

一　那須野の大觀

武藏野は、今は、名のみして、野にはあらず。村里なり。もしくは、雜木林にとりかこまれたる畑也。那須野は、古くは、戰國時代の開墾により、近くは、二十餘年前に於ける三島通庸の開墾によりて、その範圍は縮小したれども、なほ一方は、今も依然として野也。

那須野といふは、東は、八溝の連山にかこはれ、西は、那須、鹽原一帶の山にかこはれ、南は、佐久山附近より始まりて、北は、白河に至るまでの一面の平原也。なほ川にて說明せむに、西は、那須、鹽原一帶の山をもち出さゞるを得ざるが、東は那珂川の流域、北は、那珂川の支流なる黑川、南は、これも那珂川の支流なる箒川に限らる。南北は、十里にあまる。東西は六七里もあらむ。なほ、松尾川、蛇尾川、那珂川の上流、余笹川など、西より來り、那須野を橫斷して、みな那珂川に入る。されば、南よりすれば、箒川を渡りて那須野に入り、松尾川、蛇尾川、那珂川の上流、余笹川を過ぎ、黑川をわたると共に、那須野をはなれ、兼ねて、下野國をはなれて、磐城國に入る。白河は、程近し。以上六川の中にて、やゝ大なるは、箒川と那珂川の上流と也。

那須野の東南隅は、戰國時代までに開拓せられて、村里となれり。佐久山、大田原、黑羽等の市街、この間にあり、大田原は、那須野の都也。奧州街道の舊道

は、宇都宮より氏家、喜連川を經て、佐久山に來り、大田原、鍋掛、寺子、蘆野を經て、磐城の白坂に入り、終に白河に達す。喜連川と佐久山との間の二三里は山坂也。寺子より白河まで、五六里の間も、山坂也。豪邁にして果斷なる三島通庸、栃木縣に令たるに及びて、那須野に新道を開きぬ。啻に栃木縣のみならず、奥州街道の新道は、殆んどみな通庸のひらける所也。那須野の新道は、氏家にて、舊道と別れ、白河にて相合す。其間、舊道は、十五六里あり。新道は二三里をますも、平らか也。われ明治二十年の夏、この舊道を徒歩せしことあり。新道出來たるため、殊に汽車が那須野の方に通したる爲めに、到る處の驛々、いたく衰微したるさまなりき。大田原だけは、さすがに、那須郡役所のある處とて、今も依然として、那須野の都也。

奥州舊街道の通ずる處は、既に久しく野にあらず。新道の沿道も、處々に宿驛が出來たるが、三島村を中心として、開墾せられぬ。これ那須野の西南に偏したる處也。三島村とは、通庸の姓に取る。其別莊もあり、人家やゝ集まりて、村をなし、畑もひらけたり。大山公、松方侯、西鄕侯、乃木大將など、この間に別莊を有し、土地を有す。このあたりも、今は、全くの野にはあらず。然れども、那須野の一半は、今も依然として野也。

那須野には、停車場六つあり。野崎、西那須野、東那須野、黒磯、黒田原、豐原、これ也。那須溫泉に赴くものは、黒磯驛に下り、鹽原鹽原に赴くものは、西那須野驛に下るを順路とす。西那須野よりは、西して、五里にして鹽原に至るべく、東して、一里餘にして、那須野の都なる大田原に至るべく、六驛の中にて、乘客降客の最も多き處也。

那須溫泉と鹽原溫泉となかりせば、那須野は、今よりも一層寂しき處なるべし。那須溫泉への路も、鹽原溫泉への路も、東西に通じて、那須野の南北に相並ぶ。共に大道なれど、鹽原路の方が一層大道にして、且つ平坦也。鹽原路は、鹽原より來り、西鄕那須野を經て大田原に及び、那須溫泉路は、黒磯を經て鍋掛に及ぶ。

而して奥州新街道縱に之を貫く、那須野に於ける大道は、譬ふれば、片假名のキ字の如し。

余は、ことしの夏、鹽原に遊びぬ。また那須山に遊びぬ。それにつれて、那須野を横斷し、又縱斷して、原野として、一種の趣味あるを覺えぬ。多年、武藏野を歩きまはりて、今は野の趣なきを遺憾に思ひしが、那須野を見るに及びて、野らしき野を見たり。茲に那須野と題して、其勝景のあらましを記せむと欲する也。

二 櫻の名所

西那須野驛より鹽原の山麓なる關谷までは、凡そ三里、路だん／＼に高まる。歩きては、その高まるを覺えざる程なるが、人力車にのれば、行きはおそく、かへりは早し。以てその路の高まれるを知るべし。

鹽原よりの歸路、關谷を過ぐること二三十町の處にて、路の左の榛莽の中に、羊のむらかり歩くを見る。牧童の羊を牧するさまは、われよく西洋の畫に見たり。また西洋の詩に見たり。實際に、牧羊を見るは、これが始めて也。牧童やあると問へば、否、犬が羊の番する也。朝、小屋を出づるや、犬之を導く。晩方になれば、その犬、後より吠え立つ。群羊その聲に驚きて、こと／＼く小屋の方にかへりゆくなり。犬三匹にて、凡そ六十匹の羊を守ると。犬やいづくにあると見れども見えざりき。車夫なほ説明して曰く、この左手の先きの方にも、牧馬場ありと。

西那那須野驛前の大和屋に午食す。主人しきりに、鳥ケ森を説き、自から案内せむといふ。されど、この日は、どうしても東京に歸らねばならぬ用事ありしを以て、近き將來を約して別れぬ。

後十餘日、余は再び東京を發し、西那須野驛に下り、大和屋に投ず。主人見て、喜ぶこと甚し。つれは、島崎未亡人、長屋權太郎、角喜三郎、みな親戚也。酒もまじりたる午食を終へて後、若主人を導となし、鳥ケ森へとて出で立つ。島崎未亡人は、車にのりたり。若主人氣を利かして、その車に酒食をものせたり。鹽原路をゆくこと七八町、かねて相會せむことを約したる齊藤宏氏、鹽原より車を飛して來るに逢ふ。荷物を大

和屋におきて來るを待ちあはせて共にす。奥州新街道の右に通ずるを見て、つきあたりたる處に、門構あり。若主人曰く、これ三島子爵の別莊なりと。このあたりは、三島村にして、櫻樹多し。左折し、やがて右折してゆくこと數町、左に折れて鹽原路と別る。路の兩側に、櫻樹相連る。凡そ五六町にして小山の麓に達す。これ即ち烏ヶ森也。

木の鳥居をくゞりて上る。路は一曲して通ず。未亡人車を下る。車夫空車をひきて、先づ上る。一歩一景ひらく。且つ眺め、且つ上る。高さ人にも及ばぬ栗の樹、生意氣にも、早や實を帶びたり。女郎花はつぼみを生じ、薄も穗に出てむとず。鳥居より僅々二町ばかりにして、山の頂に達す。地を拔くこと、十數丈もあらむ。東京の飛鳥山の二倍したるぐらゐの高さ也。頂上は、南北にせまく、東西に長くして平らか也。中央に一つの人家あり。西端に稲荷神社あり。拜殿がお神樂堂を兼ねたる一種の構造なり。村民をり〳〵こゝに會して、宴をひらくとぞ。側に、有栖川宮殿御手植の松ありて、その由を記せる石碑も立てり。有栖川宮殿下、松の芽ばえを見て、これは何ぞと問ひ給ふ。松の芽なりと申せば、さらばとて、移しうゑ給ひしが、爾後二十餘年、今はかばかり生長しぬなど、若主人物語る。

僅々十數丈の岡なれども、那須野は、一目の下に在り。四方の眺望ひらけたり。新開の畑も見ゆ。茅屋も處々に見ゆ。杉林もあり。その餘りに規則正しく植ゑられたるは、少し慊らぬ心地せり。この小山を中心にして、路、四方に通じ、いづれもみな兩行の櫻ありて、長さ七八町に及ぶ。山上にも櫻樹少なからず。花時は、頗る美觀なりとぞ。こゝも、ゆく〳〵、櫻の名所として、世に著はるべし。聞く、當年、三島通庸那須野を開發するや、三島村に一大市街を起し、この烏ヶ森を公園となさむとし、多く櫻を植ゑたりと。甘棠ならぬ櫻樹、今に偉人の功蹟を語る。

見上ぐる高原山も、那須野山も、半ば以上は雲にかくれて、わづかに山腰をあらはす。東方には、一帶の連山横はる。その中にて、最も高きは、八溝山也。東

南には、遥に筑波山を見る。あゝ、この眺望に、櫻花の美觀加はらば、如何ばかり心ゆくべきぞや。斷じてこれ那須野中、唯一の勝地也。西那須野驛を距ること凡そ半里、鹽原路より僅々五六町のまはり路せば、この好風景に接するを得べきに、鹽原に遊ぶもの、多くは之を知らず。其名甚だ世にあらはれず。惜むべき也。

東端の芝生に踞して休息す。若主人、車中より酒を取出し、鑵詰を開らく。箸なし、枝を折りて箸に代へ、木の葉を皿に代ふ。未亡人へは、手製の麥酒なりとて、麥湯を入れたる瓶を出だす。夏蜜柑も、未亡人へとて出だす。用意周到也。酒を車夫にもわかつ。わづか三杯だけのみしに、顏忽ち眞赤になりて色のみならず、顏付までも、猿に似たり。語音、上方らしく聞ゆ。國はどこぞと問へば、阿波なりといふ。さらば、十郎兵衞か。いや〳〵四國猿なりと、冷かすに、赤き顏益可笑しくどつと笑ふも、酒の上の興也。

三　雲照寺

鳥ヶ森を南に下り、ゆくこと四五町、清き小川に沿うて右折す。路幅はひろきに、芝一面に生えて、足の踏心地よし。前後左右、みな木立にして、人のけはひも無し。まことに淸淨の地也。二基の石柱あるあたりにいたりて、はじめて、前方に寺あるを見る。石柱より數町にして達す。十善山雲照律寺といふ。今の世の名僧雲照律師の建てたる寺也。水たまりて。池を爲し、門前を流れて溝を爲す。石佛多し。いづれも兒戲的のつくり方なれど、善界善女の隨喜の涙の凝りたる者と思へば、笑はれもせず。那須野にかゝる寺あらむとは思ひもかけざりき。寺といふ寺は多けれども、かばかり人里はなれ、所謂世ばなれして、淸く靜かなるは、他に其比を見ず。戻りて、石柱の前を北折すること三四町、小高き處に、小堂あり。納骨塔といふ。雲照律師百年の後、骨をこゝに葬るなりとぞ。このあたり、處々に、石の觀音を置き、三十三所を三つあはせ、それに、この納骨塔を加へて、百觀音と稱す。一々まはりて見むかと、若主人云へど、さまではとて、直に大和

屋さして歸りぬ。

島崎未亡人は碁を好む。去年の秋までは、余に四目おきしが、二三個月、小田原に遊び、碁の先生に學びて、進境あり。三目にてうちてわれ敗れぬ。二目にてうちて、また敗れぬ。漸く先にて、くひとめしが、その後、またもどりて、二目に下り更に三目に下る。氣の勝ちたる人なれば、年は老いても元氣は益壯也。殘念なりとて、碁先生に通ひ、をり／＼余に戰を挑む。その爲めに徹夜せしことと、この頃、二囘に及びぬ。この旅は、到る處、碁に徹夜することかと思ひの外、唯一局を終りしだけにて、酒となり、同行五人、語り興じ、笑ひ興じて、夜のふくるを知らず。

この後、那須溫泉に三泊し、鹽原溫泉に二泊しけるが、唯にぎやかに、面白可笑しく過して、絕えて、碁を圍むの暇なかりき。

四　宿醉

那須溫泉に三泊しぬ。さて、東京にかへらむとて、程に上りしが、われ酒に中てられて、胸くるしく、たど、うと／＼眠を催す。物言ふも、ものうくなりて、唯默す。定めて、顏色も惡かるべし。未亡人、酒の故とは知らず。一所に來て、このやうに弱らせては、氣の毒也。一兩日、鹽原溫泉に浴し、恢復するを待ちて歸京せむといふ。好意かたじけ無し。われ唯々として從ひぬ。

西那須野驛にて汽車を下り、例の大和屋に小憩し、馬車を借切りて鹽原に向ふ。われこの二十日以前、二度目にて鹽原に遊びぬ。三度目には晚秋を期して紅葉を賞せむと思ひしが、今、思ひがけずも、三たび鹽原に遊ぶことゝなりたる也。

丸屋を始めとし、福渡戸の旅館は、どこも、客が一杯なりしかば、古町まで行きて、楓川樓に投ず。樓上欄によれば、箒川を隔てゝ、直に青山に對す。箒川も、このあたりは、流ひろくして淺く、水の音も小也。この夜、われ氣持よくなりて、また飮む。溫泉の故にあらず、宿醉が時と共にさめたる也。

五　山間の月

一夜すぐれば、余の氣持は、平日の如くになりぬ。朝食に酒を呼ぶ。余の元氣回復せるを見て、未亡人喜ぶこと甚し。餘りうれしいから、わたしも一つ飲まうよといふ。親戚の間柄とて、年久しく相往來しけるが、この未亡人を唯下戸とのみ思ひき。これはしたり、酒がのまるゝにやと問へば、平生は飲まず。飲まば、飲まるゝ也。三年前に飲みしことありといふ。さらばとて、酒くみかはす。

何人の手ずさびにや。隣室に、琴の音す。これは、聽くに足る。上手なりと、未亡人先づ言ひ出す。聽けば、成る程、絃々情を含み、水音に和して、優婉、人を動かす。酒益酣也。

凡そ二時間も飲みけむ、未亡人忽ち、げつと云ひて苦しみ始む。それ金盥とて、金盥を取りよす。大に吐く。清心丹をとりよせて飲ます。吐きつくして、別に苦むさまもなく、唯昏々として眠る。これて、ひと先づ安心と思ふ間もなく、齋藤氏も、げつと云ひ出す。清心丹、また役立つ、これも大に吐きて、昏々として眠る。嗚呼、今日は人の身の上、明日は我身の上とは、古の武士の述懷なるが、この旅にては、それとあべこべに、昨日は我身の上、今日は人の身の上、わが酒に中てられしを心配せし人、今日は自から酒に中てられぬ。その心根を思ひやれば、氣の毒千萬也。されど、眞の病にはあらず。看護を要するても無し。權太郎と喜三郎と余との三人は、むなしく室内にとぢこもるに堪へず。殊に權太郎、喜三郎の二人は、鹽原にありては、生客也。われ東道の主人とならむとて、あとは、主婦と女中とに賴みおきて宿を出でぬ。

源三窟にいたりしが、窟内へは入らず。窟前の茶店に小憩し、老婆がもち出す團子を食ひて去る。入幡宮にいたり、逆杉の下に設けたる脚掛臺に脚掛け、茶を飲みて去る。精進川を溯り、木葉石を拾うて歸路に就きぬ。

午食いたる、醉倒せる二人を呼び起す。うんと云ひて、箸は執りたるが食するに堪へずして、また眠る。われら三人は、また宿を出でぬ。

第一回の遊には、われ導者なくして、洗心瀑をさぐりぬ。ついこの頃の第二回の遊には、洗心、瀉霓二瀑を見むと欲して果さゞりき。このたびこそはとて、先づ洗心瀑を目ざし、人に路を問うて、箒川をわたる。水、腰を没す。この頃の雨に、水量大に增したる也。少し上りて、路を得て、山に上る。ゆけども〱瀑なし。もどり來りて、岐路を左にとれば、ゆきつまる。右にとれば、またゆつきまる。問はむに人なし。斷念して、須巻を經て鹽の湯に赴かむとて、門前まで來り、右折して川をわたらむとせしに、この二十日以前にわたりし橋、今や無し。增水の爲めに流されたりけむ。古町まで戻らむかと思ひしが、時すでにおそし。今日は鹽の湯だけにて滿足せむとて、鹽涌橋をわたり、鹽の湯にいたりて、玉屋に入る。主人見て、大に喜び、いざとて、樓上に延く。一浴して、座にかへれば、酒肴出づ。主人來りて酒をすゝむ。いとうれしくて、快飲して、辭し去る。夜は初更を過ぎたり。一痕の明月中天に懸る。四山蒼々として、清涼の氣、乾坤に溢る晝間きゝては、さまでもなき溪聲も、今宵は仙妃が秘曲を奏するかとばかり思はれぬ。

明くれば、未亡人は、けろりと回復して、平日の如く、相變はらず、元氣也。齋藤氏はまだ弱れるさま也。用事もあればとて、なほ四五日滯在せむといふ。喜三郎も二週間ばかり、ゆつくり湯治することゝ定めぬ。未亡人と權太郎と余との三人だけ、歸ることに決して、未亡人は車、われら二人は徒歩、相前後して鹽原を去り、例の西那須野の大和屋にて落合ひぬ。

六　昔の海底

鹽原に貝の化石出づるは、不思議なるやうなれども、那須野は、もと海底なりしとのことなれば、毫も怪むに足らず。那須野が海なりし時には、宇都宮平原も、武藏野も、無論海なりし也。筑波山は、海中の孤島なりし也。

先年、那須野の北端なる黒田原には、那須溫泉をひきて、溫泉場を設けたりしが、今は、すたれたりと聞く。那須野の西に、南北相對峙せる那須、高原の二山

は、那須野の壯觀也。この二山は啻に那須野の風景をかざるのみならず、いづれも靈泉を出して、那須野に景氣をつく。今、那須、鹽原の二温泉を比するに、後者には、都人多く、前者には、近縣の人多し。從って鹽原には、東京式の旅館あれども、那須には無し。行路を見るに、鹽原路には、人力車に乘るもの多し、馬車に乘るものも少なからず。されど、幾んど馬に乘るものを見ず。那須路には、人力車は少なし、馬車は多しされど、馬に乘るもの最も多し。馬に乘るとても、普通の乘り方にはあらず、和鞍の上に、膝をくむ也。女は兩足をなげ出して、紅裾、風に飜る。馬車や人力車やは、殺風景也。旅客の馬にのりてゆくは、何となく詩趣あり。われは、鹽原路よりも那須路の方を面白く思ふ也。もし山水を比すれば、鹽原には水あり、那須には無し。紅葉の美は、那須、到底、鹽原の比にあらざるべし。那須の温泉には、遠望あれども、鹽原には無し。那須には、裾野の壯觀あれども、鹽原には無し。鹽原には、平地あれども、那須には無し。茶臼山の噴火口の奇は、高原山には求むべからざる也。なほ大日本地誌によりて、兩温泉の質を比較せむに、鹽原は、福渡(ふくわた)戸、古湯本が炭酸泉、鹽釜が硫黄泉、新湯(あらゆ)が酸性泉、大網、鹽の湯、畑下戸、須巻、門前、古町が弱アルカリ性の鹽類泉也。那須は、湯本が酸性泉、高雄股が硫黄泉、辨天、大丸、旭、北、三斗小屋、板室が鹽類泉也。げにや、花は紅に、柳はみどり也。余は、妄りに二者を軒輊せざるべし。唯山水の遊を好む者は、二者其一を逸すべからず。

七　那須野の疏水工事

那須野をきはめつくさむには、少なくとも、旬日を要す。余はたゞ汽車にて縱横し、那須、鹽原二路によりて横斷し、鳥ヶ森附近を逍遥したるに過ぎず。殊に元岩崎に於ける疏水の入口を見ざるを遺憾とす。當年、三島通庸の開墾するや、水を得ざるべからずとて、那珂川の水をひきて、疏水工事を施せり。これ明治の世に於ける三大疏水工事の一なりと聞く。今日、鹽原路の兩側を始め、鳥ヶ森附近一帶の地に、幾線にも分れ、

清流淙々として白玉を轉ずるは、すべて、通庸の賜物也。

なほ日本名勝地誌によりて、廣義の那須野の中をさぐりて見むに、那須國造の碑は、世に有名にして、日本最古の碑と稱せらるゝものなるが、そは、最も早く開けし那須野の東南隅、大田原よりは東二里、黑羽よりは南一里、那珂川の右岸に接したる湯津上村にある也。其碑文に曰く、

永昌元年己丑四月、飛鳥淨御原大宮、那須國造追大壹那須直韋提、都督被ㇾ賜、歲次㆓庚子㆒年、正月二壬子四辰節物故、意斯麻呂等立ㇾ碑銘ㇾ偲云爾、仰惟殞公廣氏尊胤、國家棟梁、一世之中重被㆓貳照㆒、一命之期連見㆓再甦㆒、碎ㇾ骨現ㇾ髓、豈報㆓前恩㆒、是以曾子之家無ㇾ有㆓驕子㆒、仲尼之門無ㇾ有㆓罵者㆒、行ㇾ孝之子不ㇾ改㆓其語㆒、月老心澄、神照ㇾ乾大、引㆓童子㆒意、香助ㇾ坤作、從ㇾ之大合、言喩守ㇾ故、無ㇾ翼長飛、無ㇾ根更固、

これ文武天皇の世に建てしものにかゝる。當年の那須國造の頌德碑也。

扇の的にて有名なる那須與一郎宗隆は、その姓によりても、いづれ、那須野の人なることは、わかることなるが、その住みしは、那須城也。即ち、那須野の東南端、箒川の那珂川に會する處、箒川の南、那珂川の西、小川村が、その那須城のありたる處也。

那須野の殺生石と云へば、知らぬ人なきまでに有名なるが、今殺生石と稱する石は、那須の湯本より四五町奥なる谷の中にあり。臥牛の如き巨石也。久壽年間、宮中に宴ありけるが、夜ふけて、不思議や、宮殿ふるひ、燭火消えたり。御座の下にありける寵姬、玉藻前の身より光を放つ。天皇病ませ給ふ。これ玉藻前のなすわざなりと、卜者の奏するに、今は、これ迄と、妖姬忽ち狐に化して、那須野に逃る。三浦義明、千葉常胤、同廣常、命を奉じて之を殺す。化して石となる。人も、鳥獸も、之に觸るゝもの、みな死せり。寶治年間に至り、僧源翁、詔を奉じて、其怪をしづめたりと、傳說のまゝにしるす也。

八　那須野の産物

『武士の矢なみつくらふことの上に霰たばしる那須野の篠原』。むかしは、狩場ともなりし處とて、猛獸ほしいまゝに陸梁したりけむ。今は一部開墾せられたれど、畑ありて、田なし。畑にも、ろくなものは、出來す。何か那須野の名産は無きかと問へば、那須野には、あけび多し。その蔓にて、手提籠をつくらむとて、職人を雇ひ入れて、研究中なるが、今の處、品質、青森縣のものに比して、大に劣れり。されど、改良に改良を加ふれば、那須野の産物となるかも知れず。唯烏ヶ森の櫻は見事也。來春は、必ず來り觀られよ。その前に、必ず鹽原の紅葉を看に來られよ。その頃は、ひまなれば、お伴申さむといふ。多謝す、先月以來、たび／＼お世話になりぬ。産物の成功を祈る。さらばとて、汽車に乘れば、大和屋の若主人、矢板まで、お送り申さむとて、酒肴を持して、同じく乘る。辭すれども、きかず。相識れる橋本驛長、同縣のお方なりとて、われに谷誠之氏を紹介す。那須野の中にて、思ふも遠き同鄕の人に逢はむとは、思ひもかけず。栃木縣の縣視學なるが、この日、大田原へ視察に來り、演説終りて、饗應にあづかりけるが、余がこの汽車に乘ることを聞き知り、暫時なりとも、相語らはむとて、宴半にして辭して來り、これより宇都宮にかへらむとするなりといふ。車中、また、にぎやかになりぬ。若主人、酒と折詰とを出し、盃をまはす。未亡人へは、例の手製の麥酒が出されたり。一瓶の酒、早く盡く。谷氏、われにも用意ありとて、一瓶の麥酒を出す。それも那須野を過ぎはてぬ間に盡きぬ。

箒川の鐵橋を過ぎて、われは、終に那須野に別れぬ。烏ヶ森の上より、鹽原の山蔦坂より、那須の溫泉より、われは、幾度となく、那須野を見下しけるが、天には雲絶えず、那須山と高原山との頂上は、一度も望み見ることを得ざりき。

（終）

月下清談

樋口龍峽

（抱月、九龍、松逕諸氏の議論
臨風、天溪、光山三氏の著書）

○今宵は名月である。名月やくもりがちなる秋の空。曇りかちの頃なればこそ、特に中秋三五の夜が名月のを名をほしゐまゝにするのであらう。そのあやしかりし空も、くるゝ頃から雲うすれて、洗ひ出されたやうな滿月の影が一しほ清い。二三の心ゆく友と共に、大學の御殿の一角に座をしめて、文藝の清談に耽つた。その數節をこゝに。

○二千里外の友を思ひ、幾百年の昔を思ひ出づるもこの月ゆゑてある。古代簡朴な民族の詩的空想を、その神話に偲び、月にゆかりの史實の中に詩趣を樂しむにつけて、名月の趣はいよ／＼加はる。上野の森の梢をはなれて、幾たび行かひの浮雲をくゞりつぬけつ、中天に上り行く、姿の尊とさ、美しさ、今よひの風の特に人に心地のよいのも、その月から來る爲であらう。缺くる所なき圓滿の相、きら／＼と耀きながらも、目ばゆく人を射るでもなく、眼前の草木から芝生の上、さては其處の建物の窓を通して、病める人の雪白の褥の上に、慰める樣にやさしくおとづるゝその光。溫乎たる君子の姿とも見やうか、十方遍照の彌陀の慈心にも譬へやうか、數多き患者の病も、この月ゆゑに頓に輕快を覺えるだらう。我々ばかりではない、あの光を受けて珠と輝く露の葉がくれの蟲の聲さへ、さもその月に憧るゝやうてある。

○浮雲はまたく消えて、月は益冴える。ぢいつと見とれて居ると、どうやら自分がふら／＼と中空に拔け出る樣な氣がする。森をこえて、海を越えて、淸い風におくられて月の方へ登つて行く。下界は夢のやうにあはく、遠くなつて、いつか自分は月の世界へ近よつて居る。今まで圓く輝いて居た月は、ふとなくなつて、美しい、輝くばかりの仙女が見える。話に聞いた常蛾と云ふのか。それともリユーナの女神か。今夜（こよひ）はテッ

サリアの魔法者の煩ひもないので、いかにも喜色滿面のさまに見える。が、どこやら沈んでも居る。それよ、父のヒユペリオンは姿も見えず、母のテラも影が暗い。淋しいのも無理はない。

○友の呼ぶ夢で不意に我に還つた。かへつたがまた自分と云ふ意識が明かでない。何だか月が女神でもあるかに思はれる。喜びもし悲しみもする有情のもの、樣に考へられる。詩的空想の言葉で云へば月と我との情の一致したのだとも云へやう。併ながら、畢竟我が一念のはたらきに過ぎぬ。昔は悟空如來の傍らを辭して、得意の神通に大千世界を馳けまはつて、還り來つたが還り來れば依然として如來の掌裡のものであつた。是はたとへに過ぎぬが、空想の翼は如何に自由でも、詮ずる所自己意識内の現象に外ならぬ。比喩的には自他の融會とも、彼我の情の合體とも云はゞ云へ、遂にこれ科學的談理の語ではない。と云ふ考の聯想は、抱月君の文藝論に予を誘ふた。

○予が「醒めたる自然主義」中に謂ゆる主客の情の合體と云ふことを論じて、人や動物はいかにもあれ、相手が非常のものでは、合體しやうにも相手に情がない、譬へば一人心中片おもいであると云つたのに對して、抱月君は九月の早稻田文學中に、シテルンやリップスのアインフユールングの說を引いて辯じて居る。けれ共これは首肯し得られぬ。

○成る程、自然の生きたる圖を眼前に展開させやうと云ふ自然派文藝の立場からは、天地萬物を有情視して、非情のものにまで我が空想所生の情を擬して寫した方が、或は效果が多いかも知れぬ。しかも竟に擬情に過ぎぬ。是を同情と云ふのも科學的議論としては、やゝ傾かれる。此を客體の情に我が情が一致合體すると云ふに於ては猶更である。まして況んや、自然派は事象さながらの眞を貴ぶからは、擬情は遂に眞に非ざるをや。

○アインフユールングと云ふ語、及びその意義が、明瞭を缺き且つ學術的用語として不完全であると云ふことは、後の評家及心理學者の屢論じた所である。加之此

語を用ゐて居るリップスや、それを受けたグロースでさへ、非情の客體に對して、いかにも情ありともおもはるゝ場合でも、つまりは自分即ち主體が、しか感ずると云ふに過ぎぬ。決して客體の情と我が情とが一致すると云はぬ。

○もとより心理學上の同情と云ふ語と、美學の夫との間に相違のあるは爭はれぬ。それ故、我が客體に同情すると云ふならばまだ差支もない。けれ共「自然主義の價値」てふ同君の議論には、他的同情とこそ云ふたが、なほ且つ客體の情に我が情が一致するとやうに說いてある。それて予は一致しやうにも相手に情はないと云うたので、我が空想を客體に擬して、我己の空想の所生ならば、一致するの、せぬのと云ふことは問題にならぬ。

○同情と云ふことに就てもなほ議論がある。心理學者の中には同情（ミツトライド）と同　感（ミツトゲフエール）との間にさへ程度の上界線を引く人もある。されば予は「醒めたる自然主義」の中にも（十二頁）、一寸此區別さへ述べて置いた。客體に自分の空想所生の情を寄せて、さて自他の別を意識せぬまでの境には入つたとしても、客體が意識あるもの〻外は、精密は言はゞ、同感は出來ても同情までは到り得ぬ。

○ロマネスが動物心理の研究に用ゐて、ボールドキンが兒童心理の上に更にその意義を定めて以來、エジエクチーヴ（投觀的）と云ふ語が、近く心理學上の一用語となつたことは、抱月君の御承知の通りである。此語をかりて言はゞ、リップス等のアインフユールングは究竟投觀的同情に過ぎぬ。或は擬情とも云うて宜からう。もつと大まかに云へば單に同情でもまだ我慢が出來る。併ながら、客體の情に我が情が趣くとか、合體すると云ふのは、斷じて非科學的である。抱月君の議論が學者的、科學的である丈けにその用語が目に障つた。もし尋常一樣の議論ならば、予は只フ、ンの一冷語で看過して置く。

○こんな僅かな點でも、眞面目に考へれば異論は多い。然るに恰もその予が抱月君の自然主義論を評した

文字を「明星」誌上の九龍生君は、わかりきつたことをさまで大げさに論ずるものでない、と評したと友は語る。是は予も知つて居る。友は更に、九龍生が生田長江君であると、つけ加へた。實に意外である。九龍生が美學專攻の學士で、自然主義の主張者たる生田君その人であるとは、同君が萬朝報へ入社されると同時に、その紙上に急に生理的美學が、事新らしく廿世紀の美學として紹介せられた(時弊には適して居やうが)よりも、なほ意外である。

○抱月君に對する予の議論がわかりきつた事であるなら、予は却て自分の立言が目的を達し得たを喜ぶ。自分が、抱月君の堂々たる議論も、所詮は近代の文藝に對する一般の要求を、學理的にむつかしく述べたに過ぎぬ、と云ふことを明かにして、それを自分勝手に解釋して棄々しく騷ぎ立てる連中の誤れるを指摘せんが爲に、あの議論を書いた。わかりきつたことと即ち平凡であると共に、間違のない當然のことであらう。それならば、極端な自然主義論の、御祭り騷ぎの酒の醉がさめた譯であるから、本懷の至りである。と同時に、評者たる長江君こと(として)九龍生は、なほさら強く同じき評を抱月君に加へねばなるまい。借問す、九龍生の意果して然る乎。なほ、抱月君の同論文が、全然新なる主張の根抵を据えたものであるかの樣に、擔ぎまわる評家の少からぬを、九龍生はいかにか見る。

○前月の本誌て、松逕氏が予の所說を紹介せられたこと、而かもその公平に批評せられたことは、心から感謝する。但し「東亞の光」のは前半だけてあつた爲め、予が見て以て自然主義の眼目とする作家の事象に對する態度、即ち無思念境のことが御批評を得るに及ばなかつたのは殘念てある。九月の同じき誌上に結尾まで出て居るから、御好意序に御覽を願ふ。さすれば予の抱月君に對する「新小說」誌上の議論も、さらに明かにならうとおもふ。

○松逕氏は、予が抱月君の議論を包括的に過ぐと難じたるやに云はるゝが、決してそうてはない。念ふに予の文辭の至らぬ爲に、かゝる誤解を招いたのてもあら

うが、予の「新小説」て述べた所は、前陳の通り、抱月君の議論はその用語や、意識狀態の區別などの心理的解釋には異論もあるが、概ね公平て、自然主義の本意を悉して居る、その代り別に新奇な所もなく、唯學理的に解說した功があるのに過ぎぬを明かにしたのである。それに副へて、同君の昨年初めて自然主義を論じた時には、無念無想の解釋がまだ充分に悉されて居なかつた爲め、御風氏の積極的排理想論や、花袋氏の技巧無用論の如き、極端な議論がその中に胚胎されたと云ふことを附記したまでゞある。

○月はいよ〳〵澄む。蟲の音もさえる。深い森に世間を隔てゝ、遠くの電車の軋り丈けが幽かに聞える。眼前の風物は我等が獨占の天地である。ビーヤの微醺と共に話興は益はづむ。歌論が出る。漱石君の評が出る。つゐには新刊書物の一口評に及んだ。

○史學と史論の峻別せられて以來、古文書考證の推稱せられた後、歷史は實に乾燥無味のものが多くなつた。日本外史の史料には錯誤もあらう、誇張も多からう。しかし、その國民の熱血を沸き立たしめ、元氣を吹舞した功は多い。歷史の教科書は史實に於て正確であらう。しかも趣味なく、熱血に乏しいのは白玉の瑕瑾である。ランケは値が多い。しかしながら、ランプレヒトも棄て難い。ロマンチックの不自然な情熱も難はあらうが、平凡冗漫な寫實主義も恐れ入る。望むらくは、花も實も兩全のものが欲しい。是は誰々もの希望てあらう。

○臨風笹川君の「時代と人物」は、少くとも著者がかゝる希望を以て書いた史談である。世人往々臨風を以て風流才士とし、通人粹客と見做す。が、それは楯の一面に過ぎぬ。臨風は同時に悲歌慷慨の士てある。經世家たらん、否ずば退いて史に隱れんの氣慨も抱負も持つて居る。此著書は能くその人物を物語る。「時代と人物」は著書と人物との密接不離の關係を自白して居る。

○細評は略すが、著者が「時代と人物」を書いた主意は八分通りは成効して居る。遠慮なく云へば時代と人物との關係には、なほ深い洞察と敍述とをほしいと思ふ

點もある。又その斷案に獨斷に過ぐる點もないではない。併し是は備はるを求むる婆心に過ぎぬ。吾人は青年讀書子が、危險な有害な書物を去つて、此の如き書に就かんことを希ふ。

○文章は輕妙を誇るに足る。が、その漢文口調と擬古調とのつながりにやゝしつくり合はぬ點あるを遺憾とする。論を以てすれば、「關城傳」と「平政子」を推すべく文に於ては「化政姿繪の一ひら」及「詩的英雄」を取るべきかと思ふ。或は「關城傳」の最初の邊が、著者の得意とする處かとも思はれる。但し予の好みを云へば、文章としては往年の「元祿時世裝」の瀟洒を取る。

○天溪長谷川君が自然主義論の一方の雄將たるとは、何人も爭はぬ處であらう。そして、特に理實即眞（フエリスムス）の意味に於て、自然主義を主張したことも世間の知る所である。その著「自然主義」はいかに著者その主張を確信して居るか、またいかに忠實にその主義の爲に勉めたかを、明かに示して居る。予は不幸にして現實即眞の自然主義に全く贊するに譯には行かぬ。併しまた、現實を重んずる點に、理由をも認め長所のあるのをも承認するに吝なものではない。此事は既に幾たびか論じたこと故詳説はせぬ。特に長谷川君の現實主義は、必しもフエリスムスには陷らぬ、たゞ議論の行きがゝりでストレッスを多く置いた丈けである。

○思ふに上篇の十四章が、自然主義者として著者の得意とする所であらう。その上編中では、「幻滅時代の藝術」、「反基督教的精神」及び「論理的遊戲を排す」の三篇に、時弊を穿つた洞察あるを喜ぶ。しかも大體としては、終の三章を除いて、下篇の方を推奬するに躊躇せぬ。

○予が惠美光山氏を知つたのは、同氏が「時代思潮」に關係して居られた時である。もと桑門に緣ある人で、多年獨逸に留學して、哲學や政治經濟までも研究したと云ふことは、姉崎嘲風君から聞いて居た。隨て、その雜誌上に書いた物を見ても、多方面で趣味も廣く、また時代の思潮の推移と云ふことに、常に着眼して居ることにも氣がついて居た。近頃その著「筆劍五年」を

見るに及んで、いよく右の事實を確かめ得た。

○思潮論あり、宗教論あり、教育論もあれば、文藝論もある。其他漫錄中には種々の題目に渉つた短編を收めてある。政治經濟や一時の社會現象に關するものは、棄て去つたと自序にはあるが、それでもなほ斯く多方面に渉つて居る。のみならず、その議論は頗る根底が深い、雜誌や新聞の記者として、怱忙な事業にたづさはりながら、なほ此の如きを得たのは、往年の修養の結果であらう。著者の自序から見れば、思潮論が尤も得意とする處らしいが、予は宗教論及文藝論に於て、その素養のたゞならぬをゆかしく思ふ。

オペラは亡ぶべきか

島村抱月

西洋で目下最も全盛を極めてゐる藝術を何かと問へば、少なくとも其の一つはオペラであると答へ得る。オペラと言へばワグナーが作を中心とすること勿論である。我が邦では是れからやつとオルフオイスの擴演でもやらうといふのだから、オペラ問題は勿論將來の事である。西洋でも多數は尙ワグナー、オペラ全盛の前途を憂へるほど先走りはしてゐない。けれども一部には正に此の前途の憂が感ぜられて來たらしい。我等は此の事實から種々の暗示を得るのであるが、先づ其の事實を概說して見ると、最近アメリカ殊にニユー、ヨークを中心として此の悲觀說を立てた例が『ノース、アメリカン、レヴユー』誌にあらはれた。其の趣意を紹介する前に、想ひ出すのは嘗て讀んだイギリスの一評論家が五六年前十九世紀の音樂を論じた一文に早くも似た議論をしてゐた一事である。其の意によると

自分が若かつた頃は、ワグナーの音樂はまだ所謂「ツークンフツ、ムジーク」即ち「未來の音樂」と稱せられてゐたが、今やそれがもう「過去の音樂」とならんとしてゐる。ワグナー式の劇樂の將來の發展に關しては疑惑がある。藝術と實人生との出來る限りの接近といふ事が近代の傾向であるとすれば、樂劇は

必ずしも是れに好都合なものでない。實人生は歌ふよりも話すを自然とする。ワグナー自らがロマンチツク、オペラと呼んだのは誠に故ある事だ。ロマンチツクなものにして始めてオペラになり得る。リアルなものは其の反對である。而して近代の藝術はリアルな點を特色とする。但し是れはワグナー式のオペラに就いて言ふのてあつて、音樂が或る種の劇の中に還入つて來て、濃厚な情緒や抒情的な箇所と結合することは、將來盛になるべき傾向てあらう。殊に抒情詩人と音樂家との聯合は最も必要な事てありまた今のリヒヤード、ストラウスなどに見える傾向てもある。たゞオペラに就いては、何うも其の題材が本來歌謠的抒情的てあるものゝみ適當てあるやうに見える。ワグナーが作に就いて見ても、神話的材料がそれてなくば『マイスタージンガー』『タンホイザー』等の如く本來が歌謠的の材料てあるものに限られ、また現代てはフンパーデキンクの輕いオペラの如きが小供のお伽噺に世界を取るたぐひてある。而して此の如きオペラ的の題材には限りがある。斯やうな意味てワグナー式オペラが是れから先益々發展するか否かは疑問になる。

以上は原文の大意を取つて説明したのてあるがワグナー、オペラの前途に關する疑問の趣旨は明てある、而して更に他の一方、「ワグナー過去に入らんとす」といふ説を聞くと、最近の論者が擧げる所は三點に歸するらしい。即ち

先づあらゆるオペラ歌手を集めてあらゆるオペラを聽くに好都合なのは世界中ニユーヨークに如くは無いが、此のニユー、ヨーク、オペラの近年の景況を計量器として觀察すると、ワグナー、オペラに對しては著しく人氣が減退したやうてある。其の理由は三つと見られる。第一は幕内の樂屋に存する理由第二は幕外の聽衆に存する理由、第三はオペラ其のものに存する理由てある。樂屋の理由とは近年歌手の名人が無くなり、若い人々はワグナー、オペラが聲を無理に使はす結果聲を傷ふを嫌つて此の方面に

熱心にならない爲に淋れたのである。次に聽衆の理由とは、所謂ワグナー熱狂者が減じて景氣が落ちた事を指すのである。最後にワグナー、オペラ其の者の理由とは、是れが音樂の醇味を害して無理をしてあるため、音樂趣味が滿足して居なくなつたのである。

といふに歸する。而して此の說に對する反駁が同じ雜誌に出てゐるが、其趣意は第一、ニューヨクでワグナーオペラの景氣が衰へたといふ事實には誤謬があるとし、さて右に擧げた三點から辯じて、名歌手の無くなつたといふことは事實に相違するとし、名歌手が隨分あると認める。またワグナー、オペラ其のものゝ音樂的純粹を失ふといふ批難は屢々聞く所であるが、之れはワグナーが本來劇を本位とし之れを助けるために音樂を第二位に置いて用ひた結果であつて、ワグナーの不敏の致す所では無くむしろ普通の音樂を通り越した高い所に標的を立てたからである。たゞ所謂ワグナー熱狂者の減したのは事實である。されば此等の理由のみからして輕々しくワグナー音樂の前途を危むのは間違ひてある。ワグナー、オペラには長く亡びざる價値がある。といふやうな意味が辯駁文の要點である。

ワグナーが其のオペラで劇的成果を得んために音樂上に無理をして音樂としての醇味を害してゐるといふとは昔から一派の批難であるが、今また根本の理由として提起せられてゐるものは此の古い難題であるらしい。而して前二家の批難說に徵して見ても、是れが容易に消えない難點と認められる。主觀的抒情的、形式的な音樂の本性と客觀的、戲曲的、內容的な劇の本性と、矛盾したものゝ統一は、古來ワグナー一人之れを能くしたと稱せられてゐるが、一方にはそこがやがて破綻の糸目であると見える。何時か一度はワグナー、オペラも此の破綻が本となつて手疵を負ふべき運命になつてゐるのでは無いか。而して此所でワグナーが傷いたら、跡は瓦解であらうか。一度調和したと見えた劇と音樂とは、再び相違ざかつて了ふてあらうか。前に引いたイギリスの評論家に從へば、兩者は遂に相分

かれざるを得ない運命のやうにも見える。音樂は宜しく音樂として思ふ存分の事をなすべく、劇は劇として不羈獨立の發展を遂げる外ないやうてある。ワグナーの計畫は半世紀の夢てあつたに過ぎないて、今や其の夢は覺めかゝつたらしい。

然るにアメリカの論者が見る所は是れと異なつてゐる。ワグナー、オペラが過去のものになるとならざるとの賛否は何れとするも、兩者共に、所謂ワグナー熱狂者の亡び行く事實を認める點に於いては一致してゐる。而してワグナー、オペラが必ずしも過去のものにはならないと反駁する論者てすら、下のやうな觀察をしてゐる。

二十年前ワグナー、オペラの劇的方面に全分の滿足を得て、ワグナーをして至上權たらしめたものが、暫時たりとも新しい方角に頭を轉じかけて來たのは主としてイタリー新代のオペラの爲てある。即ちマスカグニー。レオンカヴローから延いてフチニーの活動に及ぶまて、所謂新代イタリーのオペラ作者等は、ワグナー、オペラの弊と見るべき緩漫、朦朧、粗暴を避けて、活潑、明細、流麗を合せ發揮するやうな新オペラを作り得るを聲言し、之れを事實に試みた。是れが少なからず世の視聽を動かして、近く『マダム、バタフライ』の如き大成功を遂げるに及び茲にオペラの新天地が展開し來たつたかのやうに人をして感ぜしむるに至つたのてある。

此れによれば、ワグナー、オペラは、よしたゞ過去の產物として保存せられるやうになるとしても、オペラ其のものは依然として劇と音樂との統一を保つて、益々新方面を開拓し行くかとも思はれる。

之れを要するにオペラの將來は解體か新局面の打開か。事實上の解決はひとり天才者の能くする所てあらうが、觀察者に取つても頗る興味ある問題てある。



財政整理案と世論

桂首相兼藏相が九月十日の夜、全國手形交換所聯合會の席上に於て後藤遞相をして代讀せしめたる財政整理案は事、頗る重大なるを以て世論亦なか／＼に喧びしく、贊否の聲處々に聞えたり。該整理案はもとより現內閣成立の當時世に發表したる五箇條の財政計畫と大體に於て異るなしと雖も、桂內閣が其財整計畫を一層周密に、一層鮮明に、又一層剴切に標榜したるものなるを以て、次に其辭令に亘れる小部分を略し趣意の存する大部分を掲載し、後之に對する世論の一班を紹介せんと欲す。桂首相兼藏相は日露戰爭に於て我國の經濟力の意外に鞏固なりしを說きたる後、いよ／＼本題に入り、

財政の實情を見るに從來の計畫に於ては確定歲入を以て確定歲出に應ずるに足らず之れを補ふに年々巨額の公債を以てせり然るに時運の變遷は公債の新規募集を困難ならしめ豫算執行上に支障を來すの結果を生せり由つて此際之れが病源を絕ち以て歲出入を整頓し財政の基礎を確立するは目下の最大急務なりと認む加之公債は急激に增加せるを以て未だ眞の放資者の手に歸せざるもの尠からず加ふるに財政に對し不安の念を生じたるを以て內外市場に於て著しく價格の下落を來たし之れが爲め公債所有者に多大の損害を被らしむるに至れり故に此際新公債の發行は務めて之れを避くるの必要あるのみならず鐵道買收公債發行の時期も迫まれるを以て公債償還資金を適度に增加し償還計畫を確立し以て公債の信用を高め價格の恢復を計るは之れ亦避くべからざるの急務也(中略)

以上の事實を基礎とし財政整理に關する大體の意見を定め就任以來專ら實際上の調査を始じめ漸く具體的成案を得て既に其の決定を見るに至れり今回の整理は國家の大計に鑑み財政の根本的基礎を確立し斷然公債の完全なる整理を期したるものなり是れ特に諸君の御注意を乞はんと欲する要點なり

財政整理案を立つるに當り特に深く感じたるは我國の財政の基礎が實際に於ては比較的鞏固にして往々世人の論ずるが如き危險なるものにあらざること是なり即ち從前の實績を見るに歲入の實收は常に豫算に超過し又豫定の經費は當該年度內に使用し終らずして後年度に繰越されたるもの尠からず每年實際の出納は豫定の公債を打ち切として差支を見ざるの實況なり之れを以て事業計畫執行の實況を精査して適宜の整理を加ふるときは事業の計畫自體に何等變更を加へずして歲出入

の均衡を得せしむるは敢て困難にあらざるを認めたり各種の事業は經濟的經營上又は國防若くは治安維持上國家當然の必要に屬するもの多く遽かに之れが改廢變更を許さずと雖も其の實施の歲月に至りては財政及び經濟上の必要に應じ適宜の整理を加ふるは寧ろ其の當を得たるものなり今回の整理は此の趣旨に基つき財政の整理、事業の完成二つながら其の目的を達するを期したり徒らに積極的政策に趨り消極的政策に陷りたるものにあらず

財政及び公債の整理に關する詳細は今日之れを述ぶるの時期にあらずと雖も既に決定したる方針の綱要を述べんに

一、確定歲出に對しては確定歲入を以て之れに應ぜしむることゝし從來公債を財源としたるものは之れを一般財源の支辨に移し新規公債の發行は電話製鐵所に要する事業費及び臨時軍事費所屬の經費にして當分之れを廢止することゝせり但し臺灣事業公債は年々の所要少く且特別引受の途定まるを以て例外とす

二、從前の計畫に於ては歲入の自然增加を見込みたれど今回の計畫に於ては確實を計り又餘裕を後年度に存するが爲自然增收を見積らざることゝせり

三、公債の信用を維持し漸時價格の恢復を計り以て公債所有者の利益を保護し間接には一般經濟界に良好なる影響を與ふる爲め公債償還高を毎年少くとも五千萬圓以上と定めたり

四、鐵道の經營は全然獨立自營のものとし一般會計との關係を斷絕し以て從來の如く一般の會計と鐵道の會計とが互に相ひ累を爲すの弊を爲すことを矯むることゝし之れに適當する特別會計法を設くることゝせり而して同特別會計に於いては財政計畫の主旨に由り當分公債の募集を見合はせ其の收益金及び預金部運用資金よりの借入金及び經費の節約より生ずべき金額等を以て其の建設改良費に充當せしむることゝせり

以上の方針實行の爲め既定經費の年度割に改訂を加へ之れを相當年度に繰延べ使用することゝし尙ほ此の以外に行政費に或程度の節減を加ふることと爲したり其の結果として從前の六年計畫を變更し新に四十二年より五十二年度迄の計畫を定めたり今回の繰延は使用年度割の改訂なる故に翌年限り使用を見合はせ翌年度に之れを繰越すとは全然其の性質を異にするものなり而して繰延は六年計畫に於て一旦繰延べ改訂せられたる繼續費に對し更らに之れを行ひたるものにして今回の整理に係る新繰延總金額約二億圓に達す繰延金額細目は各省主務者に於て調査の上決定し然る後相等の手續を踐むで確定のものとする筈なり而して巨額の經費繰延の結果民間の生產事業等に影響する所極めて少かるべしと信ずと雖も其の影響等に至りては尙ほ詳細なる調査を爲さしめ機宜の措置を誤らざることに注意すべし財政並びに公債整理の方針既に定まり此處に諸君に向つて其の大要を述ぶるを得たるは余の欣喜に堪えざる所なり

財政の基礎既に確定し公債整理方針此處に定まりたるを以て今後民間に於ては安んじて經濟的事業の經營に從事することを得べしと確信す余は實業家諸君が同心協力經濟界の整理恢復に盡力せられ速かに經濟界繁榮發達の日を實現せられんことを要望す幸に我國經濟界不振の一大原因を爲したる歐米經濟界の波瀾は全く收まり近來著しく好況に向ひたる傾あり內地に於ても生糸の賣行漸く活潑となり米作豐收の見込立ちたるを以て經濟界の中樞たる金融機關を掌握する諸君の盡力宜しきを得ば民間經濟界の整理恢復を見るは敢て難きにあらざるべしと信ず而して生產事業の改良發達は中外國民の幸福を增進し以て永久に

平和を維持するに貢獻すること少からざる所にして諸君と共に協力一致の遂行を希望して已まざる也

と說けり。現内閣の最も有力にして又殆んど唯一の黨與たる『國民』の門外漢氏は十二日の「東京だより」に於て

◎整理は決して消極にあらず。整理其物の外に、事業の完成をも心掛け居るとは、特に桂侯が重きを措きて宣言したる所に候

◎更らに一轉語を下して云へば、整理も畢竟積極的政策を施行せん爲めの準備と申す可く候。民間の起業家、請ふ此の方針を看取して、敢て少しも油斷すると無らしめよ。

と簡明なる辨護兼贊同の文字を掲げ、同日の『東京朝日』は「桂藏相の財政綱領」と題して、別に新奇なる發表にあらざるを以て五箇條の財政計畫當時の批評を以て之に代ふるを得べしといひ、只行政整理云々は稍耳目に新たなる綱目なるも「或程度の節約」云々とあれば左程大したものにはあらざるべく要するに「今回の整理には是非共第二期計畫なかるべからざる也」と論じ、其第二期計畫のなかるべからざる所以を說明して

現に桂卿の自認せるが如く、我歲入の自然的增加は決して侮るべからざるものあり。隨つて卿自身に於ても、其演說中に於て、今回の計畫に之を加算せざるは、餘裕を後年度に殘すが爲なりといへり。こは財政の成るべく鞏固ならんとを欲したるに因ると雖も、去りとて餘り餘裕を生ずる時は、財政は動もすれば濫費に流る。依て歲入の自然的增加が愈確かなるの見込付きたる曉には、今度は之れを以て稅法整理の資に宛ざるを得ざるなり。何となれば、稅法整理の結果、幾分か歲入の減縮を免れざると、稅法調査會の報告によりて明かなればなり。而して此の稅法整理は、是非とも桂卿の第二期計畫中に之なかるべからざるなり。鐵國公債の整理償還方法の如きも亦然り。吾人は今回の財政整理を以て成功とするに躊躇せざるが、之れと同時に更に第二期計畫の桂卿の胸中にあるべきを疑はず。

といひて文を結べり。而して此財政整理案に向て最も批難の筆を揮ひたるは日頃穩健の見を以て鳴れる『時事』紙にして、劈頭第一に

一昨夜全國手形交換所聯合會の席上に於て内閣の一員が大藏大臣に代りて朗讀したる財政演說の草案を讀むに單に從來世間に傳唱せらたる所を綜合したるに止まり更に耳目に新なるものあるを認むる能はず

といひ、次に其要點を掲げたる後、

現内閣が成立の當初より世間に標榜したる財政整理の計畫にして果して是等の諸點に止まるものならんには我輩は寧ろ其平凡なるに驚かざるを得ず

といひて再び批難し、諄々として公債整理案の姑息なるを說き、鐵道獨立會計法の如きも今日の如き狀態にては其目的を達し難かるべきをいひ、

以上の諸計畫を行ふ爲めに既定經費に繰延を行ひ從來の六年計畫を十一年計畫に延長するものとすれば是れぞ即ち財政の難關を後年に繰延ぶるに過ぎずして斯る姑息平凡の計畫を指して財政整理の要を得た

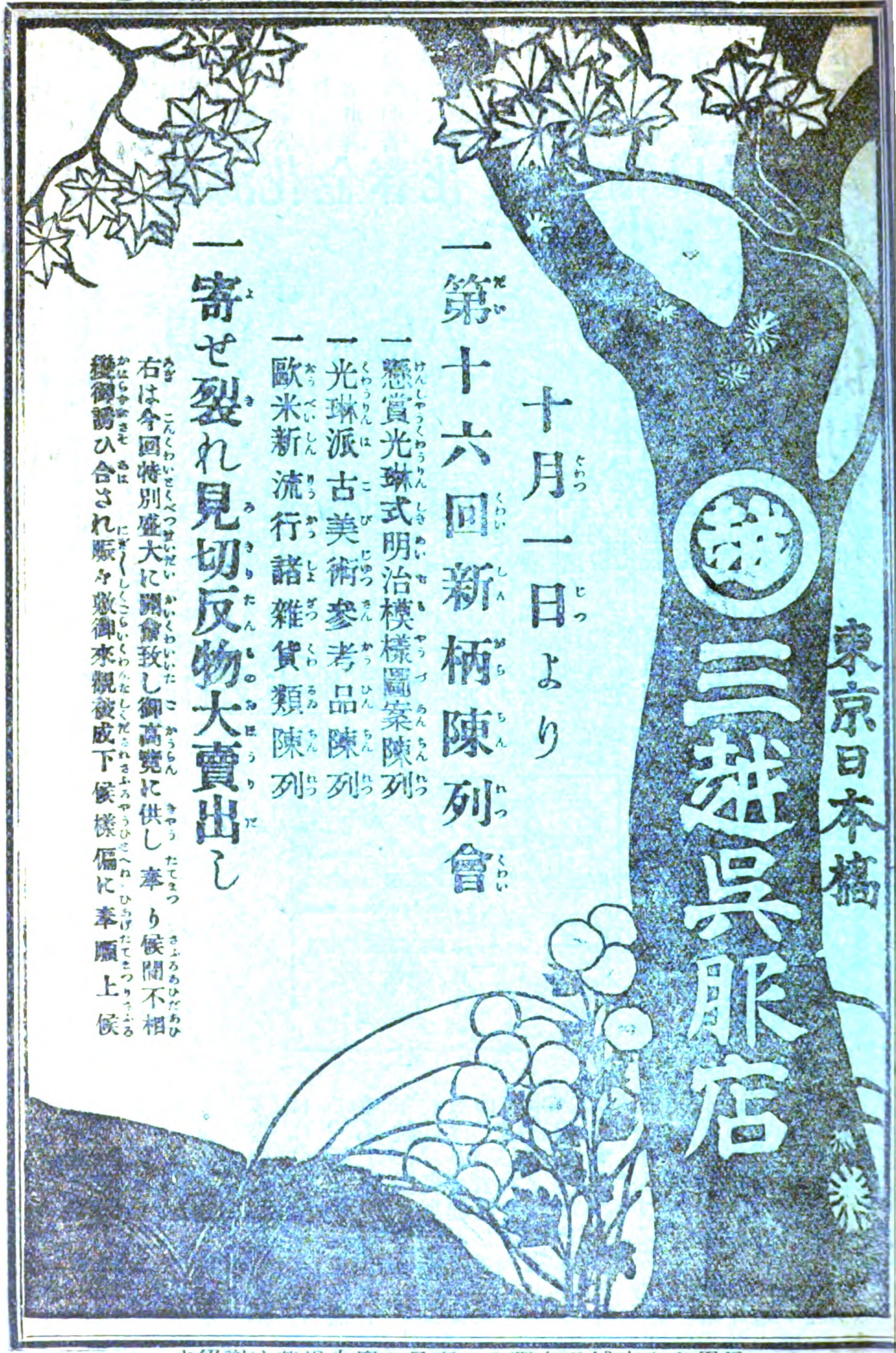
りとす可きや否や凡そ財政を整理して國の信用を增進せしめんとするには歲入の基礎たる租稅制度の改革を以て事の根本と爲さゞる可からず我國の如き戰時稅法に非常の紊亂を來したる國に於て殊に其必要あるは論を俟たず若しも當局者の云ふ如く「財政に對し不安の念を生じたる」の事實ありとすれば更に此の點に重きを置きて稅法を完備し何時にても國庫の必要に應じて租稅の收入を增加せしむるの餘地を稅法の上に存すると同時に平時に於ては人民に對する負擔を正しくし稅法の爲めに國の產業を苦しむるが如きとなきを期せざる可からず財政家が財政改革を行ふに當て第一に着眼す可き點なるに然るに當局者が殊更に此要點を逸して一言だも費す所なきは何如なる意嚮なりや抑々亦稅法整理を行はず唯、公債整理に主力を傾倒したるのみにて財政整理の業を果したりと信ずるや否や我輩問はんとする所なり

と論じたる後、餘沫尚「歐米經濟界の近況」云々にまでも及び

最後に當局者が歐米經濟の近來著しく好況に向ひたることを述べたるは思ふに銀行業者の喜ぶ所なる可しと雖も我輩は遽に彼等と喜を頒つ能はざるを遺憾とするものなり歐米の經濟界が著しく好況に向ひたるとは果して如何なる事實を指して之を云ふや我輩は寧ろ此點に就て反對の材料を有するのみならず現に我國と經濟上の關係密接なる米國の如き景氣恢復の先驅たる可しと豫想せられたる銀行紙幣發行法改正が案外姑息のものなりし一方に大統領改選期の切迫に伴ひ其の運動の盛なる爲め經濟社會の機運は未だ恢復の域に達せざるが如し銀行業者にして妄に當局者の說を信ぜんか所謂糠喜びの愚を重れんのみ我輩の戒むる所なり。

といひて徹頭徹尾批難の聲を放てり、然れども世論は概して該整理案に向て贊成を表したりと見て可なるべく、若し完きを求むれば際限なかるべきも、現下の如き形勢に於ては之れ以上の整理案を作ること殆んど不可能なるべきは吾人も亦密かに信ずる所也。要は只聲明に止らずして實行の如何に繫る。（樗陰生）





東京日本橋
三越呉服店
十月一日より
一第十六回新柄陳列會
一懸賞光琳式明治模樣圖案陳列
一光琳派古美術參考品陳列
一歐米新流行諸雜貨類陳列
一寄せ裂れ見切反物大賣出し
右は今回特別盛大に開會致し御高覽に供し奉り候間不相變御誘ひ合され賑々敷御來觀被成下候樣偏に奉願上候

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

破天荒の三大快著

五大洲探檢家中村直吉君
冒險世界主筆押川春浪君共著

▼好評嘖々 初版賣切 再版出來▲

五大洲探檢記 第一巻 亞細亞大陸横行

正價四拾五錢（郵税八錢）四六判美本

本書は大冒險家中村君が孤劍瓢然大膽にも無錢五大洲探檢を試みんとし先づ清韓内地を跋渉し進て暹羅に入りし大旅行記にして、奇談珍譚湧くが如く美人顯れ豪傑出で馬賊來り快僧去る而も之れ悉く事實也、加ふるに春浪氏の健筆を以て描寫す眞に破天荒の快著

江見水蔭君著
好評三版

冒險小說 大寶窟

正價五拾錢（郵税八錢）四六判美本

▼報知新聞評 近時著者の小說には極めて多くの化學的智識が含まれて居る。此篇も明治式の水滸傳とも云ふべき蠻勇のものであるが著者得意の海事思想を皷吹すると同時に構想極めて奇抜で至極面白い

江見水蔭君著 ◉地底探檢記（大好評再版）▼正價四十錢 郵税八錢

（東京）博文館發行（本町）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



葬の曲 外三篇

長田秀雄

葬の曲

沃度の如き雲の色灰に輝き
銹にたる伽藍の塔も家の棟も
山門に立つ神將も思深げに
悲愁の餘光をうけて暮れてゆく。

あはれ此時秋の風いと靜に
池に添ふ丸葉柳の樹の群に
いとこまやかに挽歌の調を奏し
水上に奇しき思の象きざむ……
道遠し。はらはらと落葉の足は
はらはらと音たてゝ打急ぎ行く……

鐘なれり、梵音太く青銅の
肉出でし不思議なる夢の響を
影深き秋の空氣に。灰色の
狹霧は香をうち薫す。青き夜となる。

びろうどの夜の棺衣に包まれて、
紫摩黄金の星の華匂へる内に、
腐れたる夏の死屍よこたはる、
葬の列はあはれあはれ何處へか行く。

アプサントの調

我いま思ふ、亞兒鮮みどりの酒に
醉ひしれて、物狂はしき歡樂の

夢に入るとき、脈々とわが内心を
つらぬきてひゞく悲しき追憶を。
妙なる響、あはれきけ、悲哀の琴
わが暗き心の奥になり出てゝ、
いと蕭やかに追憶の嘆息のごとく、
其胸の鼓動のごとく伴奏す……

病めるがごとく美くしくさはれ悲しく
なつかしく追憶の聲打笑める
見よみよやがて黒髮の縮の波を
わななかせ闇にかがやくすすりなき、

紅き唇しなやかに皓き歯みせて
動くとき、聲なき聲は遲々として
毒のいたみを心地よくもの惱ましき
我腦に注ぐ――樂の音うちくゆる……

あゝ亞兒鮮日に歎く緑の光、
歡樂の樂の狂態に、血の如き
濃き幻響に愛でふけり、わななく手して
我はまた玻璃の盃飲みほしぬ。

曇れる夜

尖塔に吐かれたる
巨鐘のくらき靈魂遙曳す……

運河には川蒸氣
空眼を瞠はりつつ死してたたよふ。
鐵橋に人の影なく、
汚水はた淀み流れず、家々の
狭霧に曇る牕の灯を、
愁はしく映したる。
物凄き狂氣の嗤笑――
轣轆と轟音ひびく……

あはれみよ、一輛の
紅き眼をきらめかす大自働車は、
けたたまし、橋うち渡り、
砂烟たかく蹴立て、走り行く、
轍の軋、夜の街は
一齊に齒ぎしりす。

はてもなき惡の空、
いと低く不安の色に曇りたる。

歡會

月中空に灰色の光を放つ、
色黄なる砂丘のもと、吹く風に
たえずわななく松の蔭、君と歩めば、
海の面に燐光走り、泡だてる
浪の響は眞白なる幸をはごくむ。

ふりかへり、相見て微笑ふ……快よく
曇れる聲に君は云ふ『否……よし給へ
……我をさは熟視め給ふな』……柔らかき
髪の香とせはしなき呼吸の内に
一脈の紅火と燻ゆる口づけの……

あはれ忽ち我心幸に嚙まれて
慘ましく狂ひ顫く。肉の
妖術をもてかの君は見る見る我を
忘却の化石となしぬ。その刹那
はてしも知らぬ永劫の姿をゆめむ……

ふと覺めぬ、——君が瞳に毒のごと、
勝ち誇りたる微笑の影は輝く。
荒らかに『放し給へ』と振りほどき、
と見れば無慘し、蒼ざめし心の上に、
明らかに幸の齒形の痕のこる。

月中空に灰色の光を放つ、

色黄なる砂丘のもと吹く風に
たえず頷く松の蔭、君と歩めば、
海の面に燐光走り、鬱憂の
浪の響は眞黑なる悔をはごくむ。

一ぜんめしや

吉野臥城

煮燒の香紛々と漂ひて、
空腹の底に沁む。
過ぎんとし立ち戻り、胴卷の
蟇口に手を觸れぬ。

有るは有る。音がする、音がする。
鱈腹は食へないが。――
繩暖簾つと分けて、土間に入り、
飯臺の前に立つ。

午後二時の客もなき飯臺の
殘肴に蠅群れて、
我入るやワアと飛び、飛び來り
目に鼻に羽を鳴す。

あつらひの燗酒と飯、肴、
並びたる二三品。
執る箸に蠅は飛び、飛び來り
皿の上に羽を鳴す。

肌脱ぎの、乳垂れし主婦は、
ごし〳〵と鍋を研ぎ、
寬褌の宿六は、盗むごと
我を見る藪睨み。

懷中を讀むらしく首傾げ、
安からぬ胸算用。――
えゝ癪だ、蟇口を鷲摑み、

飯臺にがちやり置く。
宿六は面羞くうしろ向き、
澁團扇うち鳴す。
我にやり笑ひ浮べて、酒呷る。
飯を食ふ舌を打つ。

と見やれば、蹌踉と犬は來て、
骨傷き背を立てぬ。
稍遠く離れ居て、きよと〳〵と
箸ごとに目を移す。

漂泊の人怖れ、——怖れても、
餓ゑたれば人に寄る。
耳を俛れ、舌を甞め尾を掉りて、
きよと〳〵と我を見る。

叱々と宿六は叱すれど、

痩犬は動かざり。
「用あるは君ならず」冷眼に
顧みず。——我に寄る。

暫時して狎るゝやう、膝を折る。
瞻むれば我を見る。
疲れたる眼、面曲、あり〳〵と
疲れたる目に映る。

おゝ友よ、汝も亦敗北者、
みじめなる敗北者。——
市を逐はれ、街逐はれ、路傍に
愛憐の情得たり。

殘肴を投ずれば口に受く、
飯やれば又ぺろり。
くん〳〵と鼻鳴し、嬉しげに
前足をうち偃す。

皿のまゝ與ふれば、宿六は
眉顰め、獨言つ。
ぺた〱と舐りしに、叱々と
手を振りぬ。――動かざり。
「忌々し、こん畜生。」憎さげに
肋骨蹴やぶれば、
苦しげの聲絞り、ひん〱と
尾を卷きて逃げ延ぶる。
我知らず衝と立ちて叫びたり、
「何をする、馬鹿野郎。」
宿六は憤として佇めば、
主婦は平に詫ぶ。
愛想よく燗をつけ、「これ飲みて
仲直り」――微笑めど、

「我飲むも彼の犬の苦は去らず」
舌鼓ちよと鳴す。
慾深きたなぞこに錢投げて、
細腰籠つと出てぬ。
口笛を吹き吹けば、痩犬は
蹌踉と這ひ來たり。
頭を撫てゝ物言へば、兩眼に
涙して物言はず。
言はねども凹みたる眼の中に、
情の火ぞ輝ける。

和歌 柴舟選

○ 淺野白汀

あからさまにものうちあくる力なきよわき心を悲しみてあり
かへりみてなべての人に欺かれやすきこゝろをみづから嘆く
わが足を捉へて前に行かしめぬものあるごときこゝちする日や
あゝやゝに冷たき暗の世界よりこゝろ隔りゆくうれしさよ
しづかなる空を仰ぎてしづかなる死をば願はむしづかなる夜や
一時は一時として一日は一日としてたへ難き胸
われ生るあゝ何故ぞそを知らず長じて知らずかくて死にゆく

○ 梶原重雄

夢なかばさめて事なく又ゆめに入るしづけさを月ほのにてる
あゝ人はわがおもほゆるほどの事なくて別れぬ心さびしや
おもかげはありし昔のそのまゝに衰へずてふにくき人かな
あはれわれ君が手とりし森の道かれし脉にも似て木々は立つ
秋風のしろき路みる哭きつゝも踏までかなはぬ世のみちに似る
あゝ木實(このみ)つめたき土にこぼれ落つ花なるものゝ末をみよ君
子のなげき母もまじりて打なげく夜はのしらつゆ野にしどろなる

○ 關本梁村

やすらけき眠の前にわがこゝろ不安をおぼえをのゝきて居ぬ
かなしみに似たるよろこび樂しさに似たる苦しみかくて世に生く
ものおもふ日の多ければやすらけき眠もあらず斯くおとろへぬ
疲たる心に切に安らけき眠を思ふ夜の靜けさよ

わが心君をおもはぬ寂しさになべてのものを恐れけるかな

わが眼今果しらぬ世に何物か求むるらしくかがやきてあり

事もなう涙ぞ落つるおところへをかこつがやうの蟲が音きけば

何ものも欲りせずといふよろこびにみちても心安からぬかな

幾萬里果しもしらぬ大空に心はかけるよろこびにみち

わがこころ何ともわかぬさまざまのものに倦んじぬたへがたきかな

わがわかき血潮や枯るとわが胸に手をあてて見ぬ脈搏はうつ

○　山村龍子

幾千年かはらぬ君と信じつゝなほ誓ひ得ぬ心に泣かる

倦み易き性もつ我ぞ願はくは君幾人をよそほひ給へ

來ませ君此頃庭は秋花の白きにみちぬともになげかむ

天地に君ならずしてこの長き我黒髮をたくし得べしや

黒々と塗られし器ともすれば白く光るに君を疑ふ

○　長田言人

しづみゆく心きづかひふとおもふ虚無の境にわれいまいく日

われといふものにくるしみもだえつゝくらやみをゆくおもひする日や

わが生をふとうたがひぬこのもだえきゆる期もなくなにゝくるしむ

死の影にをのゝくやからにぐる人生のちまたに何を欲りする

いづちゆく心かわかずいさゝかの木陰にいねてまたみちをゆく

○　角田野花

何事も思はず過ぎし日をおもひ君おもふ日の涙はてなし

よろこびに滿ちしあしたの天地のそのまなかより君は來れる

七人の心あつめて思ふ子の性や造りしうとまし

き神

わが瞳もの見るすべを知りし日のよろこびに見
し君なればかも

〇 千葉高軒

湯の山のせまき坂路の一角にとほき里見る秋晴
のそら

〇 井淵みたま

あゝ小さき心のま垣くちゆかば淋しき原とわが
世なるべし

〇 植木鵠水

朽ちし桶破れし廚に巾にゐてこほろぎ鳴くをな
つかしみゐぬ

燈臺と岩とのなかの草原に牛を放ちぬ白濱の里

〇 伏見未染

なりはひに倦じ果てたる人の子のいくむれ過ぎ
ぬ暮れてゆく街

今日もかくみ胸の園の片隅の朽木によりてひた
泣きに泣く

〇 あをじほ

きみと行くあきの潮みつ川づゝみ野菊しら萩爪
赤き蟹

君は森の木洩の日かやよわけれど木陰くらきに
花をさかしむ

〇 太田生麥

今日もまたきのふに似たる幼なごとくりかへし
つゝ身の老を知る

しこの國しこの草生ふ野をゆけばさびしき果て
になでしこの咲く

ともすれば遁るゝ捷き日輪を逐ひてはてなき道
を我れの行くかな

〇 鈴木春洋

暗き夜や大地の底に湧く水の音とし思ふ幽かな
る音

胸の機日毎何に織る五色の絲もて君がおもかげ
を織る

我れ獨り離れ小島の荒磯に泣きぬれておる寂し
さにゐぬ

〇 佐藤琢眞

今日の日の心たらへば明日の日は希望を捧げわ
れによりくる

うみのごとひろきみ胸にしろき帆の思ひの舟は
縱横に馳す

冷たきはわれの性なりやむなくば火の衣きて君にまみへむ

○　小川眞清

並立てる柳雫す葉がくれをほのかにかへる君が舟見ゆ

わが胸の海に帆あげて美しき君が舟こそ浮び來にけれ

かきつばた朝ふく風によき人の髪梳きおはす家をおもひぬ

ふるさとや棟のかげにわが姉とひぐらし聞きし昔をぞおもふ

秋は來ぬ君ます方のみ空にはいとかろらかに雲をうかべて

海なぎぬうれしう胸は君をえて君に足らひて靜なるごと



紫苑

端居して雨の紫苑に湯ざめかな　へき
馬の荷の摺りて折り行く紫苑哉　同
垣間見し梵妻若き紫苑かな　同
尼寺や紫苑がもとの砧盤　同
智月庵雨の紫苑に鎖ざけしり　同
どぶろくの鄙ぞたのしき紫苑哉　同
小蜻蛉の雨を寒がる紫苑かな　同
雜魚提げて戻る紫苑の裏戸かな　同
風呂煙雨の紫苑になびきけり　同
蟋蟀逃げて紫苑に鳴きにけり　銀波
廢校の窓に迫りて紫苑かな　朝影
留守な家の紫苑に蜻蛉とまり皃　不子
怨靈の紫苑に立つと夢うつら　吟朗

遊女名を紫苑と云ひて丈高き　尺水
杉苗の畑に高き紫苑かな　雨月
花紫苑月照る椽に人の在り　兎鶴子
花紫苑切ればぬかごのこぼれ飛　鯨舟
花紫苑月見るに窓低くからず　盛花
紫苑折れて日脚短くなりにけり　白蛾
蚯蚓鳴く石に影落つ紫苑かな　伍平
土もりて何遊ぶ児ぞ紫苑咲く　沐雨
村塾の裏門入れば紫苑かな　奇溪
花紫苑左玉川月夜かな　柿膓
添竹に余りし丈の紫苑かな　柳子
石臼にたまれる水や花紫苑　木人
樋の口の日蔭つめたき紫苑かな　風生
閼伽桶に挿しのこしある紫苑哉　秋灣
竹垣に紫苑晴れたる關所かな　鬯子
戀塚の芒に交る紫苑かな　楓子
朝顔の垣低うして紫苑かな　春波
厠より一尺高し花紫苑　一郎
淋しさの塀へがてに見る紫苑哉　桃村
經藏の窓に伸びたる紫苑かな　香村
花紫苑尼僧に宿を乞はれけり　北窓

賣り家の背戸の畑や花紫苑　喬木
地下りに田になる庭や花紫苑　汀葵子
落窪や紫苑の影のくねり様　葵雨城
干莚乾かて暮るゝ紫苑かな　同
紫苑活けて一軸ふるし山水畫　月峰
張板に押されし紫苑ゆがみけり　同
板塀に風うち當つる紫苑かな　木犀
大原女や紫苑の長きかつきけり　同
宵月や紫苑いよ〳〵影長き　不言
大瓶に菊あしらひて紫苑かな　同
花守の高きをほこる紫苑かな　梁村
赤土の土塀の高き紫苑かな　同
萩出でゝ妹が背高き紫苑かな　桂村
水足らでゆるき水車や花紫苑　同
鬼灯の殖え行の中の紫苑かな　小魚
行商の村定宿や花紫苑　同
襁褓干すじめ〳〵垣の紫苑かな　濛雨
亡妻の高き面影紫苑かな　同
數莖の芒一株の紫苑かな　麥村
塀の上に隣の紫苑伸びにけり　同
花紫苑高きに蜻蛉とまりけり　方外

花紫苑世に諂はぬあるじかな　同
盜人の倒して遁げし紫苑かな　烏城
花紫苑秋は月よき小庭かな　同
月出でゝ三尺黒き紫苑かな　洛燕居
馬追の杜に來鳴く紫苑かな　同
後園の一路紫苑に盡きにけり　哲郎
蟲寒しわが秋こゝに花紫苑　同
市に住んで庭なつかしむ紫苑哉　犀星
六尺の紫苑に秋の雲低し　同
須磨琴や垣根はあれて紫苑咲く　桃紅
五歩の庭紫苑に月を賞しけり　同
草高し草より紫苑高く咲く　總子
紫苑より低き遠山晴れにけり　同
布團干す草の戸紫苑日和かな　太郎
藁砧打つ此の家の紫苑かな　同
朝な切る佛の花の紫苑かな　鬼洗
雛屋出でし鷄朝鳴の紫苑かな　同
この里の歌よみが家の紫苑かな　同
紫苑咲くまで長かりし歸省かな　草童
鉋研ぐ紫苑がもとや宮大工　同
腰を下ろす石は冷たき紫苑かな　同

庇突く紫苑の丈や咲きにけり　花舟
打振りし棒過まちし紫苑かな　同
花賣の籠三本の紫苑かな　同
泉水の金魚は瘠せて紫苑かな　其蝸
人見えて鷄なく家の紫苑かな　同
空き家となりて淋しき紫苑かな　同
ひとつ家の竹垣破れて紫苑かな　一淚
馬繋ぐ杭に十歩や花紫苑　同
張板に夕日かたむく紫苑かな　同
毛見の馬がくさみして居る紫苑哉　火箭
うそ寒や紫苑に襟をかきあはす　同
明月に蕎麥打つ宿の紫苑かな　同
繩をなふ非人が宿や紫苑咲く　寒山老
百花園眞萩に隣る紫苑かな　同
六尺の屛風を凌ぐ紫苑かな　同
屋根葺の梯子ねせたる紫苑かな　三命
干衣の付け紐びく紫苑かな　同
芥を燒く煙根を這ふ紫苑かな　同
鎌鍛冶のこゝに住み古る紫苑哉　初聲
訪ひよれば勸農の碑に紫苑咲く　同
紫苑寺老ひたる尼と語りけり　同

下草を刈りて紫苑の高さかな　同
墓花を賣る戸に咲ける紫苑かな　玉雲
秋の蝶いくつ日に來る紫苑かな　同
たそがるゝ紫苑を去らぬ蝶淋し　同
忌み明けて紫苑に雨の降る日哉　同
芙蓉から蜘蛛の糸ひく紫苑かな　骨竜
坂下に廣き墓地ある紫苑かな　同
轉居して紫苑咲く庭萩散る戸　同
野良菊の貧に隣れる紫苑かな　同
花瓶に五尺の紫苑いけなやむ　木瓜
紫苑切つて佗しき秋となりに亀　同
里の秋紫苑もほしく思ひけり　同
風に折れ蟲に枯れたる紫苑かな　同
伸び〳〵し紫苑の丈も彼岸かな　青城
かけてある鼬の罠や紫苑垣　同
庵の窓紫苑月夜となりにけり　同
八重葎繁る宿の紫苑かな　同
猶ほ赤き鷄頭はいやし花紫苑　刀川
花紫苑尼僧に乞へば呉れにけり　同
雨止んで夕べ紫苑に風渡る　同
紫苑咲いて秋海棠を疎みけり　同

寮守の紫苑わびしと刈りにけり　同
歌よみの妻歌よめぬ紫苑かな　春陵
遷坐して野の宮淋し花紫苑　同
銀襖古流傳へて紫苑かな　同
草の戸や枯れし紫苑に夕月す　同
前栽の七草低し花紫苑　同
鷄の背丈けなりしが花紫苑　青葵郎
掛煙草よくかれて紫苑伸びに亀　同
糠臭き飯食ふ宿や花紫苑　同
花紫苑隣りへ行きし鷄を呼ぶ　同
花紫苑絢めくや月のくづれ垣　同
垣間見や君見えずして花紫苑　天睡郎
燒杭の垣に日照るや花紫苑　同
此堂の唐木造りや紫苑咲く　同
堤一里一軒茶屋や紫苑咲く　同
貰ひ猫馴れて日南や花紫苑　同
花紫苑畑ばかりの町はづれ　同
厩の根を引くや夕日の花紫苑　同

本號應募者は總て八十三名、句數正に千五百句、應募句數の多きは花舟、絹子、梁村の三氏の五十句づゝ、桂村氏の四十九句、麥村、鳥城二氏の四十九句づゝ、玉雲、小魚二氏の三十六句づゝきなりき。

募集課題

蛇入穴　十月十五日締切
冬田　十一月十五日締切

應募俳句は今後總て加賀國金澤市櫻畠九番丁十九番地大谷正信宛の事



東洋趣味を忘るな

松溪生

自然派の作物必ずしも肉慾一點張と限らるべくもなく、其主義も抱月氏等の説を廣義に取つて應用を試みるならば、必ずしも現實の一埒にのみ閉ぢ籠るべきではないとも思はれる餘地がある、自然主義とは唯單に作家が描寫の際に於ける心的體度に一警策を與へたものとのみも解釋し得られる、自然主義とは一派の評家の解するが如く左程に窮屈なものではなく、頗る寛容の處があるとも思はれる、が世間では大分騒しく難詰する、宙外氏の如きはそれ以外に別に理想派の小説を要求して居るし、先月の帝國文學には頭を下げたる文藝として幽絃郎の評論が見えて居る、が其處は兎角の穿鑿を省き誰か烏の雌雄を知らんや位に流して置かう、が主義は兎に角として今日の所謂自然派の作なるものには事實上取材の範圍が余り廣濶でなく、之をのみ見て立論されゝば自然或る一派の酷評をも當分甘受せなければならぬ樣である、予輩は大らかに自然派の作物以外に尚ほ他種類の作物を欲するといふよりも、今の自然派作家の取扱ひ居る題材以外の作物をも迎へると言ひたい、

要するに現下の我國の文學は慥に過去の積習より一脱化して居る、否な一脱化しかゝつて居るが、と言つて未だ我國獨自一己の文學、即ち一國の特色ある文學を顯彰するには至らない、英國には佛文學の模倣時代があり、獨逸にも佛文學の模倣時代があり、その又佛にも希臘羅馬の古典文學模倣時代がある、各國の文學史を辿れば之れ又已むべからざる事ではあるが現下の我日本にも、未だ十分に此時代を去ることが出來ぬて

はなろうか、

日本固有の文學を顯彰せんにはその固有の趣味性を發揮せなければならぬ、細かに言はゞ日本趣味、支那趣味印度趣味と各々分れるべきであらうが、概括して言へば、今の歐米趣味に對しては單に東洋趣味の一語を以てしても分ち得られやう、東洋趣味の粹は、卓落逸宕にある、瀟洒閑雅にある、歐米の趣味の偏に穠艶豐縟に存するとは大なる逕庭がある、その逕庭は最も詩を見るに於て明確である、世にはまだ多く知らぬ人もあろうが越僧良寛などは蓋しその尤なるものと思ふ、彼が繡毬兒の歌や千門乞食の詩や篇々能く之を證して居るが、夫等は彼の得意の漢詩以外俳句にも現れて居る「焚く程は風がもて來る落葉かな」とは何等の飄逸ぞや、之を支那に求めれば寒山がある、東坡や淵明や人その恬澹の味を推すとはいへども及ばざる事遠しである、が更に歐米に求めたら如何であらう、僅に一ウヲーヅウヲースあるのみと言ひたいが、東坡淵明を上の如く評するからには、辭の以て彼に與ふべきも

たか之は獨り該著者の讀みた事では

レーングが已に敢てした所でなる、彼は斯く言つて居る。

and it is remarkable how closely he approximatesin other respects to the oriental philosophy which findd its exprssion in the religions of Brahma and of Budsha

之は彼の詩よりしてその東洋的即ち婆羅門若くは佛敎の萬有神論的見地のあることを看取したものである、然り、ウヲーヅウヲースには慥に東洋的の思想がある、從つて趣味がある、それをばレーングの已に認めて居るのであるから、吾輩が彼の趣味を以て西洋に

は珍しくし敢て東洋的とすることは決して專斷ではなからう、

良寛寒山はさてもあれ、若しそれ李太白の命意の雄大なるに至つては如何であらう、彼の襄陽の歌の「鸕鷀杓鸚鵡杯、百年三萬六千日、一日須傾三百杯、遙看漢水鴨頭綠、恰似蒲萄和醱醅、此江若變作春酒、壘麴便築糟丘臺」とまだ長いが左樣引かぬも可からう、此樣なものは西詩に見るを得るであらうか、此かる一種の雅懷は予輩東洋人に多く賦與せられたる天分といつても差支なからう、我々は範を泰西の詩に取るも宜いが、飽く迄此種の趣味をも存したいと思ふ、以上は詩に就いて語つては來たが、小說中の人物に於ても、今の樣に唯多くセンチメンタルな女々しいもののみではなく、もつと上來說いた樣な風格を帶びた人物をも配したいと思ふ、それも實際ないならば據もないが如何に時流が歐化してもまだ皆がら左樣ではなかろーでないか、獨り漱石氏の作物が能く東洋趣味を示して居るが、彼の超脫主義の小說とは限らず更に自然派風の用意の作物中にも有つて欲しい、否その方がもつと活氣あり生命あるものが得られ樣と思ふ。予輩は歐米を學んで居るが歐米では又畫などの方で頻に東洋趣味を認めて來て居る、日本的の印度畫、即ち我佛畫めいた彩色畫が頻に珍重がられて雜誌などに紹介され、その線の具合や着色の如何などが稱へられて居る、此樣な鹽梅で、グヅ々々して居ると、あべこべに彼等によつて東洋趣味を鼓吹され、予輩は却つて後れ馳せに自覺の眼を開くこともあらう、曾ては金子筑水氏も丁寧に論じて居られたのであるが、予輩は此處に重ねて之を言ふのである。

福かも知れぬ。

小人世

靑桐の巨な幹に、那處からとも知れず蟬子が一匹ついと飛んで來て、チイ〳〵と鳴き出した。

ドウセ秋の終りの蟬だ。落命の程も近い、誰も哀れに思ひはせぬ。小兒さへも黐竿に捕へてくれもせない予が筆の柄を咬へて熟と見てゐる眼先、復たついと飛んで今度は樫の樹に留つた。矢張りチイ〳〵と鳴く。

何と考へたか？　白雲の方へ飛んで、這度は最う歸つて來ない。

嗚、蟬子は、生れて來ない方が幸福だつた。夫んなら、啼いて日を暮す事も莫つたらう！　雀に迄も逐はれて夏秋馬鹿を見る。

人間も、弱い者は生れない方が可い。また活きて居ないはうが可い。平凡な小人物の社會は觀るに堪へない。——天下は畢竟英雄兒の馳聘する廣場だ。大に英雄主義を絶叫して弱者の哀歌を殺到すべしだ。

今宵、隣家に赤ン坊が產れた聲がする。又た蟬子が一匹殖えたのかと心に思つた。

鬼面魔語

白雨生

○遊ぶ金は不思議に融通の出來るものぞと或遊び男がいひたり。

○茶屋酒の味もしらぬ奴はと知つた男がいひ、茶屋酒の味を知るやうになつてはと知らぬ男がいふ。面白の世や。

○「僕は女嫌ひでね」などと得意相にいふ人あり。こんな人は多分木の股から生れてミルクで育つた人なるべしと可笑し。

○「撲つてやつて怒る位なら大丈夫脈があるのよ」と某の歌舞の菩薩が仰せられし由。

○酒を捨つるの惜しきにあらず、酒より來る感興を捨つるの惜しきの也と某氏はいふ。

○秘密を守り得る人間は槪して腹黒きものぞ。

○自分はエライものとも又幸福者とも何とも思つてゐないが、どんなエライ幸福な人からソックリ其儘生命の取代つこをしやうと申込まれても首を縦に振る氣が起り相にも思はれず。人間の自己執着心の强きこと又驚くべし。

○正しき生活、眞面目なる生活に入らざるべからずと痛切に感じ居る人は寧ろ正しからざる生活、眞面目ならざる生活を送り居る部類に多し。されど只感じ居る丈けにて踏張役に立たぬ也。それを押し切つて實行する人は餘程のエラものならざるべからず。

○醜い男は惚れられたなと思ふ自惚からつひ深く迷ひ込んで了ひ、器量自慢の女は妾しに惚れさせずに置くものかとのきかぬ氣からヒヨッと戀に落ちて了ふものぞ。

○一人で居れば眞蒼になつてブル／＼震ふやうな雷嫌ひの人も大勢の人込の中に入れば案外平氣な顔して電のピカ／＼光るのなど面白相に眺め居るものぞ。人間は三途の川をも一人で渡りたくなきものと見えたり。

○「あの人は正直な人だが學問が出來ぬ」と「學問は出來ぬが正直な人だ」とは内容は同じ樣だが意味は大違ひ也。がは英語の but 也。物も言ひ樣で角が立つ。浮世を丸く渡らんとする人は常に but の置き所に深き注意を拂へ。

新刊紹介

▲秋聲集

徳田秋聲著　易風社發行

「犠牲」「二老婆」「發奮」「甥」「小紅蝶」「裏の家」「罪へ」「かくれ家」「あの女」「診察」「夫戀し」「背負揚」「獨り」「絶望」「倦怠」「小問題」「老音樂家」の十七篇を集めて秋聲集出づ。題目を見た丈けでも分る。以上の十七篇の中、不安、苦痛、不如意、悲痛の意味の籠らざる題目は僅かに「發奮」「甥」「背負揚」「あの女」等の數篇に過ぎぬ。然し此數篇とても讀んで見れば「發奮」を除くの外内容は矢張り皆不安と幽愁の籠つた作物である。要するに「秋聲集」一卷、悉く生活の消極的方面を描寫したるものといつてよい。而して其生活の消極的方面は氏の落付いた、底光りのする、シンミりした筆によつて遺憾なくあらはされて、哀れな果敢ない感じがしみ／＼と身に泌みる。殆んと「作物」にあらずして「人生」其物の如き感あらしめる。蓋し氏獨特の壇場であつて日本の文壇此點に於て氏に及ぶもの一人もない。明治文壇の誇りの一つとして永く後世に傳ふべき充分の價値がある。次號の評論欄に於て精評を試みる積りである。(定價九十五錢)

▲生ひ立ちの記

徳田秋江譯　東京國民書院發行

「戰爭と平和」「アンナ、カレニナ」と竝んでトルストイ翁の最も價値ある作也と稱せらるゝ「幼年、少年、青年時代」の初二篇即ち幼年時代と

「少年時代」とを譯したものである。一面に於ては翁の幼少なる時代の生活及び心理狀態を研究することが出來、一面に於ては翁が三十歳未滿の時に於て有せられた驚くべき藝術的力量を學ぶことが出來る。翁其人に興味を持て居る人は勿論の事、又一般文學を愛好する人の爲めにもよい讀物である。一體トルストイ翁の名は何人も口にするが、然し「戰爭と平和」とか「アンナ、カレニナ」とか此篇の如き名著は未だ一つも譯されてゐない。(「アンナ、カレニナ」は柴田某の譯があるが杜撰粗濫全く原作を臺なしにして了つた)。僅かに内田魯庵氏の「復活」の飜譯があるがまだ本になつて出ぬ。此飜譯もとより魯庵氏などの老練な筆には比べられないが、忠實に原文の面影を寫さんとした苦心の跡は歷々讀まれる。「言ひあらはし方」が今少し巧みならばと思はるゝ處も少くはないがゴマカしてイヽ加減にやつたものよりは遙かに心地よく讀まれる。吾人はかゝる名著の忠實なる飜譯の出でたるを喜ぶものである。(定價九十錢)

▲加藤清正　塚原澁柿園著　左久良書房發行

澁柿園叢書第九卷として「加藤清正」出づ。澁柿の歷史小説、餘りに史的事實を臚列するに急にして文藝的價値の比較的に少きを病とすべく、殊に其文の如き今少しコンヴエンショナリズムを脱却せてはとの憾みあるも、讀書界全體の風潮に抗して自己の立場を動かず、十年一日の如く自己の所信を貫くの勇氣は又偉なりとすべし。此篇加藤清正の朝鮮征伐を材料として結構せるもの、子弟の志氣を鼓舞するの力はあるべし。(定價八十五錢)

▲ヂョンブル及び其郷土　草野柴二譯　中西屋發行

有名なるマクス、オーレルの著の前半を譯したるもの也。譯文餘り巧みなりとはいふべからざるも、忠實ならんとするの苦心は見えたり。蓋し彼れの如きヒネクレたる文は譯しにくきのなるべし。添ふるに註釋を以てし、且つ原文を掲げて彼此對照するの便を與へたるは讀者の爲めに懇切也といふべし。此書の出でたる頃の英國の裏面を知るに都合よく又一般英語學生の參考となるべし。(定價六十錢)

▲報德一夕話　留岡幸助著　警醒社發行

二宮主義の宣傳者留岡幸助氏が廣島縣下に於てなしたる講演の筆記也。「報德の教義」「二宮翁の人生觀」「二宮翁と獨」附錄として「家庭の中心」「子供の育て方」の二篇を收めたり。德育に志ある人、又は家庭の讀みものとしてよし(定價不明)

▲科學的信仰　宮崎八百吉譯　警醒社發行

ニューマン、スミス氏がボストンの「ローエル學會」に於て講演したるものを飜譯したるもの也。一種の辯證學にして普通の讀者には高遠に過ぐべきも斯界の參考となるべき節多きを疑はず(定價七十錢)

▲凋落　德田秋聲著　隆文館發行

▲コブシ(後篇)　小杉天外著　春光閣發行

右二篇次號評論欄「今年の新聞小説」中に詳評せん

▲達摩と陽明　忽滑谷快天著　丙午出版社發行

迷蒙な佛門の王陽明とすれば王陽明は儒門の迷蒙であるとは本書の緒言に於ける冒頭の語であるが、蓋し之は至公至平の斷案であるであらう孔孟の學は專ら外に向つて實行上の工夫に專念して在るので、宋より明に至る内觀省察の工夫は前者とは餘程趣が變つて居る象山を經て陽明に及び遂に其學の大成を見たのだが大成は即ち愈よ禪に近いて來たのである、著者が陽明を以て儒の用語を以て禪を説明したものと斷ずるのは決して牽强の説ではない、此著は兩哲の顯揚したる兩敎を取つて詳にその契合點を闡明したる良著である(定價金七十五錢)

▲日本自助論

井口丑二著
内外出版協會

スマイル氏の自助論一篇英國民の偉大なる事業に本づいて成つたには相違ないが、それによつて逆に又新に英國民の偉大を助成したる事も少くない、我國にも此種の著述なかるべからずとして玆に本書をなすに至つたといふ事だが、今その目を見るに國民の自助、進取の氣象、堅實の風、立志勉勵、簡易儉素の五つのみで、その下に收められる人物も、訪問に散見する不用意の言行錄の様な、大言壯語をする所謂る東洋豪傑連が見えぬのは、今日の人心を率ゆるには適當なものと思ふ(定價金壹圓)

▲女子の本分

下田次郎著
金港堂發行

ラスキンの著レサムとリリースの中、そのリリーズの方を譯したものだが原著は言ふ迄もなく十九世紀に於ける英國女子の狀態に就いてその意見を親切に發表したものであるが、今繙いて見るに時も處も直に現下の我日本と見て差支なく感ぜられるものである、即ちラスキンの英國人に說く所のものは直に我々日本人に說くところのものかの觀がある、譯文又流暢自在些の難澁の字面がない(定價金參拾錢)

▲英語前置詞正用法研究書

吉田俊男著
有樂社發行

孰れの國語でも厄介なるものは前置詞の使用法である、此書は初に前置詞に對する諸家の定義を集め、次に各前置詞に於ける意味を和英相並置し、以下各詞に就いて一々例解を施し課題を設けて丁寧に說述したもの英語の門に入るもの丶之によつて少からぬ利益を得ること丶思ふ。

▲日本名勝寫生記行

小林鐘吉氏等編
中西屋發行

山本、岡野、跡見、中澤、小林氏等の手に成れるこの第二卷は、利根川附近より房總半島を繞り、更に函嶺より伊豆半島に及びたる晴好雨奇の景致の幾多を載せて出でたり。鉛筆、水彩、油畫の淡掃せるもの濃抹せるもの寫眞版となり、木版となり、二色版となり四色版となり交錯してあらはれ來るを以て觀者を頁を繰るとともに山陬水涯を經長亭短驛を過ぎて半日放浪の客となることを得べし。ことに、小林氏の文流麗にして巧緻、よくその景を寫し狀を描きてしかも氣品あり精彩あり、觀者をして畫中の人たらずんは止まざらしめむとす近來の好著として歡迎するもの、評者一人のみにはあらざるべし。定價三圓五十錢不廉なるが如くにしてしかも廉なり。

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

國語の精華は發揮されたり

山田孝雄著

日本文法論

上製脊皮美本
全一冊紙數約
壹千七百頁索
引付用紙上等
定價四圓五拾錢
小包料拾六錢

曩に、七年前本書の約八分の一を上卷となして、公刊するや、時代に超越して急進せるが爲めに、之を解する徒、稀なりといへども、しかも、具眼の士は、斯界必讀の書と認め、群書場裏一頭地をぬけりと賛す。近くは、國學院雜誌が、その問者に答へし日本文法研究の書目に於いて、純粹國文法書中、至高の者としてあげたり。かくの如きは、實に、自賛の言にあらず。今その完本を世に公にす。その價値、まさに、贅言を費さずして明なり。著者は、日本文法界の特飛軍として、民間より崛起せるもの、而、その最初の宣言は、即ち、この書也。その說くところ、あらゆる文法現象を記述し、而、之を論究して人心の根源に至りて、始めて止む。他の繁瑣なる空名を羅列せる類と、全く根底を異にす。この故に本書を一讀過すば、日本文法上すべの現象を知り得べく二讀過まさに、その現象の意義をさとりうべく、三讀四讀に至りて、は國民意識の狀態よりして、進みて人類思想ハ根源に溯るを得べし。而も、從來の文法書が、多く陷れる弊竇を知れる、著者は、勃牢の理論を以て、讀者を苦しましめんことを恐れ、各種の方面より實例を引來りて、以て、之を具體的に示せり、この故に、趣味津々としてつきざるものなり、本書は、實に、その引例をのみとりても、豐富なる一大集覽と稱すべきなり。而、その論斷の考據となるものに至りては、博引汎證、古今の書籍を引來れるとこ、ろまさに、百花亂發の概あり。古今の疑問、まさに、この書に解決を待ちたるものゝ如く、先人未發の眞理の闡明せられしもの少なからず。中比湮沒せし先人の功績煙乎として明にせられしもの、亦多し、實に空前絕後とは、これを云ふべきなり。今や學界の進運は、まさに、本書と、調を一にせんとしつゝあり。志あらむ人は、あに。時運に、後るるを、恥ぢざらむや。今、裝釘なるにあたり、敢て、世に薦す。

文學士三島毅監修
池田蘆洲輯著

故事熟語辭典

上製 全一冊
定價金壹圓五拾錢
小包料 拾貳錢

發兌 東京市日本橋區本石町三丁目 大阪市東區備後町四丁目 振替貯金口座番號 二八〇番 六九一番 寶文館

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

眞宗信徒生命保險株式會社

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし

●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり

●當會社の保險は凡べて嶄新にして且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり

●當會社は掛金割增（年增契約）の代りに保險金控除（或ル年限內ニ死亡セバ）の新法を用ゆ

●當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり

●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし

●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角（電話 七貳貳番）京都本店

東京市京橋區南槇町壹番地（電話本局五壹八番）東京支店

大阪市東區大川町御靈筋角（電話東壹貳五參番）大阪出張所

長崎市榎津町六十五番地（電話 七貳六番）長崎出張所

廣島市紙屋町（秦 忠兵衛方）（電話 六〇八番）廣島出張所



銀製洋盃及木盃

紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達を致し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一　金七圓五拾錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十五匁付
一　金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一　金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味五十匁付
一　金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味五十五匁付
一　金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ッ組ノ部

一　金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸臺三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一　金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸同　同目方正味五十五匁付
一　金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸同　同目方正味八十匁付
一　金參拾壹圓也　同徑四寸丸同　同目方正味百卅匁付
一　金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸同　同目方正味百八十匁付
一　金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸同　同目正味二百卅匁付

一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
文字彫刻　一字　金拾錢
大字彫刻　一字　金七拾錢

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品類
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商 玉寶堂

（電話下谷特九六五 一二四四）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

好評嘖々初版賣切再版出來

長篇小說 紅涙

生田葵山著

葵山先生の著書屢々發賣禁止の厄に遇ひて讀者に接するの機少し本書は其渇を醫せんとして發行したる者也。思想嶄新、行文流暢なる一大長篇!!

定價金八拾錢
郵稅金八錢
洋布製美裝釘

犯さぬ罪

中村春雨著

菊判總クロース美本
定價金八拾錢
郵稅金八錢

進呈　弊堂發行圖書目錄御入用の方は御申越次第進呈可仕候（但郵送費二錢御封入を要す）

東京日本橋區馬喰町三丁目　今古堂發行　（振替口座四九〇七番）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

秋期大附録

世間師　小栗風葉

舊知　德田秋聲

南小泉村　眞山青果

漂浪　岡本靈華

明日　正宗白鳥

世間師

小栗風葉

一

それは私が未だ二十前の時であつた。若氣の無分別から氣紛れに家を飛出して、旅から旅へと當も無く放浪した事がある。秋も最う深けて、木葉もメッキリ黄ばんだ十月の末、二日路の山越えをして、其所の國外れの海に臨んだ古い港町に入つた時には、私は少しばかりの旅費も悉皆拂き盡して了つた。町へ着くには着いても、今夜から最う宿を取るべき宿錢も無い。いや、午飯を食ふ事すら出來ないのだ。昨夜は夜通し歩いて、今朝町の入口で蒸芋を一錢が所求めて、其れで左に右く朝は凌いだ。握飯でも可い、午は米粒に有り付きたいのだが、蝦蟇口には最う二錢銅貨一枚しか殘つて居ない。

私は其所の海岸通りへ出た。海から細く入江になつて居て、傳馬や艀が犇々と舳を並べた。小揚人足が賑かな節を合せて、船から米俵のやうな物を河岸倉へ運込んで居る。晴れ切つて明るくはあるが、何所か影の薄いやうな秋の日に甲羅を干しながら、仄やり河岸縁に蹲んで居る勞働者もある。私と同じやうに大方午の糧に屈托して居るのだらう。船虫が石垣の間を出たり入つたりして居る。

河岸倉の庇の下に屋臺店が出て居る。竹輪に淺蜊貝と云つたやうな物を種にして、大坂風の切鮨を賣つて居る。一錢に四片と云ふのを、私は六片食つて、何の足しにと云ふ事は無しに二錢銅貨で五厘の剩

錢を取つた。那樣物の五片や六片で、今朝からの空腹の滿たされようも無いが、それでも幾らか元氣付いて、さて此先何うしたものかと考へた。

爰から故鄕へは二百里近くもある。歸るに旅費は無し、留まるには宿も無い。止むなくんば道々乞食をして歸るのだが、恁うなつても有繫に未だ私は、人の門に立つて三厘五厘の合力を仰ぐまでの決心は出來なかつた。見えか何か知らぬが矢張耻しい。其所で屋臺店の亭主から、此の町で最も忙しい商店の名を聞いて、其れへ行つて小僧でも下男でも可いから使つてくれと賴んだ。先方は無論斷つた。色々窮狀を談して執念く賴んで見たが、旅の者てはあり、仍更身元の引受人が無くてはと屹ばり斷られて、手代や小僧がジロ／＼訝しさうに見送る冷たい衆目の中を、私は赤い顏をして出た。最う一軒賴んで見たが、矢張同じ事であつた。一體此土地は昔からの船着場で、他國から流れ渡りの者が絕えず入り込む。私のやうな事を言つて救ひを乞ひに廻る者も希しくない所から、又例のぐらゐで土地の者は對手にしないのだ。

私は途方に晦れながら、それでもブラ／＼と當も無しに町を步いた。町外れの海に臨んだ突端しに、名高い八幡宮がある。其處の高い石段を登つて、有名な爰の眺望にも對して見た。切立つた崖の下から直ぐ海峽を隔てゝ、青々とした向うの國を望んだ眺めは有繫に惡くは無かつた。が、私はそれよりも、沖に碇泊した內國通ひの郵船が氣立しい汽笛を鳴らして、淡い煙を殘しながら段々遠ざかつて行くのを見遣つて、あゝ、自分も那船に乘つたら、明後日あたりは最う故鄕の土を踏んで居るのだと意ふと、氣氣

地無く涙が零れた。海から吹き揚げる風が肌寒い。

恁うなると、人間といふものは妙に引け身になるもので、何時までも一所に居ると、何だか人に怪まれさうで氣が咎める。で、私は見たくも無い寺や社や、名ある建物など那方這方見て廻つたが、其中に足は疲れる。それに大坂飴六片で漸と空腹を凌いで居るやうな譯で、今度何か食はうにも持合せは最う五厘しか無い。妄みに歩き廻つて腹ばかり虛かせるのも考へものだ。其所で、私は町の中部の可成賑かな通へ出て、何所か人にも怪まれずに、蹲むか腰掛けかする所をと探すと、丁度取引會所が目に付いた。盛んに米や雜穀の相場が立つて居る。廣い會所の中は揉合ふばかりの群衆で、相場の呼聲毎に場内は色めき立つ。中には又首でも縊りさうな顏をして、冷たい壁に悄り靠れて居る者もある。私も然ういふ人々と並んで、差當り今夜の寢る所を考へた。場内の熱狂した群衆は、私の姿など目にも留めない。

其中に閉場の時刻が來た。ガラン〳〵と云ふ振鈴の音を合圖に、然しも熱し切つて居た群衆もゾロゾロ引擧げる。と、小使らしい半纏着の男が二人、如露と箒とで片端から掃除を始める。私の傍の青い顏の男も何時の間にか居なくなつた。ガランとした廣い會所の窓ガラスには、赤い夕日がキラ〳〵輝いたが、其光の屆かぬ所は最う薄暗い。

私は又當も無く其所を出た。する中に、ポツ〳〵店明が點き出す。腹も段々空いて來る。例の如く當も無く彷徨歩いて居ると、何時の間にか町外れへ出た。家並も小さく疎になつて、何所の門も最う戶が閉つて居る。ドーと遠くから響いて來る音、始めは氣にも留めなかつたが、旋て海の音と分つた。私は

町を放れて、暗い道を獨り浦邊の方へ辿つて居るのであつた。此の困憊した體を海際まで持つて行つて、何うした機でフラ〳〵と死ぬ氣に成らないものでも無いと思ふと、急に怖しくなつて足が竦んだ。

私は暗い路傍に悄り佇んで、獨り涙含んで居たが、偶と人通りの途絶えた向うから車の轍が聞えて、提灯の火が見えた。這方へ近いて來るのを見ると、年の寄つた一人の車夫が空俥を挽いて居る。私は人懷しさに行成聲を懸けた。

先方は驚いて立留つた。

「些つと伺ひますが、爰は一體何と云ふ所でせう、彌張何町の內なんですか。」

「何有にお前さん、爰は最う何々村つて、村でさ。」

「何々村――何々村には何てせうか、何所か其の‥‥泊めて貰ふやうな所は無いでせうか。」私は偶と口に出たまゝを聞いて見る。

「泊めて貰ふつて――宿屋かね。」と車夫は提灯の火影に私の風體を見て「木賃なら衝い其所に有るが‥‥‥私が今曲つて來た那の横町をね、曲つて些つと行くと、山本屋てえのと三州屋てえのと二軒有るよ。遠方から行くと先のが山本屋で、山本屋の方が客種が好いつて話だから、其方へお行てなせい。」

言遺いて、其のまゝ車夫は行つて了ふ。私は凝と其れを見送つて居たが、其の提灯の影も見えなくなり、其の車の音も聞えなくなつて了ふと、急に耐らなく寂しくなつた。其所で駈出すやうにして、車夫に教はつた其横町へ入ると、成程山本屋と云ふ軒行燈が目に入つた。

貝殻を敷いた細い穢い横町で、貧民窟とでも云ひさうな家並だ。山本屋の門には火屋無しのカンテラを點して、三十五六の棒手振らしい男が、荷籠を下ろして、賣れ殘りの野菜物に水を與れて居た。私は泊り客かと思つたら、後で此家の亭主と知れた。

「泊めて貰ひたいんですが……」と私は門口から言つた。

すると、三十近くの痩繊の、目の鋭い無愛相な上さんが框際へ立つて來て、先づ私の姿をジロ〳〵眺めたものだ。而して懐手をしたまゝ、

お上り。」と一言言つて、頤を杓つた。

頤て杓つた所には、猿階子が掛つて居て、上り框から(と云ふよりは、寧ろ土間から)直ぐ二階へ上がるやうになつて居る。私は古草鞋や古下駄の踏返された土間に迷々じて居ると、上さんが又、

「お上り。」

「は。」と答へた機で、私は衝と下駄を脱捨てゝ猿階子に取着かうとすると、

「あゝ穿物は持つて上つてお下れ。其所へ脱いどいて、失へても家ぢや知らんからね。」

私は言はれるまゝに、土の附いた日和下駄を片手に下げながら、グラ〳〵する猿階子を縋るやうにして登つた。

二

二階は六疊敷ばかりの二間で、仕切を取拂つた眞中の柱に、油壷のブリキで出來た五分心のランプが

一つ、火屋の燻つたまゝ仄やり點つて居る。窓は閉めて、空氣の通ふ所と云つては階子の上り口のみであるから、ランプの油煙や、人の匂や、變に生暖い惡臭い蒸れた氣がムーッと來る。薄暗い二間には、襤褸布團に裹つて十人近くも寢て居るやうだ。未だ睡付かぬ者は、頭を擧げて新入の私を訝しさうに眺めた。私は勝手が分らぬので、仄やり上り口に突立つて居ると、直ぐ足元に寢て居た男に、

「おい〱、人の頭の上で泥下駄を垂下げてる奴があるかい。那方の壁際が空いてら。そら、駱駝の脊中見たいな那の向う、那所へ行きねえ。」と險突を食はされた。

駱駝の脊中と言つたのは壁際の寢床で、夫婦者と見えて、一枚の布團の中から薄禿の頭と櫛卷の頭とが出て居る。私は其横へ行つて、其所でも亦仄やり立つて居ると、櫛卷の頭がムク〱動いて、

「お前さん、布團なら那所の上り口に一二枚有つたよ。」と敎へてくれた。

て、私は又上り口へ行つて、其所に疊み寄せてあつた薄い莚のやうな襤褸布團を持つて來て、それでも敷と被と二枚延べて、而して帶も解かずに其のまゝ横になつた。枕は脂染みた木枕で、氣味も惡く頭も痛い。私は持合せの手拭を卷いて支つた。布團は垢で濕々して、何とも言へない臭がする。が、其れは未だ我慢も出來るとして、何うにも恁うにも我慢の出來ないのは、少し寢床の中が暖まると共に、蚤だか虱だか、ザワ〱ザワ〱と體中を刺し廻るのだ。私が體ばかり踠々させて居るのを見て、隣の櫛卷が又敎へてくれた。

「お前さん、這麼所で寢るのに着物を着て寢る者があるもんですか。褌一筋だつて、肌に着けてちや、

螫られて睡られやしない、素裸で無くつちや……」

成程、然う言はれて氣を付けて見ると、誰も誰も皆裸で布團に裸まつて、木枕の間から素肌が見えて居る。私も帶を解いて着物を脱いだ。餘程痒みも少なくて凌好い。其代り秋末の肌寒さに、手足を蝦のやうに縮めて寢た。

周圍は鼾や齒軋の音ばかりで、何れも晝の疲れに寢汚く睡込んで居る。町を放れた場末の夜は密りとして、車一つ通らぬ。唯海の鳴る音が宵に聞いたよりも物凄く聞える。私は體の休まると共に、萬感胸に迫つて、涙は意氣地無く頰を濕らした。然ういふ中にも、私の胸を突いたのは今夜の旅籠代である。私も實は前後の考へ無しに爰へ飛込んだものゝ、明朝になれば早速拂ひに困らねば成らぬ。此地へ着くまでに身邊の者は悉皆賣盡して、今は最う袷とシャツと兵兒帶と、眞の着のみ着のまゝ。而して懐に殘つて居るのは五厘銅貨唯一つだ。明朝になつて旅籠代が無いと聞いた時の、那の無愛相な上さんの顏が思遣られる。

其中に、階子の八角時計が九時を打つた。それから三十分も經つたと思ふ頃、外から誰やら歸つて來た氣勢で、

「最う商賣して來たの、今夜は早いぢや無いか。」と上さんの聲がする。

すると、何やら其れに答へながら、猿階子を元氣好く上つて來た男がある。私は寢床の中から見ると、薄暗くて顏は分らぬが、若い脊の高い男で、裾の短い着物を着て、白い兵兒帶を幅廣に緊めて居るのが

目に立つ。手に塗柄の附いた馬乘提燈を下げて、其提燈に何やら書いてあるらしいが、火を消して居るので分らなかつた。其男は暫く其所等を見廻して居たが、旋て舌打をして、

「阿母、俺の着て寢る布團が無えぜ。」と上り口から呶鳴つた。

「あゝ然う、忘れて居た、今夜は一人殖えたんだから。」と言ふ上さんの聲がして、間も無く布團を抱へて上つて來た。

男は其布團を受取つて、寢床と寢床と押並んだ間を無遠慮に押分けて、手敏く帶を解いて着物を脱いて、腹卷一つになつてスポリと自分の寢床に潛ぐり込んだ。而して寢床の中で腹卷の錢をチヤラ〳〵云はせて居たが、

「阿母、おい、爰へ置くよ。今夜のを。」と枕元へ銅貨の音をさせた。

私は悸とした。

すると、案の如く、上さんは其れを受取ると、今度は薄暗いランプの火影で透しながら、私の枕元へ來た。

「お前さんには未だ屋根代が貰つてなかつたね。屋根代が六錢。それから宿帳を記けてお下れな。」と肩先を搖る。

私は睡つた振もして居られぬので、餘義無く返事をして顏を擧げた。而して上さんの差出す宿帳と矢立とを取つて、先づ其れを記してから、

「其の……宿代だが、明朝ぢや可かんてせうか。」

「明朝――今夜持合せが無いのかね。」

「明朝になれば出來るんだが……」と私は當座逭れを言ふ。

「明日だつて、何うせ外へ出て出來すんだらうがね、それぢや私の方で困らあね。今夜何か品物でも預かつとかう。」

「品物と云つて――何しろ着のみ着のまゝて……」

「曩お前さんが持つて上つた日和下駄、那れは桐だね。鼻緒は皮か何だね。」

「皮てせう。」

「お見せ。」

寢床の裾の方の壁際に置いてあつたのを出して見せると、上さんは其鼻緒を觸つて見て、

「ぢや、是でも預かつとかう。お前さんが明朝出掛ける時には、何か家の穿物を貸して上げるから。」

上さんは其儘下駄を持つて階下へ降りて行つた。高が屋根代の六錢にしても、豈か穿懸けの日和下駄が用立たうとは思ひも懸けなかつたが、私は其れてホッと安心して直き睡付いた。

三

翌朝私が目を覺した時には、周圍の者は何れも最う出拂つて居たが、私の外に今一人、向うの部屋て襤褸布團に裹まつて居る者があつた。其れは昨夜遲く歸つた白い兵兒帶の男だ。私は昨日からの餒じ

さが、目を覺ますと共に堪へ難く感じて來て、起き上る力も無い。密と仰向きに寢たまゝ、何を考へる精も無く、唯目ばかりパックリ動かして居た。

見るとも無く見ると、昨夜想像したよりも一層邊は穢ない。天井も張らぬ露出しの屋根裏は眞黑に燻ぶつて、煤だか蟲蔓だか、今にも落ちさうになつて垂下つて居る。四方の壁は古新聞で貼つて、其れが煤けて茶色になつた。日光の射すのは往來に向いた格子附の南窓だけで、外の窓は何れも雨戸が釘着けにしてある。疊は甚麽か知らぬが、部屋一面に摩切れた縁無しの薄縁を敷いて、所々布片で、破目が綴くつてある。而して襤褸夜具と木枕とが上り口の片隅に積重ねてあつて、晝間見ると到底も體に觸れられたものでは無い。私は急に自分の着て居る布團の穢さが氣になつて、努めて起き出た。

私も其所に爲てある通り、自分の布團と木枕とを上り口の横に積重ねて、それから顏でも洗はうと思つて、手拭を持つて階子の口へ行くと、階下から暖い旨さうな味噌汁の匂がプンと鼻へ來た。私は其匂を嗅ぐと、一層空腹が耐らなくなつて、牽々と目が眩るやうに覺えた。外はクワッと目映しいほど好い天氣だが、日陰になつた町の向うの庇には、霜が薄りと白く置いて、身が引緊るやうな秋の朝だ。

私が階子の踏子に一足降懸けた時、丁度下から焚落しの入つた十能を持つて女が上つて來た。二十七八の色の青い小作りの中年増で、髮を櫛卷にして居る。昨夜私の隣に寐て居た夫婦者の女房だ。私の顏を見ると、

「お早う。」と愛相好く挨拶しながら、上り口で些つと隣の部屋の寢床を覗いて、「未だ寢てるよ。錢占屋

の兄さん、最う九時だよ。」

「九時でも十時でも、俺あ時間に借りは無え。」と寢床の中で言つた。

すると、女は首を竦めて、ペロリと舌を出して私の顏を見た。何の意味か私には分らなかつた。擦違ふと、干鰯のやうな匂のする女だ。

階下へ降りて見ると、門を開放つた往來から見通しの其一間で、岩疊に出來た大きな餉臺のやうな物を圍んで、三四人飯を食つて居た。各々に小さな飯鉢を控へて、味噌汁は一杯づゝ上さんに盛つて貰つて居る。上さんは裾を高々と端折揚げて、土間の竈の前で立働いて居た。手拭を下げて私の降りて來たのを見ると、直ぐ、

「井戸は外だよ。」と言つて、自分の足元にあつた古下駄を貸してくれた。口數が少なくテキパキしたものだ。

宿の横の、土管燒の井筒が半分往來へ跨がつた井戸傍で、私は其所に投り出したブリキの金盥へ竿釣瓶の水を汲込んで、さて顏を洗ひながら朝飯の當を考へた。此空腹で午まで通さうものなら、私は倒れて動けなくなるだらう。上さんに泣付いて、釜の底の洗落しでも可い、惠んで貰はうかとも思ふが、矢張何うも耻しくて出來ない。食を乞ふと云ふ事は能く〳〵愁いものだ。

「さあ君、金盥が明いたら貸してくんな。」と言はれて振返ると、何時の間にか錢占屋の兄さんが私の背後に立つて居た。

例の白い金巾の兵兒帶を幅廣に卷着けて、手拭を肩に、齒磨粉の赤い唾をペッと吐いて、

「君は何所から來たんだね。」と聞く。

私は是々だと答へて、次手に今の窮境を匂はせると、其男は頷いて、

「君はそれぢや、今日出たつて何所へ行く當も無んだらう。」

「え、全くは然うなんです。此邊に知つた者なんか一人も無いんですから、何所で何うする當も些とも無いんです。」

「其奴あ困つたね。」と太い眉を寄せて、私の顔を見戍つて居たが、「ぢや、當分まあ私の物でも食つてたら何うだね。其中に何とか又、國へ歸るやうな工夫でもするさ。」と言つてくれた。

地獄て佛だ。私は思はず涙を浮べて感謝した。這麼緣故て、私はそれから一月餘りも此男の世話になつて、此木賃宿て暮らした。私が禮を言ふ度び、

「何有に君、旅へ出りやお互ひさ。爰の宿の奴等あ食詰者ばかりてお話にや成らねえが、私ども世間師仲間ぢや當前の事だ。お互ひに困りや助け合ふ、旅から旅へ渡り歩く者の其れが人情さ。」と毎も口癖に然う言つた。

四

同宿の者は何れも名前を呼ばない。萬年筆を賣るから萬年屋、布哇行を口にするから布哇、と云つたうに皆渾名を呼合つて居る。私は誰が呼ぶとも無く書生さんと呼び慣らされた。それから、私を買い

てくれる其男は錢占屋と云ふのだ。錢占判斷と云つて、六文錢で吉凶禍福を占ふ其次第書を、駿河半紙二切り六枚綴の小本に刷つて、其れを町の盛場で一冊三錢に賣るのだ。人寄せの口上さへ旨ければ相應に賣れるものださうて、毎晩夕方から例の塗柄の馬乘提灯を點けて出掛けて、十時頃には少なくとも五六十錢、多い時には一圓近くも握つて歸つて來る。

て、同宿の外の徒のやうに、土方だとか車力だとか云ふやうな力業で無く、骨も折れずに好い金を取つて、年の若いのに一番稼人だと言はれて居る。同宿の者は此男一人を目の敵のやうにして、何ぞと云ふと錢を使はせようと巧む。が、錢占屋も年こそ若いけれど、世間を渡り歩いて居る男だ、容易には其手に乘らない。けれど、此男の弱點は博打の好な事で、外の事では乘らないが、博打で誘ふと屹度乘る。乘つては毎も負ける。私は見るに見かねて、

「勝負事も好いけれど、那の連中は腹を合はせて何を爲るかも知れや爲ないから、爰て遣るのは不利益ですよ。」と諫めて見るが、

「何有に、最う遣りやしねえから。」と苦笑ひをして、「馬鹿〱しいね。那奴等に奪られる錢で、君に小使でも上げた方が可い。最う何てつて勸めやがつても手を出すめえ。」と其場では言つても、明日になると矢張勸められて遣る、遣れば決つて奪られる。

勝てばこそ勝負事も歇められないのだが、然うして奪られてばかり居て、何が面白いだらう。私は訝しくてならなかつた。然し錢占屋自身の言草では、

「博打が唯面白いんて、負勝なんか何うだつて二の次さ。」と云ふのだ。
それから、同宿の夫婦者の事を嘲つて、
「那奴等だつて矢張世間師なんだが、博打一つ打つぢや無し、仲間付合すら怖がつて逃げて、那して隅角でコツ〳〵暇無しに遣つてるんだが、那れで彌張殘りやしねえ。那通り頭も最う禿懸つて、那年まで木賃宿が浮ばれねえぢや、那奴も一生まあ旅で果てねえぢや成らねえやうに出來てるのさ。ね、何うせ旅で果てるものなら、面白可笑しく渡る方が德ぢや無えか。同じ廣い旅に出てながら、此氣隨氣儘な世間師の味が分らねえかと思ふと可哀さうだ。」
其夫婦者は萬年筆を造つて賣り歩くのだ。万年筆と云つても其實小兒瞞しの玩具に過ぎぬ。銅の薄く延ばしたのを長さ二寸ぐらいの管にして、先を細く窄めて、元口へ木の栓をする。其栓から糸のやうな黄銅の針線が管の突先まで差込んであつて、管へ墨汁を入れて字なり何なり書くと、其針線の工合で墨が細く切れずに出る、と云ふだけの物だ。頭の天邊の薄くなつた亭主が、銅の延片を型へ入れて卷いて居る。すると、櫛卷の女房が小さい燒鏝を燒いて、管の合せ目へジユーとハンダを流す。小さい臺を眞中に夫婦差向ひて、午前半日精々と爲揚げて置いて、午後二人で其れを賣りに出る。
「何うだね、万年屋さん、儲かりますかい。」
と同宿の者が辭を懸けると、
「何うしまして。いや、もう、貧乏閑無しでげすよ、へ、、、。」と卑しい笑様をする。

「巧く言つてるぜ。付合ひは嫌ひだし、酒は飲まず、女には上さんて不自由しねえし、それで溜らなかつたら何うかしてらあ。」と錢占屋は皮肉を言ふ。

「笑、笑談言つて。私なんざ年ばかし可い年して、全ら最う意氣地が無えもんだから、幾ら稼いでも、漸と二人が口を糊して行くだけでげさ、へゝゝゝ。其所へ行つちや兄さんなんか素曠しいもんだ、些いと夕方から二三時間廻つて來りや、腹巻にザク／＼云ふほど握つて來るんだから――なあ嘸、羨しい腕ぢや無えか。おい、那樣にハンダを使つちや爲やうが無え、最つと薄く、薄く……」と口小言を言ひながら、爲事の方に向いて了ふ。

すると、或日の事だつた。ハンダの下地に塗る鹽酸が無くなつたから、町の藥屋へ其れを買ひに行つた萬年屋は、ものゝ三十分ばかりも經つと、眞蒼になつて歸つて來た。

「藥は？」と女房が聞くと、

「其れ所ぢや無え、大變な事が出來た。」と言つて、何やら女房とボソ／＼呟いて居た。

それから、女房に草鞋を買つて來させて、早午飯を食つて、身輕に支度をして何所へか萬年屋は出て行つた。

其時は丁度錢占屋も遊びに出て居たし、外の同宿は何れも晝稼ぎの者で、萬年屋夫婦の外には、二階に私一人だつた。私は毎日錢占屋の爲事を手傳つてやつて居る、此時も板木へ彫つた其判斷書を駿河半紙へ刷つて居たが、萬年屋の出懸けた後で、女房は獨り沈み込んで了つて、何か考へては溜息を吐い

て居た。

「書生さん。」と不意に私を呼懸けて、「お前さんは、銀行の事を知つてなさるかね。」

藪から棒に、附かぬ事を聞かれて、私も些つと返事に迷付いた。

「銀行の事つて——何ういふ事です。」

「支拂停止とか爲ると、金を預けた者は何うなるんだね。」

「さあ……能く私も知らないが、整理が付くまでは、預金を拂還してくれない譯なんでせう。」

「支佛停止と云や、其銀行はまあ潰れたも同じ事なんかね。」

「那樣事は無い。支拂停止と云ふのは幾日間と日を切つて、其間に整理が付きや、元の通り又營業するんだから——知つた銀行でも支拂停止を爲たんですか。」

「え、私共の方の銀行が支拂停止を爲たつて、最ね、内の人が藥屋へ行つたら、店の者が新聞を見て談してたのを聞いて來たんでさ。私共でも少しばかし預けてあるもんだから、内の人も心配して出懸けたんだが……到底も最う駄目か知ら。」

「一體何所です、所は？」

「何々町と云つて、此から二十里もあるんだもの。」

それから、女房は私を捉へて愚痴半分に色々と談した。夫婦も以前は相應な百姓であつたが、今から八九年前出水があつて、家も田畑も悉皆流されて了つた。それから此方二人は旅から旅へと細い商ひ

をして廻つて、少しづゝ殘した金を銀行へ預けて居るのだが、それが或る高に積ると、故郷へ歸つて田地を買つて、又元の百姓になる意りだとの事。

「八年も九年も懸つて、それで漸と始めの見込みの半分しか未だ殘らないんだもの。それが今度のやうな事で、銀行が潰れた日にや浮む瀨は有りや爲ない。今までだつて可い加減に飽き〳〵したもの、此上又何年も何年も、這麽——食ひたい物も食はないで辛棒するやうぢや、私や本當に命が縮まる。何もね、那樣にまで辛抱して、百姓に成らなきやならない譯も無いぢやないかねえ。」と女房は沁々訴した。

私は氣毒で慰めやうも無かつた。

其夜萬年屋の居ないのを、同宿の者が訝かつて女房に聞いたが、唯些つと田舍へとのみで、委しい事は言はなかつた。然し、愛相の好かつた女房が悉皆沈み込んで了つて、陸に口も利かないのを、人々は亭主が居なくなつて寂しいからだらうと譁つた。錢占屋も譁ふ。私も女房が可哀さうであつたから、錢占屋だけに其譯を談して聞かせると、

「然うか、其奴あ知らなかつた。萬年屋め、薄い頭が仍禿げたらう、はゝゝ。」と大笑ひをして、「其口振ぢや、嚊の方は最う辛抱して還る氣は無えんだね。其筈さ、七八年も世間師を爲て居ちや、旅人根性は生涯拔けやしねえ、今更到底も土百姓に返られるものか。」と言つた。

五

女房の話では、萬年屋は永くも五日ぐらゐの豫定で行つたのださうだが、それが六日經つても七日經

つても歸つて來ない。其中に亭主が遺いて行つた錢も無くなり懸けるし、女房は弱り切つて居た。同宿の者も笑止がつて、手紙でも出したらと勸めたが、郷里と云つても定まつた家が有るのでは無し、何處に居るのか其れすら分らぬのだ。階下でも有繋に二晩や三晩の屋根代ぐらゐは猶豫もするが、食ふ物は三度〳〵自分で買はねばならぬ。商賣物の萬年筆でも拵らへて、一人で賣りに出たらと勸める者もあつたが、其萬年筆が矢張一人では出來ぬのださうだ。外の事は見様見眞似で行くが、肝心の管を卷くのと、栓に針線を植ゑるのとが大事の呼吸物で、亭主の熟練で無くては駄目だとの事。

晝皆の出拂つた後で、同じ二階に女房と顏を合せて居るのは、錢占屋と私とだけだ。人の女房だからと云つて、豈か食はずに居るのを見捨てて置く譯にも行かず、錢占屋は私と一緒に自分の食ふ物を分けてやつて居た。

同宿の者が夜錢占屋の歸つて來るのを待設けて、例の勝負を勸める事があつても、錢占屋は今までのやうに二つ返事で應じないやうになつた。時には手を出すことがあつても、途中で考へて直き歇めて了ふ。

「何だな、客臭え。途中で舍すやうなら始めつから出ねえが可い。お前此節は厭に緊り家になつたな。」

と貶されると、

「那樣譯ぢや無えが、悉皆拂いて了つちや明日困るからな。」と錢占屋は腹卷を擦り〳〵引込む。

「へ、人の嚊を張つたり樗蒲一張つたり、然うは張り切れねえやな。」

「何だと?」

「何有に、お前は深切者だつて事よ。」

這麽事が折節あつた。同宿の者は錢占屋と萬年屋の女房との間を疑ひ出したのだ。

尤も、女房の爲向けも疑へば疑はれる。食はして貰ふ其禮心でもあらうが、錢占屋の事と云ふと忠々しく氣を付けて、下帶の洗濯から布團の上げ下ろしまで世話をしてやる。而して同宿の者の居ない時なぞ、私の目にも可怪しく思はれるほど狎々しい。男の方には那樣氣も無からうが、女は慥に持懸けて居るのだと私も思つた。

或晩錢占屋は雨に降られて歸つて來た。すると、女房は急いで立つて行つて、

「濡れて大變だつたらうねえ。お待ちよ、內の人の着更があるから、那れと着更へると可い。今出して上るから。」

「えん!」と誰やら寐床の中で咳拂ひをした。

「嫐けてやがらあ。」と又一人が罵つた。

錢占屋は氣色を變へて、

「お上さん、お前の深切振は最う舍してくんな。俺あ痛くも無え腹探られて、氣色が惡くて成らねえ。」

「でも、色々お世話になるから、私や禮心の意りだもの。」

「それにや及ばねえつて事さ。那方へ行つてゝくんねえ。」

乾ばり言はれて、女房は悄げ切つて自分の寐床へ引込んだ。誰やらクツ／＼笑つて居た。

錢占屋は濡着物を脱いで釘に引掛けて、私と並んで隣へ寐た。何所かの隅でポソ／＼二人の噂をして居る聲がする。錢占屋は獨り舌打しては、何時までも寐返りばかりして居たが、

「え丶糞！忌々しいから——可し！」と言ふと、ムツクリ起きた。而して大きな聲で、

「おい、皆目が覺めてるなら聞いて下んな。俺あ痛くねえ腹探ぐられるのも忌々しい、恁うなりや糞暴だ、皆の思ふ通りになつて見せるから、印に一杯買はうよ。今夜の鹽梅ぢや何うせ明日は降りだ、夜が明けたら皆で飲んでくんな、可いか。」

「可いとも／＼、早く然う分つて出りや文句は無えんだ。」

「明日はそれぢや、祝つて飲むか。」

「俺あ飲むより肖かりてえ。」

「何でも可い、飲めりやあ結構よ。」

口々に好な事を言囃した。

翌日はビショ／＼秋雨の降る肌寒い日であつた。薄暗い二階は疊でも壁でも濕と／＼して、其氣味の惡さは無い。町を鯷賣りが呼んで通つた。毎も逗麼日には、外稼ぎの連中は爲事にも出られず、三度の飯を二度にして、轉々襤褸布團に裹りながら冴えない顏をして居るのだが、今日ばかりは然うで無い。朝起懸けから、飲めるぜとばかりて、酒を買ひに行く者、肴を拵へる者、其中には萬年屋の女房も交つ

て、人一倍燥いで居る。元方の錢占屋は氣の無い顏をして、皆の爲る樣を見て居た。

一同は階下の例の大餉臺を取圍んで、十時頃から飮み始めた。而して夕方燈の點く頃まで飮み續けた。私は一人二階に殘つて、襤褸布團に裹りながら階下の騷ぎを聞いて居た。面白さうに唄つたり囃したりして居る中は可かつたが、尾には取組合ひの喧嘩を始めた。上さんが金切聲を搾つて制する。私は錢占屋が對手で無いかと案じて、階子の上り口から密と覗いて見たが、其時には最う錢占屋は其中に居なかつた。女房の姿も見えなかつた。

喧嘩も濟んで、醉漢どもが漸と二階へ引揚げたのは夜の八時頃、何れも泥のやうになつて直ぐ寐た。錢占屋と女房とは、それから二時間ばかりも經つて歸つて來たらしかつたが、其時には私も夢現で能くは覺えなかつた。

六

所が、其翌々日の暮方萬年屋はブラリと歸つて來た。私は階下で遲れて夕飯を食べて居たが、萬年屋は如何にも疲れ切つた樣子で、ドツカリ上り框に腰を下らすと、最う草鞋を解く勢も無い。

「お上さん、今歸りました。」と息を切らせて、「濟まねえが、嚊に降りて來いつて呼んでお下んなさい。」

丁度爲事から歸つて來た同宿の連中、夕飯を食つて居る者や、足を洗つて是から食はうとする者や、四五人其周邊に居合せたが、皆默つて和や〱笑つて居る。

「お前さん、馬鹿に手間を取つたぢや無いか。四五日と云ふのが、最うこれ、十日にもなるんだもの。」

と上さんが言ふ。

「何うもね、それが……取んでもねえ目に遭つて了つたもんだからね、つい日間取つて了つて……」とグツタリ首を垂れる。

私は其萎れ切つた樣子を見て、的り銀行の方が駄目なのだと察した。

「那樣事はまあ何うでも……それよりか萬年屋さん、お前さんは最う家で泊らない方が可いよ。惡るい事は言はないから、向うの三州屋へでもお行てな。」と附かぬ事を上さんに言はれて、萬年屋は訝しさうに顏を擧げた。

「何故ね、私を最う泊めねえのかね。」

「那樣譯ぢや無いけれど……でも――ねえお前さん達。」と上さんは周圍の者に言ふ。

「然うよ、其方がお前の爲めだ。」と誰やら言つた。

這麼風て、上さんが何時までも煮切らぬ事を言つて居るのを、萬年屋は一圖に泊めたく無いのだと取つて了つた。で、有繫に怫として、それなら泊めて貰らはなくも可い、自分の留守中、嗅が寐たり食つたりした勘定の不足を奇麗に濟して、是から直ぐ退拂ふと言つた。

「別に那樣、お前さんから勘定なんか貰ふのは有りや爲ない……から又有る道理も無いやね。家は木賃だもの、誰の上さんだらうが何だらうが、一晩だつて不足を默つて措きやしないから。」

「おい、阿母。何時まで那樣廻り冗い事を言つてるんだ、聞いてゝも小憤れつてえ。」と傍から一人が引

取つて、「萬年屋さん、お前が那樣心配しねえても、上さんの勘定は其日〳〵に丁と濟んでるんだとよ。」

「女に喰ひ逸ぐりは無えやな。お前が留守になりや、今度は最つと若い野郎が、上さんの食ふから寐るまで一切世話するてえんだから、お前も安心して引取んねえ。」と又一人が冷かす。

萬年屋の顏色は變はつた。ガタ〳〵體が顫へる。何か言はうとするが口も利かれぬらしい。

所へ、生憎なもので、何所へか遊びに行つて居た萬年屋の女房と錢占屋とが、二人とも赤い顏をしながら好い機嫌で歸へつて來た。點燈頃の家の中は薄暗い、何の氣付かずに土間へ入つて、バッタリ萬年屋と顏を合はせた女房は、ハッとして逃げやうとする。と、行成亭主は其後髮を攫んだ。女は悲鳴を揚げる。

「何爲やがるんだ！」錢占屋が横合から無手と萬年屋の利腕を抑へた。

「儞、儞だな！」

「俺なら何うした。女だつて活物だ、何故其日に困らねえやうにして置いてやらねえ。食はせりや這方が飼主よ、指でも指しやがると承知しねえぞ！」

「然うだ〳〵、那樣分らねえ奴あ擲つ了へ！」と傍から嗾し懸ける。

二階に居た連中も皆降りて來た。多勢が寄つて聚つて、無理に女の髻を放させたが、其れに逆つたと云ふので、到頭萬年屋を袋叩きにして了つた。而して誰だか二階にあつた萬年屋の荷物を運んで來て、其れと一緒に表へ突出した。

「本當に物の分らねえ鈍痴漢ぢやねえか。已の氣の利かねえ事あ考へねえで、女を怨むツて法があるものか。」と云ふのが一致した衆評であつた。

私は始終を見て居て異樣に感じた。

七

女房を奪はれながらも、萬年屋は目と鼻の間の三州屋に宿を取つて居る。翌日から最う商賣に出るのを見懸けた者がある。山本屋の前を通る時には、怨しさうに二階を見擧げて行くさうだ。私は見慣れた千草の風呂敷包を背負つて、前には女房が背負ふ事に決つて居た白金巾の包を片手に提げて、髮毛の薄い素頭を秋の夕日に照されながら、獨り町から歸つて來る姿を哀れと見た。で、女房は有繫に怖がつて外へも可成出ないやうにして居る。

それから、二三日經つて或朝、錢占屋は飯を食懸けた半ばに偶と思ひ付いたやうに、希しく朝酒を飮んで、二階へ歸へると又布團を冠つて寢て了つた。女房は錢占屋の使で町まで駿河半紙を買ひに行つたし、私も話對手は無し、と云つて爲る事も無いから、濱へでも行つて見ようと思つた。すると、私の其氣勢に、今まで凝と睡つたやうに身動きも爲なかつた錢占屋が、

「君、何所かへ出るかね。」と頭を擧げて聞いた。

見ると、何んだか泣いてでも居たやうに、目の緣が赤くなつて居る。酒も醒めたと見えて、青い顏をして居る。

「何有、出なくつても可いんです。」

「ぢや、まあ談して居てお下んな。何だか心寂しくつて可けねえ。」と毎もにも無い事を言ふ。

「何うかしたんですか。」と私も怪しむと、

「何有にね、色々な事を考へ込んで了つて、變な氣持になつたのさ。」と苦笑ひをして、

「君は幾歳だつたつけね。」

「十九です。」

「ぢや來年は二十だ。私なんか其頃は最う旅から旅を渡り歩いて居た。君はそれで、家も双親も國には有るんだつけね。ぢや、早く國へお歸んなせえ。這麽所に何時まで轉々して居たつて爲やうが無え、旅用だけの事は何とか工面して上げるから。」

餘り出抜けて、私は其意を圖りかねて居た。

「私もね、是でも十二三の頃までは双親ともに居たもんだが、今は双親は愚か、家も生れ故郷も何にも無え、本の獨法師だ、考へて見りや寂しい譯なんさね。家と云つたつて何うせ荒家で、二間か其所等の薄暗い中に、お父もお母も小穢え恰好して燻つてたに違無えんだが、……でも秋から先、丁度今頃のやうな夜の永い晩だ、燒栗でも剝きながら、罪の無え笑話をして夜々深かしたものだつけ、ね。那頃の事を考へて見ると、何だか恁う、仄やり前の世の事でも考へるやうで、儚えやうな、變ちきれんな心持になりやがつてね——意氣地あ無え。」と寂しげに笑つた。

錢占屋は其儘目を閉ぢて、凝と枕に突伏した。木賃宿の晝は靜かで、階下では上さんの聲も爲ない。
「あゝ浪の音か。」と暫くしてから顏を擧げた。「俺あ又風の音かと思つた。是から何だね、ゴーッて足まで掠つてきさうな奴が吹くんだね。すると直き又、白いのがチラ〳〵降るやうになるんだ。旅を渡る者にや雪は一番御難だ。ねえ君、恁うして私のやうに、旅から旅と果し無しに流れ渡つてゝ、是で何所まで行着きや落着くんだらう。何とやらして空飛ぶ鳥は、何所の何所で果てるやらつて唄があるが、全く私等の身の上さね。恁うやつてトゞの究りは、何所かの果の土になるんだ。そりやまあ可いが、旅で死んだ日にや犬猫も同じで、死骸も分らなけりや骨も殘らねえ——殘して措いても爲やうが無えからね。すると、全て私と云ふものは影も形も無しに、此の永え間の娑婆からづッと消えたやうに無くなつ了ふ譯だ、然う思ふと厭だね、些と飽氣無さ過ぎる……いや、飽氣無えよりか第一心細えよ。」
「ぢや、旅を歇めて、家を持つたら可いでせう。家を持つちや自然と子や孫も出來るし、何時までも君と云ふものは——死んだ後までも殘るぢや無いですか。」
錢占屋も今は最う獨身で無い、女房めいた者も出來た、隨つて家庭が欲しくなつたのだらうと思つて、私は然う言つてやつた。すると、重々しく首を掉つて、
「君にや此心持が分らねえんだ。」と腹立しさうに言つたが、其辯も私には分らなかつた。

八

其翌朝、同宿の者が皆出拂ふのを待つて、錢占屋は私に向つて、

「ねえ君、妙な縁で恁うして君と心安くしたが、私あ今日向地へ渡らうと思ふからね、是で愈よお別れだ。お互ひに命がありや又會はねえとも限らねえから、君もまあ達者で居てお下んなせえ、就いちや爰に持合せが一兩と少しばかしある、其中五十錢だけ君に上げるから……」と言ひながら、腹巻を探つた。

私は餘りに不意なので肝を潰した。

「本當ですか。」

「本當とも、實はね、這麽所に這麽に永く逗留する意りぢや無かつたんだが、君とも心安くなるし、つい這麽に永逗留をして了つた譯さ、それでね、君に旅用だけでも遺してつて上げようと思つたんだが、廣くもねえ町を、餘り何時までも荒したもんだから、人が最う寄らなくなつて、昨夜なんか思つた半分も商賣が無かつたんだ。那樣譯だからね、此五十錢で二三日の所を君が爰て辛抱してりや、私が向地から旅用の足しぐらゐは間違無く送つて上げらあ、ね。其意りで、私が居なくなつたつて直ぐ餘所へ行かねえで、いかね。」

外の者の辭なら知らず、私は決して此男の言ふ事を疑はなかつた。で、禮も述べたし、波殘も惜しみたし、色々言ひたい事もあつたが、傍に居た萬年屋の女房が然うはさせて置かなかつた。

「本當かね、お前さん、餘り出抜けで、私や擔がれるやうな氣がするよ。ぢや、本當に立つとすると、今日何時だね。」

「是から直ぐだ。」と錢占屋は澁い顏をして、
「さ、お前にも五十錢遣いてくよ。最つと實は遣りてえんだが、今言ふ通り商賣が無えんだから、是で勘辨してくんな。」
私も傍で聞いて居て譯ふのだと思つた。女房も始めは笑談にして居たが、錢占屋は何所までも本氣であつた。
「お前さん、それぢや私を一時の慰物にしといて、棄てるんだね。」と女房は終に泣聲を立てゝ詰寄せた。
「慰物に爲たんか爲ねえんか、那樣事あ考えても見ねえから自分でも分らねえ、何うともお前の方で好なやうに取りねえ、昨日は昨日、今日は今日よ。お前が何と言つた所で、俺てえものが爰に根を据えて居られるもんでもねえし、思立つたんだから、今日は何でも海を越さねえぢや成らねえ。」
「私や何所までも附いて行く。」
「笑談言つちや可けねえ。俺あ旅から旅と果無しに渡り歩く體だ、お前なんかに覺はられて耐るものか。可いぢやねえか、お前も女と生れた仕合せにや、誰でも亦食はしてくれらあ。それも氣が無きや、元の萬年屋が所へ還るのさ。」
「馬鹿にお爲てない！今更何の面下げて亭主の所へ行かれるかよ。」
「まあ然う言はねえでさ。俺あ何もお前と夫婦約束をした譯でも無えし、唯何だ、お前は食はせる人が居

ねえて困つてるし、俺は獨者だし、の、其丈の事で、外にや棲も何にも有りや爲ねえんだから、お前も旅の者らしく洒脫して下んねえな。俺あ何所までも好自由な獨者で渡りてえんだから、それを抗はる事だけは、何うか勘辨してくんねえ、お願ひだ。お前にしてからが、俺のやうな一生世間師で果てようて者に緊附いてくより、元の亭主の――那いふ辛抱人へ還つた方か末始終の爲めだぜ。お前さへ還る氣になりや、那の人あ何時でも引取つてくれあ、其丈は俺が受合ふ。惡い事は言はねえから、然う爲ねえ、よ。」

「知らない！這麼耻しい目に遭つて、私や人にも顔向け出來ない、死んでやる！」と言つて、女房は泣伏して了つた。

* * * * * * * *

私は錢占屋を送つて、町の入江の船着場まで行つた。其所から向地通ひの小蒸汽に乗るのだ。戰々と西風の吹く日で、爰からは海は見えぬが、外は少しは浪が有らうと待合せの乗客が話して居た。空は所々曇つて、日がパッと照るかと思ふと急に又影げる。水際には晝でも淡く水蒸氣が見えるが、其癖向河岸の屋根でも壁でも濃く瞭りと目に映る。何うしても最う秋も末だ、冬空に近い。私は袷の襟を堅く合せた。

「ねえ君、二三日待ちなせえよ。屹度送るから。」と船に乗り移る間際にも、錢占屋は其事を誓つた。

汽船は出た。甲板に立つた錢占屋の姿が段々遠ざかつて行くのを見送りながら、私は今朝其話の中に引いた唄の文句を思出して、

「何所の何所で果てるやら――全くだ、空飛ぶ鳥だ！」と然う思つた。

が、其小蒸汽の影も見えなくなつて、河岸縁に一人取殘された自分の賴り無い姿に氣が付くと、私は急に何とも言へぬ寂しい哀愁を覺えた。而して沁々故鄕が戀しかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

萬年屋の女房は悉皆悄げ返つて居たが、錢占屋に貰つた五十錢が盡きると、間も無く三州屋に居る其亭主の所へ轉げ込んだ。で、元の鞘に收つた萬年屋夫婦は、白と千草の風呂敷包を二人で脊負分けて何所へか行つて了つた。

錢占屋は二三日と私に約束して行つたが、遲れて七日めに、向地から渡つて來た蝙蝠傘の張替屋に托して二圓送つてくれた。向地は思ひの外の不景氣な所から、錢占屋は今十五里も先きの何やら町へ行つて居て、其所から托されて來たとの事であつた。

私は翌日故鄕へ向けて出立した。

（完）

舊知

徳田秋聲

小野捨吉は今日も職業の口を求めに出て、今し方空しく歸るところである。

電車賃を少しばかり持つて、朝の十時に追分町の我家を出たが、途中で吝な蕎麥屋へ飛込んで、モリを二つ食つた限なので、腹のへコ〳〵になつたのも無理はない。無論脚も擂木のやうに成つてゐた。牛込の矢來、四谷永住町、東大久保、番町と云つたやうな順序で歩いた。何か會社の口をと思つたので、中には前以つて頼んでおいた口もある。新規に口をかけた處もある。厭な思をして、三度も足を運んで、遂に要領を得なかつた處もある。

「ヤレ〳〵、今日も電車賃の使ひ損か。」と捨吉は落膽して大學つ通へ入らうとした。

捨吉の頭は、砲彈か何かで打拔かれたやうにボーッとして居た。潮の寄せるやうな四丁目近邊の人の込合ふさまが、全然夢でも見てゐるやうで、雜踏の物音が、他界から來る響の如く、氣の遠いやうな耳へ入つた。それでも家が近くなるに從つて、ボーッとした頭はボーッとしたなりに多少混亂して來た。胸も壓つけられたやうに爲つて來た。ワッ〳〵云つてゐる子供の聲や、屈托さうな妻の顏が目に浮んで來ると、此處までウカ〳〵歸つて來たのが、大なる不覺であつたやうにも思はれた。

十月の初めてある。點火頃の街には、フワリと顔に當りさうな淡靄が漂ふてゐた。チラ〳〵する蒼空の星影も冷つこいやうてあつた。

華やかな電燈の點れた洋物店や呉服店には、もう大半冬物の陳列が出來て、人はゾロ〳〵其前を行いてゐた。女の眉掛や、子供の帽子などが殊に目に立つた。捨吉は、明日のパンもない癖に、其等の店を、ちよい〳〵覗いて行いた。直段付などに目を止めて、ヒヨコ〳〵と出て行つた。

捨吉は脊の低い男である。撫肩の、首の小い、瘦せぽちて、手首や足は比較的大い。焦茶色に棒縞のネルの單衣を着て、綿入縮緬の兵兒帶を締めてゐる。胴が細いので、帶のところに入つ皺が寄つてゐる。

ノロクサと靑木堂の前まて來たとき、誰やら前に立蟠かつた者がある。

「ヤア……。」と言つて脊の高い、色の黑い男が眞新しい鼠の中折帽子を脫つた。看たところ洋服など着込んて、金色の時計の鎖を光らせてゐる。襟や頸飾は大分汚れて、ステツキも棕櫚竹てあつた。三十四五の年輩てある。

此の男が、大した氣樂な身分てないと云ふ事は、其の落着のない目色ても解る。額を白く遺して、顏の皮膚が一體に薄汚く日焦をしてゐた。

「古谷君か。」と捨吉は相手を見あげて、小い鳥打帽を脫いだ。

古谷は直く帽子を冠つて、「不思議なところてお目にかゝるもんだね。何時東京へやつて來ました。」

「今年の五月出て來ました。」と捨吉は、人物の善良さうな菱なりの目を側めてヂロヽヽ古谷の樣子を見てゐた。

「何してゐる……」と古谷は訊くともなし訊いた。

小野は大な手をあげて、頭を搔きながら、

「イヤ……其の爲ることがないんで、實は弱つてるんで……。」

久く床屋へも行かぬと見えて、小野の頭の毛は、耳の周に芒のごとくスク〳〵してゐる。古谷は其に目を注ぎながら、

「それでも能く出て來たね。細君も御一緒か。」

「イヤ、實は其で困るんで……。」

「けど可いさ。何處にゐるね。」

三年ほど前に、田舍新聞の汚い編輯室で、一ッ机で氣餤を吐合つてゐた仲間である。古谷は法律學校を中途で廢した男で、多少經濟事情に通じてゐる。如何にも悧巧〳〵した男で、能く何の事でも知つてゐる。融通も利く方である。才の廻らぬ小野の目から見ると、黠い男だ、とも思はれる。然し今日まで別に黠いと言はれるやうな事をしたともなく、如何なる場合にも、ヅン〳〵自分の步むべき道を開拓いて、危げなく步いてゆくやうに見える。小野は不思議な男だとも思つたが、可羨しくもあつた。小野は其頃三面記者をやつて居た。

「東京でも何かやつてるんでせう。」と小野は想出したやうに訊いた。

「ウーム」と古谷は顏に微笑を帶びて、「マア何かやつてゐる譯なんだらう。」と憶出したやうに時計を見て、

「君は是から家へ歸るんでせう。如何です、久振だから、何處か其處いらで晩食でも食はうぢやないか。」

「然うですね。」小野はモソクサしてゐたが、畢竟蹤いてゆく事に成つた。

二人は途々昔の事を談りながら歩いた。小野は古谷が東京へ出てから、彼此一年半も同じ新聞に辛抱してゐたが、今度思きつて、社の方の貯金を少し持つて、家族引連れて來た始末を話した。其から丸五箇月、其間には雜錄など一つ二つ賣つて、小使くらゐは取れた。然し六七年の間に、東京も滅切變つた。新聞界ももう一廻轉してゐる。迚も田舍で敗れた我々の顏を出すべき處ぢやないと思つたから、其方は七八分斷念して了つた。加之、皆ながもう立派になつてゐる。訪問するのも何だか極が惡いくらゐなので、可成其の周圍へ近かぬやうにしてゐる。此頃殊に然う感じたから、別の方面で、左に右飯の食へる口を搜さうと思ふけれど、それが皆目見つからないと云ふ事を、チビ〱話した。

古谷は聞かなくとも、丁と解つてゐるやうな顏容で、時々「然う〱。」と氣のない返辭をしてゐた。

「子供はもう幾人かね。」

「此夏三人目が產れたところさ。」と小野は小い聲で言つた。

「それア結構だ。皆な健康かね。」

「マア健康です。」小野は不承々々な返辭をする。

こんな平凡な話をしながら、二人は湯島六丁目の或牛肉屋へ入つた。三本弱の酒で、二人は可也醉つたが、此と云ふ話もなくて別れた。古谷は何をして居るか解らぬ。御用商人のやうな處もあるし、何かコムミツシヨン取てもしてゐる樣子にも見える。左に右顏が廣いやうな話なので、小野は妻の實家——今は零落してゐるが——から讓られた徂徠の書を持つてゐるが、其賣口があるまいかと云ふ相談など爲かけた。

別れるとき、古谷は名刺に鉛筆で「青山南町……」と宿所書を入れて小野に渡した。

古谷は其處から腕車で、外神田の方へ急いだやうであつたが、小野は赤い顏をして、フラ〳〵と歸つて行つた。外は薄ら寒いくらゐ秋風が吹いてゐた。

小野は暫くぶりて、比較的多量に飲んだので、其翌日は終日二日醉の形で寢てゐた。一日ほつき廻つた其疲勞もあつた。

家は駒込の追分で、室數が三つ、些とした門もある。親子五人家内だが、久しく收入がないので、屋中が寂れ切つてゐる。家も手入を怠つてゐるので、門柱がボス〳〵に敗つて、廂や樋などもボロ〳〵して居る。障子も破けたまゝて、道具と云ふほどの物がないから、小汚い其處らがソゲ〳〵と赤裸てある。

凉氣が立つて來ると、殊に然云ふところが目に立つて來る。

其翌日も九時頃まで寢てゐた。

悲哀の深さうな子供の泣聲に目をさますと、頭から何か引被つてゐるやうな厭な氣持であつた。色の褪めたやうな黄色い壁や、松の板に反の入つた天井に、何處からか追窮められて來たやうな薄白い蠅が、弱ッかしい羽で飛んでゐたが、それが妙に分明と目に映つた。何だか情ない心持であつた。

子供が交る〳〵部屋を覗きに來た。

「父さんお起なさいよ。」と上の女の子が、ペッたり枕頭に坐つて、鼻を些いと摘んで笑つた。母親に似て、目や口の大い、肉厚の顔である。田舍にゐた頃から見ると、姿が崩れて、リボンだけ綺麗なのを着けてゐる。

小野は地の薄くなつたやうな白地の寢衣のまゝ、楊子を口に啣へて臺所に出た。袖口のところが、破けてピラ〳〵してゐた。

細君は潰れたやうな形で、乏しい茶の間の椽先に坐つて、子供に乳を呑してゐた。何か考へてゐるやうにも見みた。此二タ月ほどゝ云ふもの、捨吉は餘り細君の好い顔を見たとがない。何をするのも、不承々々と云つた形である。出るとき後を尾いて來たり、着物の襟を直してくれると云ふやうな事も、餘り爲なくなつた。ベチヤクチヤ〳〵しないまでも、良人の傍へ寄つきたいやうな風も見せ無くなつた。何となく脂が乘らなくなつた。夫婦間には、一時のやうな充實した感情がなくなつた。

捨吉はプツキ落の火鉢の傍で、スポ〳〵と飯を食ひはじめた。給仕をしてゐる細君の顔一つ見ないで咽喉の太い筋や、痩せた顎の骨を動かせて居た。憎いとも可愛とも、感じがなかつた。顔は始終思案深さうに曇つてゐた。

飯が濟むと、徂徠の軸を大事さうに風呂敷に包んで、古谷の許へ行くといつて出かけた。

古谷の家は、家賃で二十五圓は出てゐやう。綺麗に拭込んだ格子戸を開けると、脊の高い乳母車が隅に片寄せてある。家も何だか賑かさうでする。

古谷は昨夜横濱から遲く歸つたとか云つて、まだ二階で寢てゐた。小野はキチンとした姿の女中に案内されて、下の八疊へ通された。緣の障子を開放して、薄日が栂の板敷に差してゐる。庭には形の好い梅の古木や、古い文人畫で見るやうな松もあつた。

小野は茶を啜りながら、胸のスッとするやうな部屋を矙してゐた。田舍では自分と同じに二十圓くらゐしか取つて居なかつた男だが……古谷に比べると、自分は汚い地面を離れるとの出來ぬ蛆のやうだと、熟々腑效なく思つた。

此時三ツばかりの、乳色をした皮膚の、髮の薄い男の子を手かけて負つて、ソロ〳〵と切戸の方から入つて來た一人の女があつた。頭から足の爪先まで、すッきりと綺麗な女で、眞白い細い指を、チカチカ光せてゐる。何やらお召柄の縞の羽織に、派手なネルの單衣を着てゐた。子供に何か言ふ其聲が、細く透徹るやうだ。

些と部屋のなかを見向くと、輕く挨拶をして、又何か言ひながら通りすぎた。
古谷の細君なら、さく子と云つて、色の黑い小柄の女であつた。
古谷とは五ツ違ひで、今年は少くとも三十になつてゐやう。今の女は、其細君とは異ふ。無論古谷の妹でもない。
小野は然し、それを押詰めて考へる氣も爲なかつた。
少時すると、古谷が威勢よく降りて來た。緣側で咽喉をガア〳〵言はせて、嗽をしてゐたが、施て座敷へ入つて、ヅシリと坐つた。
「如何したね。」と古谷は捲莨を函から一本掴出して、眞中へ据えてある一閑張の机の隅で、輕くトントンと遣りながら火を點けた。
「イヤ、如何も恬もないです。」と小野はキヨトンとしたやうな顏をして居た。取留もなく色々の事が頭腦に浮んでゐたらしい。
「君の生活は好いですな。」
古谷は含んだ煙を、ポカンと口を開いて噴出しながら、「別に好い事もない。マア好い加減にやつて行くのさ。」
「君の職業は、失敬だが何です。」小野は目眩さうな目色をした。
古谷はニヤ〳〵と笑つて居た。そんな事は如何ても可いと云つた調子だが、何處か落着のない目色だ。

「マア當てゝ見たまへ。」
「株ても行つてゐるのぢやないのか。」
「株？ 株もやらん事はない。」
小野は話を轉じた。
「失敬てすが、先刻庭に見えたのは、他は‥‥。」
「家内かね、多分然うだらう。外には女中限だから‥‥」と古谷は庭の方へ目を注いだ。而して、少し聲を低めた。
「君は前の家内を知つてるね。然だ、確か然うだ。他は君、東京へ來ると、間もなく別れて了つたよ。」
「どう云ふ事情て‥‥。」
「事情と云ふほどの事もないが‥‥。」と古谷は俯いて、「事情もないぢやない。けど、畢竟可けないから取換えたゞけの話なんだ。」と平氣らしく言つた。
小野は苦笑した。それも然かと、茫然考へてゐた。
「子供は一人のやうだが‥‥。」と少時して、又ポッツリ口を訊いた。
「然う、今のところ一人だ。」と古谷は胡散くない目を小野の顏に見据えた。
するうち、格子戸の外て、自轉車でも乘棄てたかと思ふ、輕い靴の音が聞えた。古谷は玄關の方へ氣を配つた。格子戸が開くと間もなく、女中が一枚の大形の名刺を持つて來た。名刺には建物地所‥‥と

云ふ文字が刷込んであつた。

古谷は急に様子がソワついて來た。

「此處でも可いが……マア二階へ通してをけ。」と命じた。

玄關の直ぐ横から二階へ上つてゆく、其男の洋服姿がチラリと見えた。派手な縞柄の洋服で　折鞄を持つてゐた。顏は能く見えなかつた。

古谷も引續いて二階へ上つて行つた。調子の高い話聲が階下まで通つて來たが、何の話か固より解らなかつた。銷魂しい呼鈴が幾度となく鳴された。女中は階子を降りたり上つたり、如何にも忙しさうであつた。

小野は其間、孑然と坐つてゐた。何だか頭腦が引搔まはされたやうになつた。五箇月間、何にも爲ずに過した、其悔恨の哀情が、妙に胸に湧いて來た。堪えがたい心の空虛を感じてゐた。

古谷は客を送出してから階下へ降りると、急に用事が出來たらしく、連に時間など訊いてゐた。小野は持つて來た軸物の賣口の周旋を頼んで、其日は其て古谷の家を出た。

小野は殆んど一日置くらゐに古谷の家を訪ねた。細君や子供とも親しくなつた。

軸は買手がつきさうで、容易に着かなかつた。今日は誰のところへ廻したとか、明日誰に見せるとか云ふやうな話ばかりして、其度に望がありさうな古谷の辭に釣られて、一日一日と日を送つた。

古谷の家の樣子も、段々解つて來た。古谷のゐない時は、細君相手に二時間も三時間も話込んでゐる事もあつた。古谷が玄關を張つてゐるほど、内容の充實してゐない事も、ちよい〳〵見透された。細君は如何かすると、存外下つた姿をしてゐる事もある。古谷も相變らず、例の洋服一點張で押廻してゐるやうである。全體に、何處か調子が浮ついて、家内擧つて不安に襲はれてゐるやうな氣味合もあつた。けれど、古谷は確かに、何事か大きな仕事を目論んでゐるらしくも思はれる。始終考事をしてゐるやうな目色で、目前の些事には頓着しないと云つた風にも見えた。

或日また遣瀬ない念で、晩方古谷を訪ねた。古谷は丁度留守であつたが、左に右座敷へ通つた。座敷はキチンと取片附いてゐたが、何となく人氣が乏しかつた。女中は落着かぬ風で、薄暗いランプなど持つて來た。細君も頭髮を亂したまゝで、寒さうな白地の單衣の上に帶しろ裸で、羽織を被つてゐた。血色も沈んで、皮膚に光澤がなかつた。

「古谷は、一昨晩出たきりで、まだ歸つて來ませんの。」と言ふ調子にも何時ものやうな落着がなかつた。

「其樣なに何か、忙しいんですか。」

「いゝえ、然云ふ譯でもありませんけれど、少し面倒なとが持上つたやうなんです。」

細君の話によると、何か地所のとで間違が起つたらしい。芝の或華族の子息から高輪あたりの或地所を、棄價で或男に買取らして、コムミッションを取つた、それが法律上の問題になつてゐるらしいと云ふのである。其の子息が氣が狂つてゐるとか、白痴だとか云ふのを看々知つてゐて、買倒したのが苦情

の基で、古谷は裁判所から呼出を受けてゐるが、面倒くさいからと云つて、ふらりと家を出て行つた。多分函嶺か小田原邊を彷徨いてゐるのであらうと云ふ、細君の想像であつた。

古谷も同じ不安の念に頭腦を衝れた。二時間ばかり、其處にモゾクサして動かなかつた。軸の成行なども聞いて見たが、

「サア、其事は一向聽きませんでしたよ。」と細君は疊の埃を捻りながら、曖昧らしい返辭であつた。

其處を出た時、小野は何だか可恐しい動亂の渦中へ捲込れてゐるやうな氣がした。古谷は世才があるばかりでなく、惡魔のやうな可怕い男だと云ふ恐怖も襲つて來た。

四五日經つて、小野は又古谷を訪ねた。氣をイラ〳〵させるやうな風の吹く日であつた。

電車はをり〳〵鋭い不愉快な響を立てゝ、青山の通を走つた。小野の頭腦は劇しく掻廻されてゐた。此頃連夜不眠症に陷つてゐるので、氣懈いやうな體中の神經が、惡く昻つてゐた。些とした物音にも、ピタ〳〵して、血走つたやうな目が、可恐しく光つてゐた。

古谷の家の門の前まで來ると、門は直り締つて、貸家札が貼られてあつた。二階の戸も締つたまゝてあつた。

直ぐ隣の、建仁寺垣の宅の前で、子供を遊ばしてゐる内儀さんに訊くと、内儀さんはヂロ〳〵小野の様子を見て、

「一昨晩何處かへ引越されたやうですよ。何だか、夜逃でもしたやうな風でしたよ。荷物なぞは、それでも悉皆車に積んでね……色んな方が私の所へ來てお聽きになるんですけれど……。」

古谷はトボ〳〵と引返した。

電車で日比谷まで來ると、彼はふらりと降りて、公園の深い木立へ入つて行つた。而してベンチに腰かけて、ボンヤリ考込んでゐた。體一つで、此まゝ東京を離れれば離れられさうな心持もした。それから其へと、動いてゐる、古谷の心持が、何だか可懐いやうな氣もした。

公園を出たのが晩方であつた。

心がそはついてゐたので、神田まで電車にも乘らず、ノロ〳〵と歩いた。踵が痛くなつてゐたが、然ほど疲れたとも思へなかつた。それで又須田町まで歩いて了つた。

咽喉が渇いてゐたので、直ぐ停留場の前の、一品料理へ入つた。生麥酒を大きなコップで二杯ばかり呷ると、空腹に滲渡つて、醉が一時に廻つた。乏しい金をふぐつて、彼はふら〳〵と其處を出た。

夜の街を、彼は的度もなく、十時頃まで歩いてゐた。

駒込まで來た時は、街はもう森としてゐた。小野はもう酒の醉も醒めて、淋しさが胸の底から湧上るやうであつた。

二三日經つと、小野の頭腦は多少鎮つて來た。一時古谷に引かゝつて、些と閃きかゝつた心は、前よ

りも一層鈍つて來た。もう何をする氣もなくなつた。

其から一週間ばかり經つた。或朝、ふと古谷から一枚の繪葉書が舞込んだ。所は神戸とだけて、町も番地もなかつた。當分此に落つくつもりだ。定めし君は僕を怨んでゐるだらう、然し今は爲方がない。しばらく待つてくれたまへ。君も早く何かに有つきたまへ。此方に何かあつたら、知らさう。妻とも別れた、然し又一緒になる時期もあるだらう。君は細君を大事にしたまへ。神戸は存外好いところだ。何か一と儲しやう……と云ふやうな文句が駢べてあつた。

小野は何だか可羨しいやうな心が動いた。古谷が洋服を着込んで、彼方此方切つて廻して歩いてゐる様子が目に見るやうてあつた。神戸の青い山や美しい海の色も想出された。

小野は其後、或新聞社の校正に傭はれた。もう何等の動搖も起らなかつた。（完）

南小泉村

眞山青果

お灸屋の兄弟

土用に近いある日のこと。患家から歸つて見ると、机の上に阿刀田玄吉と云ふ名刺が載つてあつた。肩書には千葉專門學校の學生としてあるけれど、自分には全く知らぬ人だ。金緣の舶來象牙紙に活字も氣取つてゴシック新型である。

何か言置はなかつたかと聞くと、何れ又來ますがお暇があらば尋ねて頂きたいとの事である。然うすりや近所の人だ。折から奧樣は留守。取次ぎに出た裁縫弟子のおうんは、その金ボタンの制服姿の威に蹴られて、碌に顏は見なかつたが、何んでも薄髭を立てゝ近眼鏡の若い立派な人だ。夏休みで一昨日歸つたとか、そんな事も云つて居たと云ふ。何うも分らない。

後で、役場から歸つて來た家の主人に名札を出して尋ねて見たが、隱居にも些いと思付かなかつたが、又考へて、「そンぢや若しや竹屋ダンポ所の總領息子かも知れせんな。阿刀田は阿刀田に相違ないが、あの息子の名が玄吉ッて云つたかな。何んても東京さ脩業に出てるッち話は聞いて居ましたがな。」とも云ふ。

「竹屋ダンポと云ふのは、一本杉のお灸師でせう」。

「さいさ。然しあすこのわらし（兒童の事）なら家さも何んとか云つて行く筈だけれどな。好く惡戲し

に來い〱したもんだから。」と決めかねて居る。

「旦那さん。屹度然うて御坐りすよ。昨日土橋ン所で冬三アん遇つたら、然う云つて居りした。お兄さんが東京から歸つて來たんて河原町さ魚買ひに行くんだッて。」次の茶の間て稽古して居る內弟子の誰かゞ言葉を入れた。

「然うか、冬三が然う云つて居たか。そンぢや然うだな。」

「お兄さんが歸つてから、いとゞ忙しいのが猶忙しくなつて、體が引張足ンないやうだッて云つて居りした。」

「然うがな。あの竹屋ダンポの倅がそんな出世しすたかな。」と隱居は未だ腑に落ちない風であつた。

竹屋ダンポなら僕も知つて居る。小兒の時からの顏馴染だ。城下(仙臺のこと)から南小泉へ入いる、俗に一本杉と云ふ下町のお灸師てある。今こそ仙臺市の內だが以前はこの小泉の內であつた。店格子に竹簾を掛下げて、切髮の婦人が灸療治の綸額を出してある家がそれだ。雨腐れて重さうな茅葺て、堀立の坊主門の傍には柘榴の大株なが咲いて居る。ダンポさんとも阿刀田樣とも云はれて、この界隈ては醫者以上に繁昌して居る。大抵の病人なら必ず一度はこゝの療治を受ける。取分けて胃弱と心臟病には家傳の秘法があるなぞ云はれて居る。ダンポさんとは此邊の農家一般の通り名て、在郷せる士族を然う呼ぶのだ。

竹屋ダンポは足輕か組來か、何れにしても輕るい身分の士族てある。今こそ縞の羽織なぞ引張つて、

他の口も利き、相應に人附合もして居るが、その以前十二三年前までは、笊作を渡世にして、それを自分で觸賣して歩いて居たものだ。竹屋〳〵と云ふのはその頃の名である。間で郵便の脚夫をして居たのも僕等は確かに見て知つて居る。背のズッコリ低い、甚い猪頭の、脚の短かい小男である。如何にも卑賤さうな面構で、厚腫れた唇ワングリ上反つて、兩の目が海豚のやうに小さく飛んで居る。五十を越して頭も禿げた癖に女子好きで、好く下女媼の中に混り込んでは何時も馬鹿にされて居た。目尻を下げてエヘエヘ笑ひながら、そこらこゝらの臺所を覗き歩いて費語を賣つて居る。何時かも家に居た下女に惡戯をして、柄杓で頭から水をぶッかけられて居たのを憶えて居る。「本當にいけ好かない竹屋ダンポだ。商賣物の笊が腐るから早く歸らんせ。」などと云はれても、愚鈍さうな顏の箍を弛めてゲタ〳〵笑つて居た。

その中に家屋敷にも分れて、この一本杉に蟄息するやうになつた。そこで思立たは灸師の看板である。德四――竹屋ダンポの名――の妻はもと或る町醫者の娘である。里方で見覺え聞覺えた術を便に私得取りの積りで看板を出して見た。ところが、それが運好くも近鄕近在の評判となり、今では日に廿や卅の客があるやうになり、農閑の日や土用うしには日に百近い數取りするさうだ。荒井の豆腐屋老爺の中氣を直したのが評判のもとで、老爺は閑を潰して効能を說き廻つたのだと云ふ。だから今では、大分貯つたらうの、好い株だのと近所の噂にも出る位になつた。で、奧樣――今では阿刀樣の奧樣で通つて居る――が點取の役、亭主の德四は袴など穿いて、馬鹿話に田舍の女子連を喜ばせながら艾の方を引受けて居る。ツイこの頃も見掛けたが、何時見ても變らない顏だ。もう六十だらうに、十年先きと同じ事である。

活計が何うやら立つ様になると、竹屋ダンボの氣位が急に高くなつた。人にも笑はれまいとするには小兒どもの教育が肝腎だと云つて、長男は東京へ修行に出し、娘のうめは市立高等女學校へ通はせた。たゞ末ッ兒の冬三だけは學校も小學校だけで退さして、屋敷内の栽園畠や内外の雜仕事を一人にさせて居る。眞逆繼ッ兒でもあるまいに何う云ふものかと世間でも怪んで居るが、飯時も冬三ばかりは木尻に畏まつて、雇人扱ひされて居ると云ふ噂である。

冬三は好くこゝの石岡(僕の居る家)へも白水を集めに來る。小男の親父に酷肖似て、矢張り唇の厚い、鈍さうな顔付の若者である。至つて無口な男で、通り合に此方から言葉をかけてもヘエッと笑ふだけ、鉢卷を奪いて行過ぎて了ふ。然し傍が彼是不審がるほど當人は別に氣にも掛けず、平氣で稼いで居る。田植時なぞは餘所の日傭仕事まで取つて居ると云ふことだ。

冬三の一心は豚にある。渠は一昨年あたりから豚を飼初めた。縣農會より拂下げのヨウクシヤとか云ふ内國雜種の豚を、屋敷境の小屋に丹精して飼つて居る。之だけは渠一人の私得財産であつて、誰の世話も受けず誰に世話もさせない。合所界隈の白水類を貰集めたり買集めたりして、夫を飼料に面倒を見て居る。仔が仔を産んで下から下へ數を殖して行くのを待つて居る。初の二頭が此頃六七頭になつた。愚鈍の冬三もこの豚には全く眞劍であつて、なけなしの小遣錢を貯めては養豚何やら云ふ書物を東京から取寄せたり、長町の農學校に出掛けてその飼方を見せて貰つたり、豚にかけてはからもう夢中である。一廉の身上竈をこの豚でおこす積りで居るのだ。

「豚は何ぜうでがすね。」と誰でもお世辞にそれを聞くと、渠は最うホク／＼喜んで、「サッパリ駄目しや。餌ばかり喰つて些つとも肥りせん。手間にも合はないもんでがすね。」と決つて然う云ふ。
「そんだつてハ最少しの辛棒だ。あれが三十匹も殖いて見さんせ、それこそ好い身代になるんだもの。」
「へゝ、何ぜうなもんだか。」と涎をすゝつて喜ぶ。そして、時も惜しまず豚に付いての經驗話やら何かを長々とやり出す。

二日ほど間を置いて、その玄吉君が尋ねて來た。晒の好い久留米の白絣に、縮緬の絞帶をキチンと締て、輕るい麥藁帽子を被つて居た。母親にでも似たのか色は白い。眼の細い、口元に締りの無い青年である。薄い細い髮の毛を眞中から兩方に梳けて、金縁の眼鏡を伊達らしう掛けて居た。家の奧樣は見て、「まづ／＼、竹屋の悴があんなに出世したべえか、まるで何所の和子樣と云つた風をして居ります。」と陰で囁いて居た。
「お父さんやお母さんは達者で居すか。何時もはア御無沙汰ばかりして居るんだから好しく云つて下なんせ。本當に立派な若い人になつたこと、途中でなぞ遇つても分んなくなりしたね。」と奧樣が茶なぞ搬んで來て煩さく愛措を云ふので、若者は「はアはア。」と素直に聞いては居るもの丶、何所か迷惑さうな樣子が見えた。ホット赤くなつて四角に坐つた膝を俯向いて居る。根ッから氣の弱さうな人だ。

別に用事はなかつたらしい。退屈だから遊びに來たのだ。村に歸つて見ても話相手はなし、偶にあつても專門外の話は興がない。幸ひ僕が出して居る看板を見付けたので、兩方の研究の補足にもならうと思つて訪ねた。顯微鏡もあり、多少の參考書も持つて來たから見に來てくれとの事である。舌の音を强く響かして東京の辯を眞似て居るけれど、肝腎の訛が少しも拔けない。セガシエになつたりスガシになつたりする。言葉尻の御座んすが癖らしいが、その又御座んすがごだんすと聞えて可笑しい。尋中の三年級から東京の錦城中學に入つて居て、一昨々年とか千葉の專門學校へ入つたのだと云ふ。然うすれば四年級だ。

年は廿四五である。

渠は無遠慮に坐敷の方々を見廻したり、机の上にある處方錄や書籍を取つて擴げて見たりして居る。座敷と云つても八疊一間である。眞中に一閑張の大机を出して、その上に諸帳簿や眼科藥盒や舊式圓胴の手提藥籠やが載せてある。臥床醫典や外に二三の醫書もあつた。閾際に木製の寢臺を置いて薄汚れた白毛布を敷いてある。枕は赤い括りの付いた舟底てある。これて患者を按腹するのだ。外には醫聖ピポクラテスの懸額と二三枚の眼底表が壁にかゝつて居るばかりだ。床に掛けた、松本順先生の佛心魔手の軸と共に、總て先代の代診生が居拔きのまゝてある。

床脇一間の押入れを拔いて、そこが藥棚になつた。硝子戶もないニス塗の棚で、重曹、健末マグネッシャなど云ふ通常藥を心にして五六十の藥瓶が並べてある。規則がやかましいから劇毒藥だけは鍵前付

の古本箱に入れて置くけれど、秤器は日本製の四瓦秤をつかつて居るのだ。

患者は重にどんな種類が多いとか、トラホームの手術は何式によるとか、暗室がなくて眼底檢査は何うするのと、渠は種々のことを問ふ。此方はたゞ遜つて、先を得意がらせる返事さへして居れば好いのだ。彼はたゞ大業に驚いて、自分の矜りを滿足させるのだ。

暗室がなければ眼底檢査は夜にする、雨戸さへ締めれば好いと云つてやつたら、渠は憤出した。「驚いたね、こんな先生にかゝつちや患者も往生ですなア。」

「それでも結構助かりますよ。」

「そりや助かるでせう。然し醫者とある以上は此方も相當な設備をせんでは、職業に對する義務が濟みますまいぢやありませんか。何うで御座んせう。」

「そりや患者次第の事です。こゝらの患者は僕等にそれだけの設備をする餘裕を與へません。」

「それも然うですな。然し驚きますな。僕等の學校の博士達はいやに難かしいことばかり云ふもんだから、開業なんて餘程大業なものだと思つて居たんです。斯う云ふ、君のやうな開業振りを歸つて話したら大に驚くでせうよ。」と云ふ口裏には、妙に僕等を見下し嘲るやうな樣子が見えた。この人を怒らせても爲方がないから僕も笑つて居た。

烟草盆を下げて、こゝの隱居が入つて來た。左の耳が些と遠いので聲が大きい。

「や、大きくなつたな。何時歸つて來した。お父さんも喜んだべえ。」と何時までも小兒に見て無遠慮

に云ふ。

「はい。」と仕方なしに畏つた。

「矢張り醫者の方をやるんだつてな。最う何年で卒業するんだ。」

「あと二三年です。」と吃りながら小聲で答へた。

年寄にそれが聞えたのか聞えないのか、「何んせ結構だな、お父さんもあんなに辛棒したんだから、これからは些と樂をしなくちや埋んねえ。何んか、矢張りお灸の方は流行つて居るか。」

「さア何うですか。」と横に流した足の裏を撫て丶居た。

「何んしろ好い、運と云ふもんだ。お母さんのお陰て家が立つたのだから。」と自分の云ひたい事ばかりサ丶サと云つて居る。何時も性急な年寄てある。

玄吉君は嚢から手持無沙汰にモジ／＼しながら顔を赤くして居たが、好い加減に話の切目を付て立上つた。何れ又來ると云つて居たが面白くない顔てあつた。

丁度黒瀧の病人も見てやらなければならず、僕もその邊までブラ／＼一所に出掛ける事にした。

夕方てある。長い田舍町に押覆さつた靑葉は急に黒ずんで見え、涼しい大年寺颪は眞直に村道を吹拔けた。

村はづれの石橋の上まて來ると、向ふから弟の冬三が三匹の豚を追ひながら、雨上りの固い石塊道を素足にこちらへやつて來た。

石橋を渡ると道は二つに分れ、一つは一本杉の方へ、一つは僕の行く黒瀧の家の方へ行く。こゝで別れるのだ。丁度そこへ冬三も出合ふ。

冬三は例の愚鈍さうな顔をニヤリさして僕へ挨拶をすまして「お兄さん、お關婆さん晨から來て待つて居すぜ。藥がなくなつたんだとしや。」

「千葉から小包來なかつたか。」

「來いせんてがしたね。何んの小包なのしや。」

「何んでも好い。主などの知つた事ぢやない。」と僕へ挨拶して、細いステッキを振りながら向ふへ行る。村を出切つて野道に出ると華かな夕日がパッとその白地の浴衣に射付けた。

冬三は口をアングリ開いてその兄貴の後姿を眺めて居た。

一匹の豚はグウと鼻を鳴らした。

「冬三さん、何所へ行くね。」と僕は聲を掛けた。

「豚に水つかつて遣るべえと思つてしや。久しく洗はないもんだから、蹄が燒けて爲方がアせん。」と肩を振立てゝ行く。丁度僕が行くと同じ方てある。

話しながら二人歩いた。

「然し豚を洗ふなら何もこんな遠くまで來ないだッて、直ぐ前に川があるぢやありませんか。」

「そいが駄目なのしや。あの川は下の方で米研につかふ水だからつて、村方の人にウンと小言云はれたか

らねし。遠いげんども五兵衞あんの下まて行くんてがす。」

「成程、こりや尤もだ。」

「豚は最う何匹に殖えたね。十頭も居ますかね。」と問ふと、

冬三は以つての外だと云ふ顏して僕を見返つて「なんてしや。そんなに一度に殖いるもんだら好いけどもねし。」

「だつて飼初めてから最う二年近くなるてせう。」

「何んしろ手馴れないもんだから、親豚に敷殺されたり蹴殺されたりして、おとす方が餘計だから何んにもなりせんてがす。」

「小屋を別にしたら何うてす。」

「處が矢張り駄目て御座りすね。育たない奴は何うしても育たないもんてす。何うせ死ぬやうに出來てるもンと見えすね。何んぼ飼物を喰はせても肝の強い奴は喰べた物は身にも肉にもなりせんからね。喰へば喰ふほど痩せるばかりてがす。」と初對面の僕に遠慮しい〳〵ノロクサ話して居る。聲まで響がない。

「然う云ふもんてすかな。云つて見ると、人間にてもそんな所がありますからな。」とツイその時は氣も付かずに云つて、後から飛んだ事をしたと思つた。

幸ひに渠には氣が付かなかつた。

「然うでがすかね。人間にも矢張りそんな事が御座りすかね。」と眞面目に聞いて居る。

向ふから苧苗の天秤をエサ〳〵擔いで來るのはお作婆さんである。出過ぎもので話好きで、人は好いが、向腹の立ちで村の通り者である。これを一括めて地方の言葉でお十八夜樣と云ふ。最う六十越して髮の毛は眞白だが、何時も元氣の好い、歌好きな婆さんである。頼まれて村の産婆をして居る。

相變らず向うから立停つて聲を掛ける。

「先生樣、何所へ御座るね。河原町へ女郎探しに行くにや未だ時が早かんべ。」と周圍關はぬ高張付である。これに係つちや誰れても勝てないのだ。

「何有、黑瀧の病人見に行くんだ。餘程惡るいやうだから。」

「あれもはア大概にしてお暇したら好かんべえにな。あゝして助かつてたッて何んになりすけな。痴妬で骨の髓まで燒けてるんだもの。業の惡るい婆さんさ。」

「然うも行かないさ、誰だつて生命は惜しいからな、お前だつてまだ〳〵死んで行く氣はあるまい。」

「私は何んとも思はないね。本當にしや。死ぬなア壽命だ。何んぼ醫者の藥でも壽命は動かねえからねし。」と腹をかゝえて高々と笑上げて、その涙を溜めた目を冬三に向ける。

「冬三あんこ、何んとしたぞ。何時會つても影薄いなア、好い若い者が何時〳〵まで豚のがんがくでもあるまい。些とシッカりしろちえや。」

「何んても好いよ。何時でもあんな事ばし云つてる。」と冬三は厚い唇を尖らかして、赤くなつて俯向

いた。

「お吉の方は何ぜうした。主の云ふ事を聞いたゞかな。」

「俺ア知らねえ。」

「憤るな、憤るなよ。全體主ア吝いから駄目さ。情婦は握り拳で出來ねえ。半襟の一掛けも與んで見ろよ、譯の無え事だ。貯めて置いた我得金を出すなアこんな時なんだぜ。」と眼を細くして、面白さうに揄揶つて居る。

「馬鹿婆ア、何吐すんだ。」と冬三は小聲で獨りブツ／＼云つて居る。

お作婆はそんな事に御遠慮が無い。「それに主は一體に氣弱いから駄目だ。まア奴等ア家見ろよ。玄吉一人が殿様の胎でもあんめえ。何んぼ總領だッて餘りと云へば方圖のあつたもんだ。自分ばり木の股からでも生れて來たやうな面付してけつかる風が、俺アには面白くねえ。何故グン／＼云つてやんないのだかな。」

「そいは何も俺の知つた事で無え。」

「知つた事でねえ？ そりや主しが腑甲斐ないからだ。俺もこの家の倅だからつて威張つて見ろ、それて好かんべえ。四の五も無い事ッた。」

「俺ア最う行ぐよ。」

冬三は路傍にクッ／＼して居る豚どもを呼集めて、厩の方に歩き出した。

「あれだもの。一生冷飯喰ふやうに出來てやがる。」と陰から惡口を云つて居た。

「それぢや。」と僕も行過ぎやうとするのを、婆さんは又捉いて、

「ぢやな先生様、黒瀧さ行つたら、嫗さんに好い加減に目繰見ろと云つて下んせよ。」

「本當に云ふぞ。」

「好がすども、誰が云ふんでもない、お作が云ふんだ。本當に云つて下んせ。そいから河原町の方だがな。」

「最う好いよ。」と僕は歩るき出した。

僕の後姿を見て、婆はアハ／＼大口を開いて笑つて居る。

黒瀧の病人は相變らず好くない。滲出液はもう第二肋間まで昇つて居る。心音も微弱である。病人はそれでも强情を張つて爐傍を離れない。埃汚れた綿入れは汗にむれて、傍へ寄るとプンと臭い。未だ滲出液を取る氣になれないかと聞けば、白い目で額越しに僕を見上げて何んとも云はない。老爺は爐傍に膝小僧を揃えて、鉈豆の煙管にパフ／＼煙草を吹いて居る。これ以て知らぬ顔だ。

この頃では病人も老爺も餘程僕を迷惑がつて居る風である。

「先生様この頃はとろぺつ惡塞はするし、それに息が苦しくて臥ても居られせん。何んとかなんねえも

のでがすかね。」と病人は染々訴ひて居た。滲出液が化膿し初めたのかも知れぬ。別に藥はないから默つて居た。

すると又、「あゝあ、俺ア死ぬんでがすかね。先生様もお醫者様でがすべ、お醫者様ならこの位の病氣癒されないのすかね。」

「だから事そ、廣く見せたら何うだ。河原町にも醫者はドッサリある。」と云つてやると、老媼は皺だらけの爪の汚ない掌を顔に當てゝオイ／＼聲を立てゝ泣き出した。死にたくないと云ふんだ。

それでも老爺は到頭僕の歸るまで默つて何も云はなかつた。

黒瀧を出る頃は最う薄暗かつた。夜氣は涼しく凝つて、水のやうに肌に爽かである。何所の叢でかチロ／＼と地蟲が鳴出した。

五兵衛の水車場近くまで來ると、そこの閘堰に豚が未だグウ／＼鼻を鳴らして居た。

無論冬三のだ。それでは冬三はと周圍を見廻はすと、二三本押覆さるやうに生いた川柳の下に跼んで誰かと話して居る。僕には氣が付かぬらしい。

「冬三さん。」と呼ばれて、喫驚した顔を此方に向けた。

「未だ居たのかね、何してるんです。

「え、なァに。」と甚くとちりながら、ウツ〳〵出て來るその後から、矢張り家に來る仕事弟子のうちにてお吉と云ふのが、それも極り惡るさうに出て來た。

何うせ見付けられたと思つたのだ。

「お樂みだッたんだね。邪魔をして惡かつたね。」と云ふと、

「え、何んてそんな事、今來て些つと話して居たばかりでがすよ。」

「何うても好いさ。」

「本當だ、なァお吉。」と冬三は困り切つてお吉を味方に取らうとする。

お吉は鼻の低いコマチャクれた顏をしてたゞ點頭いた。虎之助と云ふ水吞百姓の娘で、まだやつと十五か十六ぐらゐにしかなるまい。

翌日はこちらから一本杉に尋ねた。玄吉君は出掛けて留守だが、皆がすゝめるゆゑ入つて待つて居た。町家造りの北口の無い家で、薄暗い座敷がたゞ二つだ。それと見世に疊を敷込んで、そこが家族の棲居になつて居る。壁の眞黒な木柱などはもう歪んで居た。奥の床の間には支那渡りの宮脈軸をかけて、その前には恭しく三寶に神酒德利を飾つてある。患者は云ふまでも無く田舍の女子連で、葭簀張りの掛出しの上に四五人寢轉んで居た。枕を借りてグウ〳〵日當近くに眠つて居るのもある。

竹屋ダンポの奥樣と云ふのは、もう汗クタになつて性根のない洗駁しに紺絣の着物を裙長くズル〳〵

と着て、地木綿の帶をだらしなく結んで、後から横紐が何かをぶら下げて居た。目性の弱い聲の低い、氣難らしい人だ。僕にも些いと挨拶したゞけ、俯向いて田舍老爺の背中に黏取りして居た。

「まア此方が何んぼか涼しがす。こッちへお出なんせ。」と徳四は艾を置掛けて居た客を打遣つて、自分を見世の間へと案内した。

こゝは猶ほ暗らい。もとは鹽物商ひでもした家らしく、壁は輪取つて汚れ、柱や板敷は鹽に濡れて居る。疊も眞赤に燃けて、そこここに心が喰出して居た。

往還に向いた格子近く、萌黃羅紗の覆布をかけだ机がある。玄吉君のだ。机の上には第一に鐵刀木製の顯微鏡の箱を置いて、その傍には試驗管やら色々の試藥やら硝子盃プレパラアト器、總てそんな物がキチンと置並べてあつた。

本も可也ある。内科、外科、その他の成書を推く積重ねた上に、須氏の解剖圖譜、組織書その他金綠の原書も四五冊ある。

「あア貴方が石岡さんに御出なさる先生ですか。何うです御商法の方は、田舍ですから然う思ふやうな程の事はありますまい。」と自分の昔を忘れて大きは口分である。

「僕等なんかまア藥屋の氣で居ます。」

「然うでもありますまいが、これて醫學と云ふ奴は餘程難かしいものと見えますな。あれを見て下んせ。去年から彼是百圓近くも本を買はせられたが、本當にやる日になると中々あれ位ぢや追付かないと云ふ

んだから恐しいもんてがすな。あれを皆暗記て覺え込むまでが一骨で御坐りすべな。」

「顯微鏡は何倍てすか。」

「六百倍とかてがす。」と内身立つて自慢そうに蓋など明けて見せて、「これ一つで八十六圓ですからな。これが無くちや勉强か出來ないと云はれて見ると、買つてやらないと云ふ譯にも行かず、本當に生優しい事ではがァせんな。大抵の身上は修業ばかりに入れ揚げて了ひます。」

「何も彼もお出來になる身代だからてす。中々僕等ぢや思つても追付きません。」

德四はズル〳〵と涎を啜り込んで、「然うでも御ざりますまいけど、本當に金のかゝる學問てすな。時に、失禮てすが貴方は何方の御出身て。」

「僕は殆んど獨學てす。」

「獨學て出來ますかな實地の勉强が。」

「出來ないても爲方ないてすからね。」

「然う云へば然うですけど、これて人間の生命を預かる商買なんてすから、粗末な事は出來せんしな。」

と得意さうに話して居る所へ、「暑い〳〵。」と叫びながら、玄吉君は外から歸つて來た。五ツ紋の絽羽織に仙臺平の袴など着いて、車に乘つて歸つて來た。德四は最う僕の事など忘れて行也飛出して迎上げた。

「お父さん、車屋へ氷でもやつて下さい。」

「はい〱、今買つて來てやりすべ。」

「早くてす。冬三は何所へ行つた。暑い所を驅させて氣の毒なんだ、早く買つて來てやつて下さい。」

「そんなにまア息を切らして、この暑い所を歸つて來る事ア無いから、最少し涼しくなつてから歸つて來れば好いに。」と德四は吾子の團扇など取つてやる。

「だッて、窮屈てならないんてす。何か喰べて行けの何んのとシッコク攻められるのが煩さいし、それに第一こんなに長く座つて居た事が無いから膝の骨が拔けるやうなんて、耐りません。」

「はゝはゝゝゝ、些つたア懲りるさ、何んぼなんても然う書生風のゾンザイても困るがな。」

「田舍の人はくどいからね、話が。」

「さう、田舍〱と云ふなよ。主だつて田舍者の子てないか。」と最うホク〱喜んて居る。

「僕ア矢張り田舍は嫌ひだね。」

「誰だッてしや。在鄕て暮らすより東京て暮らす方が好うがすもの。だから早く俺も東京さ行つて暮らすやうにして下んせ。」

「お父さんのやうな、そんな人を東京へ連れて行つたら大變てせう。第一その大きな聲ばかりても耐らないね。」

「何んてしや。その時はその時て又チャンと御隱居樣になつて見せすのしや。」

「何うだかな。」

「本當てがすよ。」
その中に玄吉は輕るい浴衣を着換えて出て來た。
「いや、失敬しました。今日は親類廻りだなんて煩さい御用を言付られたもんですから。暑かつたですよ。」とハンケチを出して顏の汗を取つて居る。
「冬三は何うしました。昨日云付けて置いた停車場の方は最う好いのかしら。」
「何んだか知らないけども、今朝暗いに起きて城下へ行くッて出掛けたやうです。」
「何時まで何をしてるんだ。」
「もう歸つて來すべ。」
「困るなア那奴實に暢氣なんてすからな。」仔細らしく鼻に皺を寄せた。
「本當に玄吉てば氣が急しくて困る。貴方に歸つて來られると、家の中が戰になつたやうだ。」と德四は不足らしく云ふ。
「當り前さ、貴方達のやうな、そんな暢氣な連中と一緒にされて耐りますか。」
「ほ、又小言だ。」
「ダンポサン、何うか俺のを燒いて下なんせ。山根に歸るんで道が遠いんだから。」次の間から療治客の一人が聲を掛けた。
「ホラ、あちらからもだ。」と笑ひながら德四はアタフタその方へ驅出した。

處へ孫娘らしい十二三の赤ッ毛に手を引かれて庭口から入つて來た女年寄がある。目が惡るいと見えて、竹の枝を杖いて居た。雀斑の汚ない、小さな婆である。

「今日は、若い先生は城下からお歸んなすッたべかねし。」とそこへ來て小腰をかゞめる。

「お、お崎婆さんか。辛つと今歸つて來した、早く行つて見て貰はんせ。」

「ぢやはア誰方（どなた）も御免なすて下なんせ。」とそちこちに頭を下げながら、汚れだガーゼで目を拭き〳〵入つて來た。

玄吉君は僕の居るのに些とトチつた風であつたが、それでも幾らか得意さうな樣子も見せて、

「實は君、近所のものなんですが、切りに頼まれたから二三日前から療治してやつてゐるんですが、何しろ不攝生ですから、それが實に閉口します。」

「病症は何んです。」

「盲膜炎だらうと思ふんですが、何しろ久しい間打遣つて置いたもんて、餘程症候が進んで居るやうです。全體なら手術をすると好いんですがな。手術と云へば僕の方の三宅先生てすがな。盲膜炎の手術なぞやらせると實に旨ひもんてす。パアセントなど取つて報告以上てすからな。」と何ぞと云ふと直く學校の自慢てある。

「はい、若先生、御免下さい。」と病人が入つて來た。

玄吉君は腮を突出して汚ない患者を見下すやうに見た。

「何うだね、痛むかね。」

「はい、お陰樣で痛むのは留りしたけど、頭のこゝん所が痛くてなりませんてがす。」と瘦せた頸筋の耳後のところを押して見せる。

「便通はあるか。」

「はい？」

「通じさ、通じはあるかね。」

「はアお通じてがすか。二三日前から結して居りす。」

「結して居る？それだから頭が痛むんだ。藥は飲んで居るかね。」

「は、頂いて居りしてがす。」

「あの丸藥の方を。あれを飲んで居て通じがないとは可笑しいな。」

「何う云ふもんだか、この頃餘計無くなつたやうて御坐りす。」

「そんな事はあるもんか。」と患者の蒙昧をせゝら笑つて、僕に、「ねえ君、芦薈丸を十粒もやつて居るんですもの、便通の無いと云ふ方はありませんな。」

「リチネてもやつて見たら何うてす。」

「リチネですか。」と玄吉君は幾らか自分の矜りを傷けられたので、正直な人だけ、その不快さが直ぐ顏に出る。

「僕は何うもリチネが嫌ひでしてな。眼科は大抵芦薈丸ですよ、大學でも何所でも。」と目を急しく瞬いた。

「然うですかな。」と僕は默つた。

「ぢや君、些いと失敬します。」と僕に斷りを云つて、點眼瓶、耳受け金盥、ガーゼ、脫脂綿、スプギイ、形の通りの眼科道具を机の上に擴げ立てた。

「おい誰か、湯を持つて來ないか。コップに水と。」

「あれお湯と水とを持つて來いとさ、おそよ、おそよは居ないか。」と艾を取つて居た德四が聲を掛けた。

そこに待合せて居た田舍の婆さんが、おそよに代つて湯や水を持つて來た。そして、閾際に突立つて療治の爲振りを眺めて居る。後からも追々見に立つて來た人がある。

玄吉君は昇汞水に指先を消毒したり、綿を濕したり、さも器用さうな手付きで點眼を初めたけれど、見る所では眼瞼の翻轉すら滿足には出來ない樣子だ。

「何うです、この顆粒は。これで好く今日まで我慢して居たもんですな。」と結膜を僕に見せた。

惡しく貧血して結膜は眞白である。

コカインを點して、銀水を點して、それを食鹽水で洗ひ落す。

德四も何時の間にか來て見居たのだ。

「婆さん、痛みすかね。痛むだら痛むと遠慮しないで云ふと好がすよ。」

「は、何有これ位は。」と婆さんは赤くなつて怺えて居た。

「本當に駄目だから、痛いなら痛いと云ふさ。何しろ醫生先生だからがむしやてがすからね。然し全體病氣にはその方が好いんだ、恐る〳〵療治してたんぢやトテも治るもんてないから。」

「本當に然うて御坐りすべな。」と外の輩も感服して聞いて居た。

點眼藥と奄法劑か何かを與へて、療治は終つた。老婆は壁際に凭かゝつて目を休めて居たが、やがし、「お陰樣てサッパリ致しすた。ては先生、又明日上りますから何うかお願申上ます。」と眠いほど長い挨拶てある。

「あゝ。」とばかり、玄吉君は尊大なる物腰てあつた。

暫くして冬三は汗みどになつて歸つて來た。停車場へ使に行つた戻り道で、久しく切れて居た麩を見付けたから、それを買つて背負つて來たから晩くなつた。麩は豚の飼料なのだ。カレイ粉や何か、何れ兄貴の嗜好品を求めにやられたものと見える。

椽側に腰かけて汗を入れて居る間も置かせず、玄吉は座敷から聲を荒立てた。

「冬三、何所へ行つてるんだ、これほど待兼ねて居るのに。」

「そだッて、鉄の好いのがあつたもんだから、それを買ふので晩くなつたのしや。」

「馬鹿だな。主は豚ばかり大事て兄貴の事なぞ何んとも思はない。」

「そんな譯てはがアせんけんど、餘り安くて好い鉄でがすからね。何しろ四十三錢つて俵だもの。」

「馬鹿、本當に主にや手が付けられない。」と呆れて口を噤んで了つた。冬三はケロッとして居る。

（完）

漂浪

岡本靈華

一

十二月の廿三日。忘れない、明方からショボ〳〵と小雨が降つて居た。此朝、修一は新橋の一番で東京を立つた。

前の晩に藏書を根こそぎ賣拂つて、辛つと旅費を工面したが、それでも汽車賃と辨當代を取除けた殘りで、メリヤスのシャツ一枚だけ新調した。襟垢の冷たい紺絣の袷の下に其れを着て、三等室の隅ッこに肩を竦めて居る。折々骨から泌出るやうな胴顫ひが、瘦せた體を戰かせた。

窓には見送人が、ゴチャ〳〵集つて、内外で賑かに笑つたり話したりして居る。無論渠の見送人なぞ一人も無かつた。プラットホームの軒柱に、霧のやうな雨が風に飛沫いて、向ふの荷物車は、ギッシリ雨桐油で圍つてある。それが黑牛の群のやうに煙つて見えた。

「草深い田舍なら、或は僕等の安住に適するかも知れん。僕は最う東京に於ける一切の關係、一切の記憶を捨てゝ、柄相應な自分の墳墓を發見しやうと覺悟した。恐く此世中で最も寂しい最も廢れた境地が、最も親しい僕の臥床だらう。」恁んな手紙を友人に出して、渠は是から國へ行くのだ。年來の目的を捨

て、先輩も朋友も捨てた意りである。

修一は沁々落人といふ寂しい感じに胸を揺られた。

二

列車が動き出すとともに、然うした寂しい感じは直に心の奥深く沈んで、渠は差當り目の前に起つて來る雜多な事物に氣が移つた。窓硝子に飛沫は煙つて、外の景色は見えぬが、車内には樣々な人の顏がある。男の割に女の甚く不器量な夫婦や、若い色の白い娘も居た。會社員らしい男がマントの襟を深々と立てゝ、中折の鍔の蔭で、最う睡る仕度をして居る。それを見ると、其の暖かさうな身裝がやたらに羨ましかつた。丁度冬期休暇が始まつた所ゆゑ、制服や紺絣の學生が澤山乘込んで居た。娘の顏をば、又しては目隅からチラ〱やる皰面の學生の樣子を、修一は又、意地惡に凝と見て居てやつた。

何所あたりからか、行先の事を考へ出した。國へ歸つて、是から落付かうと云ふ家の事――落魄の身を提げて、郷里へは何としても歸る氣は無いので、先は左も右く、當分叔母の所へ轉込む意りに決めて居た。長く東京に居たから、親類へは皆無沙汰になつて、叔母の家も今度が五年振である。

叔母の家に、娘が一人ある筈な事を渠はフイと思出した。幾つになるか其れも知らぬが、何でも自分の直ぐ弟か、其下の弟かと同年位と覺えて居る。すれば、多ければ廿歳、少ければ十八と云ふ事になる。名は澤である。けれど、顏、姿には些とも記憶が無い、記憶が無いと云ふよりも知らんのだ。五年前に行つた時はホンの些つと、半日も居ない位で歸つたので、其時逢つたか逢はないかさへハッキリしない。

其以前となつては、自分も腕白盛りだし、先方は尚更、髪も未だ本當に生へ揃はない位なものだ。實にボンヤリして居る。顔は叔母の顔から辿つて、極くおぼろげに輪廓位を想像されぬ事も無いが、それも殆ど形を爲さぬ。修一は何うかして、其顔が大概な所で可いから組立てゝ見たくて耐らなかつた。續いて娘の事が妙に氣に懸る。

ふいと「馬鹿らしい」と氣が付いて、今迄思ひ續けた聯想を、一度に引くり覆したりしたが、矢張次第に國へ近くなるに從つて、譯も無く其れが胸をそゝつた。有體に言ふと、未だ何んな娘か知らぬが、修一は其お澤さんに戀して見たかつたのだ。

○○の停車場を下りると、其所から叔母の家へは二里程、赤禿な岩の多い小丘に寄せて、鄉からは四五丁離れた一つ家である。丘の裾を庭造りにして、小さな池なぞ堀つて、小健な叔母は毎日其手入に忙しい。夏は殊に好い。秋になると、近邊の山に茸が出るし、柿や栗の木なぞも澤山あつた。其所で取れた果物や初茸を、よく小畚に入れて、男に持たせて渠の家へも下れたものだ。田地持て、極めて暢氣な家である。

第一男主人の無い事が、修一には何より有難かつた。叔父が何んな人だつたか、殆ど記臆しない所から推しても、餘程前に死んだものらしい。辰雄といふ長男が、修一と一つ年上て、中學の時分は一緒てあつた。今は福岡の大學に行つて居る。二男の方も此夏金澤かの高等學校へ入つたやうに聞いた。那所ならば周圍も暢氣だし、究屈な人も無いと云ふが、當初に此所と修一の撰んだ動機である。

今日行くと云ふ事は、豫め手紙でも言送つてある。事情も薄々漏してあるし、氣の捌けた叔母だからとは思つたが、愈々其所へ押掛けるとなると、有繋に先方の想はくが氣遣はれぬでも無かつた。何よりも、其の見窄らしい裝が耻しかつた。で、午後の一時に汽車を下りた渠は、それから一里歩いて、途中の村端れにある松樹立の深い、或る神社の境内へ入つて、拜殿で日の暮れるのを待つて居た。可加減四邊が暗くなつてから、向ふへ着かうといふ意りだ。枯葉が風に飛んで、サラ〳〵と音して境内の砂地を轉がつて居る。此所迄來ると、汽車の中で考へて居た娘の事は忘れて了つて、修一は唯叔母が自分を迎へる其待遇のみ、切りと氣に懸つた。

冬の日短い盛り、四時には最うポツ〳〵暮れかゝる。幸に雨は歇んで居たが、其代りヒユウ〳〵乾田を吹放す晩の風に顫へながら、只歩きに叔母の家に着いた頃は、星が砂子のやうに空に光つて居た。相變らず愛相の好い、フツクラした叔母の聲を聞くと、修一は活返つたやうに嬉しかつた。直ぐと座敷に通される。交趾の火鉢に赤く火が起つて、鐵瓶はブツフツ湯氣を上げて居る。

待つて居たとか、雨が降つたとか、汽車の時間が何うだとか、そんな事を立續けに言懸けながら、玉ボヤのランプの火をグイと捩上げて坐ると、叔母は

「さて、」と改まつた口調で、挨拶一通り濟した。

修一も久々の口上を述べた。寒い外氣に曝されて來た頰邊が、急にポツと熱を持つ。それでも兩手で膝を抑へて、肩を固く坐つて居た。未だ左程に延びては居ない意りの頰鬚が妙に苦になつて、幾度も手

をやつちや頤のまはりを撫でる。

「畷が寒いて、何ないにかお肚が空いてづら。今直ぐと御飯上げますてね、それにお風呂も何だし、」と叔母は茶を進めながら、「けど、大變貴方お痩せたのン。」と言つて、熟々修一の顏を見た。

「然うですかな。」

「お痩せた。私は最き一目見ると然う思つたぞな。第一目が落込んだし……けど、お父樣に段々能う似てお來てることとな。」と笑顏になる。

「然うですかな。」と又言つて、修一も笑つて居た。

「お幾年だつたか。」

「廿五、最う直ぐ六てす。」

「然う〳〵、家の辰と、一つ貴方の方がお下だつたね。」

それにしては出世の遲い、と云つた蔑視の色でも目に動くかと思つて、注意したが、そんな氣振は少しも無かつた。

「油畫の方が目的だそなが、體がお弱くちやお惡いね。何をしても體が資本だて……」と思遣の深い顏て言ふ。

此時、「あの、お風呂を。」と次の間の紙門の蔭から誰か言つた。娘らしい前髮がチラリと火影に動いたので、修一は我知らず胸をドッキリさせた。

「ほゝ、お風呂が明きましたそな。」と叔母は受取つて、「さあ、まあ緩りお風呂でも入つて、後直ぐと御飯にしますでのン。一日汽車で疲れて、加之に寒い所お來ただて、能う溫まつてお來てやす。」

「おや、失禮して頂戴しませうか。」

「さあ〳〵何うか。何を、お浴衣を。」と振向くと、紙門の傍に其れが持つて來てある。

修一は暗い所へ着物を脫いて、其浴衣を引被けて湯殿へと行つた。叔母が一緒に立つて來て、案內してくれた。

此邊の風呂は所謂地獄風呂といふ奴、湯槽の下に地に橫穴を穿つて、其れから焚くやうに出來て居る。火口は湯殿の外て、下女が其方から壁越しにお加減を問いた。

「結構です。」とそれに答へて、渠は手拭を握つたまゝ、頸までズップリ漬りながら、凝と動かずに居た。動くのも厭だ。何とも言へない好い心持てある。そして、胸の中は只滿足と懷しさて滿たされて居る。何から何迄懷しい。叔母の顏も、座敷も、火鉢も、浴衣も、湯殿も、一つとして快感を與へぬものは無い。

すると、又娘の事が心に浮んて來た。最き浴衣を持つて來た女が、屹度澤子に違無い。下女なら臆面無く顏を出す、顏を出さない所が娘だと思つた。其外取止めも無い事を種々考へた。其れらしい聲ても爲ぬかと、時々耳を澄して見たが、叔母が何か言付ける聲のみて、バタ〳〵と七厘ても煽ぐ團扇の音が、止つちや又聞えて居た。

湯から上つて、身骨の蕩けさうな好い氣持になつて、座敷へ歸つた。クシャ〳〵に押捏ねて置いた着物が、疊んであるなと思つたきり、別に氣も付かず取上げると、手觸りても直ぐ分つた。別の着物が出してある。未だ新しい綿入であつた。

修一はヒヤリとした。ふいと厭な氣が射して、着物を摑んだまゝ、着やうか着まいかと迷つて居ると、叔母が來た。

「何うだね、恰好いすまか。貴方には些と裄が短かゝ無いか。」と言ふ。

「替へて下すつたてすか。」と渠は叔母の顏を讀まうとした。

「這方は寒いて、到底も袷おや凌げんてのン。それに那りや大分最う何し居るやうだて、一遍洗濯して布子に仕立直すわね。其間まあ其着物着居いてやす。福岡の辰のてすよ。」

物言が何所迄も心身で和しいので、

「然うですか、そりや濟みません。」と禮を言つて、修一は早速其れに手を通した。

着更へて、帶を締めて、キチンとして座に返ると、體が正直輕くなつたやうだ。

「おゝ、些とも短かゝ無い。キッカリだ。」と言つて、叔母は裾の絲屑か何か撮んだ。

そこへ、澤子が膳を運んで來た。

「お來でやす。」と聞えぬ程の聲で、耳孕まで眞赤に染めてお辭儀したが、それきりコッ〳〵と行つて了つた。顏も能くは見せなかつた。お給仕に來るだらうと思つたが、其晩は到頭姿を見せずに了つた。

寢てから、修一は其態度を恁う解釋して見た。眞赤になつたのは、無論意味無い羞耻に過ぎない。けれど、少くとも自分に對ふ感情が、那れて全然冷かぢや無い事は分る――

三

翌日は幾度も機會があつて、渠は澤子に逢つた。その度每、仔細に顏から姿、體止などに氣を付けたが、何よりも先づ其の不器量な顏立に、少からず失望させられた。

澤子は思つたよりも醜い娘であつた。叔母の顏から想像して、大概何の位には見られるだらうと思つて居たのが、餘程外れて居る。成程似ては居る。色は白い方で、目付も口元も、如何にも此一家の特色といふ點を表して居るが、其の特色から來る變化の妙を謬つてるのだ。第一目が餘りパッチリし過ぎる。瞳の光が頰までも流れて明るいので、何うかすると飛出たやうにも見える。唇が厚く、口尻に稍締り無い所があつて、そして、女にしては廣過ぎると思つた。

背は低くは無い。肥つても居ず、且つ痩削でも無いから、是丈は誰の目にも非難無いが、肩が立つて、少し丸背だ。それから、巾の無い下頤へ響かすやうな聲、此聲で修一は以前先生の家に居た、それは醜い、伊豆生れだとか云ふ下女の聲を思出した。この聯想が甚だ床しみを殺いだ。

ては、是て澤子に取られた渠の注意はお終ひかと云ふと、中々然うぢや無かつた。矢張何か知ら始終氣になる。何所に居て話聲が聞えても、つい其方へ耳立てゝ、自分の噂でもして居やしないかと思ふ。パサ〳〵と疊に踵を擦らせて、少し腰を振るやうに歩くのが娘の癖て、其の足音を聞付けると、乾度修

一は振向いた。氣に咎めるから、故と振向かずに居る時でも、其音が行つて了ふ迄は肩口がモゾ〳〵するのだ。そして、顔を合せる度に、強いても何か話しかけては、自分に對する娘の感情を讀まうとした。

「然し、戀する女ぢや無い。」と獨りで能くそんな事を考へた。

澤子は意外に氣のさくい娘で、二三日經つ内にスッカリ修一に馴れて了つた。叔母の氣質を其まゝ受けて、能く語り、能く笑ふ。些とも心に拘泥の無い、無邪氣な、小娘らしい、誰にでも懐かうとする女である。笑ふと、瞳の光が顔中に流れて、有繋に大きな口へは袂を當てるが、最う始めての時のやうな赤くなる事など更に無くなつた。恁うなると、修一は又「可かん、處女の謹みといふものが無い。」など考へて見る。然し、無論惡い氣は爲ないのだ。

顔さへ見ると、何か話ても爲懸けて引付けて置きたいから、つい話題が無いと、

「澤さんは何が一等お好きです。」恁んな平凡な事も言つた。餘り立入つた話は、氣が射して渠には出來ない。

「食べる物?」と澤子は問く。

「いや、爲る事です。譬へば裁縫とか、活花とか、讀書、然う云ふ物で……」

「私、何にも好きな物無いなン。」と言つて笑つて居る。

「裁縫も嫌いてすか。」

「嫌ひぢや無いけれど、爲事に掛ると、私直ぐ睡うなつてなン、毎でもお母さんに叱れますがな。」

修一は微笑しながら、「ぢや小說などお讀みですか。那云つた物はお好きですせう。」

「讀んどると矢張睡うなつて、雜誌など兄さんから送つて貰つても、一度も本當に讀んだ事ありませんわな。每でも繪だけ見てお終ひ。」と言つて、耳へ被さる鬢毛を煩さゝうに兩手で押上げて居る。フックリした腋下まで些い〳〵覗かせる。「けれど、私お話なら好きだなン。小說のお話でも、何のお話でも可いて、何時迄でも聞いとりますがな。」

「ぢや、何か面白いお話爲ませうか。」

「へ、爲ておくれやす。每でもあの、三浦さんて家にお居てます人が、雜誌のお話や落語家やしてお下れますがなン。そりや面白いぞな。土曜日の晚など、十二時までも無理と聞かして貰ひます。」

「ほう。」と渠は感心したやうな顏をして、「三浦さんて何ういふ方てす。」

「村の高等の先生てす。去年から家の離屋を借りてお居てますけど、最う又直きに學校が始まるて、お來てますわな。氣の輕い、好いお人てすぞな。」

是を聞くと、修一は急に面白く無くなつた。其の三浦といふ男、彌張此娘の機嫌を取つて居るんだと思ふと、小面憎かつた。

後て、其男の事を考へて、屹度輕薄な、女たらしの巧い奴に違無い、小學敎員などと云ふものは、得て然うした人間が多い、品性の陋劣なものだと思つた。何有、談話なら、小說でも落語でも自分の方が澤山知つて居る。繪でも可い、繪なぞは些つと女の心を引き易いから、一つ其奴の鼻明してやらうかと

も考へた。然し馬鹿な事だ、小學教員と腕押でも無いぢや無いかと、直ぐ氣耻しくなる。

其後澤子が、

「修一さん、今晩お談して下れますかな。」と言つても、「えゝ、然うですな……」と、爲るのか爲ないのか、毎も煮切らぬ返事ばかりして居た。

一度、修一は美術談をしてやつた。西洋の名畫の話や、古代美術の話や、それから名家の苦心談など取交ぜて、成可く言葉を碎いて、素人にも分るだらうと思ふ程に簡略に聞かせてやつた。

所が、澤子はポカンとして、更に面白く無い顏である。時々兩手で欠伸を抑へては、膝動かしたり肩搖つたりして居る。

「何うです、面白く無いですか。」と、修一は中途で詰らなくなつた。

「何だか、難かしいお話だなン。」と言つて、澤子は目をパチ〳〵させて居た。渠は張合拔がして、其きり話を止めて了つた。

四

三浦といふ男の來たのは、一月の末であつた。此所から七八里ある別所村といふが在所で、何か家に不幸があつた爲めに、今日まで休勤して居たのださうだ。年輩二十二三の、頭の大きな、肩骨の窄脫けた男で、小さな顰んだ目に眼鏡を掛けて居る。何にしても、當初から修一は厭な奴だと思つた。

成程、三浦は此家族と餘程親んで居る。血續きの自分よりも、却て彼奴の方が馴染深いやうに修一に

は思へた。修一の方は滅多に勝手なぞへは立入らぬやうにしてるのに、三浦は管はず行つちや冗口をきいて居る。お菜の小言を言つたり、又自分で水を汲んで來たりする。時々下女にまで調戯ふものと見え、一「あれ、先生からそげな事して可いだかね。」なぞと、大きな聲で喚くのが聞えた。すると、叔母も澤子も一緒になつて高笑ひである。何だ馬鹿々々しいと、座敷で修一は一人て苦々しがつて居た。

土曜日の晩には屹度澤子は離屋へ行く。例のお話を聞きに行くのだ。そして、澤子の笑聲が全でのべつに聞えて來る。

男は笛が自慢と見えて、直きに其奴をピイ〳〵始める。明笛だ。いやに氣取つた吹方をするらしい。凝と恁う首を据ゑて、娘の方を折々チラ〳〵見ながら、器用な指先を穴の上に躍らせて居る格好が見えるやうだ。修一は出來ないから、笛の事は餘り知らぬが、何でも六段とか云ふのを一番能く吹くと思つた。それを又、時とすると、叔母までがヒヨク〳〵出掛けて行く。行懸けに、

「修さん、貴方も離屋へお來てんか。一人ぢや退屈づらに、些と笛でも聞いて來ませう。」と聲を懸ける。

「は、私は笛は嫌ひですから、何うも此所に居ても、耳がヂン〳〵云ひます。」

叔母は笑つて行つて了ふ。

「フン、那んな事が女なぞの氣に合ふんだ。那奴は男の威厳と云ふものを知りやがらん。」と恁う修一は嘲み笑を故々唇へ上せて見た。

そんな風で、三浦が來てから、澤子に對ふ態度も急に餘所々々しくなつた。妙に反撥的である。娘の方は相變らず無邪氣に笑顔を見せたり、馴々しく話しかけたりするのを、這方は毎ても故と冷かな遇ひ振をする。そしちや、後で物足りない思をして居た。終ひには澤子も「何だ知らんが煙い人だ。」と云ふ目で、渠を見るやうになつた。

修一は其時分叔母に請つて、美術に關する書籍を一二冊買つたので、其れを毎日座敷に寐ぞべつて讀んで居た。そこへ澤子が來る事がある。

「何の御本です。繪が付い居りますかな。」と言つて傍へ寄る。けれど、其の樣子が如何にも究屈さうに、笑つても壓付けたやうな笑ひ方をして居る。

すると、直ぐ厭な氣になつて、「餘り退屈だから、俺を暇潰しの對手にする意りなんだ。」と僻う片意地に取つた。

「繪ですか、有ります。」位で素氣なく答へて居る。

「見せてお下れやす。」

「御覧なさい。」と書物を押してやる。

全て話が彈まない。綺麗な挿繪が澤山あるから、其れを繪解てもしてやれば可いのだが、何も強いて甘心など得たか無い、三浦とは違ふ。」と云ふ意りだ。一つは說明したつて分らないと云ふ所もある。て、

默つて遣方から其繰られる繪を見て居る丈だ。しかも、時々上目を顏にやる。

澤子は眩しさうに顏を俯向けて、急いでバタ〳〵と頁を返して了ふ。一枚や二枚は繪の所も飛ばして行つて、終ひに、

「有難う御座んした。」と言つて、唇でもピシャ〳〵鳴らしながら行つて了ふのだ。後は最う、修一は書物は讀めない。樣々な事を頭に浮べて居る。三浦と自分と比べて見て、到底那は行かんと思つて、三浦の態度を、やたらに賤しく貶しめて見た。

一度、叔母に恁んな事も言つた。

「叔母さん、あの三浦と云ふのは何ういふ男です。何か家と關係でもあるんですか。」

「いゝえ、知らん人ですよ。けど、那してお頼みた事でもあるし、家も男氣無して、無用心だし寂しいしね、丁度好いと思つて置いて上げ居るだわね。氣の置けん好う出來た人です。」と言ふ。

「然し、身元は確かでせうな。」

「え、そりや最う、在所も可也な家らしいし、村でも評判が好い方だわね。」と何所迄も信用し切つてる口振である。

修一は不愉快な顏して、

「そんな事は何方でも可いが、全體他所の人なぞ、やたらに家へお置きなさるのは好く無いです。第一

家庭が亂れますからな。辰雄君だつて、屹度好いとは言ひますまい。」この辰雄君を殊に利かせるやうに言つた。

「私だつて其所は氣い付けとりますがな。けど、――那の人なら、別に心配せる事もあらまいで……」

「まあ叔母さんが被居るから、無論大丈夫ですけれど、是が女の人ばかりだから、尚更他人を入れるのは注意しないと可かんですよ。」

然し、叔母は極めて無頓着に呑込んで居た。「澤さんを第一氣を付けなさい。」と、其れを言ひたかつたのだが、有繋に氣が射して、口へ出さずに了つた。

で、段々此家が不愉快になつて來た。身内の自分よりも、他人の三浦の方が重んぜられて居るやうで、甚だ面白く無い。始めは氣の捌けた、物分りの好い、昔の人には珍しい位に思つた叔母が、此頃は惟證止のない人らしく見えて、更に感心されなくなつた。叔母は一體、三浦と澤子を何う思つて居るだらう、若い男女が那の通り接近して、必ず間違など無いものと信じてるのだらうか、と恁んな事が齒痒くなる。女なんて云ふものは、堅いやうで極く薄弱な者だ。男の方から弱味さへ見せて懸れば、大概な女は釣落されて了ふと云ふ。三浦のやうなが、其の幾でも、弱味を愧無しに見せ得る奴だ。そして、澤子は又、那の如く無邪氣な、無教育な、やたらに人に懐しまうとする女――

「年頃ぢやあるし、最う今だつて何う成つてるか知れやしない。」と、そんな所まで修一は疑ひ出した。

五

最う修一が此所へ來てから百日近くになる。寒い北風が東風に廻つて、座敷の椽側へ射込む日射が、何うかするとビックリする程暖かい日もあつた。何しろ梅は最う遲いし、山の彼岸櫻がポツ〳〵蕾にならうと云ふのだ。

此間渠は少しも外へ出た事が無い。終始家にばかり引込んで、前の山位なら時々運動に登つて見たが、近い町へ一度出掛けて見るぢや無かつた。「町へ行つたつて何が有るもんか。東京の事思へば何うせ寂しい。」と然う言つて居る。町なぞ何うても可いが、此所に居て、家へ一度も行かずぢや惡いからと、叔母は其れを心配した。

是迄にも一二度言つた事があるが、又しても其事を言出す。

「のン、修さん。貴方にも了簡ある事づらけど、折角此所までお來てたゞに、一遍ぐらゐ家へ顏をお出しやす。手紙ぢや何度も申し置いたけど、お父樣も乾度お逢いたからすに。ね一遍歸つて、又、這方が好かつたら何時でもお來てやす。それて無いと、私もお家へ惡いに……」と言ふ。

前には別に感じも無かつた言葉だが、今度は非常に不快に聞えた。如才無い叔母の事ゆゑ、無論氣振にも見せぬが、慥かに以前とは言振が違ふやうに取れた。最う置き飽ねたのだ。乾度然うだらう——然し、渠は口ては素直に恁う言つて居た。

と、「おや、此頃の内に一度行つて來ませう。暖かにも成つたし、外を歩くも心持が好いてすから。」

「然うお爲りや、私も本當に安心します。其上て遣方が好かつたら、又何時てもお來てりや可いてね。私が方は些とも迷惑せやせんて。何の貴方、此節ぢや日も長うなつたし、朝出りや二時頃にや何方へも行着けるわね。六里――近い七里て云て いますてのン。」

「ブラ〳〵歩くと、丁度好い一日旅てす。」

「何日お來てます。貴方が然う云ふ氣にお成りや、一日も早いが可い。乾度皆なお待ち兼ねだに。」

「日はマア又に爲ませう。そんなに急ぐ事も無いてすから……」と言つたが、聲か顏かに、つい不滿な氣色が見えたものだ。

「然うてすとも、行く段になりや雜作無いてね。」と叔母は急に調子を變へて、後最う勸めなかつた。

けれど、修一は此の失敗のまゝ、何としても故家へ歸るのは厭だから、一日々々言譯を付けては延して居た。終ひには、默つてズル〳〵日を越して居た。此頃になつて、又東京の事や目的の事が思はれて來る。東京へ行く氣には未だ成れぬが、繪だけは修りたい、折角三年なり四年なり修行したのだから、何うかして其道て生活出來る程度まで爲上げたいと云ふ氣が、切に胸に動き始めた。叔母の家は益々居辛いばかりてある。

殊に、澤子と三浦の關係を變に疑ひ出してから、渠の神經は恐しく銳敏になつた。自分でも苦しくて

耐らぬ。土曜日のお話も、明笛の音も、以前と別に變らんのだが、其れが何うも修一には無意味て無い。段々二人の親交が、歩分を進めて行くやうに思へるのだ。

土曜日の晩、離屋て澤子の明放しな笑聲が聞える。相變らず笛は六段だ。然うすると、氣が苛々して耐らなくなつて、直ぐ前の山へ飛出して行く。大概は山向ふの何にも聞えぬ所まで行つて了ふが、時とすると、歸りを竊と離屋の庭先に出る事がある。スタ〳〵通つて管はぬ譯だが、毎でも足音を偸んだ。一度なぞ、フイと漏れて來た言葉に甚く興奮して、胸をワク〳〵させながら雨戸際へ忍び寄つたが、彌張何でも無い冗話な事が分つて、安心して歸つたものだ。

そして、能く澤子の夢を見る。敏感になつた爲めか、此節は一晩中ウト〳〵と夢ばかり見て居るが、其内一つ二つは乾度中へ澤子が入つて來た。やたらに見るから、大抵醒め際に忘れて了つて、後で考へると、全てボンヤリしてゐるのが多い。恁んな夢を見た事がある――

何でも夕方の燈火頃らしい、家の中は最う人顔も見えぬ程に暗かつた。臺所には火光が付いて、叔母と三浦とが肉鍋か何か突付きながら、晩飯を始めて居る。修一は何う云ふものか離屋に居た。直ぐ前にあるランプを點けるのも臆劫て、ボンヤリと暗い中に坐つて居ると、そこへ澤子が御飯だと云つて呼びに來た。澤子は三浦を呼びに來た意りらしい。「御飯だぞな。」と部屋を透した。「はい。」と云ふ返事で、「修一さんかな。」と言ふ。修一は突然女の手を握つて、そして引寄せた。女が聲を立てさうにするから、

急いて耳元へ口を寄せて、何とか色々な事を話した。澤子はビックリして其顔を見たが、別に擦抜けて逃げやうとは爲なかつた。そして、見えぬ筈の臺所で、叔母と三浦とが何かグタ〳〵話しながら、折々目を上げて笑ひ合つて居るのが、這方から見えた――

恁んな夢を見るのは、自分が内心非常に澤子の愛を求めてるからだ、と然う考へて、自分ながら實に淺ましかつた。耻だ、耻だと思つた。

四月も最う末近い或日のこと。晴も好し、風心地も好し、到底家に凝としちや居られんやうな日であつた。修一は唆られる氣持で外へ出て見た、野は最う麥が穗を孕む頃で、林にも、村にも、鮮しい綠が日和に光る。菜の花が咲いて居る。小鳥は輕い羽を風に流して、夥しく群れては麥畑へ落ちた。

蒸るやうな肥土の臭を嗅ぎながら、野田の間を修一は那方這方と歩き廻つた。物皆變つた。境遇の停滯と云ふやうな感じが、切にその胸を煽つた。

ふいと、裏の山の上を見ると、澤子と三浦が立つて居る。二人とも這方を見て、何か話し合つた。渠は直ぐ目を外向けて、知らない風をして歩き出した、やがて別の方の、彼等からは見えない筈の山裾を廻つて、セカ〳〵と家へ歸つて來た。

「何と云ふ好い日和づら。」と叔母は羽織を脱いで、椽側に立つて庭を眺めて居る。

修一は默つて部屋へ入つて了つた。耐らなく不愉快である。アヽ最う、近い内に又何所かへ去らうと

思つた。（完）

本號には田山花袋氏の作物を掲載する筈の處氏近來病氣の爲め捗々しく執筆出來ず終に寄稿を得ざりしは編者の讀者と共に遺憾とする所也。其代り病氣癒ゆるの日大いに會心の作を寄せらるゝの約あるを以て吾等は其日の速かに來らんを祈るのみ

明日

正宗白鳥

（一）

お慶は引窓を開けて、臺所に蹲まり、七輪の火を煽いでゐた。小さい皿には魚の赤い切身が重なり合つてゐる。黑ずんだ狹い三和土の上には、大きな味噌擂鉢があつて、その中には舟のやうに刳られた白瓜が並んでゐる。埃の目立つて白い釣棚には、必要な諸道具がごた／＼と入亂れ、耳のない土鍋には殘飯を山盛りにし、その頂を蠅がつゝいてゐる。お慶は顏を火照し首筋に汗を滴らせ、金網に一つ／＼魚を載せてゐたが、玄關に郵便の聲がしたので、箸を持つたまゝ慌てゝ出て、二通の手紙を拾ひ上げ、宛名を讀むと、ソッと離れの隱居部屋を見て、臺所へ戻つた。姑に知れて惡い手紙でも何でもないが、此頃田舍の姉や弟と手紙の往復が頻りに續いて、此方からは內輪のことを洗ひさらし追加までつけて云つてやつてるので、多少氣が咎めるらしい。この二三日も神戶の姉の返事を待ち焦れてゐたので、郵便の來る度にそれだと定めて、飛び出ては失望さゝれた。が、今度のは本物だつた。

手紙の破れぬやうに封じ目をめくつて、引出して見たが、一つは白紙で丁寧に包んだ小形の寫眞であつた。二三年前に死んだ父の寫眞の複寫であつた。お慶はそれを一目見たばかりで、別に何の感じをも

起さず、今一つの手紙を執つて、一行づゝ廣げて、熱心に目を注いだ。寫眞は膝から辷り落ちて、板の間に仰向きになつた。寫眞は頭の少し禿げて頤髮の長い老人で、顏が細長く鼻の先きが圓く目が落付いてゐない。下品な相ではないが、如何にも力がなささうだ。そしてお慶の面相がよくこの老人に似てゐる。目付もそつくりだ。額の狹い工合も同じやうだ。只著しく違つてるのはその鼻で、お慶のは高くてその先がずつと尖つてゐる。この女、年齡は三十八、老け加減も歳相應だ。艶は失せてゐるが、色は白く愛嬌がある。子が三人で、年上二人が女、姉はもう十九になつて、この春緣付いてゐる。外に家族は姑と夫とで、小人數と云ふ程でもないが、生活に餘裕もなければ、下女も置かず、一人で立働いて、自分の事には何一つ贅澤がましいことをせず、切詰められる限り約しくしてゐるが、收入が少いから、月々の不足が重つて行くばかり。これぢや困ると思ひあぐんだ揚句の果が、松山と神戸とそれから江州の田舍にゐる姉弟と矢鱈に手紙の往復が始まつた。

今日の手紙は特別に長い。子供の消息もくどく書いてある。寫眞の由來や父の石碑の出來たことも書いてある。が、肝心な所は「こんな次第やさかい、タントのお金は私の手元で纏りません、お前さんの方でも、主人が定まつた月給を取るのやさかい、險約さへすれば、どうにか遣繰のつかん譯ないと存じ申候、何分手紙の事はお斷り申候」と云ふ數行で盡きてゐる。お慶はこのぬらくらした讀み難い文字を繰返して、ようやく意味を合點したが、それと知ると急にガッカリして、まだ後に何か書いてあつたけれど、碌に目を通さずして、元の封へ收めた。て、焦げついた魚を小皿へ移しながら、寫眞と上包の名

前とを横目で見て、つまらないやうな、自烈たいやうな、さては腹立しいやうな氣になり、小粒の目を頻りに瞬きさせてゐた。「一寸會つて話しさへすれば、直ぐ分るんだけれど、遠方だからオイソレと行けやしないし」と思つたり、「頼み甲斐のない人達だよ」と思つたり、暫らく落付かないでゐたが、不意に門の戸がガラッと開いて、敷石を駒下駄が飛ぶと思ふと、俄かに耳元でジャーンと蟬が鳴いた。

「お母さん、どつさり取つたよ」と、末子の道男が息せきながら叫んだ。右の手に黐竿と蟲籠を持ち、左の手で蟬を二三羽握つて立つてゐる。

「八釜しくつて仕樣がないぢやないか、そんなにどつさり取つて來て……おや〳〵泥まみれで、足に足跟がついてるぢやないか、さあ早く洗つてお出てよ、何て云ふこつたらう、帯から衣服まで汚しちやつて」と、引剝ぐやうに道男の浴衣を脱がせて、「よく洗ふんだよ」と三和土の上へ突下した。

「お母さん酷いなあ」と、道男は恨めしそうに云つて、片手で蟬を持つたまゝ、片手で足を洗つた。

お慶は力を入れて邪慳に道男に當つたので、今迄のむしやくしや腹がちつとは治まつて、靜かに臺所仕事に取かゝつた。

〔二〕

道男の蟬取功名談に空返事しながら、一時間ばかりゴタ〳〵してゐる間に、娘の淸と主人の博直とが勤め先きから歸つて來た。主人から始めて、道男と淸と姑と、順ぐりに行水をつかつて、薄暮くなつた頃、一家揃つて空腹で晩餐に取掛た。茶の間の眞中にチャブ臺を持出したが、姑と主人とは各自別仕立

の膳て、閾向うの寢室兼帶の座敷に座つた。姑は切髮のまだ色艶のよい丈夫さうな婆さんで、大きな黒塗の箸箱から細い象牙の箸を出して、チヨコ〱と食べてしまうと、サツサと隱居部屋へ入つて、煙草の二三服も吸ひ、それから鼈甲緣の眼鏡をかけて、報知新聞の拾ひ讀みか、縫物に餘念がない。滅多に茶の間に居殘つて、皆んなの世間話に加はることもないが、偶に仲間に入ると、馬鹿に聞上手で、「ホウ」「エーツ」「ヤレ〱」と掛聲つきで、如何にも身を入れて聞いてゐるやうだ。主人はお人善しで、月給二十五圓で朝八時から役所へ通うのも苦にせず、家の事子供の將來についても深くは考へぬ。只唯一の樂みの晩酌を一日を缺かさず、二合入の銚子を前に置いて、何時までも盃を離さない。酒を飮んでるんぢやなくて、舐めてるんだ。嗅いでるんだ。酒の中毒か手が少し震えて、言葉もハツキリしない。

「さあ、もういゝんでせう」と、お慶が銚子を執つて、二三滴を盃に落し、膳ごと持つて行かうとすると、厚い唇を反し、「何をする」と怒つて、後はブツ〱口の中で呟きながら、前へ屈んで膳を庇うようにしたが、お慶はそれに搆はず、食器も銚子も片付けてしまつた。博彥は「チエツ、仕樣がない奴だ」と云つたきり、肱枕で横になつた。年齡は五十を越えたばかりで見た所は丈夫さうだが、心が弱つてるのか、如何にも元氣がない。

　道男は箸を置くと緣側へ出て、蟲籠をいぢくりながら、喇叭節を唄つてゐた。夕風は氣持よく涼しく、狹い庭の中でも秋らし蟲の音がする。背中合せの隣の家の竹垣の透間からは、膝頭の動くのが見えてゐたが、やがて闌の上に爪立てした可愛いゝ子が丸顏を垣根の上に釣出して、「道ちやんお出でよ、ゴム玉

を上るよ」と呼びかけたので、道男はオイソレと庭下駄を突かけて、一目散に驅けて行つた。

お慶は遲れ馳せに行水を遣つて、勝手元の戸締りをすると、細帶のまゝ浴衣の前を手繰つて、爪立足て、茶の間へ戻り、ハタ／＼と氣忙しく團扇を動かしながら、お清の顔を見下したが、ふと娘の女振りが先頃よりや、ぐつと美しくなつたやうな氣がして、溜らなく悦しかつた。て、力を入れて奥歯を噛み合せ、憎い程可愛く思はれて、何かから娘の喜びそうな、喜んで母の乳房に飛びついて來たがるやうな言葉を云つてやりたくてならなかつたが、さて何が御意に入るか分らないので、默つて見惚れてゐた。すると、お清は二尺指を杖に、その美しい顔を持上げ、黒い眼と紅い唇を動かし、

「お母さん、邪魔になるぢやありませんか、暗くなつて」

と、叱るやうに云つた。

お慶は平生の落付かぬ顔つきに復して、團扇を置き帶を締めて、お清の眞向ひに、膝を崩して座り、内職の觀世撚を撚り出した。これを織つて風流な煙草入を造るのださうだが、撚方が拙くては、から役に立たぬと云つて、先方で受取らず、もう呼吸だけは覺えてゐるものゝ、隨分肩の凝る根仕事だ。

お清は母の指先を見詰めながら、

「お母さん、この切れは駄目よ、短か過ぎて。それに色が寢ぼけてゝ、私厭やだから、もう止しませう、折角お母さんが搜して與れたんだけど」

「そうかい、ぢやお止しよ、又何か見つかるだらうから」

「さうね、買ふのもつまらないし」

と、お清は前ににじり寄り、風呂敷から紙縒を取つて縒りかけたが、母は目で壓へて、

「お止しよ、疲ぶれてるのに、それに明日も朝が早いんだから」

「いゝえ明日は夜勤よ。どうせ晝間寢るんだから、今夜は遲くまで起きててもいゝわ」

「お前なんかに夜勤までさせなくつたつてねえ、……夜夜中どんな人が電話を掛けるんだらう」

「よく待合や藝者屋から掛ることがあつてよ、聞いてて隨分面白いことがあるわ、てね、時々や惡戲をしてやることもあるのよ」

「そんな事をして、お前怒られるてせう」

「何構ふものですか、……だけどねお母さん、これて缺勤しないて、失敗らないて、年末まで勤めたらば、どつさり賞與が貰へるんですつて、五圓位乾度貰へるんだわ」

「だから働くに限るのさ」

「けれどねお母さん、誰れても長くは勤まらんのよ、長く出てるとね、乾度眩暈がしたり、頭痛持になつたりするんですつて」

「あ、そうかい、そうだらうね、私なんか側て電話の音を聞いてても頭に響くんだもの、だからお前も今年一杯くらゐ勤めたらお止しよ、その中にやお母さんに考へもあるからね、」と、云つたが、矢張娘に出て貰はなくちや困るので、初の間は娘が電話交換局で取つて來る金は、殘らず貯金して、嫁入衣裳て

も貯へるつもりであつたのが、日々の小遣ひにも窮する有樣だから、つい一圓二圓と引揚げては、貯金どころか、折角造つた縮緬の羽織さへ、ついぞ一度手を通させず、「お前には縮緬づくめが乾度よく似合うよ」と云つて、姑に笑はれたばかりで只の質草になつたのだもの。

けれどお清は母の言葉は一から十まで疑はず、睦じく話しながら、仕事を續けてゐた。御院殿近くの引込んだ家で、夜になると汽車に嚇かされる外は、四圍がひつそりして、心細いほど淋しい。お清は晝間の疲勞で、時計の廻るにつれて、欠伸と居睡りをしかけた。お慶は最早娘を前に据ゑてゐなくては、何となく手頼なく、仕事にも張合の拔けるやうな氣がして、その睡さうな顏を見ても、早く床に就かせようともしなかつた。

姑は隱居部屋に只一人、煙草盆を前に置いて氣樂に床に入り、外の四人は茶の間の隣りに、枕を並べて睡る。お慶が最後に蚊帳に入る頃は、皆夜具をはね退けだらしなく手足を投げ出してるのがお定りて、お慶は何時もその端つこに小さく横になるのだ。

この夜は殊に寢床がずつて窮窟だ。道男が母の場所を塞いて、容易に動かぬので、お慶は詮方なしに博彥の側の空地にもぐり込んだ。博彥は肋骨の出た胸に手を置き、半ば開いた口から薄い息を吐いてゐる。お慶は厭な顏して枕に就き、二三度自分の額を叩いて、ア、〳〵と溜息吐いたが、間もなく熟睡に陷つた。

〔三〕

その翌日、姑は朝から徒士町の孫娘の家へ出掛けた。姑の訪ね行く所は、主人の弟の家か孫娘のお露

の嫁入先かて、何時も長尻をして、家の噂や芝居や寄席の話をして歸るのだが、二軒ともサッパリした老婆さんとして、歡迎して御馳走もして呉れる。時々は連中に加はつて芝居へも長唄會へも行くが、只の一度だつてお慶やお清を誘つたことがない。一體にクヨ〳〵物事を考へたり、五月蠅いことに係合ふのが大嫌ひて、田舍物のお慶のハシタナイ仕打にも口小言を云はず、孫にも自分から手出しをせず、至つて冷淡だが、只お露だけは孫らしく可愛がつてゐた。博彥が田舍勤めをしてゐた頃。二番娘の生れると、直ぐに姉娘をその東京の祖母さんに預けたので、一家が東京に移つてからも、お露は殆んど祖母さんの手一つて育てられた。そして妹のお清の一度も行つたことのない歌舞伎座をも見た。淺草へも幾度も連れて行かれた。長唄をも祖母さんの手から敎はつた。

お慶はお清を可愛がるのから見ると、一つ腹から出たとは思はれぬ程お露をウト〳〵しくする。て、偶にお露が遊びに來ても、決して家の遣繰や、妹の所置に係はる相談を持出すこともなく、親身の話は碌々しない。なあに、自分に懷かない娘や、文句ばかり付けたがる親類の世話にならないでも、獨りで立派に家の仕末をつけ、お清をも氣樂な確かりした所へ片付けて、老婆さん贔負の親類達に降參させてやりたいと、イラ〳〵氣を腐らせてゐた。

「祖母さんはどうせ晩まで歸りつこはないんだから、お前隱居部屋へ行つて晝寢でもおしなね、彼方の方が涼しいよ」

と、お慶は姑の後姿を見送りながら、お清に云つた。

「だつて、朝から眠らりやしないわ、幾ら夜勤だからつて」

「でも隱居部屋を空けとくのは勿體ないぢやないか、昨日もね、喜ちやんが來て、夫婦者で貸間を搜してる者があるから、あの部屋をお貸しなさらんかと云つてたよ、彼所だけは疊も毀んでゐないし、あの儘で借手があるだからね、室代だつて、五圓や六圓は取れるんだしね、本當に勿體ないよ、あんなにして遊ばしとくのは」と、さも惜しさうに云つた。

「だつて祖母さんがゐる中あ仕樣がないわ、汚い部屋へ大勢でゐたくないと云つてるのだから」

「だから困るんだよ、祖母さんは自分のお小遣ひをドツサリ持つてゝ、ちやんと御隱居樣で澄してるんだから、それていゝけれど、私達や大迷惑さ」、

「本當だわねえ」

「あんなに氣樂だから、祖母さんは丈夫なんだよ、」

と、眉根に皺を寄せて云ふ。お清は「さうねえ」と雷同する。

一しきり、祖母さんや徒士町の噂をしてしまうと、母子は左右に分れて、拭掃除をした。この日はお清の手助けがあるから、まだしも息が吐けるので、廣いが取得の廢屋を、少しでも小薩張りと光らすのは容易の事ではない。それに暑いから洗濯物も多い。井戸端て水を汲んだり洗つたり、腕の拔けるほど働いて、それが濟むと、大風呂敷を抱へて、蝙蝠傘もさゝずにスタ／＼と車坂の問屋まで行つて、觀世縒を渡して、賃金三十錢を受取り、新に仕事の材料を持つて歸る。歸ると稻荷樣の修繕費の寄附の勸

誘やら、姑一人の讀む新聞代の滯りの催促。それを斷はつて、埃に汚れた足を拭うて、やつと茶の間に座ると、直ぐに觀世捻仕事が初まる。一本二本と紙箱の中に同じ小縒が重なると共に、心の中でも平生の考へが同じやうに縒られて行く。

「東京に自分の身内が一人でもあつたらば」と思つた。「神戸の姉は何故あゝ察しのない人なのだらう」と思つた。「四人姉弟の中で私ばかりが貧乏籤で、こんな貧乏な家へ賣りつけられて」、とも思つた。「でも老婆さんさへゐなけや、この家を叩き賣つて、小ぢんまりした借家へでも移つて、ちつたあ樂が出來るんだけど、あの輕薄な老婆さんに同情が爪垢ほどもあるんぢやなし。あの薄ぼんやりの家の夫に、何一つテキパキ出來るんぢやなし」と思つた。

風袋は大きくても、家の中は貧乏長屋と異りはなく、ガラクタ道具の、それも次第に減つて行くばかり。お慶には外行の着物一つあるでもなく、此頃は只の一度髮結の手を煩らはしたこともない。裏店の日雇稼ぎの神さんと見違へられんのは、その顏立に何處となく品のあるお蔭だ。

〔四〕

お慶はその油氣のないバサ／＼した手束ね髮を、塵風に嬲らせて、物干竿から洗濯物を手繰つてゐた。勝手口には箍の彈けかゝつた盥が立掛けられ、油ぎつたギラ／＼した水がその下をくゞつて、垣根の方へ流れてゐる。二三本の鷄頭も葉が俯首れ、垣根にまつはつてる。朝顏の紅白の花は縮れ込んで、埃に色も褪せてゐる。

「今日も大變お暑いぢや御座いませんか」と、半袖の襦袢に腰卷を纏うたきりの、隣りの神さんが垣根越しに聲を掛けた。

お慶は振向いて、「何ていふ厭やな風だらう」と心では蔑視んだが、顔では一寸微笑して、

「左樣て御座いますね、風も何だか生温くつて」

「でもお宅はお廣いから結構ですわ、私の宅なんかそりや堪りませんですよ、家中日が差込むんですから、丸で炙殺されそうて御座いますよ」

と、神さんは垣根に摑まつて、今晝寢から醒たらしい寢呆顔で、ジロ／＼前を見てゐたが、無遠慮な欠伸を一つして、

「お孃樣は今日はお休みて御座いますか」とわざと慇懃らしく云つた。

「いゝえ、今日は夜勤だそうてす」

「おや／＼夜分も被行しやるんですか、それは大變てすことね、でも貴女のお宅では皆さんが、せつせとお働きなさるから結構て御座いますね、だから貴女程御氣樂な方はないと始終申して居りますんですよ。私とこなんかは役に立たんものばかり揃つてゝ、本當に仕樣も模樣もありやしない」。と、さも歎息するやうに云つて、「でもね、内職にマッチ箱いぢりなんか小五月蠅いことも致しませんで、これでも奥樣氣取て澄してゐるんてすから、自分で餘程可笑いんて御座いますよ、食はず貧樂ていふのは、私達のことて御座いませうよ、アハヽヽヽ」

と厭な聲で笑つて、いざこれから好きな饒舌を初めやうとしたが、お慶は其處に居たゝまらぬ程不快な感じがして

「あゝ私大變な事をしちやつた」と、獨言のやうに呟いて、兩手で洗濯物を抱いて勝手口から飛込んだ。内儀がどうのかうのと、神さんは何氣なく云つたにしても、お慶はそれを自分に當てすられたやうに思つた。高があんな下等な女、驛夫の女房風情に馬鹿にされるのが口惜しくつてならなかつた。何時かも「お宅では大勢様なのに女中衆もお置きなさらないで、本當にその方が結構で御座いますよ、他人が一人でも入ると、そりや五月蠅う御座いますからね」と云やあがつた。「どうせ旦那はお車でお出でになるので御座いませう」と、冷笑かすやうなことを云ひ居つた。そして遊ばせ言葉で、いやに奉つた口を利くかと思ふと、時によつちや、自分を朋輩扱ひして、淫らな言葉で世間の情話をすることもある。近所の噂ぢや、亭主の留守に若い男が遊びに來て、一緒に外を歩いてることもあるさうだが、そんな女に侮られて自分も同じ仲間に引込まれるのかと思ふと、無念で心外でならなかつた。

私は武士の娘だ。父は五萬石の殿様の御前で四書五經の講釋をお聞かせ申してゐたのださうだ。その氏素性のいゝ私が、あんな下司女と一つにされて溜るものかと、お慶は力んでも見たが、情けないと云ふ感じが直ぐ後から込み上つて來る。

そしてお慶は人の足音がする度に、我知らず觀世縒を膝の下に匿すやうになつた。仕事が果が行かなくなつて、手業も拙くなつた。問屋へも人目を憚つて、夜行くやうになつた。

〔五〕

それから一月立つた。その間、一家は變つたこともなく、主人もお淸も一日も缺勤しなかつたが、お慶の手元は月增しに心細くなつて行く。姑は暑さにも弱らずに出歩いて、一度はお露の家族に加はつて花火を見物し、一度は知合ひの婆さん連と宮戸座へ行つた。その度にお慶は忌々しくて、「自分の母は每朝佛前にお看勤して、後生願ひをしてゐたのに、此家のあの婆樣は何と云ふこつたらう、碌にお墓參りもお寺詣りもするぢやなし」と思つては、お淸に向つても田舍の祖母さんを褒めそやしてゐた。

八月も末であれば、北風に雨の降る日などは單衣では肌寒く、障子の破れも氣にかゝるやうになつた。お慶の屈托は殖えて來る。今に秋になり冬になり、四人の衣服の工面だつて大抵の事ぢやない。炭や油の雜費だつて嵩張つて行く。自分はどうであれ、主人も構はぬにしても、お淸にだけは人並の裝をさせて、朋輩に負を取らせたくない。と云つて、何處に確かな當てがあるぢやなし、木葉一つ空に湧いて出りやすまいし。

「でも、祖母さんさへ亡くなつたら、家だつて樂になるんだがね、今に電車がつけば、此邊の家屋敷も高くなるだらうから、この家ぐらゐなら賣つたつて、貸したつて、餘程になるんだよ、二千圓なら今に今買手があるそうだ」

と、或時も染々とお淸に云つた。

「こんなに壞れても、そんなに高く賣れるんですか」と、お淸は笑つたが、お慶は壓へ付けるやうに、

「いゝえ賣れるとも、お前は知るまいけれど、此頃は家の價値はそりや高くなつたんだもの」と云つて、お清を得心させた。

だが、二千圓でも一萬圓でも、それは何時のことか當てにはならぬ。そして時節々々の負擔は遠慮なく押迫つて見のがしては呉れぬ。

て、お慶は手の付けやうがなく、思ひあぐんでゐる最中に、久振りに稻村と云ふ男の太い聲がした。お慶とは同郷で幼い頃から互に顏を見知り合つてゐる。五六年前東京へ流れ込んで、今は或有力な鑄物師に使はれてゐるさうだ。一昨年であつたか、道でお慶に出合つたのが緣となり、時々遊びに來るので、東京に知邊のないお慶は、それを非常に悅しがつてゐる。年齡は三十五、眉が濃く色が黑く顴骨高く、見るから頑健て、目付は恐さうだが、氣前がさつぱりしてゐて、話しつ振りも面白い。女房は有るのだか無いのだか、給金も多いのか少いのか分らぬが、口では景氣のいゝ事を云つて、今に一人で鑄物の工場を建てるなどゝ云つてゐる。

この男が今日は絽の羽織なんか着て、新聞で包んだ手土産を持つて來た。舌打して簞笥の中を搜してゐたお慶は、慌てゝ抽出を閉ぢ。無斷で茶の間の入口に幅廣く座つてる稻村を見て、

「おやお珍らしい方が入しつた」と、面相を直して舞ひ戻つた。

「どうです此頃は。皆さんお變もありませんか」とお慶の顏をジッと見て、「貴女は大變にお瘦せなすつたね」と、さも同情のありさうな口振りて云つた。

「私そんなに痩せて」と、お慶は自分の頬を撫てゝ、「私なんかどうだつてよう御座んすよ」

「でも貴女方はこれからうんと氣樂になれるんだから結構でさあ、もうお子供衆も大きくおなんなすつて世話の焼ける方はなし、これから好きな事して氣晴らしをなすつたらいゝぢやありませんか、毎日家にすつこんでばかり居らつしやらないで」

「どうして、出歩いてゐれるもんですか」

「まあそう被仰らないで、一日道ちやんを連れて、私の工場でも見に被入しやいな、ちつとは保養になりますさあね」

「まあ、それ所ですか、稲村さん」と、お慶は例のやうにこの男には、心を緩めてうつかり所帶向きの話まで持出し、「何でも私一人の所爲にして、親類中で私を目の敵にしてるんですからね、本當に察して下さいよ」と、一圖に同情を求める。

稲村は輕く受答へしながら、馴々しく肩に凭れかゝる道男を綾してゐた。道男はこの男には懐き切つてゐて、連れ出されては、玩具などを買つて貰つたり、見世物見物をさせて貰う。空氣銃やナイフやお伽本や、道男の所有品は大抵その賜物である。で、道男は味を占めてゐるから、今日も何處へか引張り出さうとして、謎をかけてゐた。

稲村はヨシヨシと首肯きながら、

「ねえ奥さん、今日は異つたお話があつて伺がつたんですがね」と、生眞面目に調子を改めて、「どうです、

いつそお清さんを早く縁付けちやどうです」と、單刀直入に出た。

お慶は驚いた風で、一寸目を張つて、「お清をですか」

「實は私に心當りがあつて、丁度いゝ縁だと思ふんですが、どうです、話を付けて見ちやあ、お清さんも長くあんな仕事をしてちや身體の爲にもよくないしね、少々早過ぎても、良縁だと、定つちまつた方が、貴女の荷も輕くなつていゝ」

「だつてね稻村さん、私自分て懲々してるから、清だけは、もう／＼嫁なんかに遣ることつちやないと思つてるのてすもの。あの子も私の事をよく知つてゝ、一生一人て暮すんだと云つてますしさ」

「そんな事が出來るもんてすか」と、稻村はせゝら笑ふやうに云つたが、お慶は

「だつてさうなんてすもの、私懲々してるから、結婚なんかさすことつちやない」ときつぱり跳ねつけて、もうそんな話にや耳を塞ぐと云つたやうな見幕てあつた。

「しかし相手が確つかりしてりやよさゝうな者だがなあ」と、獨言のやうに云つて、暫らく口を閉ぢた。

道男は頰ぺたを脹らせたり窄めたりして、二人の顏を見比べてゐたが、突然に

「女が嫁に行つたりして馬鹿だなあ」

と叫んて、次の室へ駈けて行つた。

お慶は險しい目をして、膝前をこすり／＼考へてゐたが、さも救助を乞ふやうに、

「清も局ては大變信用されてるんてすけど、此頃は忙しいのて、始終頭痛がする／＼と云つてゐますか

らね、いつそあの方は止させて、何處かの華族さんに小間使奉公でもさせやうと思ふんですが、貴下に何とかお世話は願へますまいか」

「さうさ、お清さんは奇麗だから、華族さんへ上れば出世なさるでせう」と底に皮肉を以て云つて、「だが奥さん、それよりや、今の私の話をお考へなすつちやどうです。向うの男は貴女も一寸御存じの筈だが、……確か去年の秋頃お宅へ連れて來たことのある、あの髪の長い脊の高い立派な男、知つてるでせう」

「あゝ、さう〳〵、金縁の目鏡を掛けてたでせう、黒瀬とか云つて繪を書く方」とお慶は急に話に乗つて來た。

「あの男さ、貴女も後で大變褒めてゐなすつたが、郷里ぢや非常の田地持て、早晩自分の者になるんださうです。だから幾らでも妻君の候補者はあるんだが、彼奴歳に似合はず考がませてゝ、金持の娘や生意氣な女學生揚りや厭やだ、素直で品がよくつて、それて機轉の利く女がいゝつて云ふんです。て、私はお清さんなら宜からうと思つて、此間それとなく仄めかすと、直ぐにでも承知しさうな口振なんでね、私は非常に悦しくつて、今日も大事な用事を解して窺つたんです」と、さも惜しさうに云つた。

「ですけれどねえ」と、お慶は拒絶して見たが、その力は次第に弱くなつた。

稲村は尚黒瀬の身の上を説いた。「姑のない事」「支度金のみか末長く補助すること」といゝ事づくめであつたが、それよりも東京に手頼りになる味方の出來ると云ふ事が、お慶の心を動かして止まなかつた。

〔六〕

お慶は縁談のことは誰れにも語らず、獨りて考へるてもなく考へぬてもなくて、日を過してゐた。何だか手放したくはないが、又自分の腕て立派な男に嫁はして、親類中に自慢して見たい氣もする。そして、いざとなれば姑にても主人の弟妹の家族にても文句を云はせず、手一つで定めて見せる。淸は私の子だ、私の云ひなり次第になる。身の振方でも氣儘我儘を云やあしない。それに黒瀬といふ男も、此方て、承知さへすれば否應を云ふ氣遣ひは更にない、只もう私の心次第て、何もかも定つてしまうだと思ひ切つてゐた。

て、お慶は立ちつ座りつ、暇もなく忙がしい間にも、この縁談を思ひ浮べては、竊かに恐悦がつてゐた。お淸の花嫁姿や、新世帶の模樣がさま〲に想像される。それよりも神戸の姉への自慢や、この縁談を左右する自分の無上の權力に思ひ及ぶと、ふと今の腑甲斐なき境涯を忘れて、急に暗闇から出て、明るい世界に入つたやうになる。

けれど、お慶は只ボンヤリ夢を樂むばかりて、敢て決斷しやうともしない。七八年以來この女がこんな夢心地て只の一日も時を送つたことはなかつたのてある。

て、お淸が辨當箱を提げて、さも疲れたやうな顏て歸つて來て、自分て額を揉んだり、耳を苦にしたりして、內職の手傳ひもしなくなるのを見ると、常なら痛々しく情なくなるのだが、此頃は左程にも思はなくなつた。「何、もう少しの辛抱だよ、お母さんに考へがあるから」を口癖にしてゐた。

お慶は新聞を讀まぬ。往來して噂の遣取りを樂む女連もない。だから姑や主人から時々大摑みの話を洩れ聞く外に、世間にどんな大事件があるかを知らぬのだが、只お清が齎して來る日々の消息は、身體に弛みのない時も、耳を峙てゝ聞いて、喜んだり怒つたりしてゐる。監督がお清に調戯つて厭味たらしい口を利くとか、年上の同僚が冷笑すとか、偶にお清が訴へると、局ではさもお清一人が美くして、大勢がこの美人を取卷いて騷いでるやうに思ふ。お慶の目には世界がお清を中心にして運轉してるやうに感ぜられる。

例の驛夫の神さんも、時々心からお清を褒めて呉れる。華族奉公を思ひついたのも、この女に煽てられたからだ。一體にお慶は隣近所の女房連を卑しい者と定めて、自分がそれと一緒にされるのが厭さに、成べく顏を外らせて話の仲間に入らぬやうにしてゐるが、それでもお清の話が出ると、つい引込まれることもある。

或日も襷姿を、氣持よく冴えた秋の日に曝らし、痩せた手に青い筋を浮べて撥釣瓶を動かしてゐると、驛夫の神さんが檢束のない姿で、「ねえ奥さん」と、生欠伸をしながら入つて來て、無駄口を叩き出した。すると横合から、髮の薄い目の爛れた婆さんが歸つて來て、神さんを横取りして、二人で大聲に話が賑つた。この婆さんは大びらで妾の周旋をもしてゐるので、人前をも憚らず、妾奉公の利得を述べ立て、神さんも相槌打つて、「私だつてもつと御面相がよけりや、お妾にだつて何にだつてなるんさ」と云つてゲラ〳〵笑ふ。

お慶は何て云ふ恥知らずの人達だらうと思つて、バケツを持つて家へ入つた。

その後婆さんは折があると、馴々しく近づいて來たが、お慶はその顔を見ると、辱められるやうな厭な氣持がした。

（七）

それから十日あまり。稻村は何の音信もしなかつた。お慶は日に／＼待遠しく思ふやうになつた。多少心細くなつて、もう駄目ぢやないかと、急に悄れ氣味になつた。

かうなつて初めて、主人と姑とに縁談を傳へた。

「大層堅い人て、繪もそりや上手なんださうですよ」

と、稻村の言ひもせぬことまで付加へた上、「お淸を貰つて呉れつて、稻村さんに會ふたんびに賴むんださうですよ」と、自分すら危んでることを、まるで眞實らしく仰山に吹聽した。姑は「ホウ、そうかい、そりや結構だな」と、別に立入つて穿鑿もしなかつた。主人は「淸の結婚はまだ早いぢやないか、それに向うの身元だつてよく調べなくちや」と云つたが、お慶は急き込んで「いゝえ、調べなくても、私にはちやんと分つてるんですよ、あの人になら、淸も早く緣付た方がいゝんですわ」と斷言した。

當てにならん事も、口先てから斷言して見ると、危んでた自分の心までも落付いて來る。

しかしお慶の斷言は失望に終らなかつた。間もなく稻村が來て、話は一歩二歩深入りした。「ぢや奥さん、一つの見合ひを兼ねて、黑瀨に歌舞伎座ても奢らせませう、どうせ話は定つてるやうなものだが」と、

稲村は獨りて呑込んで、一切の世話をすることゝなつた。お慶は稲村の親切をつく〴〵と感じた。親類や近所の女房に自慢が出來ると思つた。しかしさう定ると、今更に自分の身の貧くして、お清に相應はしい扮裝もさせられぬのを情なく思つた。

て、暫らくは觀世縒仕事も手につかず、座つたまゝ、ボッとなつてゐると、我知らず涙が頰を傳ふ。

二三日しての日曜。稲村が約を踏んで連れ出しに來た。お慶は主人に酒と刺身とを宛がつて留守居をさせ、お清と道男とを連れ、道に待合せた黒瀬と一緒になつて歌舞伎座へ行つた。この日こそ、お清よりもお慶のために忘れ難い日で、これ迄終日家を空けて物見遊山をした例は、殆んど一度もなかつた。土間の片端にお清と並んで座り、キョロ〳〵見渡すと、自分の來るべき場所ではない處へ來てゐるやうだ。上座を飾れる、紅や紫、それ〴〵の色を纏へる數多の女客、金絲で刺繡した眞紅の緞帳、鈴成りになつて下を見下してゐる三階の見物。どれを見ても心が散らつき搔亂れる。まして舞臺では緋威しの鎧を着た若武者の凛々しい立廻りやら、蝶々の如く身を飜へし狂ひ戯むれる女姿の嬋妍さ。お慶は只ぽつと見惚れて、泣いたり笑つたりする餘裕はなかつた。幕數の進むにつれて、心も次第に落付いて來た。すると四方から照付ける電燈は自分達の衣服を一層薄汚く見せる。香のする風を起して花道を往來する若い女共の裝ひが交る〳〵目を惹つける。

お清が口を噤んで、醉心地で見てゐる間に、お慶の神經は疲勞した。て、幕間に黒瀬が三階の運動場へ誘つたが、お慶のみは居殘つた。そして帶の中から毛絲の金入を出して、二十錢銀貨二個を鼻紙に包

み、そつと稻村に手渡して、「こんなに道男まで奢つて頂いては何だから、少しだけれど、お辨當代にでもして下さいな」と云つて、笑つて推返へすものを、無理に納めさせた。

「どうです、面白いでせう」と、稻村が尋ねる。

「えゝ、私芝居といふ者はもう十幾年て見ないんですからね、毎日こんなに見物人があるんでせうか」

「今日はこれて見物が少い方ですよ、時によると爪も立たん程に籠んでさあ」、

「さうですかねえ」

と、お慶は世間に姑のやうな人の多いのを思つた。

「貴女もこれからせつせと見に來るさ。家にばかり燻ぼつてたて下らないぢやありませんか、どうせ一生だから、ちつとは樂もしなくちや」

と云つて稻村はハツ〳〵笑ひ、悠然として麥酒を呑み煙草を吸ひ、一座でこの人一人が氣兼もなく屈托もなく、平氣て見たり聞いたり饒舌つたりしてゐる。

菓子も味かつた。辨當も味かつた。二番目の河内山は筋も一通り分つて、役者の顏にも見榮えが出來て、面白味も加はつて來る。淸元連中の出語りの入谷の寮は、舞臺に溢れてる濃かな感情と、冴えた絃聲、哀れげな唄の音と、互ひに融け合つて、お慶の疲れた神經に觸れ、腸に染み込むやうであつて、自からお慶の睫毛は潤はうた。舞臺の人間に同情したからでもないが、只譯もなく深沈な柔しい思ひの湧き上つて、魂が搖蕩と小迷うた。幕の閉づると共に、ホツと息を吐いたが、鬱悶ゆいやうな焦躁しいやうな

自分で自分が哀れなやうな、所在ない感じが身體中に漂うて、歸る道々も消えなかつた。

黒瀬と稲村とに分れ、寂とした道を通つて家に着くと、主人は椽側に寢そべつて、煙草を吹かせながら、月を浴びた庭をぼんやり眺めてゐた。ランプも點火されてゐない。一度點火すには點火したが、風に吹き消されたから、そのまゝにしてゐるのだそうだ。で、お清や道男が天國をでも覗いて來たやうに、さも珍らしさうに芝居の噂をするのを聞くと、にや〳〵笑つて、番付を見ては「まだこんな芝居をやつてるんかなあ」と呟いて「おれがお清ぐらゐの年齢に、河原崎座で見たことがあるよ」と、顔を歪めて今昔の感を起してゐたが、やがて氣取つた聲で「練塀小路に隠れのねへ、御數寄屋坊主の宗俊が」と、誰れの聲色だか河内山の臺詞を、思ひ出し〳〵一くさり口にして勢のない聲で笑つた。お慶もお清も隠居まで加はつて、一時は華やかな話に賑はつたが、こんな事はこの家に滅多に見られることではない。

しかしお慶のみは厭な夢に魘はれて、熟睡されなかつた。たつた一日、幾年來の慣例を破つて、内職や家の仕事で、身體を慘く使はず、定つた心配と定つた考へ事をしなかつたゝめ、却つて神經に異状を呈した。

〔八〕

その翌日からお慶は氣を落付ける暇がなかつた。いよ〳〵縁談が取定つて、お清を彌生町の黒瀬の新宅へ置いて來る迄、お慶は狂人のやうであつた。お清は初めから母の言ひなり次第で、自分と云ふものは少しも立てず、先々の境涯も母の教へた通りになるものと信じてゐた。黒瀬の新宅は三室ばかりの小

さい家で、生活の摸樣から見ても稻村の吹聽のやうに富豪の息子とも思はれず、碌に繪を書いてゐる風もないが、黒瀨の柔しい親切さうな態度や、「來年にでもなつたら、何處か閑靜な所へ新築しませう、成べくお母さんに度々來て頂けるやうに、根岸の近所にしたいもんだ」などゝ云ふ賴もしい話に、お慶は滿足して、家へ歸つては景物までつけて主人に取繼いだり、驛夫の神さんなどにも自慢らしく聞かせてゐた。姑は一家に事なきが如く、隱居部屋で靜かに自分の冬衣を繕らうたり、假寢を貪つたりしてゐる。主人は「まあ結構だ、これで一安心だ」と、盃を弄びながら、滿足して、明日から先のことは念頭に浮べない。お慶は一騷ぎの片付いて、一息吐くと、もう元の境涯に立戻つて、筒袖の半纏着てせつせと働かねばならなかつた。そしてその働きが以前よりも辛抱し酷く、迫つて來る仕事も放任られるだけ放任つて、「どうなる者か」とガッカリして、長火鉢にへばり付てい身動きの慵くなることが多い、古綿の食出た蒲團をも繕らはうとはせず、盥に突込んだ洗濯物をも短かい日の暮れかゝるまで手をつけず、觀世撚もつく／＼と厭になつた。お清を縁付けて、肩の荷の輕くなつたと思つたが、それと共に張合ひの拔けた氣がして、何だか薄ら淋しい。日々交換局の噂を聞いたり、自分でも將來の當事を聞かせてゐた頃は、流石に勵みがあつたが、今は鬱憤を洩らすものがない。それに時偶お清に會つても、もう昔のお清ではなくて、母の心と一つに融け合はぬ。賑やかな罪のない話を持つて來て、お慶も悅しがつて聞いてる時でも、お清の身に何處か母に背いた所が出來てゐる。そしてお清の歸つた跡はお慶に不安心な賴りのない感じが芽差して來る。

この頃から近所の女房連と親しく話をするやうにもなつた。驛夫の家では屢々親子夫婦で大聲出して言ひ爭ひ、それが募ると悲鳴を揚げたり、掴み合ひをも始めるのだが、そんな時はお慶は臺所口に爪立してそつと頭を出して口を開けて面白さうに立聞きする。神さんが剛情張で、耻も外聞も構はぬのだから、その暴れ方つたらない。仲裁なしで一しきり騒いだ揚句、

「この糞婆あの死損ないめ、文句が云ひだけや入齒でもしてから吐かせ」

と怒鳴つて、嚴つい顔をして、口をむが〳〵させて、柿の朽葉の散り敷いた垣根の小徑をサク〳〵音をさせて出て行く後姿を、お慶は見送つてゐた。

しかし夕方になると、神さんは晝間の事をケロリと忘れて、喧嘩は何處であつたかと云つた顔して踊り、ゲラ〳〵笑ひながら、一家揃つて晩餐を食ふ。

お慶は何て云ふ呆れた人達だらうと侮つてゐるが、その實その喧嘩が一つの大事な慰みになつて、ドタバタ音がするとそらと飛び出し、若しも喧嘩に花が咲かずに靜まつてしまうと、物足らぬ氣がして引込む。

口入婆さんの話によると、驛夫の神さんは、若い情夫を拵へて、それも大ビラなんだから、家にゴタゴタが絶えないんだと云ふ。「普通の女で二人の男に見ゆるなんて、よくまあ太陽の照る所でそんな眞似が出來たものだ」と、お慶は淺ましく思つて吐息つくことがある。だが神さんは平氣で、

「毎日お八釜しくて、嘸御迷惑で御座いませうね、貴女のお宅は何時もお靜かで、本當にお羨ましいん

てすよ」と云つて「どうせ、人間がこんな粗暴に生れてるんだから、喧嘩でも追始めにや身體が怠くつて仕様がないんてさあね」と、後で馴々しい口を利く。

「てもお賑やかて結構てすわ」と、お慶はお世辭に云つて、神さんもお世辭と聞くのだが、今の場合それがお慶のどん底の感じかも知れぬ。もう日によつては霜柱が立ち路も氷るほどて、龜んだ指先を袖口から出して、鼻水垂らして、役所から歸る主人博彦を見ると、何となう無情の念も起るのである。

それても少しづゝは内職もしてゐたので、或晩、夕餐が濟むと、仕事の包みと、それから質屋の通帖を持つて出て、山下の方へ寒さ凌ぎの急ぎ足で歩いてゐると、ふと二三間斜めの向うに大丸髷の平顔が目についた。それが驛夫の神さんで、耳から首筋へかけて厭味たらしい白粉の跡が見える。連れてあらうか、鳥打を目深く被つて懷手して刻み足で側を歩いてる男がある。歳は二十三四と見え、色は黒く齒が少し反つてゐるが、何處となく可愛くも見られる。

お慶は避けやうとしたが、神さんはそれと見ると、笑顔で近づいて「おや奥さん、何方へ」と會釋して、臆した色もなく、かの男と連立つて行つた。

お慶は風呂敷包を半纏の下に隱して、振返り〳〵神さんの跡を見送つた。

〔九〕

稻村は時々訪ねて來ては、黒瀬の家庭の圓滿に睦じい樣子を語り、も少し待つてたら貴女の生活向きの世話もするだらう、又私が乾度させて上げると受合ふ。お慶も最早初めのやうに一圖にそれを信用は

せぬが心の底では多少當てにしやうとしてゐる。

主人には殆んど交友がなく、稲村の外には親しい訪問客もないので、お慶の世界は狭く〳〵なる。そして稲村一人がさも男を代表してゐるやうに見える。で、偶に博彦とこの男と差向ひで酒でも呑んでゐると、一方は如何にも朽ちて世に用のない人らしく、相手に氣壓されて、口の利き工合、身體の態度、何て云ふ意氣地のないことだらうと思はれる。

でも稲村の方から、砕けて女話でも始めると、博彦も少しは負けぬ氣も出るのか、小さい目を細くして乗り出し、自分の昔をも語つて、もづれ舌で憐れなる氣燄を揚げる。

「私もこれで馬鹿にやなりませんぜ、九州から四國中國、それから上州と、勤め先が異つてはぐる〳〵廻つたからね、諸國の女も随分知つてゐますよ、土地々々での顔から様子から、趣が違つて、それ〴〵に面白いね、上州では一人氣合ひの面白い女に會つて、それから色んな事がありましたつけ」と、首を傾けて考へて、「いやあんな女に酌をさせて飲む味は又格別だ」と、口の周圍に皺を寄せて薄笑ひをする。

上州の女といへば、前橋の下らない酌婦で、博彦もほんの一時、浮かれた眞似をもしたので、酔つた時は折々この上州の女を口にすることがある。で、お慶は「何て馬鹿を云ふですよ」と云つて、心では嘲つてゐるが、あの時はこの人だつて、まだ力があつて、身體に張合があつたが、何時の間にこんなに見る影もなく老いたのだらうと思ふと情けなくもなる。そして博彦は醉が廻ると、客を忘れてその前で假睡の夢に入つて、折々「さうか、はあ、成程」と寢言の空返事をして、手足をビリ〳〵と動かす。

「本當に仕樣がない人だよ」と、お慶は口元には微笑を湛え、眉と鼻の間には皺を寄せて、「稻村さん、この人あ何故からたわいがないんでせう」と嘲けるやうな、歎くやうな聲て云つた。

「てもよく役所が勤りますね、感心だ」と、稻村は手を逆にして反身を支え、逞ましい顏を眞赤にして云ふ。

「あれて何時まで勤まるもんですか、どうせ長かあないんてさあね、これて病みつかれてもしやうなら、本當にどうするんでせう。」

「そりやその時のことさ」と、稻村は冷然として云ふ。

「稻村さんは御自身が氣樂だから察しがない」と、お慶は小聲て云つて、主人の顏を見て、稻村を見返したが、その目は、不安て凄味を帶びてゐた。

稻村は笑つたきり何とも答へず、煙草入を挿して「遲くなつたから、もう御免蒙りませう」と、尋常に云つて、何氣なく歸つてしまつた。お慶は無言て見送つて、座敷へ戻るなり、酒の餘瀝を二三杯キユツと煽つて、正體のない道男と博彥との間に、薄い夜具を被つて眠つた。夜中齒ぎしりの音をさせた。

翌日からお慶は酒を飮むやうになつた。主人の分をコツプへ半分ばかり竊んて食厨へ隱して置いて、就眠前にそつと煽るやうになつた。主人は銚子を振つて、「これつ切りか、足らんな〱」と、不平顏て、もつと欲しさうにすれど、强いて求むることも出來ず、そのまゝ泣き寢入りになる。て、銚子の酒はまず〱減つて、主人も我慢ならなくつて、

「何故こんなに減すのだい」

と小言を云ふと、お慶は白眼て睨んで、

「もうそれで澤山ですよ、お金でもドッサリ取れた時に、幾らでも召上るのさ」と、慳貪に云ふ。

「何だと、ぢや俺等あ明日から役所を止してしまうぞ」

「あゝ、お止しなさいとも、皆なで饑え死にすりや結構氣樂だ」

「仕様のない奴だなあ」と、主人はブツ〳〵云ひながらも、大抵は降參して寢そべつてしまう。

（十）

臺所の隅々には埃が積り、茶の間の疊も爪先に引かゝる程に破れ、雨は座敷の眞中に漏る程であるが、お慶は最早左程氣にしなくなつた。どうせ自分の手一つで取繕らう術もなく、どうにでもなれと構はなくなつた。隠居部屋は外の部屋とは、一つ家とは思へぬ程になり、粗末な六疊の間でも、小ザッパリして居心地よく二挺の三味線が淺黄の袋に包まれてゐる。隠居は毎朝糠袋で顔を磨き髪を撫でつけ、それから行火に火を入れて、小屏風を立て、苦のない一日を靜かに送るので、僅かだが亡夫の遺産の中、自分の分前だけはちやんと保存して、只の一錢も家の暮し向きの助けにもせねば、自分だけの一生の小遣ひに心配はない。時々は玻璃越しに庭から玄關の方を見ては、お慶の汚い衣服を着て、不作法の樣をしてるのに氣をつけ、「だから田舍物は仕樣がない、あれだから家の中も荒れしまう」と思つて、親類の客でも來ると零すことがある。

或日お慶は晝間から茶碗に一二杯酒を呑み、黑ずんだ目の縁を微紅に染めて、火鉢の前に立膝をしてゐると、珍らしく車の音が門先に留まつて、勝手口からお淸が入つて來て、「おゝ寒い〳〵」と、肩掛も取らず火鉢に當つて、

「あら、お母さん、どうしたの、お酒なんか飮んで」

と、母の酒臭い息に驚いた。お慶は定りの惡い思ひをして、

「今朝からぞく〳〵震へて仕様がないから、風邪でも引いちやならんと思つて」と何氣なく云つて、話を外らし、

「暮れて忙しかあないの」と、伏目でお淸の白い寶石入の指環を見てゐる。

「別に忙しかあないわ、私ね、お母さん、二三日中に信州へ行かなくちやならんのよ」

「黑瀨と一緒にかい」

「えゝ、信州のお母さんが是非歸つて來いつて云ふんですから、どうせ此地にゐたつて差當つて用事もなし、當分田舍に引籠るつもりなのよ」

「お正月までも行つてるのかい」

「えゝ、都合て三月や四月彼地にゐるかも知れないわ、」

「そんなに」と、お慶は驚いたやうに目を張つた。

お淸はソワ〳〵落付かぬ風で、「私、これからお土産を買つたり、お友達に暇乞ひに行つて來なくちや

ならんから、今日はユックリしちやゐられないわ」と、腰を浮かせて、「新年狀は彼地から出しますよ」と、もう立上つて、お轉婆らしく身を動かして、母の顔はよくも見ずに、暇を告げて歸つた。お慶の顔はお淸の結婚以前までは窶れてゐる中にも、何處か溫味もあり、若い時からの愛嬌も殘つてゐたが、今はそれが消えて、鼻が際立つて淋しく尖つて來た。

お淸の車の音の消えると、一時收まつてた氣が又焦立つた。醉も醒めて、元の青筋の浮んだ凄味のある顔に復つた。

〔十一〕

或日、神戸の姉からの手紙に。お前の家でも淸をよい所へ緣付けて幸福だ、男の子も大きくなつたてあらうし、手數のかゝる嬰兒もないから、これからお前も樂が出來る。私の家では又小さいのが生まれた。何時になつたら氣樂になれるだらうと、書いて來た。

お慶はそれを讀むと、姉も四十を越して子供なんか生んでと、卑下むやうな妬ましいやうな氣がした。そして姉の夫が四十五歲て、自分の夫は五十三歲だと考へて見て厭な氣がする。

一家を背負つて、絕間なく手足を働かせてゐた十幾年の間は、振返つて考へる餘裕もなかつたが、少し自暴氣味になつた此頃は、獨りツクヽヽと昔の事も考へられる。「こんなつまらん事つたらありやしない」と、的なしに腹の立つことが多い。姉や妹は可成りの物持の家へ緣付いたのに、自分だつて田舍の田地持へ嫁入口もあつたのに、父が昔堅氣で門閥や人前を氣にしたゝめ、こんな意氣地無しの老人を夫

とするやうになつたと口惜しくてならん。

お清のゐなくなつてからは收入も少い上に、家の締りがなくなつて、臺所の拂もズン／＼滯つて、米屋酒屋の出入も止まつて、勢ひ質屋の歸りにその風呂敷て米の一升買ひ、德利を袂に潜まつて來るやうになつた。驛夫の神さんと違ふ所はない。

博彥は晚酌が思ふやうにならぬて怒り出して、「貴樣にもう用はないから、今直ぐ出て行け」と盃や皿を投げつけることがあるが、お慶は「フ、ン」と鼻て笑つて、「私こそ貴下に用はありませんよ」と冷やかに云つて相手にしない。だが親類の方ては家の樣子を見て、最早默つてゐなくなつた。姑もよく博彥の弟の家へ行くやうになり、弟もよく隱居部屋へ遊びに來る。その揚句が弟が全權大使になつて、お慶に苦情を持込んで來る。

「かう家を荒してどうするんです、世間に對して耻かしいぢやありませんか、平生から、も少し貴女が氣をつけてりや、こんなにならんて濟むのだ」、

と、月末の拂ひの溜つてることは知らぬから、見た所の家の見すぼらしくなるのを責める。裏長屋の借家暮しとは違ふとは、親類中の定文句だが、お慶はこんな境涯て見榮も何もあつたものかと、皮肉を云ふやうになつた。

ても弟の方て、かう放任つて置けぬから、私が後見になつて、此家の經濟も整理する。そして自家の老舖を手傳ひに寄越して臺所にも締く丶りをつけると云ひ出すと、お慶は目に角を立て丶反對する。

「家の事はこれ迄通り私一人に任せてゝ下さい、人様のお世話なんかにならなくつたつて、私一人で結構さ」

「だつて此ぢや仕方がない、何も貴女の邪魔をするんぢやないから、さう剛情張らなくたつていゝさ」

「私剛情張りますとも、剛情つ張りだからこそ、此迄家が立つて來たんぢやありませんか」

と、ツンケン云つて、直ぐに目を潤ませる。さうなると、弟も敢て強る力がない、

「ぢや仕方がない」と、厭な顔をして、「しかし貴女も身體が弱いし、無理をしちやならんから、老婢だけ寄越しませう」と折れて出ても、お慶は承知しない。自分が勝手に下女を雇ふのでなくて、向うから定めた氣心の知れん奴を入れるのが、どうしても得心出來ぬのだ。で、私一人で立派にやつて見せると頑張つて、敵方の使を退却する。

二三日は氣を張つて、手一つで拭掃除もすれば、襤褸をも綴くり、内職も勵み、鮹の切身を買つて來ては、主人や姑の膳に供へて、氣前を見せてゐたが、それも長續きのしやう筈はない。

今年ももう三日と押迫つたれど、お慶は正月の用意が何一つ出來さうでない。主人の月給位税金と乘引ならぬ掛取りに支拂ふにも足らぬ。そして簞笥の中は着更え一つない位に空となつてゐる。お清の結婚費の負債の殘りから、酒屋米屋の二三月以前の滯り、これ迄貧乏を潛つて來ながら、お慶にはそれを巧く切り拔けることが出來なかつた。平生の廣言もあり、敵と思つてる親類に頭を下げて頼むのは厭だ。て、朝から酒を呑んでムシャクシャ腹を押へてゐた。驛夫の家では二三日前に夜逃げをして、後はま

だ住者がなく、一年近く絶えなかつた騷ぎが止んでしまつた。男を拵えやうと勝手な事をして行詰まると夜逃げをしやうと、あの神さんには何の障礙もないのだ。

お慶はこんな廢屋を脊負つて苦しんでるよりは、あの驛夫の跡の貸家へ移つて、困つたら夜逃でも出來る身になつたらと思つた。が、姑の生きてる間は、それもならぬと思ふと、自分を意地めてる當の敵のやうに憎くて／＼溜らなくなつた。

その姑は家の事は頓着なしに朝から遊びに行つた。腑甲斐なしの主人は子供を連れて暮の町を見に行つた。お慶はホンノリ紅くなつた顏で財布を見て考へてゐたが、やがてそれを用箪笥へ突込んで、スタスタ緣側を歩いて、ソッと隱居部屋へ入つて、暫らくボンヤリ立つてゐた。わざと入口の戸を開けて、後を顧みながら、戸棚を開けて葛籠の蓋を取つて、頭を突込んで中の物をめくつて見た。姑の今は着られさうてない派手の衣服もちやんと仕舞つてある。人に呉れるのも惜しんでこんなに持つてゝ何にするんだらうと、暫くは只見てゐたが、終に底から一枚小紋の羽織を引出した。入口に猫が目を尖らせて見てゐる。お慶はソッとした。不安の思ひが胸に湧いて、葛籠の前に蹲まつてゐた、小さい時から只の一度も後暗いことをした例はなく、武士の娘だといふ父の敎訓が、まだ忘れられずに頭を刺激して來る。て、羽織を元へ收めて蓋を鎖めたが、まだ思ひ切れなかつた。これを質に入れたつて幾らの足しになると云ふのでもないが、只姑に對して些とは腹癒せになる。自分は十何年この家の爲に骨惜しみもせずに働いてゐるのに、姑は微塵も手助けをして呉れた例はない。これ位の事したつて構ふものか、自分の身

につけるんぢあなしと、かう定めてしまつて、羽織を奪つて風呂敷にくるんで、臺所の米櫃の裏へ隱して置いた。

〔十二〕

兎に角年は明ける。一家揃つて健全であつた。主人は酒の飮めるので、子供のやうに正月を悦しがり、襟卷に首を埋めて頻りに年賀廻りをする。道男も珍らしく祖母に連れられて、陽氣な賑やかな親類の家へ行つて飽く程甘い者を喰つて、飛んだり跳ねたりしてゐる。お慶は靜かな部屋に、脊を丸くして、肱枕で假寢をした。血の氣の失せた頰には梅干を張つて、髮も亂れて耳にもつれてゐる。玄關の白木の名刺受には僅かに五六枚の名刺と二三枚端書が投げ込まれてあつた。

お慶は玄關前の敷石に、名刺投込みの客の足音を、寢耳に入れながら、氣がポッとして、節々が碎けて、このまゝ息の根も止まるやうであつた。

正午過ぎに主人は、色の褪せて緣は鼠に喰はれた山高帽子を被り、幾度質屋をくゞつた古洋服を着て、ヒヨロ〳〵と茶の間に轉げ上り、

「この春は何處も景氣がよさゝうだ、」

と呟いて、名刺と端書とを見てゐたが、中に黑瀨の手紙が交つてゐた。彼れは力のない目を見張つて、二三度繰返して讀んでゐたが、やがてお慶を顧みて、

「オイ、淸が孕んだらしいぜ」

と、元氣のいゝ聲を出して、手紙を渡した。お慶は眠い目を醒して顔を上げ、手紙を引繰るやうに取つて、一心に讀んで、

「ちつとも氣が付かなかつた、何時でせう、何時生れるんでせう」

「まだ容易なこつちやあないや」と、主人は重たさうに首を垂れて、微笑々々して「目出度々々々」と云ふ。

お慶は待遠しいやうに、指を折つて月を數へてゐた。

二人は久振りて睦じく將來の話をした。お慶の頭も一時輕くなり明るくなつた。

（完）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

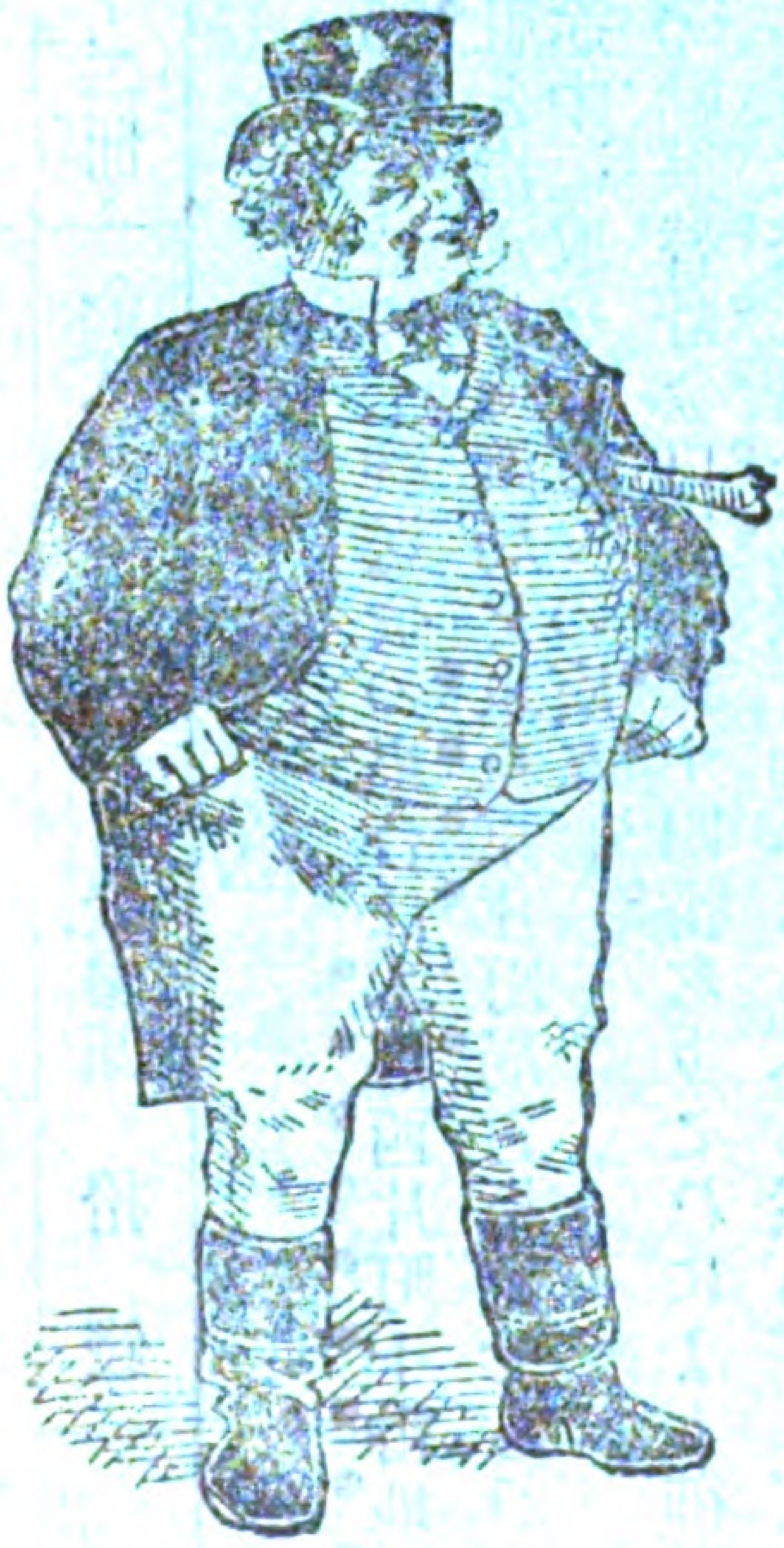
（新刊）

マックスオレル原著　草野柴二譯註

ヂョンブル及其郷土

四六判紙表裝全貳冊
總紙數約七百餘頁
上卷●定價金六拾錢
下卷●定價金六拾錢
郵税各册金八錢

此原著は佛文で英譯もある此英文が是迄一般讀者の外に公私の各學校で用ひた數は實に素適なものだそれが内地丈で本家の外國では何十萬やら殆無限の盛況讀だ士は御存だらうが政治、經濟、商工業、美術、音樂、劇、文學、新聞、雜誌や宗教其他全英國の隅から隅迄頗る多方面の人と物とに永い間の研究は自國のそれと公平に批判された所謂佛人の大英見聞記目次を開ひても讀み度なる流石に世界的の名著傑作如何にも眞面目の樣てソウでない誰にも面白く興味を感ずる尚英語研究者には忠實なる註釋とお負けに添たる英文とを對照すれば結構呑込める筈だ一日も早く御覽なさい



發賣元　東京●神田●表神保町　振替口座　二八一六番

中西屋書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

●本號に限り　定價金卅八錢（郵稅共）

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋尾張町	東海堂
仝　日本橋呉服町	北隆館
仝　本郷本富士町	盛春堂
仝　京橋鎗屋町	良明堂
仝　日本橋住吉町	至誠堂

關西大賣捌所

大阪備後町	盛文館
仝　京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

中央公論
廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金參拾錢
半頁	一回	金七圓
一頁	一回	金拾貳圓
表紙の二、三、一頁	一回	金拾五圓
表紙の四	一回	金貳拾圓

廣告一手取扱　神田三河町一丁目　博報堂

○壹册定價　金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅八錢）

册數／國別	內國	外國	
六册	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢	以上郵稅共
十二册	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢	

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵劵代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十一年九月廿七日印刷
明治四十一年十月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

發行所（電話下谷九一九）　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

MORITA'S MYOFURIDASHI.

J. MORITA,

No. 27, Ikenohata-nakacho, Shitaya-ku.

TOKYO, JAPAN.

其効必如神

明治十八年乙酉八月十日免許發行

四季の引風を首とし、逆上一切、咳嗽の出るに奇効あり

また寒暑のあたり、頭痛、めまひ、氣のふさぐに最も妙なり

守田家方

妙振り出し



寳丹本舗

東京上野池之端仲町二十七番地

守田治兵衛謹製

定價壹貼金五錢●六貼函入金廿五錢●拾貳貼入金五拾錢

（明治四十一年九月改版）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す